原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第39集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑥

2009

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第39集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑥

Pho. 1　原の辻遺跡全景

Pho. 2　平成20年度調査　原地区　遺構検出状況

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い平成19年度および平成20年度に実施した，原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記される「一支國」の王都として特定されています。弥生時代におけるクニの実体を解明できる稀有の遺跡として，平成12年度に国特別史跡に指定された重要な遺跡です。

平成19年度は閏繰地区，八反地区，池田大原・原地区を，平成20年度は原地区を調査しました。

平成19年度の調査成果としては，八反地区より貨泉２枚が出土したことがあげられます。この結果，原の辻遺跡における貨泉の出土は15例目となります。弥生時代における「市」の存在や交易について，新たな発見を期待させるものです。また閏繰地区では石鎌や石斧などの石製品が多く出土しました。これは閏繰地区における石器工房の存在を示唆しており，原の辻遺跡の全容解明に資する成果となりました。

平成20年度の調査成果は，甕棺墓18基，土壙墓19基，箱式石棺墓１基の計38基もの墳墓遺構が確認されたことです。また鉄剣や刀子，勾玉や管玉，ガラス玉などの副葬品も発見され，原の辻遺跡がもっとも栄えた時代の墓域であることが分かりました。

最後に，調査に際して多くの方々にご協力頂いたことに深謝するとともに，本報告書が研究の一助になれば幸いです。

2009年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　寺　田　隆　士

例　　言

1．本書は，主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成19年度および平成20年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書は，平成20年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。

3．本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触および石田町石田東触に所在する。

4．本事業は長崎県壱岐地方局建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．調査組織は下記の通りである。

(1)　平成19年度　※（　）の現所属は平成20年３月現在

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	課長	宮崎　貴夫	
	係長	村川　逸朗	※調査担当（現 佐世保文化財調査事務所）
	係長	森崎　伸一	
	文化財保護主事	川畑　敏則	
	文化財保護主事	林　隆広	
	文化財保護主事	小林　利彦	※調査担当（現 長崎県教育庁学芸文化課）

(2)　平成20年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉	
	課長	宮崎　貴夫	※報告担当
	係長	四辻　義仁	
	文化財保護主事	川畑　敏則	※調査担当
	文化財保護主事	林　隆広	※調査・報告担当

6．本書に収録した遺物の実測および製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。

7．本書収録の遺物，図面，写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。

8．自然科学分析は古環境研究所（H19年度）およびパレオ・ラボ（H20年度）に委託した。

9．平面直角座標は旧日本測地系（１系）を使用している。

10．本書の北はすべて方眼北（G.N）を使用している。

11．本書では挿図図版を Fig.，表組図版を Tab.，写真図版を Pho. で表記している。

12．本書の執筆は宮崎と林が行った。

13．本書の編集は林が行った。

遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年度４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から−0.417mの修正を行った新しい標高値を採用するものとする。

本 文 目 次

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境……1

2．歴史的環境……2

Ⅱ章　調査に至る経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯……6

2．本事業調査の経緯……7

Ⅲ章　平成19年度調査

1．閏繰地区……9

(1)　調査概要

(2)　土層

(3)　遺構（河川跡）

(4)　遺物

①土器

②石器

2．八反地区……19

(1)　調査概要

(2)　土層

①B区北壁

②B区西壁

(3)　遺構

①SD1

②SD2

③ピット

(4)　遺物

①土器

②石器

③貨泉

3．池田大原・原地区……27

(1)　調査概要

(2)　土層

(3)　遺物

①石器

②磁器

Ⅳ章　平成20年度調査

1．原地区……35

(1)　調査概要

(2)　土層

(3)　遺構

①甕棺墓

②土壙墓

③箱式石棺墓

④濠

⑤土坑

⑥落ち込み

⑦ピット

(4)　遺物

①甕棺

②土器

③石器

④鉄器（副葬品）

⑤玉類（副葬品）

(5)　総括

附編　自然科学分析

平成19年度自然科学分析 ……109

平成20年度自然科学分析 ……124

挿図目次

Fig. 1　壱岐島の位置図……1
Fig. 2　壱岐島内主要遺跡分布図……5
Fig. 3　調査地区位置図……6
Fig. 4　闇繰地区　全体図……9
Fig. 5　闇繰地区　土層図……10
Fig. 6　闇繰地区　礫検出状況図……10
Fig. 7　闇繰地区　河川跡（7層）
出土土器図①……11
Fig. 8　闇繰地区　河川跡（7層）
出土土器図②……12
Fig. 9　闇繰地区　河川跡（7層）
出土土器図③
およびその他出土遺物図……13
Fig. 10　闇繰地区　石器図①……14
Fig. 11　闇繰地区　石器図②……15
Fig. 12　闇繰地区　石器図③……17
Fig. 13　八反A地区　全体図……19
Fig. 14　八反B地区　全体図……19
Fig. 15　八反B地区　土層図……20
Fig. 16　八反B地区　出土土器図①……22
Fig. 17　八反B地区　出土土器図②……23
Fig. 18　八反B地区　出土土器図③
および石器図……25
Fig. 19　八反B地区　出土貨泉図……26
Fig. 20　池田大原・原地区　全体図……28
Fig. 21　池田大原A～B地区　平面図……29
Fig. 22　池田大原B区　土層図……29
Fig. 23　池田大原地区　出土遺物図……30
Fig. 24　原地区　全体図……35
Fig. 25　原地区　土層図……36
Fig. 26　原地区　甕棺墓遺構図①……37
Fig. 27　原地区　甕棺墓遺構図②……38
Fig. 28　原地区　甕棺墓遺構図③……40
Fig. 29　原地区　甕棺墓遺構図④……42
Fig. 30　原地区　甕棺墓遺構図⑤……43
Fig. 31　原地区　甕棺墓遺構図⑥……44
Fig. 32　原地区　土壙墓遺構図①……45
Fig. 33　原地区　土壙墓遺構図②……46
Fig. 34　原地区　土壙墓遺構図③……48
Fig. 35　原地区　土壙墓遺構図④……49
Fig. 36　原地区　土壙墓遺構図⑤……51
Fig. 37　原地区　土壙墓遺構図⑥……52
Fig. 38　原地区　土壙墓遺構図⑦……53
Fig. 39　原地区　箱式石棺墓遺構図……54
Fig. 40　原地区　濠遺構図および土層図……55
Fig. 41　原地区　土坑遺構図①……56
Fig. 42　原地区　土坑遺構図②……57
Fig. 43　原地区　1号落ち込み遺構図……58
Fig. 44　原地区　2号落ち込み遺構図……58
Fig. 45　原地区　3号落ち込み遺構図……59
Fig. 46　原地区　甕棺墓出土土器図①……61
Fig. 47　原地区　甕棺墓出土土器図②……62
Fig. 48　原地区　甕棺墓出土土器図③……63
Fig. 49　原地区　甕棺墓出土土器図④……65
Fig. 50　原地区　甕棺墓出土土器図⑤……67
Fig. 51　原地区　甕棺墓出土土器図⑥……68
Fig. 52　原地区　土壙墓・濠
・土坑出土土器図……70
Fig. 53　原地区　1号落ち込み出土土器図…71
Fig. 54　原地区　3号落ち込み出土土器図…72
Fig. 55　原地区　石器図および鉄器図……74
Fig. 56　原地区　甕棺墓出土玉類図……75
Fig. 57　原地区　土壙墓出土玉類図……76
Fig. 58　原地区周辺過年度調査地位置図……77
Fig. 59　平成13年度墳墓遺構出土玉類図①…78
Fig. 60　平成13年度墳墓遺構出土玉類図②…79

Fig.61　平成13年度墳墓遺構出土玉類図③…80
Fig.62　平成13年度墳墓遺構出土玉類図④…81
Fig.63　甕棺墓時期別変遷図……84
Fig.64　土壙墓主軸別図……85

表組目次

Tab. 1　壱岐・対馬面積比率表…… 1
Tab. 2　壱岐島内遺跡・史跡一覧表…… 5
Tab. 3　平成19年度調査　土器観察表①……31
Tab. 4　平成19年度調査　土器観察表②……32
Tab. 5　平成19年度調査　土器観察表③……33
Tab. 6　平成19年度調査　石器観察表……34
Tab. 7　平成19年度調査　貨泉観察表……34
Tab. 8　甕棺墓情報一覧表……83
Tab. 9　土壙墓情報一覧表……83
Tab.10　箱式石棺墓情報一覧表……85
Tab.11　平成20年度調査　土器観察表①……86
Tab.12　平成20年度調査　土器観察表②……87
Tab.13　平成20年度調査　石器観察表……87
Tab.14　平成20年度調査　鉄器観察表……87

写真目次

Pho. 1　原の辻遺跡全景
Pho. 2　平成20年度調査
　　原地区　遺構検出状況
Pho. 3　1号甕棺墓　検出状況……89
Pho. 4　2号甕棺墓　検出状況
Pho. 5　3号甕棺墓　検出状況
Pho. 6　4号甕棺墓　検出状況
Pho. 7　5号甕棺墓　検出状況……90
Pho. 8　6号甕棺墓　検出状況
Pho. 9　7号甕棺墓　検出状況
Pho.10　8号甕棺墓　検出状況
Pho.11　9号甕棺墓　検出状況……91
Pho.12　10号甕棺墓　検出状況
Pho.13　11号甕棺墓　検出状況
Pho.14　12号甕棺墓　検出状況
Pho.15　13号甕棺墓　検出状況……92
Pho.16　14号甕棺墓　検出状況
Pho.17　15号甕棺墓　検出状況
Pho.18　16号甕棺墓　検出状況
Pho.19　17号甕棺墓　検出状況……93
Pho.20　18号甕棺墓　検出状況
Pho.21　1号土壙墓　検出状況
Pho.22　2号土壙墓　検出状況
Pho.23　3号土壙墓　検出状況……94
Pho.24　4号土壙墓　検出状況
Pho.25　5号土壙墓　検出状況
Pho.26　6号土壙墓　検出状況
Pho.27　7号土壙墓　検出状況……95
Pho.28　8号土壙墓　検出状況
Pho.29　9号土壙墓　検出状況
Pho.30　10号土壙墓　検出状況
Pho.31　11号土壙墓　検出状況……96
Pho.32　12号土壙墓　検出状況
Pho.33　13号土壙墓　検出状況
Pho.34　14号土壙墓　検出状況
Pho.35　17号土壙墓　検出状況……97
Pho.36　18号土壙墓　検出状況
Pho.37　19号土壙墓　検出状況
Pho.38　箱式石棺墓　検出状況①
Pho.39　箱式石棺墓　検出状況②……98
Pho.40　1号落ち込み　検出状況
Pho.41　2号落ち込み　検出状況
Pho.42　1号埋納土坑　検出状況
Pho.43　3号落ち込み「立ち壺」検出状況…99

Pho.44　濠　土層断面
Pho.45　4号土坑完掘状況
Pho.46　1号甕棺　上甕
Pho.47　1号甕棺　下甕 ……100
Pho.48　2号甕棺　上甕
Pho.49　2号甕棺　下甕
Pho.50　3号甕棺　上甕
Pho.51　3号甕棺　下甕 ……101
Pho.52　4号甕棺
Pho.53　5号甕棺　上甕
Pho.54　5号甕棺　下甕
Pho.55　6号甕棺　上甕 ……102
Pho.56　6号甕棺　下甕
Pho.57　7号甕棺　上甕
Pho.58　7号甕棺　下甕
Pho.59　8号甕棺 ……103
Pho.60　9号甕棺　上甕
Pho.61　9号甕棺　下甕
Pho.62　10号甕棺　上甕
Pho.63　10号甕棺　下甕 ……104
Pho.64　11号甕棺　上甕
Pho.65　11号甕棺　下甕
Pho.66　12号甕棺　上甕
Pho.67　12号甕棺　下甕 ……105
Pho.68　13号甕棺　上甕
Pho.69　13号甕棺　下甕
Pho.70　14号甕棺　上甕
Pho.71　14号甕棺　下甕 ……106
Pho.72　15号甕棺　上甕
Pho.73　15号甕棺　下甕
Pho.74　16号甕棺　上甕
Pho.75　16号甕棺　下甕 ……107
Pho.76　17号甕棺　上甕
Pho.77　17号甕棺　下甕
Pho.78　18号甕棺　上甕
Pho.79　18号甕棺　下甕 ……108
Pho.80　鉄剣
Pho.81　刀子
Pho.82　鋳造鉄斧

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里可，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差に田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

このように『魏志倭人伝』にて記される壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8㎢，人口は約３万２千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県呼子へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的，経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213mにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。『魏志倭人伝』では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から延びた舌状の台地（標高18m）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉾川（約8.8km）が流れ，東へ約1.5km進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２km上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。

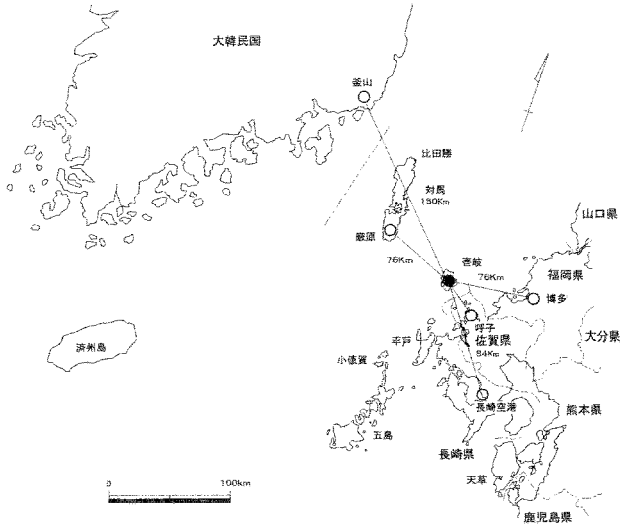
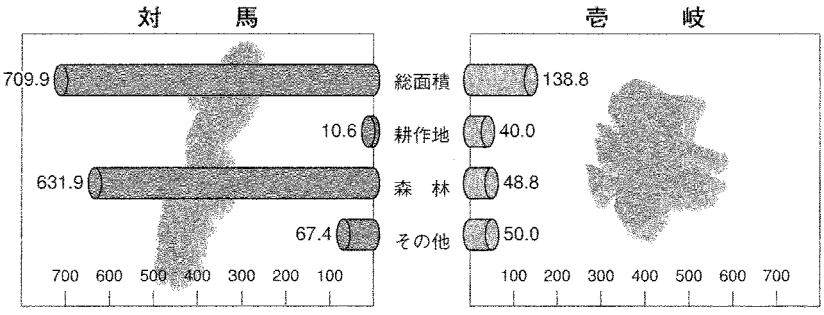


Fig. 1　壱岐島の位置図



単位は㎢	その他	森林	耕地	総面積
対馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱岐	50	48.8	40	138.8

Tab. 1　壱岐・対馬面積比率表

2．歴史的環境

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。また原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり出土した。特に台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ形石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180cmの腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されており，特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず朝鮮半島南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われた。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，上面からは人頭大の礫や石皿が出土している。形状の多くが円形筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から，貯蔵と灰汁抜きの兼用が考えられよう。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの縄文時代の遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と朝鮮半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60カ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha，３重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約５km西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規

矩鏡や貨泉，卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から祭祀的な空間として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70mを超える丘陵部に位置する遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから，農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）では銅鏃や卜骨などが出土し，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。朝鮮半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては，天ケ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に３本の中広銅矛が出土している。おそらくは朝鮮半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

現在確認されている壱岐島内の古墳は256基にのぼるが，編年的に４世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳が最も古く，５世紀後半頃に比定されているが，大部分が６世紀から７世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で，これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17mと長い。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15mと長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91m，玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mをはかり，自然地形を利用して版築した２段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・唐三彩などの遺物が確認されている。

古代，律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ，壱岐・石田の２郡が置かれた。従って国府が置かれ，やがて国分寺が設置されるのだが，壱岐では新たに建設する経済基盤がなかったのか，壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。その記録には「壱岐嶋直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり，僧二十口が置かれた諸国の国分寺に比べて規模が小さく，そのため嶋分寺と呼ばれることになる。この嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され，同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのだろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここでは卜占に使用された海亀の甲

羅や，大量の鮑殻が出土している。亀卜は壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが，卜骨から引き継がれた卜占の伝統が感じられる。また鮑殻はここが調の加工場であったことを想像させる。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。6世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，朝鮮半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。朝鮮半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行なわれたと思われる。

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が徴発されて海の藻屑と消えたであろうし，寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕囚された。

鎌倉時代には文永・弘安の役，すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面，多くの住民が殺戮された。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の1つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のことで，倭寇とは14～16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易（私貿易）に求めねばならなくなり，しばしば略奪行為を行なうようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり，この頃壱岐は松浦党五氏(志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留)によって分割統治されたと『海東諸国紀』（1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主(つかさど)る。戊子年（1468），図書（李朝が授給した銅印）を受け歳遣一，二船を約す。書に一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり，志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ，この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約1kmに位置する覩城は真弓氏の居城と思われ，発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・粉青沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際，松浦党五氏の代官衆が覩城で籠城・降服したといわれるが，先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行なわれていることから，壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され，平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では，松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され，三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた外枡形虎口や，その搦手となる虎口などの遺構が残されている。

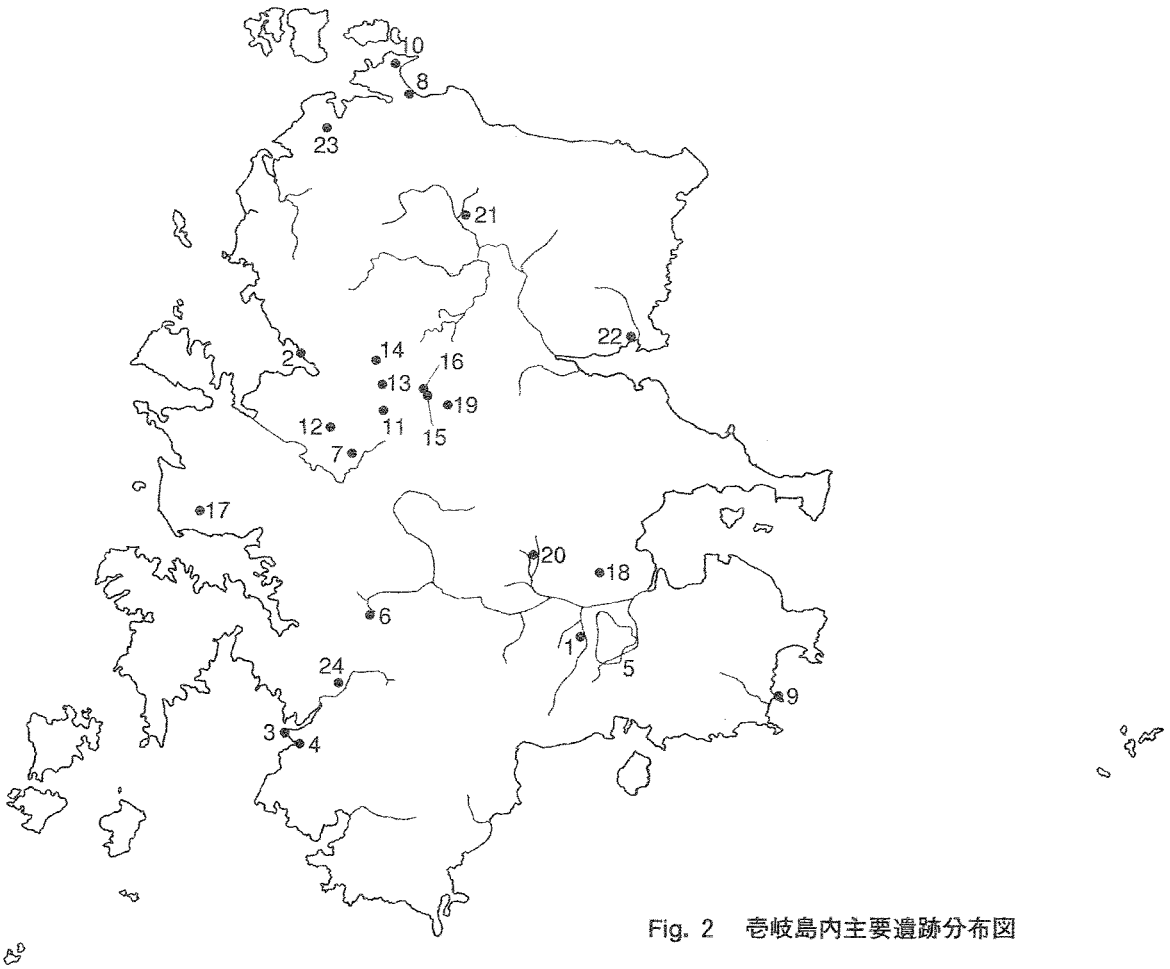


Fig. 2　壱岐島内主要遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　礫道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）
2	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 干潮帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
3	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 干潮帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山順・田中良之（1979）
4	名切遺跡	縄文土器・石器 干潮帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
5	原の辻遺跡 （国特別史跡）	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会
6	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
7	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
8	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
9	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）
10	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨格器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
11	双六古墳（国指定）	鉄製品・金銅製品・ガラス玉・須恵器・土師器・唐三彩 前方後円墳（全長91㍍後円部直径43㍍高さ10.6㍍前方部幅36㍍高さ５㍍）横穴式石室（全長11㍍玄室・前室）	勝本町教育委員会（2001）
12	対馬塚古墳（国指定）	— 前方後円墳（全長約65㍍後円部直径約36㍍前方部幅25㍍）横穴式石室（全長9.4㍍玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
13	笹塚古墳（国指定）	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38㍍高さ10㍍方墳の可能性も）横穴式石室（14.8㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
14	掛木古墳（国指定）	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30㍍高さ７㍍）横穴式石室（全長13.6㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
15	鬼の窟古墳（国指定）	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45㍍高さ13㍍）横穴式石室（全長16.5㍍玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
16	兵瀬古墳（国指定）	— 円墳（直径34㍍高さ８㍍）横穴式石室（全長12㍍玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
17	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失　石室も半壊しており開口方向など不明　袖石に船の線刻あり	副島康司・木村幾太郎（1981）
18	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14㍍高さ２㍍）竪穴系横口石室（全長3.96㍍）	芦辺町教育委員会（1987）
19	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
20	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城　朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
21	文永の役新城古戦場	— 文永の役における戦場　壱岐守護代平景隆らが戦死	—
22	弘安の役瀬戸浦古戦場	— 弘安の役における戦場　壱岐守護代少貳資時らが戦死	—
23	勝本城跡（国指定）	— 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城　兵站中継基地	—
24	亀丘城跡	— 波多宗無が築城した城郭　近世からの壱岐の中枢部	—

Tab. 2　壱岐島内遺跡・史跡一覧表

Ⅱ章　調査に至る経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが確認され，遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26～36（1951～1961）年には京都・九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行なわれた。初の本格的な発掘が行なわれたこの調査では各種鉄製品や貨泉，あるいは韓半島系や楽浪系土器が出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面，地元における遺跡への関心は低く，やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畑地から水田への転換が進められた結果，遺跡はかなりの損壊を受けた。昭和49（1974）年には石田大原地区において，水田化改良工事にともなう発掘調査によって墓域が確認された。この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50～52（1975～1977）年に範囲確認調査が実施され，遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。平成に入ると幡鉾川流域総合整備事業にともない舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行なわれた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす，遺跡規模約100haにもおよぶ大規模環濠集落であることが判明した。平成７（1995）年以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され，丘陵上の調査においては多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が

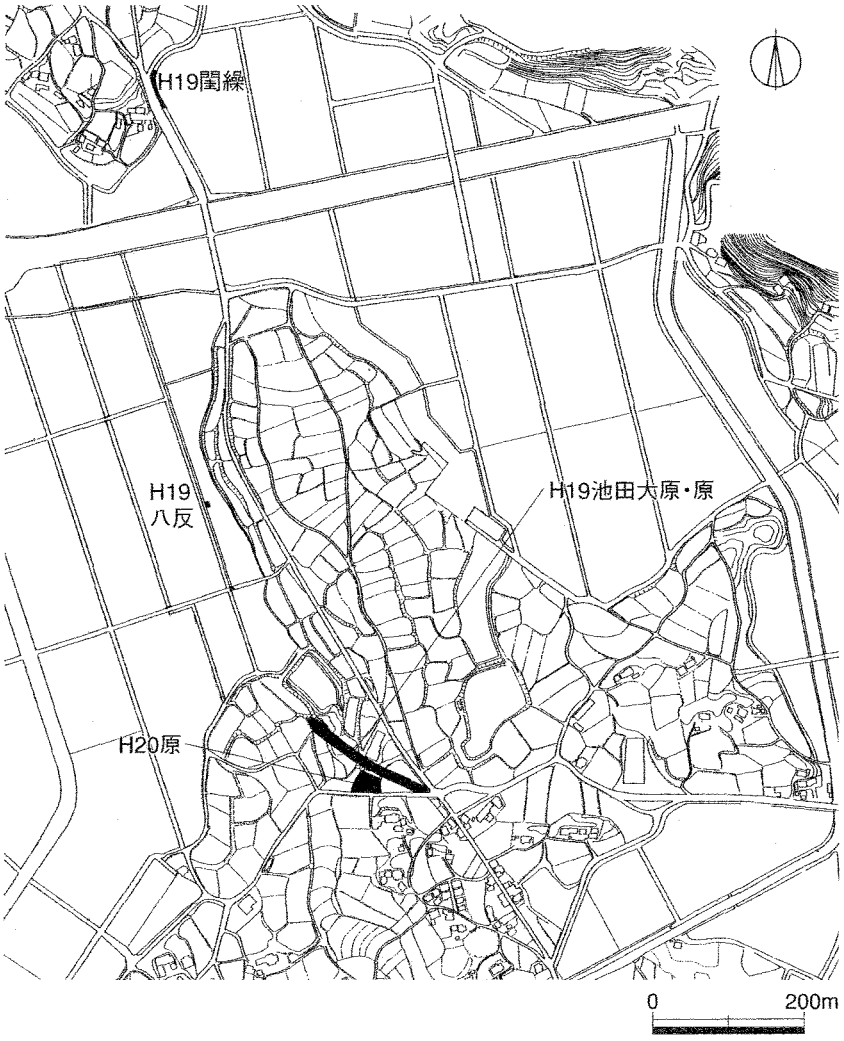


Fig. 3　調査地区位置図（1/10,000）

発見された。また低地部の調査も継続して行なわれ，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることとなった。

また旧芦辺町教育委員会によって平成11（1999）年から，また旧石田町教育委員会によって平成13（2001）年から遺跡整備にともなう発掘調査が行なわれている。旧芦辺町は丘陵部を中心に調査を行ない，多数の住居跡を確認するとともに権（秤の錘）や青銅製ヤリガンナ，中広銅矛や鋳型などの重要な遺物を確認している。また旧石田町は石田大原・石田大川地区の墓域を中心に調査を行ない，甕棺墓22基，多紐細文鏡や細形銅剣などを確認している。この遺跡整備にともなう発掘調査は壱岐４町（他に郷ノ浦町・勝本町）の合併（平成16年３月）により誕生した壱岐市教育委員会に引き継がれている。

２．本事業調査の経緯

主要地方道勝本石田線は遺跡の丘陵部西側を南北に走るが，幅員が狭く朽化も進んでいるため，改良工事に向けての協議が平成５（1993）年から行なわれた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが，丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり，また将来的に遺跡整備を行なう際の支障となる恐れがあることから，丘陵西側低地部に新たに取り付けることとなった。

その間，遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され，平成９（1997）年には国史跡となり，その３年後の平成12（2000）年には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

県道改良工事に伴う調査は平成14（2002）年に着手し，2,400㎡の調査が行なわれた。このH14年度の県道緊急調査（以下，H14県道）〔**福田・小玉2004**〕では遺跡西側低地部が調査され，環濠１条・河道２条・溝１条などが確認されている。続く平成15年度の県道緊急調査（以下，H15県道）〔**林2005**〕においても同じく遺跡西側低地部3,100㎡の調査が実施され，河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構（畦畔）１基，集石遺構１基，小児甕棺墓１基などが確認されている。平成16年度の県道緊急調査（以下，H16県道）〔**林2006**〕では原ノ久保Ａ地区の調査を行い，溝状遺構１条，住居跡１基，不明遺構１基，埋甕遺構１基，ピット群などが確認されている。平成17年度の県道緊急調査（以下，H17県道）〔**林2006**〕では安国寺Ａ地区の調査を行い，河道跡１条などを確認している。平成18年度の県道緊急調査（以下，H18県道）〔**林2007**〕では不條地区では濠２条，溝３条，土坑２基，ピット12基を，池田大原地区で濠２条，不明遺構１基，ピット294基を，原ノ久保Ａ地区で濠１条を確認している。

Ⅲ章　平成19年度調査

1．閨繰地区

(1) 調査概要（Fig. 4）

閨繰地区は圃場と排水路にまたがる南北に細長い調査区で，調査期間は平成19年10月24日から平成20年１月31日である。今回の調査では河川跡を確認した。この河川跡は平成７年度の圃場調査（以下，H７圃場）〔山下・川口1997〕における「大溝」およびH17県道〔林2006〕における「河道跡」と一連のものと判断される。また河川跡からは人頭大ほどの礫とともに弥生土器片が多数出土した。

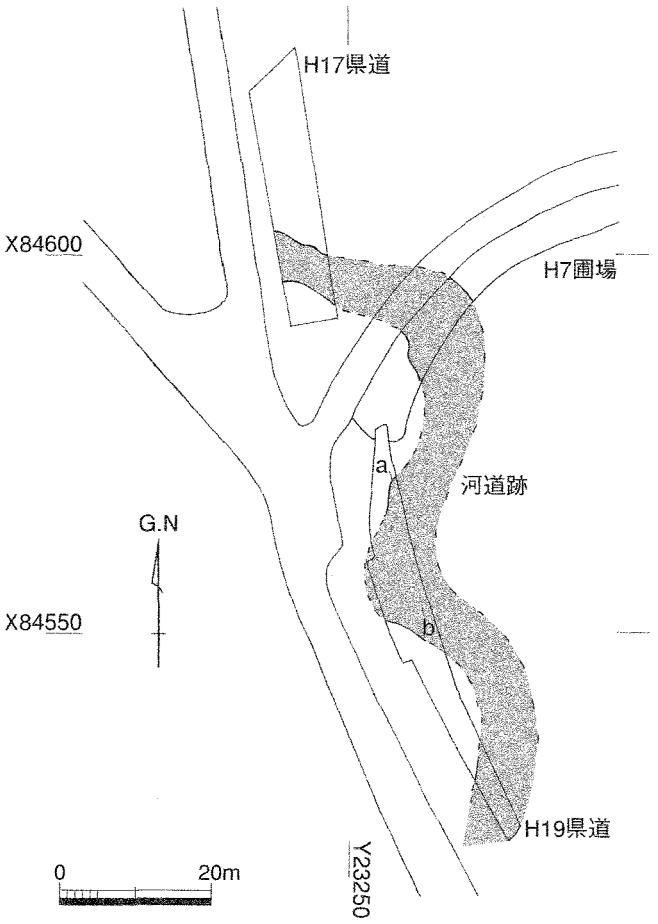


Fig. 4　閨繰地区　全体図（１/1,000）

(2) 土層（Fig. 5）

基本層序は９層に分層される。１層は褐色土（Hue10YR4/4），２層は灰白色粘質土（Hue10YR7/1），３層は褐灰色粘質土（Hue10YR4/1）で，水田耕作土や圃場整備工事における造成土などの堆積である。４ａ層は褐灰色土（Hue10YR5/1），４ｂ層は褐灰色粘質土（Hue10YR5/1），５層は黒褐色土（Hue10YR3/3），６層は褐灰色砂礫土（Hue10YR5/1）で，須恵器や古代の遺物が出土している。７層は暗褐色混礫土（Hue10YR3/3）で河川跡の堆積物である。拳大から人頭大の礫が80cm以上堆積し，弥生土器片が多量に出土している。８層は青灰色土（Hue5Y8/4）で，風化礫からなる基盤層である。

(3) 遺構

河川跡（Fig. 4，6）

礫層は深さ80cm程度の堆積があり，過年度調査（Ｈ７圃場およびH17県道）の際にも同様の状況が確認されている。花粉分析の結果，７層では花粉がほとんど検出されず，水流や粒径による淘汰，選別を受けたことが想定されている。出土した土器の時期は弥生時代中期中葉～中期終末を中心としている。この土器の出土様相も過年度調査の内容と一致する。また土器以外にも石包丁や石鎌，敲石や石斧のほか，石剣の未製品が出土している。

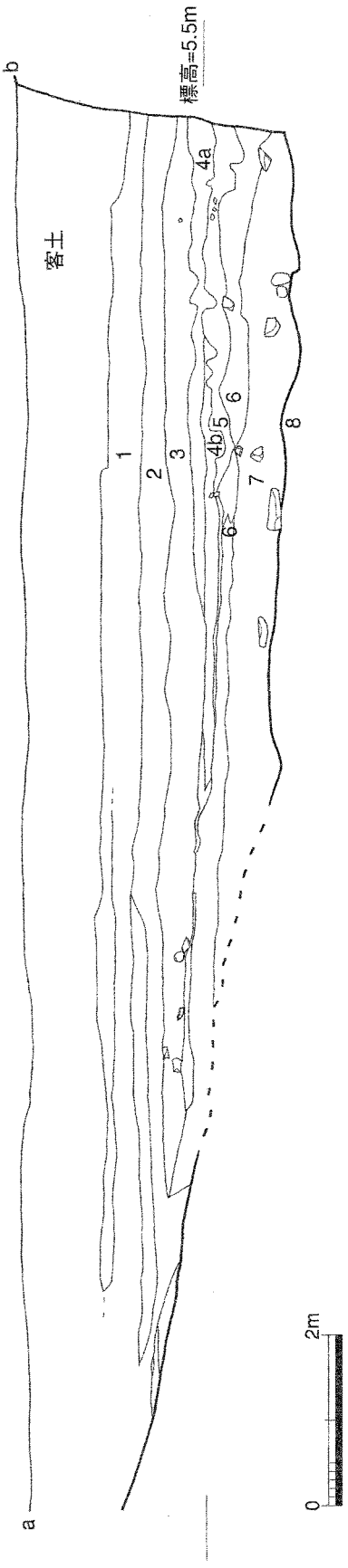


Fig. 5　閨繰地区　土層図（1/80）

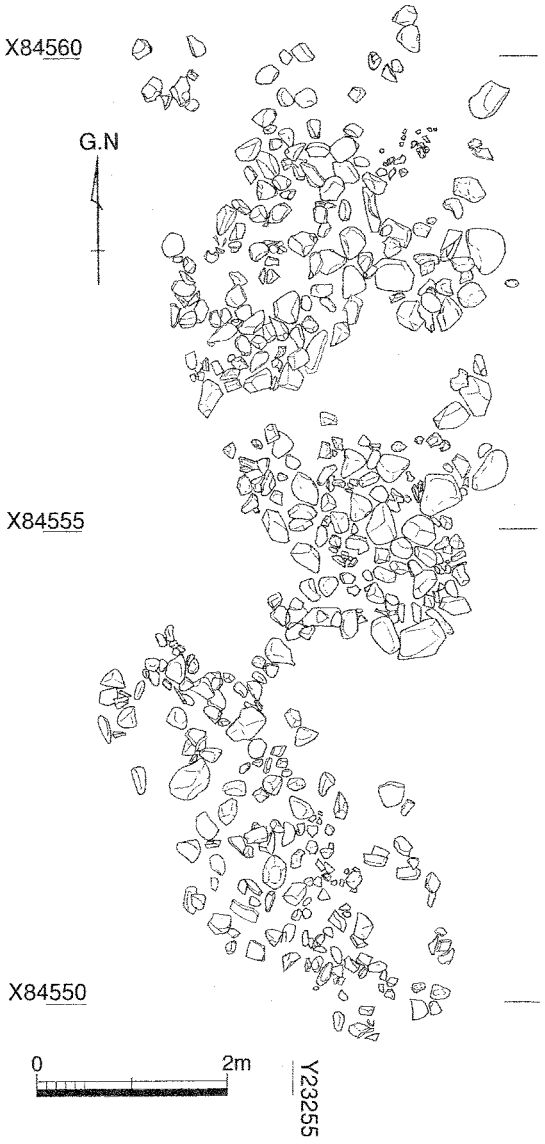


Fig. 6　閨繰地区　礫検出状況図（1/80）

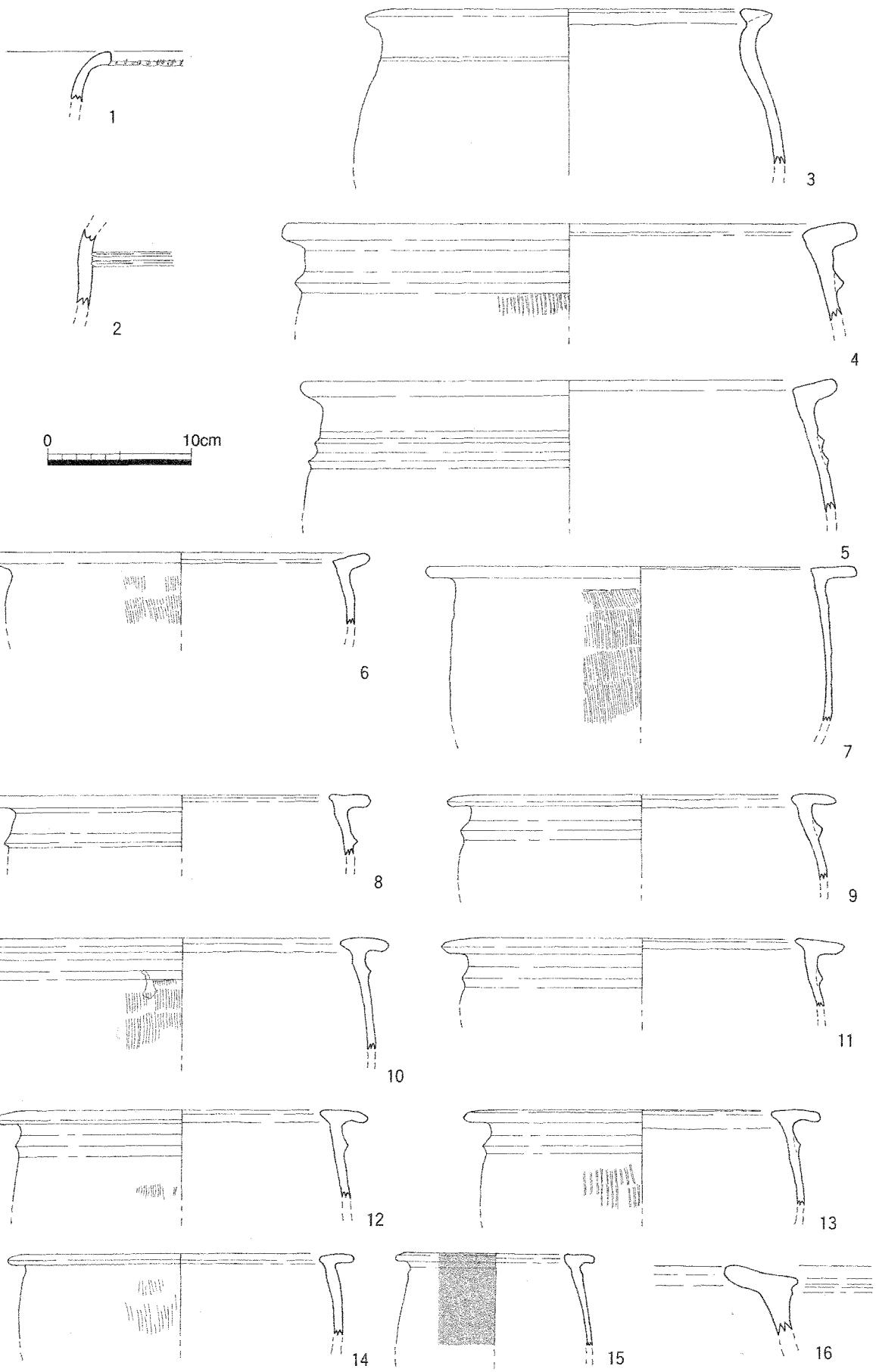


Fig. 7　闇繰地区　河川跡（7層）出土土器図①（1/4）

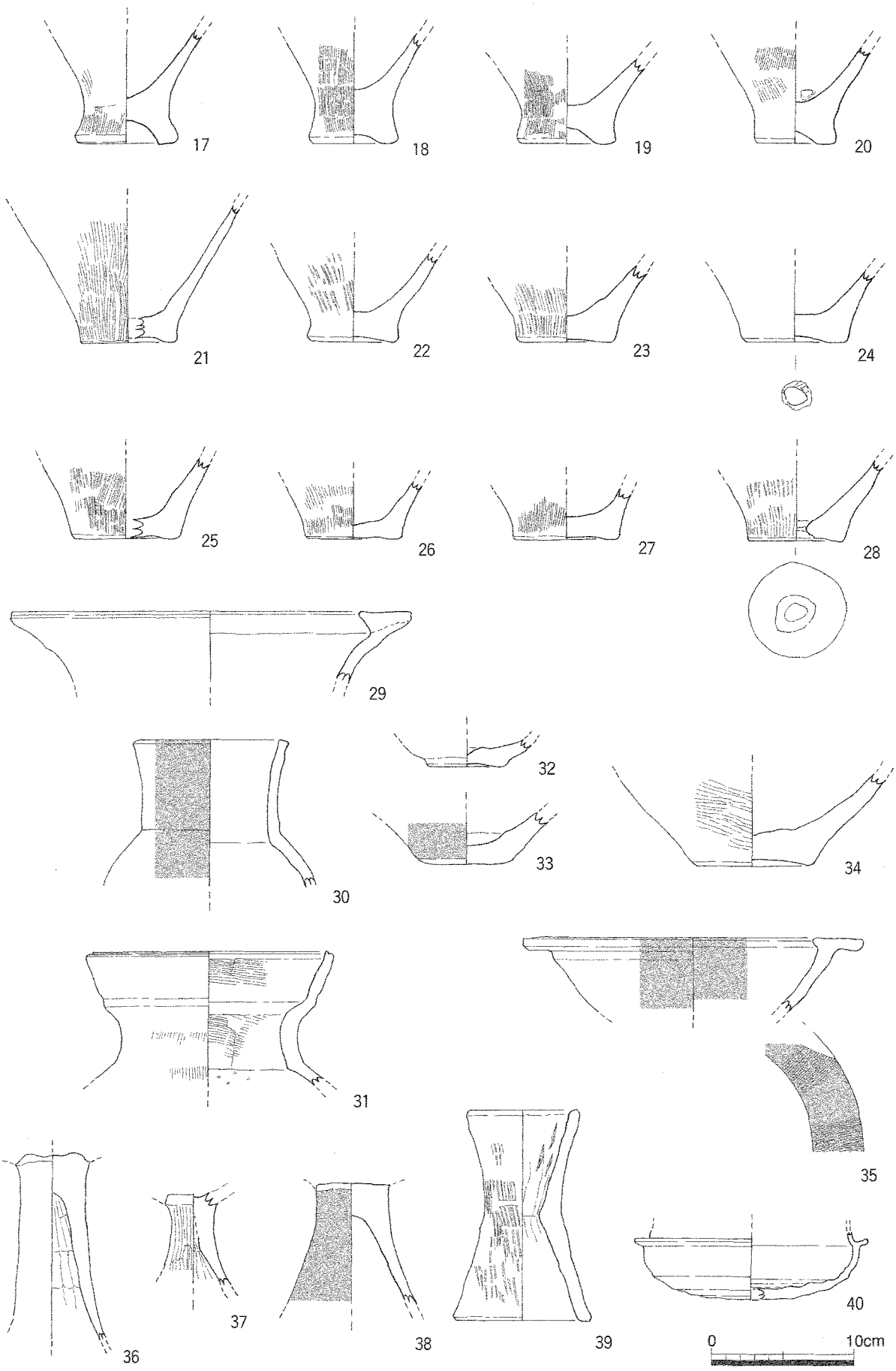


Fig. 8　闇繰地区　河川跡（７層）出土土器図②（１/４）

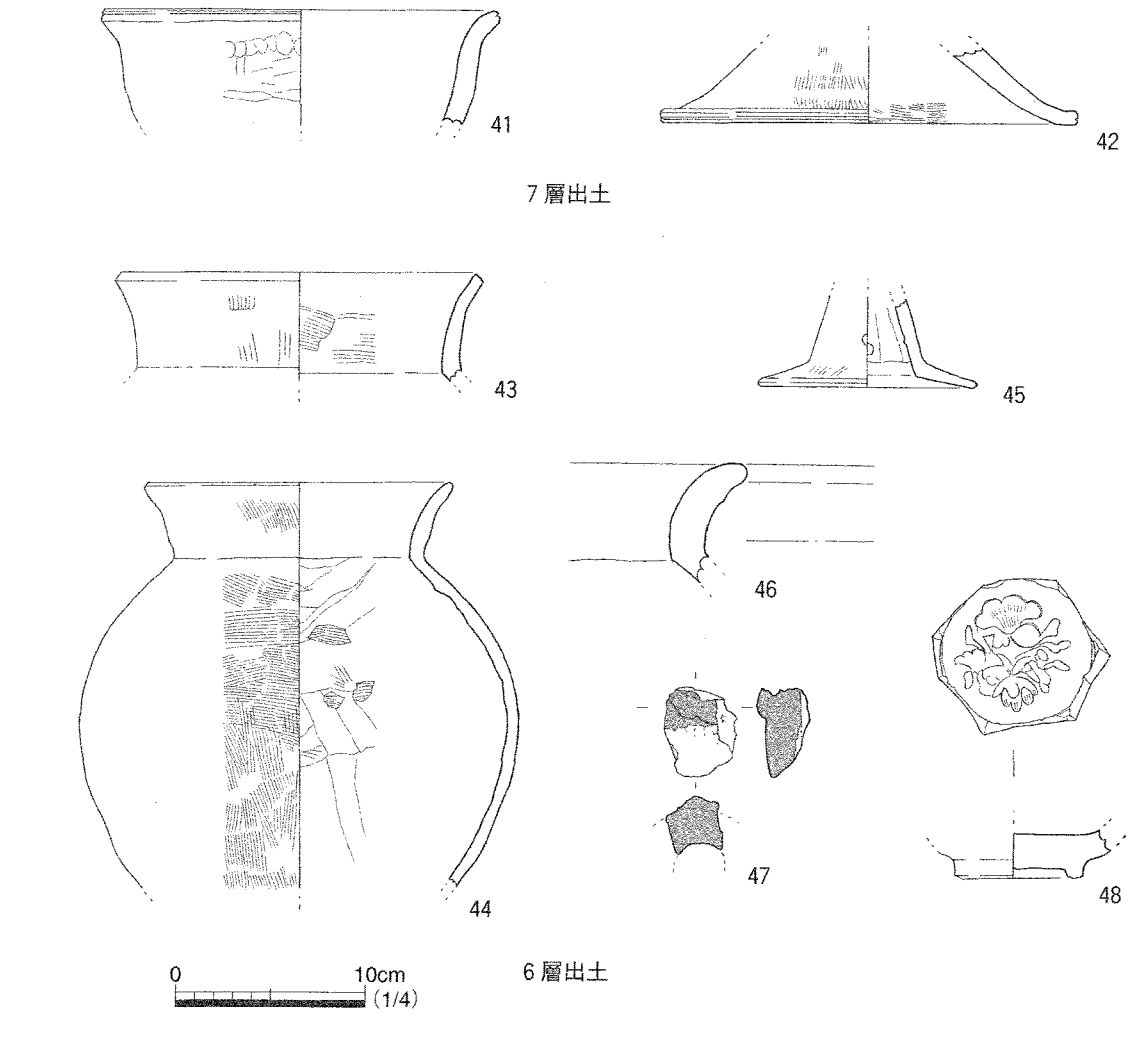


Fig. 9　閼繰地区　河川跡（7層）出土土器図③およびその他出土遺物図
（41～47，54＝1／4　48～53，55＝1／3）

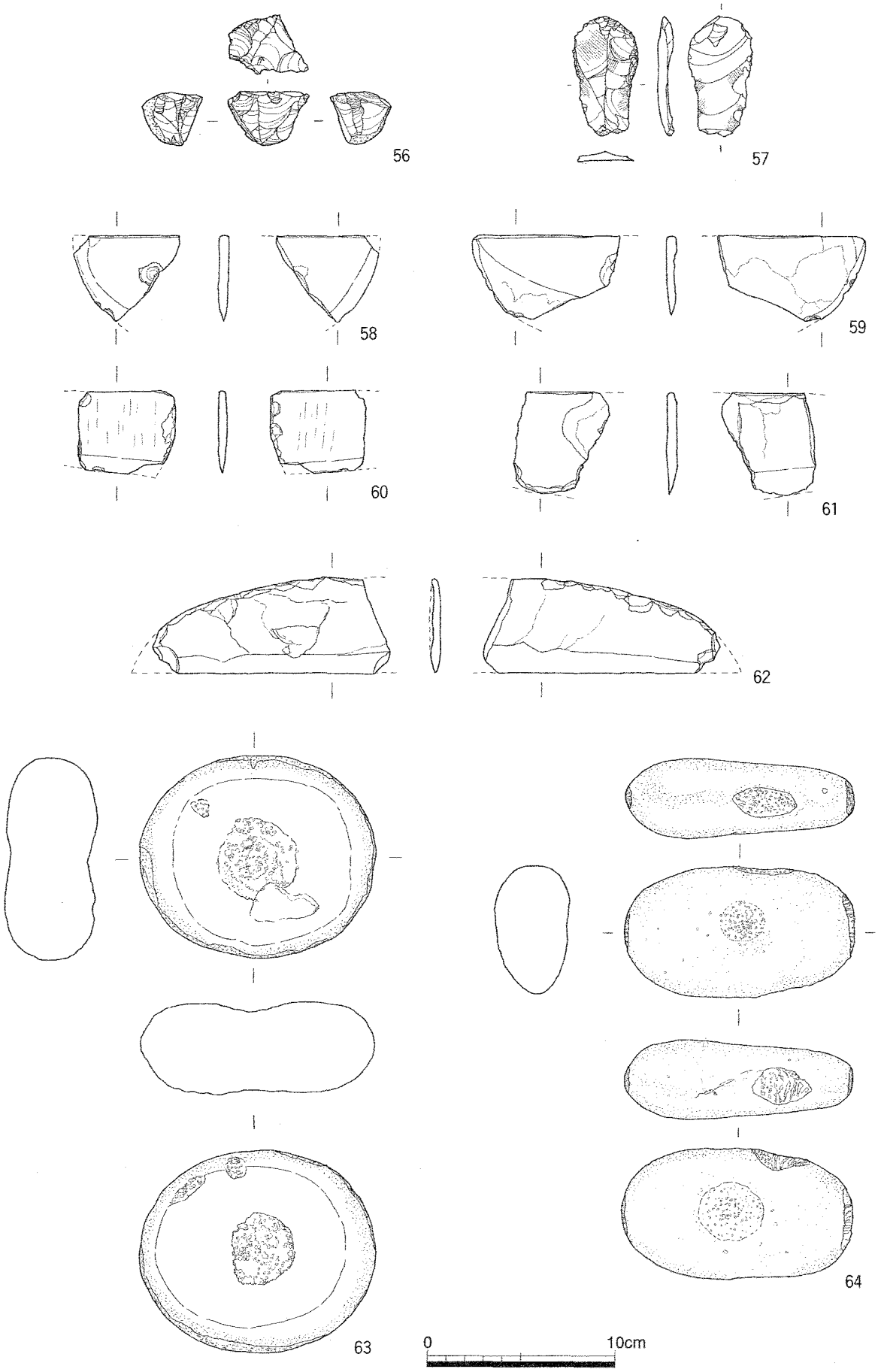
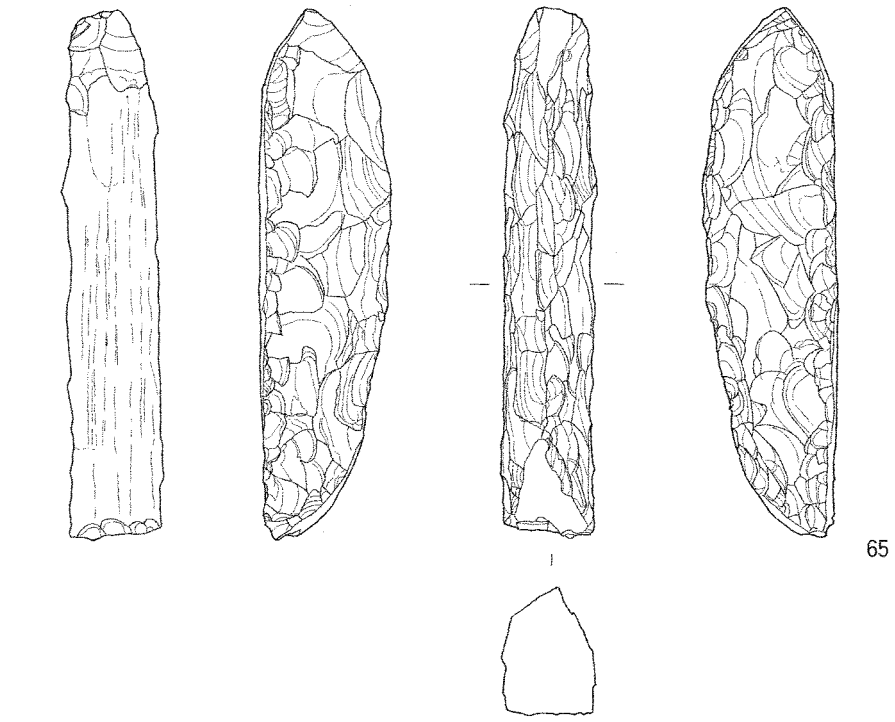


Fig. 10　閨繰地区　石器図①（1／3）



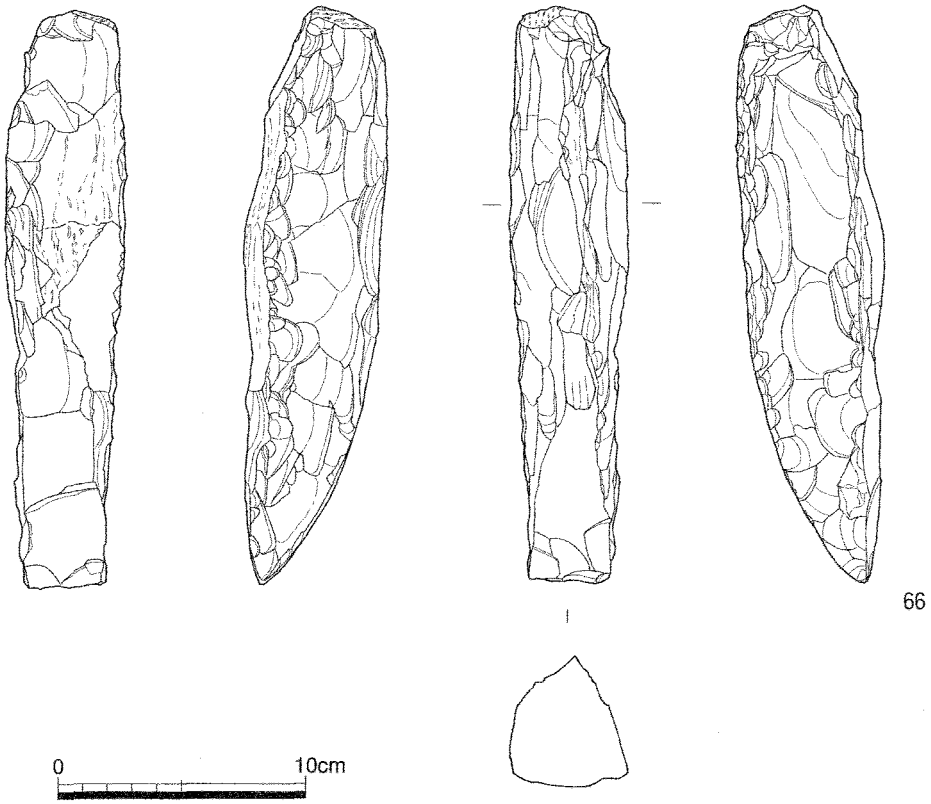


Fig. 11　闇繰地区　石器図②（1/3）

(4) 遺物

①土器

7層出土土器（Fig. 7～9）

河川跡の堆積である7層の出土土器を説明する。なお，北部九州系弥生土器の時期判断については宮崎編年〔**宮崎2005**〕を参照した**註1**）。**1～27**は甕の口縁部である。**1**は口縁部の断面が「如意輪」形となり，先端下部に刻目が入る。**2**は胴部で2本の沈線が入る。ともに前期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。**3**は口縁部の断面が「三角」形となり，くびれる頸部に1本の沈線が入る。中期Ⅰ期の資料である。**4～6**は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部先端が口縁の屈曲部よりも高く位置し口縁部が内側に傾斜する。**4**は口縁部下に1条，**5**は2条の三角突帯を施す。中期Ⅱ期の資料である。**7**は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部が水平に伸びる。中期Ⅲ期の資料である。**8～13**は口縁部の断面が「鋤先」形へと移行し，口縁屈曲部内側のつまみ出しも明瞭となる。また口縁部下に1条の三角突帯を施す。**14**は三角突帯のないものである。中期Ⅳ期の資料である。**15**は口縁部の断面が「鋤先」形ではあるが，全体的に角張った印象を与える。外面には丹塗りを施す。他地域の資料と思われる。**16**は甕棺材で内面に丹塗りの痕跡がわずかに残る。口縁部が内側に大きく張り出して外側には張り出さず，口縁先端部が低く傾斜する。橋口編年〔**橋口2005**〕のＫⅡｂ～ｃに比定され，弥生時代中期前半の資料である。**17～28**は甕の底部である。**17～20**は底が大きく凹んで上げ底となり厚みのある裾部がやや広がる。中期Ⅰ期の資料である。**21～24**は底の凹みは浅く，厚みも減る。中期Ⅱ～Ⅲ期の資料である。なお**22**は搬入品と思われる。**25～28**は平底となる。**28**は底に穿孔が見られる。中期Ⅳ～Ⅴ期の資料である。**29～34**は壺である。**29**は広口壺の口縁部で，内面に丹塗りの痕跡がある。中期Ⅱ期の資料である。**30**は直口壺の口縁部で，外面に丹塗りの痕跡がわずかに残る。**31**は古墳時代の壺で，山陰系と思われる。**32～34**は壺の底部である。**32**は底部に段があり，前期末の資料と思われる。**33**は外面に丹塗りの痕跡が残る。**34**はやや底が凹む。**35**は高坏の口縁部で，断面が「鋤先」形となり，口縁部上面に放射状の暗文が施される。また全面に丹塗りの痕跡が残る。**36～38**は高坏の脚部で，**36**は丹塗りの痕跡が残る。**39**は器台である。高坏，器台ともに中期の資料である。**40**は須恵器坏の坏部で，上層からの混入と思われる。小田編年〔**小田1979**〕のⅢ－Ａ式（6世紀中頃）に比定される資料である。**41～42**は朝鮮半島系無文土器に類似する資料である。**41**は鉢で口縁部下に指オサエ，胴部に横ミガキ風のナデで仕上げる。**42**は高坏の脚部で，ハケ目の後にナデ消して仕上げる。

6層出土土器（Fig. 9）

43は壺の口縁部である。**44**は布留系甕である。**45**は高坏の脚部で，古墳時代の資料である。**46**は甕の口縁部で，外面にはスス痕が付着する。奈良時代の資料である。**47**は鞴の羽口と思われ，熱を受けている。**48**は青磁器の碗の高台で，見込みに花弁文型押を施す，明代の資料か。

5層出土土器（Fig. 9）

49は須恵器の壺の底部で内外面ともにロクロナデで仕上げる。古代の資料と思われる。**50**は須恵器の杯の蓋で，外面はロクロ右回り回転ケズリが見られる。焼成は良好で堅緻な仕上がりである。小田

編年のⅡ－B式に比定される資料である。51は青磁器の碗の口縁部で竜泉窯系の資料である。森田・横田編年〔**森田・横田1978**〕の碗Ⅰ－5－b類に比定される。52は白磁器の碗の高台で，円板状を呈する。見込みには透明釉が施されているが，高台は露胎である。白磁碗Ⅴ類に比定される。

4b層出土土器（Fig. 9）

53は楽浪系瓦質土器の鉢の口縁部である。ロクロ回転ナデで仕上げる。54は土師器の高坏で，ほぼ完形に近い。古墳時代前期の資料である。55は青磁器の盃である。見込みにはクズが付着し，高台は露胎である。明代の資料かと思われる。

②石器（Fig. 10～12）

56，58～62，55～59は7層出土，63～64は6層出土，57は出土層位不明である。56～57は黒曜石で，ともに星鹿産のものと思われる。56は円礫である。57は使用痕のある剥片で，右側縁辺の全体にわたり使用による刃潰れが見られる。左側縁辺は後世の剥離のため不明である。全体に摩滅しているため，移動してきた可能性もある。58～59は石包丁で，いずれも頁岩製である。ともに外湾形の半月形で刃部は両刃，背はほぼ平坦に仕上げられている。敲打による穿孔の途中で破損した未完成品と思われ，

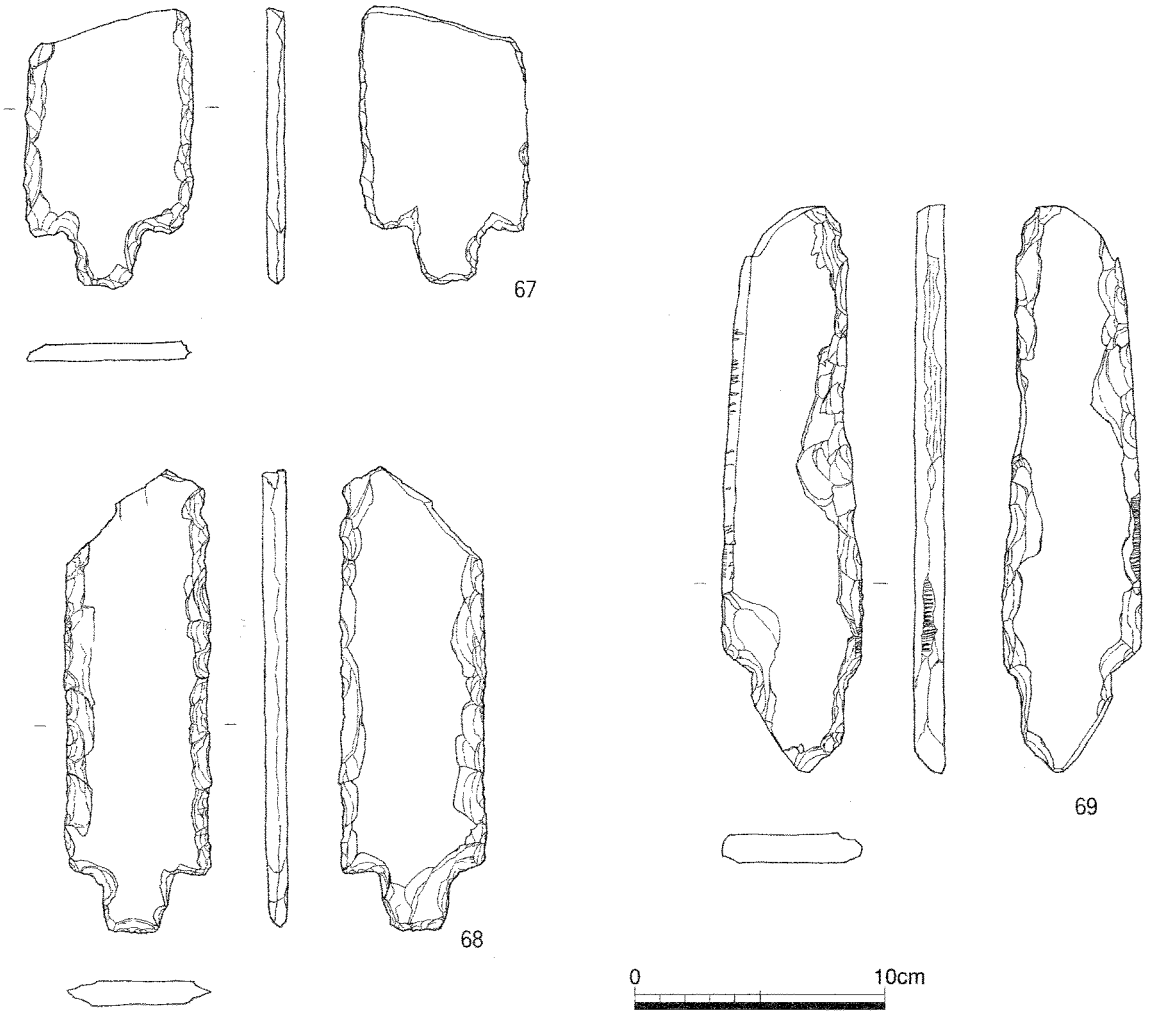


Fig. 12　閼繰地区　石器図③（1/3）

特に58は途中まで穿孔した痕跡が残る。60～62は石鎌で，いずれも頁岩製である。60は基部の破片で，刃部は両刃加工かつ直線刃で，丁寧に研磨されている。61は基部の破片で，刃部は方刃加工かつ直線刃で，研磨の痕跡が見られる。62は先端部と基部側面部（柄の装着部）が欠損し，刃部は両刃かつ直線刃である。研磨がないため刃部の研磨加工の前に破損した未完製品か，あるいは打製石鎌である可能性もある。63～64は凹石で，63は多孔質玄武岩製で平面円形，平坦面の２面ともに凹面，側面全体に敲打痕が見られる。64は玄武岩製で平面楕円形，平坦面に浅い凹面，側面の４面に敲打痕が見られる。65～66は頁岩製の方柱状片刃石斧である。ともに断面が三角形となるよう敲打によって成形されており，同じ技法で製作されている。66は抉入が見られる。67～69は頁岩製の石剣である。67～68は茎が作り出されて関が明瞭となっているが，69は茎が未成形である。いずれも身を側面から敲打して刃部を作り出す成形過程が見られる。

2．八反地区

(1) **調査概要**（Fig. 13～14）

八反地区の調査はＡ～Ｂ区の２カ所を行った。Ａ区の調査面積は30㎡で，調査期間は平成19年６月25日から同年７月25日を要した。このＡ区地点は農道であるため，Ｈ14県道〔**福田・小玉2004**〕およびＨ15県道〔**林2005**〕の際に未調査であった所である。またＢ区は農業用ポンプのあった所で，調査面積は45㎡，調査期間は平成19年10月25日から平成19年11月15日を要した。

Ａ区では古代の水田畦畔跡と推測される遺構が検出されているが，記録がないため詳細は不明である。Ｂ区では溝状遺構が２条（ＳＤ１およびＳＤ２）およびピット４基，また古代のものと推測される杭が確認されている。ＳＤ１の覆土である８層より，貨泉２枚や朝鮮半島系無文土器，弥生土器片や木片などの遺物が出土している。

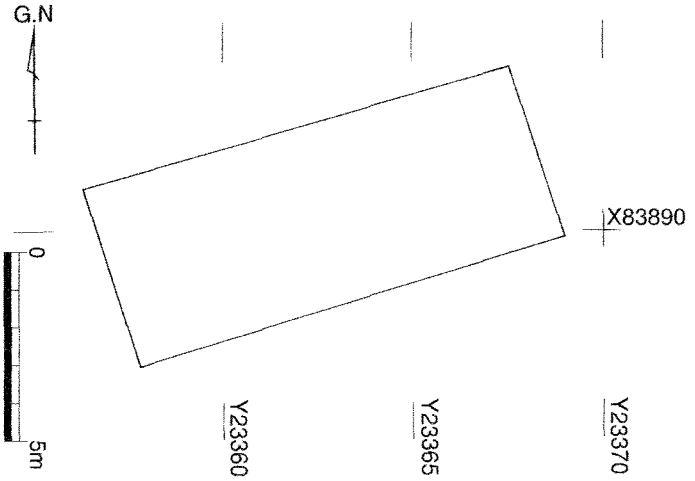


Fig. 13　八反Ａ地区　全体図（１/200）

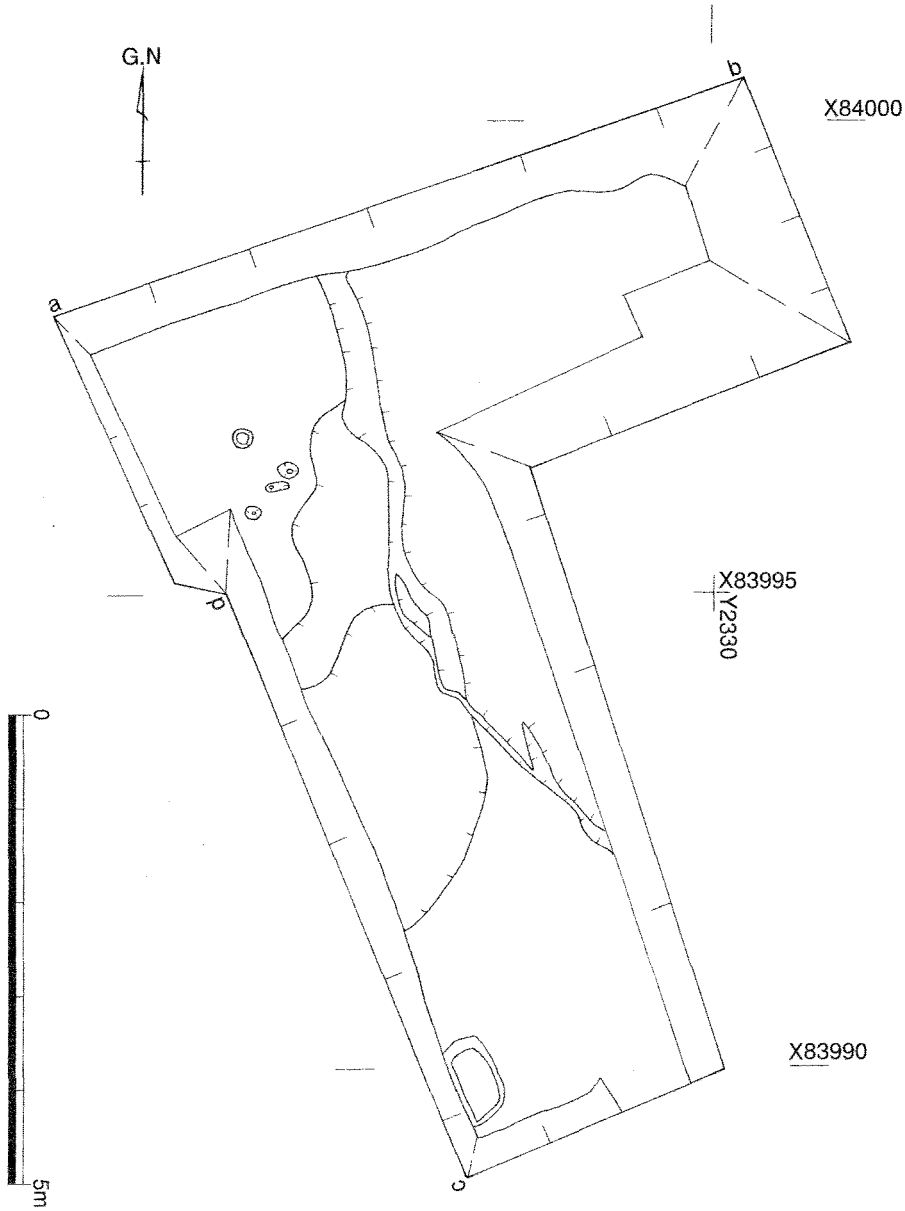


Fig. 14　八反Ｂ地区　全体図（１/80）

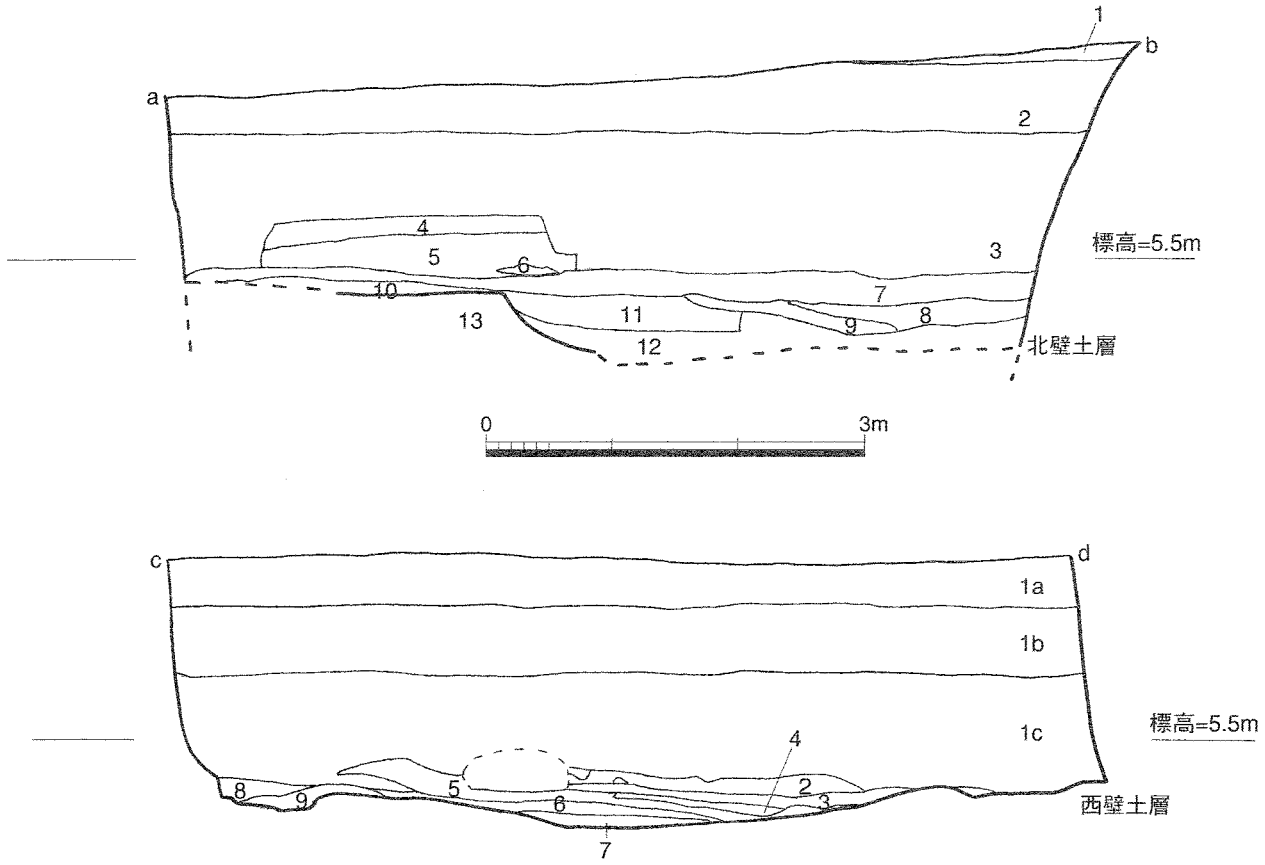


Fig. 15　八反Ｂ地区　土層図（１/60）

(2)　**土層**（Fig. 15）

①Ｂ区北壁

１～３層はＨ14県道調査の埋め戻し土である。８～12層がＳＤ１の覆土となる。８層は黒褐色砂質土層で，弥生土器片や木片が多量に出土している。11層は灰オリーブ色粘質土層，12層は灰色粘質土層で遺物は出土していない。なお，上記以外の層位については注記等の記録がないため説明を省略する。

②Ｂ区西壁

１層は撹乱が著しく，黒褐色や褐灰色の土層が混じり合っている。６層の黒褐色砂礫土層より多量の土器片と加工痕が見られる木板などが出土している。なお，上記以外の層位については注記等の記録がないため説明を省略する。また土層分割線に不自然な点もあるが，調査担当者の記録のまま図化した。

(3)　**遺構**（Fig. 14）

①ＳＤ１

Ｂ区で検出した。遺構検出規模は南北約７ｍ，東西約４ｍ，深さ0.7ｍである。流れの軸は南東－北西をとる。遺構の覆土は４層からなり，そのうち８層から貨泉や朝鮮系無文土器，また多量の弥生

土器片や木片が出土している。H14県道調査における第９調査区のＳＤ４との繋がりを検討したが，軸が異なるため別の遺構と思われる。しかし，H14県道調査の成果との整合性で疑問が残る。

②ＳＤ２

Ｂ区で検出した。遺構検出規模は南北約1.4m，東西0.7mである。この遺構の西側では，平成11年度の農道調査〔2000村川〕が行われ，付近より３号旧河道が検出されている。ＳＤ２と３号旧河道との繋がりも想定できるが，記録の不備により平面的な繋がりを確認することは困難であった。また３号旧河道は検出幅が南北約６mであると報告されるが，このＳＤ２は検出幅が南北３m弱しかない。両遺構が極めて隣接することを考えれば，仮にＳＤ２が３号旧河道の終息地点であるとしても，遺構が狭くなりすぎる感がある。

③ピット

ピット①より土器片が出土しているが，摩滅が著しく，時期の判断はできなかった。

(4) 遺物

①土器（Fig. 16～18）

６層出土の資料を説明する。なお，北部九州系弥生土器の時期判断については宮崎編年〔宮崎2005〕を参照した。70～77は朝鮮半島系無文土器または擬朝鮮半島系無文土器である。70～71は甕の口縁部で，口縁部の断面が「く」の字となり，内面や頸部外面にヘラナデの後にナデ消し調整，胴部はハケ目の後にナデ消し調整が見られる。72～76は甕の底部である。72は甕の底部で，内面はヘラナデ，外面はヘラナデの後にナデ消し調整と思われる。72は外面をヘラナデ（または板ナデ）の後にナデ消し調整で平滑に仕上げている。内面はヘラナデ調整である。73は外面をハケ目の後にナデ消し調整で平滑に仕上げ，内面は指ナデで仕上げている。74は底部が不整形ながら裾広がりとなり，外面をハケ目の後にナデ消し調整を，内面は指オサエやナデで仕上げている。75は外面をハケ目の後にナデ消し調整を，内面は指オサエや指ナデで仕上げている。76は底部が不整形ながら裾広がりとなる。摩滅が著しく，調整は不明である。77は壺の胴部で，外面は黒塗りで横方向へのヘラナデ調整，内面はヘラケズリの後にナデ消してともに平滑に仕上げている。78～86は楽浪系瓦質土器の壺である。78～81は胴部破片で内外面ともにロクロ調整の痕跡が明瞭に残り，外面は黒色である。82は外面に縄席文タタキ，内面に当具痕が残る。83は胴部から口縁部で，内外面ともにロクロ成形痕が残るが，外面はナデ消し調整が見られる。84は頸部から口縁部で，内外面ともロクロ成形痕が残り，外面は黒色である。85は底部で，外面下部はロクロ成形の後にヘラケズリで面取り状となる。内面はロクロ成形，底面には板目痕が残る。86は底部で，外面に縄席文タタキを密に施し，内面は指ナデ，一部には当具痕も見られる。また器壁を薄くするためにケズリ調整を行ったような痕跡も見られる。87は陶質土器で内外面ともロクロ成形の後にナデ調整で仕上げている。

88～97は弥生時代の甕である。88は口縁部で，口縁部先端に刻目を施し，内外面ともナデ調整が見られる。前期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。89は口縁部で，口縁部の断面が「コ」の字形となり口縁先端部

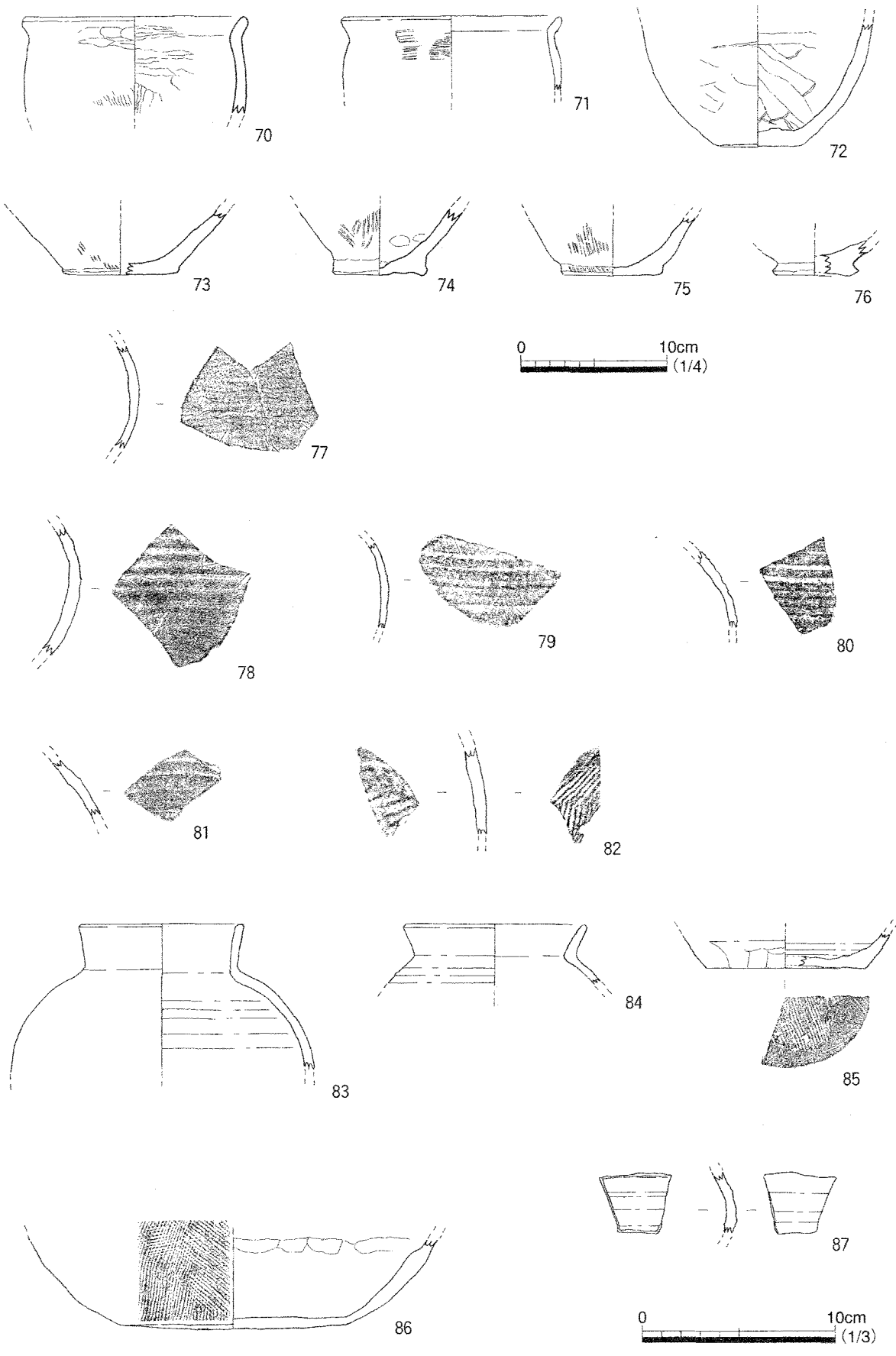


Fig. 16　八反Ｂ地区　出土土器図①（70～76，83～86＝１／４　77～82，87＝１／３）

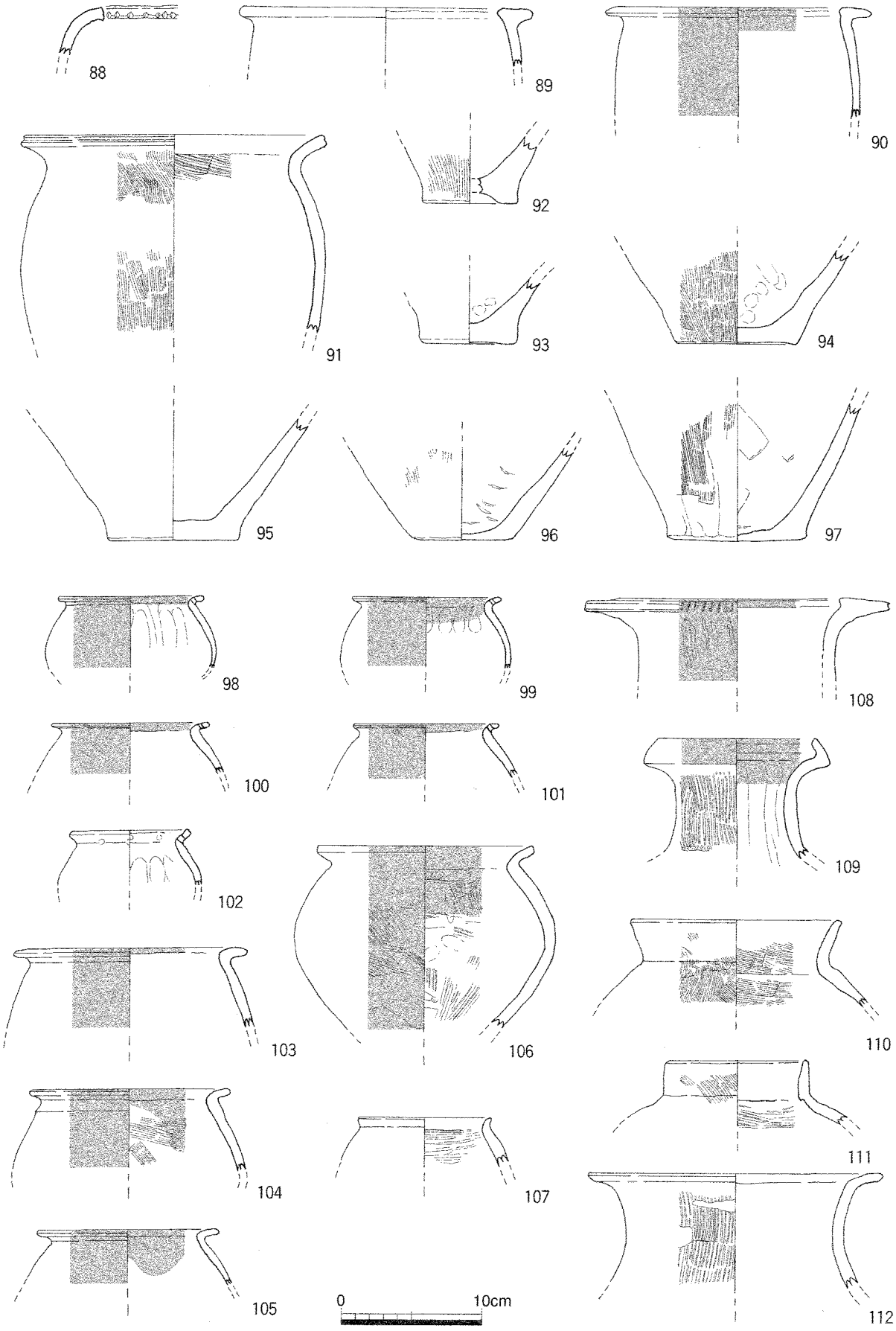


Fig. 17　八反B地区　出土土器図②（1/4）

分が水平に伸びる。内外面ともにナデによる平滑に仕上げる。中期Ⅱ期の資料である。90は口縁部から胴部で，口縁部の断面が「コ」の字形となり口縁先端部分がやや垂れ下がる。外面および内面の上部に丹塗りの痕跡が残る。面はナデ調整で平滑に仕上げる。中期Ⅲ期の資料である。91は口縁部から胴部で，口縁部の断面が「く」の字形となり口縁先端部分の先端面に沈線がめぐる。外面はハケ目の後にナデ消し調整が施され，スス痕が残る。内面は口縁部の屈曲部にハケ目が残る以外は指ナデにより平滑に仕上げられる。後期Ⅰ期の資料である。92は底部で，上げ底状となる。外面はハケ目の後にナデ，内面はナデ調整にスス痕が付着する。中期Ⅰ期の資料である。93は底部でわずかに上げ底状となり，外面はハケ目の後にナデ消し，内面には指オサエが残る。中期Ⅱ期の資料である。94は底部でほぼ平底状となり，外面はハケ目，内面は指オサエや指ナデで仕上げられる。中期Ⅲ～Ⅴ期の資料である。95は底部で平底状となり，内外面ともナデ仕上げである。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。96～97は底部でやや凸レンズ状となり，外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデ調整で仕上げている。後期Ⅳ期の資料である。98～107は短頸壺で，口縁部の断面が「く」の字形となり，外面はハケ目の後にナデ消して平滑に仕上げ，内面は指オサエ，指ナデで仕上げる。外面および口縁部の内面に丹塗りの痕跡が残る。98～102には口縁屈曲部に穿孔が確認される。中期Ⅳ～Ⅴ期の資料である。106は外面にハケ目の後にナデ消し，丹塗りの後に黒塗りを施している。また内面はハケ目が残る。後期Ⅰ期の資料である。107は口縁部の断面が「く」の字形になるものの，口縁先端部分が短く，上方に立ち上がる。外面はヘラナデの後にナデ消し，内面は横方向へのヘラミガキで仕上げる。中期Ⅰ期か，あるいは朝鮮半島系無文土器の資料かと思われる。108～112はそれ以外の壺である。108は鋤先口縁をもつ広口壺の口縁部で，外面は横ナデで平滑に仕上げて丹塗り，頸部には縦の暗文が施される。内面は横ナデ調整である。中期Ⅴ期の資料である。109は袋状口縁壺で，口縁部のふくらみに明瞭な稜線が走る。外面の頸部に縦ハケ目，口縁部ふくらみ稜線の上面は横ナデ調整と丹塗りが確認できる。内面は口縁部付近に横ナデ，頸部にはしぼり痕が確認される。後期Ⅱ期の資料である。110は口縁部の断面が「く」の字形となる壺で，胴部外面は縦ハケ目，口縁外面は下部がハケ目ナデ消し，上部が横ナデ調整で，部分的に赤色塗彩を施す。内面は横ハケ目である。後期Ⅴ期の資料か。111は直口壺の口縁部で，外面はハケ目の後に横ナデ，内面の口縁部は横ナデ，胴部にはハケ目の痕跡が残る。後期Ⅴ期～古墳Ⅰ期（古墳時代初頭）の資料である。112は広口壺の口縁部で外面は縦ハケ目，内面はナデ調整で仕上げる。型式的には後期の資料だが，擬朝鮮半島系無文土器である可能性もある。113～115は鉢である。113は外面の一部に縦ハケ目の痕跡が残るが，全体的には内外面ともナデ調整で仕上げる。114も同様に内外面ともナデ調整で仕上げるが，底部には指オサエによって高台状の段を成形している。ともに中期の資料である。115は内外面ともナデ調整で，やや丸底状となる。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料か。116～117は高坏である。116は口縁部で内外面とも横ナデで平滑に仕上げ，内面には暗文が入る。古墳Ⅰ期（古墳時代初頭）の資料である。117は脚部で，内外面ともナデ調整である。大きさからミニチュア製品と思われる。118は甕で口縁部の断面が「く」の字形となり，口縁部は内外面とも横ナデ，胴部の外面は縦ハケ目，内面はヘラ調整の後にナデ調整で仕上げる。口縁先端部分先端

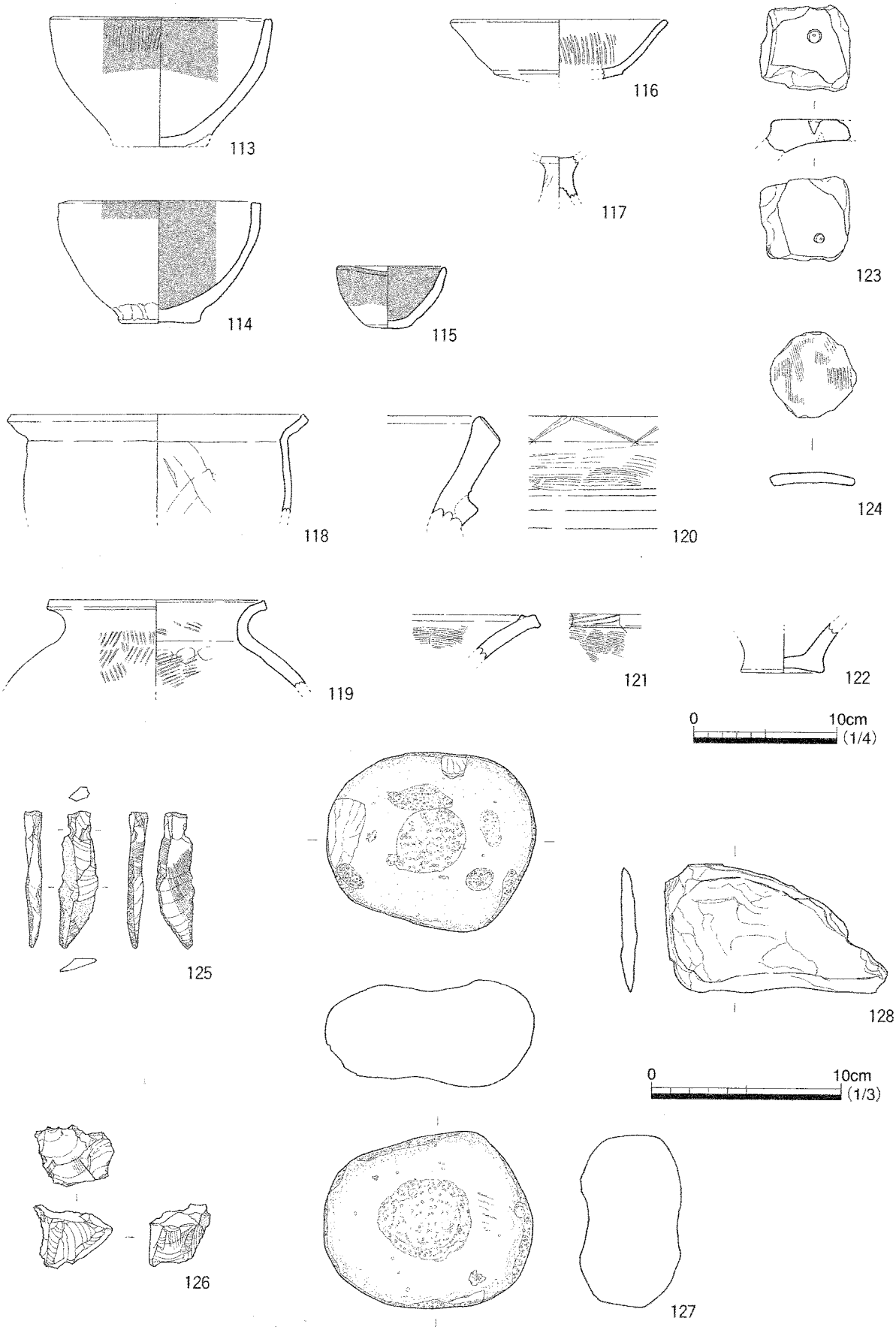


Fig. 18　八反Ｂ地区　出土土器図③および石器図（113～122＝１／４　125～128＝１／３）

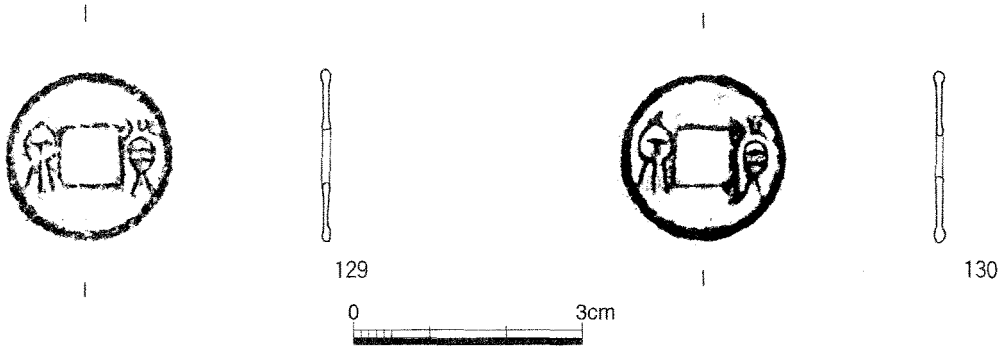


Fig. 19　八反Ｂ地区　出土貨泉図（１/１）

が上に尖っており，いわゆる「跳ね上げ」口縁である。豊前から周防方面からの搬入品で弥生時代中期末から後期初頭の資料と思われる。**119**は壺で口縁部が「Ｓ」字形となり，口縁部は内外面とも横ナデ調整，胴部は外面が縦ハケ目，内面がハケ目の後にナデ調整，一部に指オサエの痕跡が残る。他地域からの搬入品で，弥生時代中期の資料と思われる。**120**はいわゆる西新系甕棺の口縁部で，頸部に突帯が１条確認される。口縁部の外面は横ハケ目，内面はナデ調整である。口縁部上面にはヘラによる山形文が刻まれる。橋口編年〔**橋口2005**〕におけるＫＶｃ式に比定される。**121**は壺の口縁部で，内外面ともにハケ目調整，口縁部上面に沈線を施す。口縁部内面に突起状の突帯を巡らせている特徴がある。他地域（周防あたりか？）からの搬入品と思われる。**122**は甕の底部で内外面ともにナデ調整，底部がやや裾広がりかつ上げ底となる。福岡北東部系で弥生時代中期の資料である。**123**は鋤先口縁壺を利用した土製品と思われる。両側から穿孔されるがともに貫通していない。**124**も同様に円盤状の土製品で，甕の胴部を利用している。

②石器（Fig. 18）

125はスクレーパーで刃部は刃潰しが施される。基部に抉りが見られる点などから縄文時代の資料かと思われる。黒曜石は良質で，腰岳産かと思われる。**126**は石核である。黒曜石に混入物（いわゆるス）が見られるため壱岐産の黒曜石かと思われる。**127**は凹石（敲石）で，両面ともに凹面，周囲の４面にタタキ面が確認できる。また部分的にスス痕が付着している。**128**は石鎌で刃部の研磨は見られず，全体的に風化している。

③貨泉（Fig. 19）

貨泉が２点出土している。**129**は直径23㎜，厚さ２～１㎜，重量は2.0ｇ。**130**は直径23㎜，厚さ２～１㎜，重量は2.6ｇ。ともに方孔の輪郭は背面のみである。

3．池田大原・原地区

(1) 調査概要（Fig.20，21）

調査範囲が南北に長いため，池田大原Ａ～Ｃ区，および原Ａ～Ｂ区に分割して調査を行った。調査面積は1,904㎡，調査期間は平成19年４月16日から平成19年８月22日を要した。池田大原１区の標高12ｍをこえる範囲（調査区の北側）では水田造成の際に遺構が削平されている様子が確認された。また同区の標高11ｍ付近ではピットや不明遺構などの遺構が確認されているが，詳細は記録不備のため省略する。池田大原２区では北東から南西に入り込む谷状の旧地形が確認できた。池田大原３区，および原１～２区は記録不備のため図化および説明を省略する。

(2) 土層（Fig.22）

池田大原Ｂ区

５層は褐灰色粘質土層で，中世陶磁器が出土している。調査担当者は，８層と９層の境に見られる凹凸を古代の水田面とし，また黒色土層である10層は沼や沢地の堆積と推測している。上記以外の層位ついては注記等の記録がないため省略する。

(3) 遺物（Fig.23）

①石器

131は剥片鏃である。漆黒の黒曜石であるが，外面に混入物（いわゆるス）が見られる。黒色土層である10層からの出土である。132～133は台形石器で，132は左側縁を主要剥離面からの調整，右側縁を外面からの切断で成形している。133は左側縁を主要剥離面からの調整で，右側縁は外面からの切断で成形している。ともに暗褐色土層の出土と記録されるため，５層からの出土かと思われる。

②磁器

134～136は竜泉窯系の青磁器である。134は見込みに片彫りによる蓮花文を施し，内外面とも貫入が見られ，高台内面は露胎である。135は口縁下の内面に３条の沈線を施し，内外面ともに貫入が見られる。ともに森田・横田編年〔**森田・横田1978**〕の碗Ⅰ類に比定される。136は片彫りの鏑連弁文を施し，碗Ⅱ類に比定される。いずれも５層の出土である。

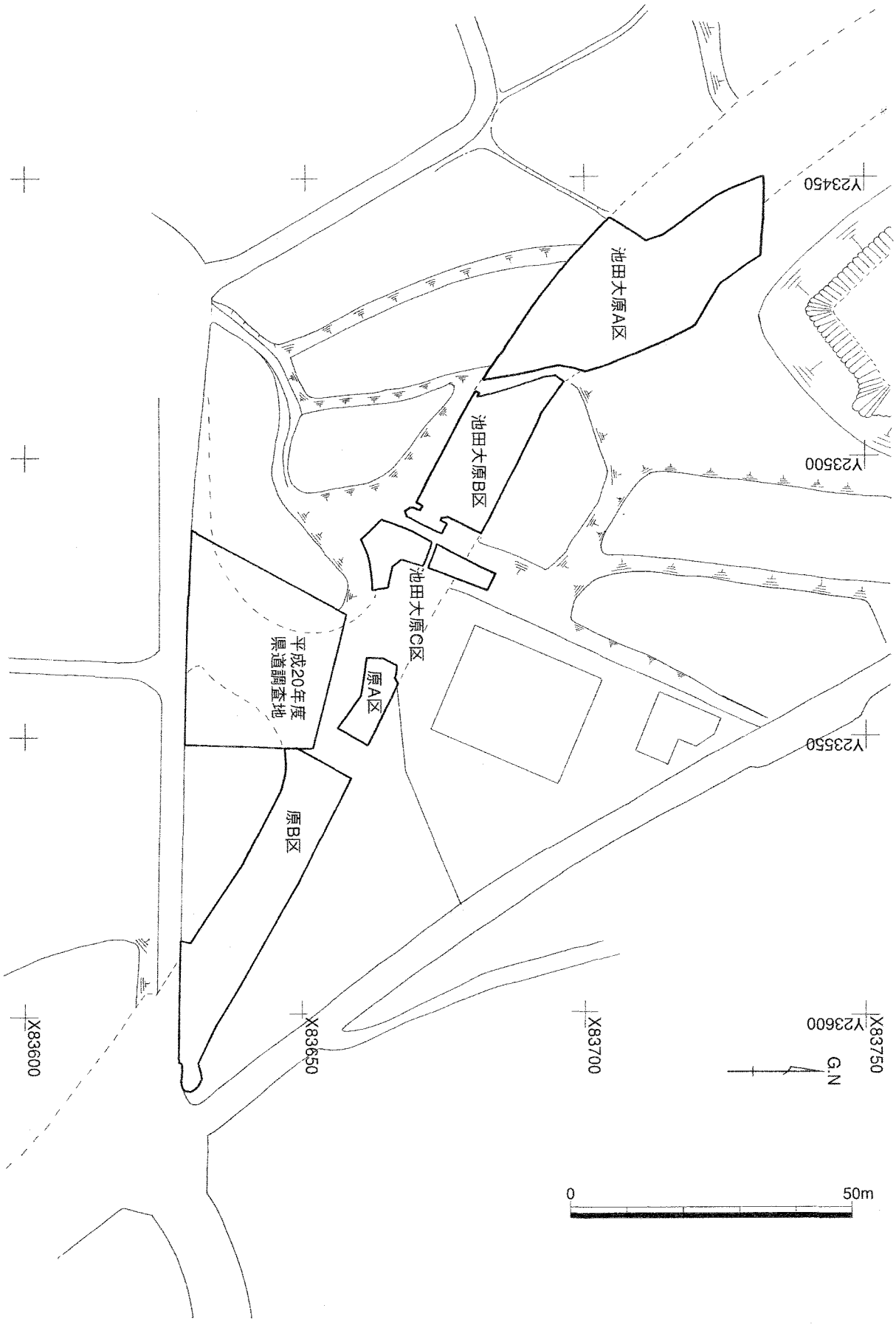


Fig. 20　池田大原・原地区　全体図（1/1,000）

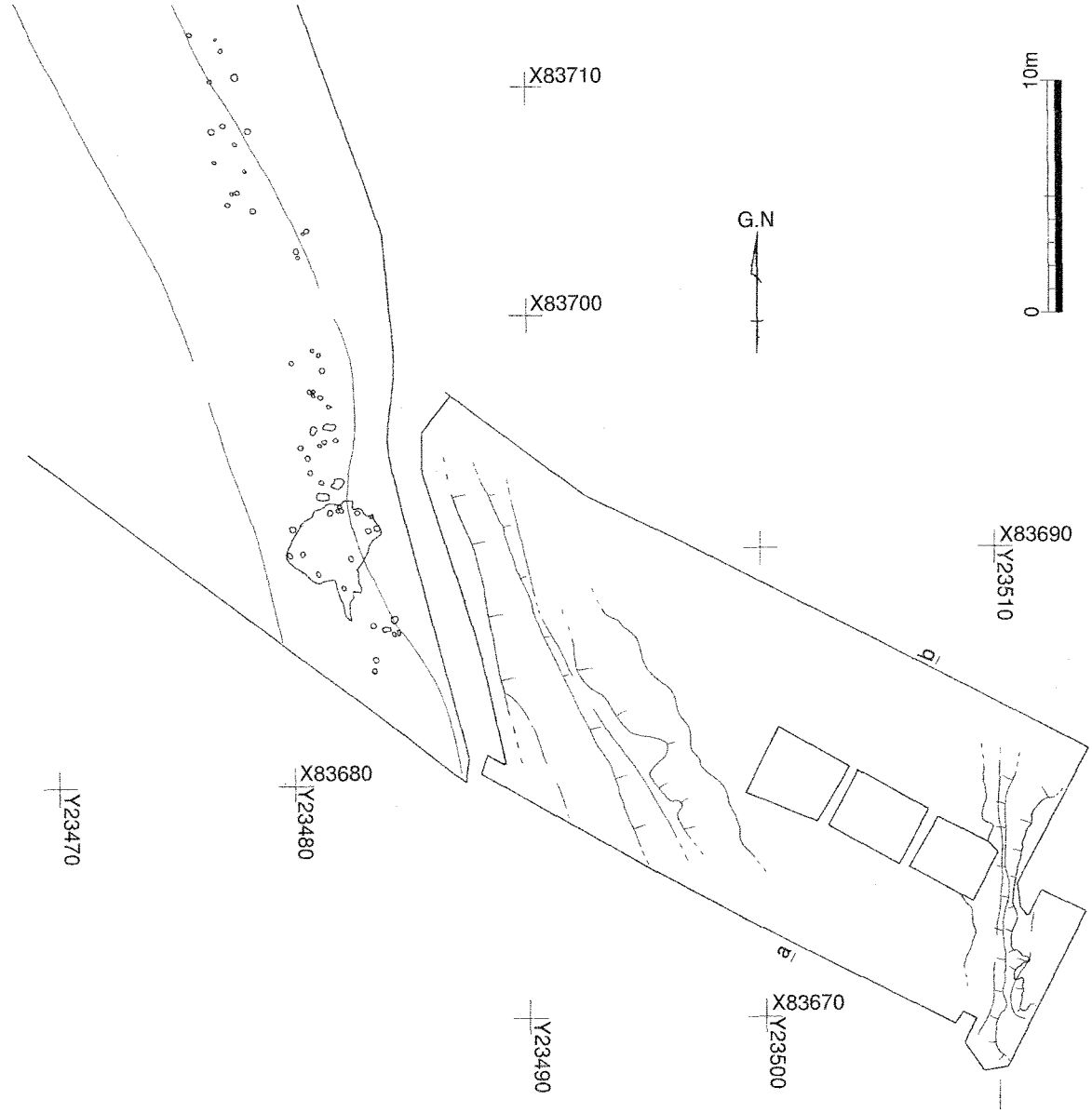


Fig. 21　池田大原 A～B 地区　平面図（1/300）

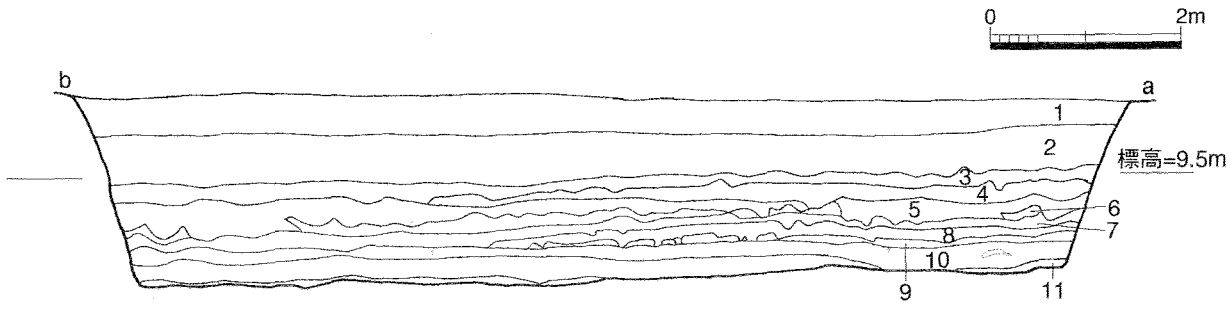


Fig. 22　池田大原 B 区　土層図（1/80）

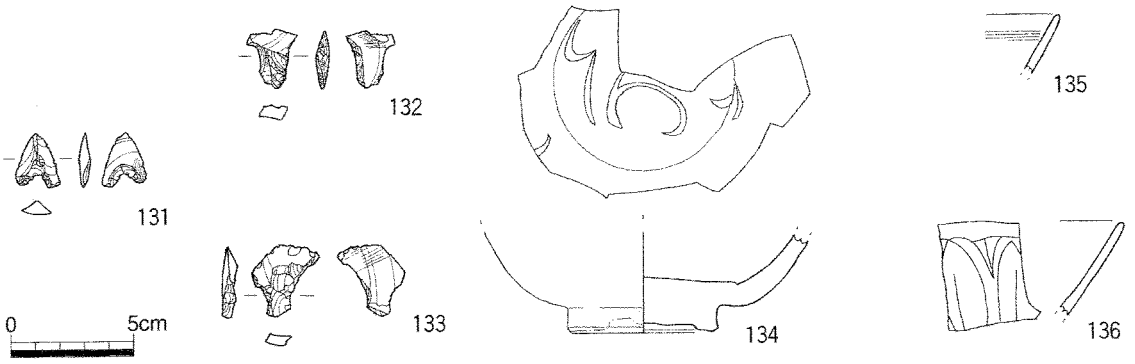


Fig. 23　池田大原地区　出土遺物図（1／3）

報告番号	調査地区　遺構　層位 調整手法	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 備考	器種
1	闍繰　河川跡　7層 風化により調整不明	10YR5/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	長石・石英・金雲母 刻目	甕
2	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・金雲母 沈線(2条)	甕
3	闍繰　河川跡　7層 風化により調整不明	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	長石・石英・金雲母 沈線(1条)	甕
4	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:平滑ナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
5	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	10YR5/6黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英・金雲母 三角突帯(2条)	甕
6	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:平滑ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	長石・石英・金雲母	甕
7	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:平滑ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英・金雲母	甕
8	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
9	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
10	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目→ナデ消し　内面:平滑ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
11	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	7.5YR5/6明褐	10YR5/6黄褐	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
12	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:風化により調整不明	2.5YR5/8明赤褐	5YR6/4にぶい橙	長石・石英・金雲母 三角突帯(1条)	甕
13	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	長石・石英 三角突帯(1条)	甕
14	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:風化により調整不明	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	長石・石英・金雲母・角閃石	甕
15	闍繰　河川跡　7層 風化により調整不明	10R5/8赤	2.5YR5/4にぶい赤褐	長石・石英 外面:丹塗	甕
16	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:ナデ　内面:ナデ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR4/8赤褐	長石・石英 甕棺材　内面:一部に丹塗	甕
17	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y4/1黄灰	長石・石英・金雲母 内面:一部にスス痕	甕
18	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:ナデ・指オサエ	5YR6/8橙	5YR4/6赤褐	長石・石英・金雲母・角閃石	甕
19	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:風化により調整不明	5YR5/6明赤褐	5YR4/2灰褐	長石・石英・金雲母	甕
20	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ヘラ・指オサエ・ナデ	2.5YR6/8橙	7.5YR4/1褐灰	長石・石英・金雲母	甕
21	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:風化により調整不明	5YR6/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄橙	長石・石英	甕
22	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:指オサエ・ナデ	10YR5/1灰褐	10YR4/2灰黄褐	長石・石英 豊前系甕	甕
23	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:ナデ	2.5YR6/8橙	10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英・金雲母	甕
24	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英	甕
25	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:指オサエ・ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	長石・石英	甕
26	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:ナデ	2.5YR5/8明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英・金雲母 内面:一部にスス痕	甕
27	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目　内面:指オサエ・ナデ	2.5YR5/8明赤褐	5YR3/1黒褐	長石・石英	甕
28	闍繰　河川跡　7層 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ	2.5YR6/6橙	10YR3/1黒褐	長石・石英・金雲母 底部:穿孔　内面:スス痕	甕
29	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　外面:平滑ナデ　内面:平滑ナデ	5YR6/6橙	5YR4/6赤褐	長石・石英・金雲母 広口壺　外面:一部に丹塗痕	壺
30	闍繰　河川跡　7層 風化により調整不明	2.5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英 直口壺　外面:丹塗	壺
31	闍繰　河川跡　7層 外面　口縁部:横ナデ　肩部:ハケ目　内面:ハケ目→ナデ消し	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	長石・石英・金雲母 複合口縁壺　山陰系	壺
32	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	10YR5/2灰黄褐	1035/1褐灰	長石・石英	壺
33	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ・指オサエ	7.5YR7/6橙	5YR6/8橙	長石・石英・金雲母 外面:丹塗	壺
34	闍繰　河川跡　7層 外面:横ミガキ→平滑ナデ　内面:ナデ	7.5YR7/6橙	5YR5/8明赤褐	長石・石英・金雲母・角閃石	壺
35	闍繰　河川跡　7層 口縁部:横ナデ　内面:ミガキ	10R5/8赤	10R5/8赤	長石・石英 口縁部:上面に放射状暗文	高坏
36	闍繰　河川跡　7層 外面:風化により調整不明　内面:シボリ	2.5YR5/8明赤褐	10YR5/4にぶい黄橙	長石・石英・金雲母 外面:丹塗	高坏
37	闍繰　河川跡　7層 外面:縦ミガキ　内面:シボリ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英・金雲母	高坏
38	闍繰　河川跡　7層 外面:ナデ　内面:ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR5/6明褐	長石・石英・角閃石	高坏

Tab. 3　平成19年度調査　土器観察表①

報告番号	調査地区　遺構　層位　色調番号(外)　色調番号(内)　胎土 調整手法　備考	器種
39	闍繰　河川跡　7層　10R5/8赤　10R5/8赤　長石・石英・金雲母 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ・ヘラ痕	器台
40	闍繰　河川跡　7層　N5/0灰　N6/0灰　長石・石英 外面:ロクロケズリ　内面:ロクロナデ　須恵器	坏
41	闍繰　河川跡　7層　10YR4/1褐灰　5YR5/4にぶい赤褐　長石・石英・角閃石 外面:指オサエ・ナデ　内面:ナデ　朝鮮半島系無文土器	鉢
42	闍繰　河川跡　7層　10YR5/2灰黄褐　10YR6/2灰黄褐　長石・角閃石 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ハケ目→ナデ消し　朝鮮半島系無文土器	高坏
43	闍繰　河川跡　6層　10R5/6赤　2.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ハケ目→ナデ消し	壺
44	闍繰　河川跡　6層　7.54/1暗赤灰　5YR5/3にぶい赤褐　石英・金雲母 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:ヘラケズリ　布留式土器	甕
45	闍繰　河川跡　6層　10YR6/4にぶい黄橙　10YR7/4にぶい黄橙　長石・石英・金雲母 外面:ハケ目・横ナデ　内面:シボリ・横ナデ	高坏
46	闍繰　河川跡　6層　2.5Y2/1黒　2.5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母 外面:ナデ　内面:ナデ　古代　外面:スス痕	甕
47	闍繰　河川跡　6層　7.5YR6/8橙　7.5YR6/8橙　長石・石英 —	鞴(フイゴ)
48	闍繰　河川跡　6層　5GY6/1オリーブ灰　5GY6/1オリーブ灰　— —	碗 青磁器　花弁文型押
49	闍繰　—　5層　N5/0灰　N5/0灰　長石 外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ　須恵器	壺
50	闍繰　—　5層　N7/0灰白　N7/0灰白　長石 外面:ロクロケズリ・ロクロナデ　内面:ロクロナデ　須恵器	坏(蓋)
51	闍繰　—　5層　10YR6/2オリーブ灰　10Y6/2オリーブ灰　— —	碗 竜泉窯系青磁
52	闍繰　—　5層　5Y7/2灰白　10Y7/1灰白　— —	碗 白磁
53	闍繰　—　4b層　5Y7/1灰白　5Y7/1灰白　長石 外面:ロクロナデ　内面:ロクロナデ　楽浪系瓦質土器	鉢
54	闍繰　—　4b層　7.5YR7/3にぶい橙　7.5YR7/3にぶい橙　長石・石英・金雲母 口縁部・坏部:平滑ナデ　脚部外面:縦ハケ目　内面:シボリ　ハケ目→ナデ消し　古墳時代	高坏
55	闍繰　—　4b層　2.5GY5/1オリーブ灰　2.5GY6/1オリーブ灰　— —	盌 青磁
70	八反B　—　6層　10YR6/1褐灰　10YR6/1褐灰　長石・金雲母 口縁部:横ナデ　頸部:ミガキ　胴部　平滑ナデ　内面:ミガキ　擬朝鮮半島系無文土器	甕
71	八反B　—　6層　2.5Y7/3浅黄　2.5Y6/3にぶい黄　長石・石英・金雲母 口縁部:横ナデ　頸部:横ハケ目　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:平滑ナデ　擬朝鮮半島系無文土器	甕
72	八反B　—　6層　7.5Y5/1灰　10YR5/2灰黄褐　長石・石英・金雲母 外面　胴部:板ナデ→平滑ナデ　内面:ヘラナデ　擬朝鮮半島系無文土器	甕
73	八反B　—　6層　2.5Y5/2暗灰褐　2.5Y5/2暗灰褐　長石・石英・角閃石 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:指オサエ・ナデ　擬朝鮮半島系無文土器	壺
74	八反B　—　6層　10YR6/3にぶい黄橙　2.5Y6/4にぶい黄　長石・石英・金雲母・角閃石 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:指オサエ・ナデ　擬朝鮮半島系無文土器	甕
75	八反B　—　6層　7.5YR5/3にぶい褐　10YR6/6明黄褐　長石・石英・金雲母 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:指オサエ・ナデ　擬朝鮮半島系無文土器	甕
76	八反B　—　6層　2.5YR4/1赤灰　2.5YR6/2灰赤　長石・角閃石 風化により調整不明　擬朝鮮半島系無文土器	甕
77	八反B　—　6層　N2/0黒　2.5Y6/2灰黄　長石・金雲母 外面:横ミガキ　内面:ヘラ痕　朝鮮半島系無文土器	壺
78	八反B　—　6層　N3/0暗灰　N4/0坏　金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
79	八反B　—　6層　N3/0暗灰　2.5Y6/3にぶい黄　金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
80	八反B　—　6層　N3/0暗灰　5Y7/1灰白　長石・金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
81	八反B　—　6層　N2/0黒　7.5Y7/2灰白　長石・金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
82	八反B　—　6層　N3/0暗灰　5Y7/1灰白　石英・金雲母 外面:縄席文タタキ　内面:当具痕　楽浪系瓦質土器	壺
83	八反B　—　6層　2.5Y8/1灰白　2.5Y8/1灰白　長石・石英・金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
84	八反B　—　6層　N3/0暗灰　N3/0暗灰　長石・金雲母 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
85	八反B　—　6層　N5/0灰　N6/0灰　長石 外面:ロクロ　底部:ヘラ削り　内面:ロクロ　底:板目痕　楽浪系瓦質土器	壺
86	八反B　—　6層　5PB6/1青灰　5PB6/1青灰　長石 外面:縄席文タタキ　内面:ナデ・当具痕　楽浪系瓦質土器	壺
87	八反B　—　6層　N4/6灰　5Y6/1灰　— 外面:ロクロ　内面:ロクロ　楽浪系瓦質土器	壺
88	八反B　—　6層　2.5Y5/2暗灰褐　2.5Y6/2灰黄　長石・石英・金雲母 外面:横ナデ　内面:横ナデ　刻目	甕
89	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　2.5Y6/2灰黄　長石・石英・金雲母 口縁部:横ナデ　外面:平滑ナデ　内面:ナデ・ヘラナデ	甕
90	八反B　—　6層　2.5YR5/6明赤褐　2.5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母 口縁部:横ナデ　外面:ナデ　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗	甕

Tab. 4　平成19年度調査　土器観察表②

報告番号	調査地区　遺構　層位　色調番号(外)　色調番号(内)　胎土　器種 調整手法　備考
91	八反B　—　6層　7.5YR7/2明褐　10YR7/2にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　甕 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目→ナデ消し　内面　頸部:横ハケ目　平滑ナデ
92	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　2.5Y3/1黒褐　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目　内面:ナデ
93	八反B　—　6層　2.5YR6/6橙　10YR5/2灰黄褐　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:指オサエ・ナデ
94	八反B　—　6層　10YR7/2にぶい黄橙　10YR7/2にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目　内面:指オサエ・ナデ
95	八反B　—　6層　2.5Y4/1黄灰　10YR6/3にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　甕 外面:平滑ナデ　内面:ナデ
96	八反B　—　6層　5YR7/3にぶい橙　7.5YR6/3にぶい橙　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ・ヘラ痕
97	八反B　—　6層　2.5Y6/1黄灰　10YR6/2灰黄褐　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ・ヘラ痕
98	八反B　—　6層　10R5/6赤　2.5Y6/3にぶい黄　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:指オサエ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
99	八反B　—　6層　2.5YR4/6赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:指オサエ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
100	八反B　—　6層　2.5YR5/6明赤褐　2.5Y6/3にぶい黄　石英・金雲母・角閃石　壺 外面:ナデ　内面:指オサエ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
101	八反B　—　6層　2.5YR5/6明赤褐　2.5Y6/1黄灰　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
102	八反B　—　6層　10YR5/2灰黄褐　10YR5/2灰黄褐　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:指オサエ　口縁部上面に穿孔
103	八反B　—　6層　2.5YR6/8橙　10YR7/2にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
104	八反B　—　6層　2.5YR5/8明赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:ヘラナデ・ナデ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
105	八反B　—　6層　10YR5/2灰黄褐　10YR6/3にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 外面:ナデ　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗　口縁部上面に穿孔
106	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　10YR6/3にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ハケ目→ナデ消し　外面:丹塗　内面:口縁部に丹塗
107	八反B　—　6層　7.5YR5/4にぶい褐　10YR5/3にぶい黄褐　石英・金雲母・角閃石　壺 口縁部:横ナデ　外面:平滑ナデ　内面:横ミガキ　擬朝鮮半島系無文土器か?
108	八反B　—　6層　7.5YR6/3にぶい褐　10YR6/2灰黄褐　長石・石英・金雲母　壺 口縁部:横ナデ　外面:平滑ナデ　内面:平滑ナデ　広口壺
109	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　5YR5/3にぶい赤褐　長石・石英・金雲母　壺 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:シボリ痕　袋状口縁壺　口縁部に丹塗痕
110	八反B　—　6層　10YR7/2にぶい黄橙　10YR7/2にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:ハケ目　頸部外面に丹塗痕
111	八反B　—　6層　7.5YR6/1褐灰　7.5YR6/1褐灰　長石・石英・金雲母　壺 口縁部:横ナデ　頸部:ハケ目→横ナデ　外面:平滑ナデ　内面:ナデ　直口壺
112	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　7.5YR7/3にぶい橙　長石・石英・金雲母　壺 口縁部:横ナデ　頸部外面:ハケ目　内面:ナデ　無文土器系か?
113	八反B　—　6層　2.5Y6/5にぶい黄　10YR6/2灰黄褐　長石・石英・角閃石　鉢 口縁部:横ナデ　外面:ナデ(一部にハケ目残る)　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:丹塗
114	八反B　—　6層　2.5YR5/8明赤褐　2.5YR4/6赤褐　長石・石英・金雲母　鉢 外面:ナデ　内面:ナデ　底部:指オサエ　口縁部外面に丹塗　内面:丹塗
115	八反B　—　6層　10R4/8赤　10R4/8赤　長石・石英・金雲母　鉢 外面:ナデ　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:丹塗
116	八反B　—　6層　7.5YR6/3にぶい褐　7.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　高坏 外面:平滑ナデ　内面:平滑ナデ・縦暗文
117	八反B　—　6層　7.5YR5/2灰褐　2.5YR6/8橙　長石・石英　高坏 外面:ナデ　内面:ナデ
118	八反B　—　6層　10YR2/1黒　10YR7/2にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　甕 口縁部:横ナデ　外面:縦ケズリ状　内面:ヘラ→ナデ消し　跳ね上げ口縁
119	八反B　—　6層　5YR7/6橙　5YR7/6橙　長石・石英・金雲母　甕 口縁部:横ナデ　外面:縦ハケ目　内面:ハケ目→ナデ消し
120	八反B　—　6層　7.5YR6/3にぶい褐　2.5Y7/2灰黄　長石・石英・金雲母　甕 口縁部:ナデ　外面:横ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ　甕棺材　口縁部上面にヘラによる山形文
121	八反B　—　6層　5YR6/6橙　5YR6/4にぶい橙　長石・石英　壺 口縁部:横ナデ　外面:ハケ目　内面:ハケ目　口縁部上面:沈線
122	八反B　—　6層　10R5/6赤　10YR6/3にぶい黄橙　長石・石英　甕 外面:ナデ　内面:ナデ
123	八反B　—　6層　10YR6/2灰黄褐　2.5Y7/2灰黄　長石・石英・金雲母　土製品 —　鋤先口縁をもつ壺の一部
124	八反B　—　6層　10YR6/4にぶい黄橙　7.5YR5/4にぶい褐　長石・石英・金雲母　土製品 外面:ハケ目　土製円盤　甕胴部の一部
134	池田大原　—　5層　7.5Y5/2オリーブ灰　7.5Y5/2オリーブ灰　—　青磁器 —　竜泉窯系青磁
135	池田大原　—　5層　7.5Y5/2オリーブ灰　7.5Y5/2オリーブ灰　—　青磁器 —　竜泉窯系青磁
136	池田大原　—　5層　7.5Y5/2オリーブ灰　7.5Y5/2オリーブ灰　—　青磁器 —　竜泉窯系青磁

Tab. 5　平成19年度調査　土器観察表③

報告番号	調査地区	遺構	層位	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	器種	石材	備考
56	閼繰	河川跡	7層	28	42	31	29.3	円礫	黒曜石	星鹿産か
57	閼繰	河川跡	不明	62	34	9	14.5	フレイク	黒曜石	星鹿産か
58	閼繰	河川跡	7層	55	45	5	15.9	石包丁	頁岩	未製品か
59	閼繰	河川跡	7層	78	44	5	23.7	石包丁	頁岩	未製品か
60	閼繰	河川跡	7層	51	45	4	17.5	石鏃	頁岩	
61	閼繰	河川跡	7層	50	53	5	24.3	石鏃	頁岩	
62	閼繰	河川跡	7層	124	50	5	54.9	石鏃	頁岩	
63	閼繰	河川跡	6層	124	106	47	999.8	凹石	玄武岩	
64	閼繰	河川跡	6層	121	68	38	535.4	凹石	玄武岩	
65	閼繰	河川跡	7層	210	35	51	623.1	石斧	頁岩	
66	閼繰	河川跡	7層	228	47	57	766.5	石斧	頁岩	
67	閼繰	河川跡	7層	110	65	6	85.1	石剣	頁岩	
68	閼繰	河川跡	7層	182	58	9	173.3	石剣	頁岩	
69	閼繰	河川跡	7層	223	55	12	241.4	石剣	頁岩	
125	八反B	—	不明	72	20	10	9.4	スクレーパー	黒曜石	腰岳産か
126	八反B	—	4層	42	33	32	34	コア	黒曜石	壱岐産か
127	八反B	—	6層	110	95	57	900.6	凹石	玄武岩	
128	八反B	—	5層	117	68	9	80.8	石鏃	頁岩	未製品
131	池田大原	—	10層	22	18	5	0.8	石鏃	黒曜石	
132	池田大原	—	5層	23	20	5	1.6	台形石器	黒曜石	
133	池田大原	—	5層	28	26	5	3.1	台形石器	黒曜石	

Tab. 6　平成19年度調査　石器観察表

報告番号	調査地区	遺構	層位	直径(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	備考
129	閼繰	SD1	8層	23	2	2.0	
130	閼繰	SD1	8層	23	2	2.6	

Tab. 7　平成19年度調査　貨泉観察表

Ⅳ章　平成20年度調査

1．原地区

(1) 調査概要（Fig. 24）

原地区は田畑地で，調査対象地をすべて掘り下げて調査を行った。調査期間は平成20年４月14日から平成20年７月９日で，日数は59日（作業日が43日，雨天日が16日）を要した。今回の調査では濠１条，土壙墓19基，甕棺墓18基，箱式石棺墓１基，土坑４基，ピット45基の遺構と，３ヶ所の落ち込みを確認した。この原地区周辺における過去の調査では，調査地北西側でH18県道〔**林2007**〕および平成19年度の県道緊急調査〔**本報告**〕が，調査地西側の池田大原地区でＨ９年度の範囲確認調査（以下，Ｈ９範囲）〔**宮崎1999**〕およびH13年度の範囲確認調査（以下，H13範囲）〔**安楽2002**〕が，調査地南側では原ノ久保地区でH13範囲が，また調査地南西側にやや離れた苣ノ木地区でH13範囲が実施され

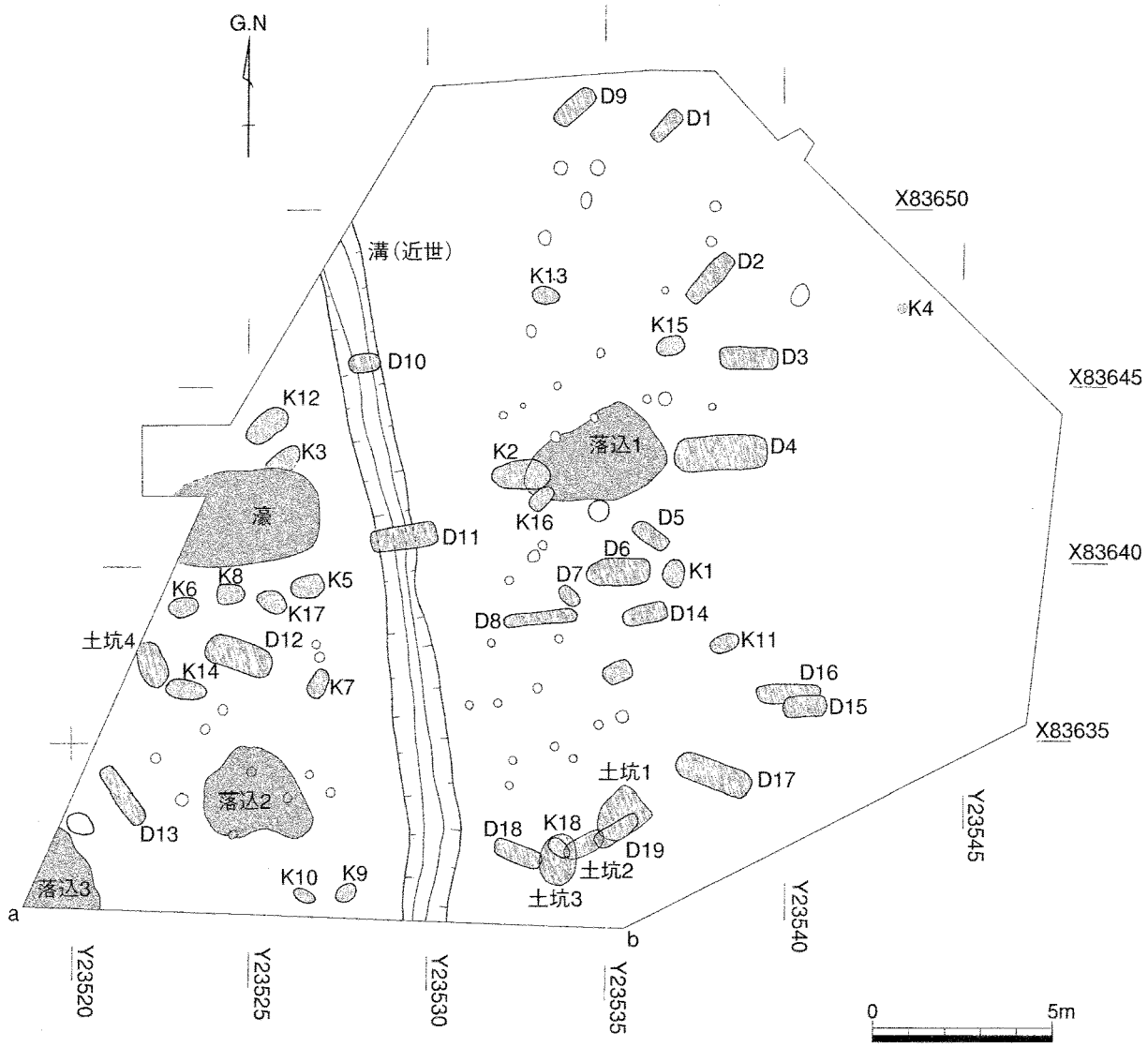


Fig. 24　原地区　全体図（1/200）

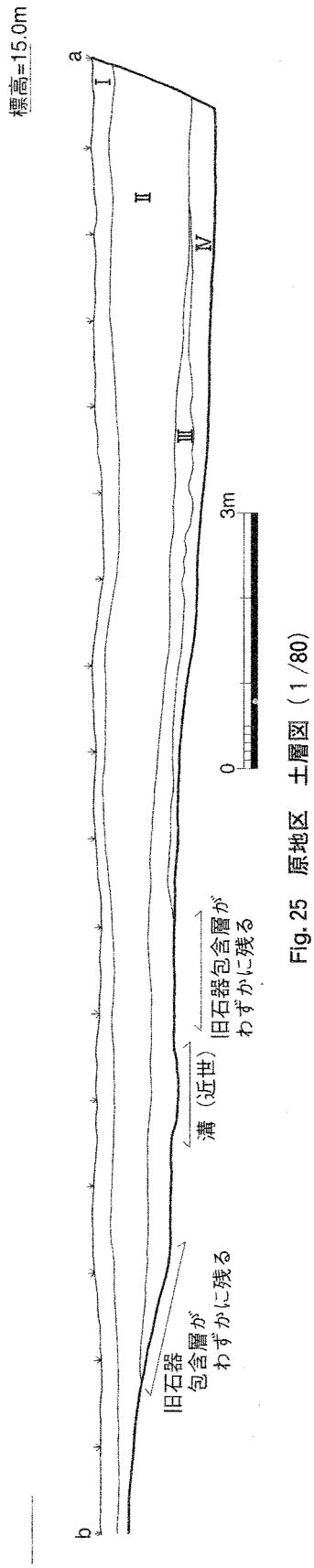


Fig. 25　原地区　土層図（1/80）

ている。このなかで本調査と関連する調査成果は，Ｈ９範囲およびＨ18県道における池田大原地区で確認された濠（環濠），およびＨ13範囲における原ノ久保地区および苣ノ木地区で確認された墳墓を上げることができる。今回確認した濠が，過去の調査における濠（環濠）とつながる可能性は低いと思われる。また墳墓については苣ノ木地区及び原ノ久保地区から本調査地にまたがる広範囲な墓域の存在が想定される。

(2)　土層（Fig. 25）

原地区の基本層序は４層からなる。Ⅰ層は表土で色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）である。Ⅱ層は造成土と思われ，空き缶などが混じる。色調はⅠ層とほぼ同じである。Ⅲ層の色調は暗褐色（10YR3/3）で，近世陶磁器片が微量ながら出土した。土質が柔らかく，均質な堆積であることから近世における畑作土と思われる。Ⅳ層の色調は黒褐色（10YR2/2）で，弥生土器片が出土した。状況的には弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層と思われるが，土師器や須恵器の出土はなかった。このⅣ層が落ち込みの堆積層となる。また極めて薄い堆積で旧石器時代の包含層と思われる堆積が平面的には確認されたが，報告の土層断面では確認できなかった。

(3)　遺構

①甕棺墓

１号甕棺墓（Fig. 26　Pho. 3）

主軸角度はＧ．Ｎ－169.5°－Ｇ．Ｅでほぼ南向き，埋葬角度は22°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ78cm，幅61cmを測り，断面形は「Ｕ」字状を呈する。上甕，下甕ともに壺である。上甕は３分の２以上が，下甕は半分程度が削塀により消失，圧壊している。下甕には丹塗りの小鉢が埋納されているが，その他の副葬品はない。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉～中葉と判断される。

２号甕棺墓（Fig. 27　Pho. 4）

主軸角度はＧ．Ｎ－86.5°－Ｇ．Ｅでほぼ東向き，埋葬角度は４°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ160cm，幅86cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「Ｕ」字状を呈する。上甕，下甕ともに壺である。上甕はほぼ完全な状態で残存しているが，下甕は口縁部および胴部に

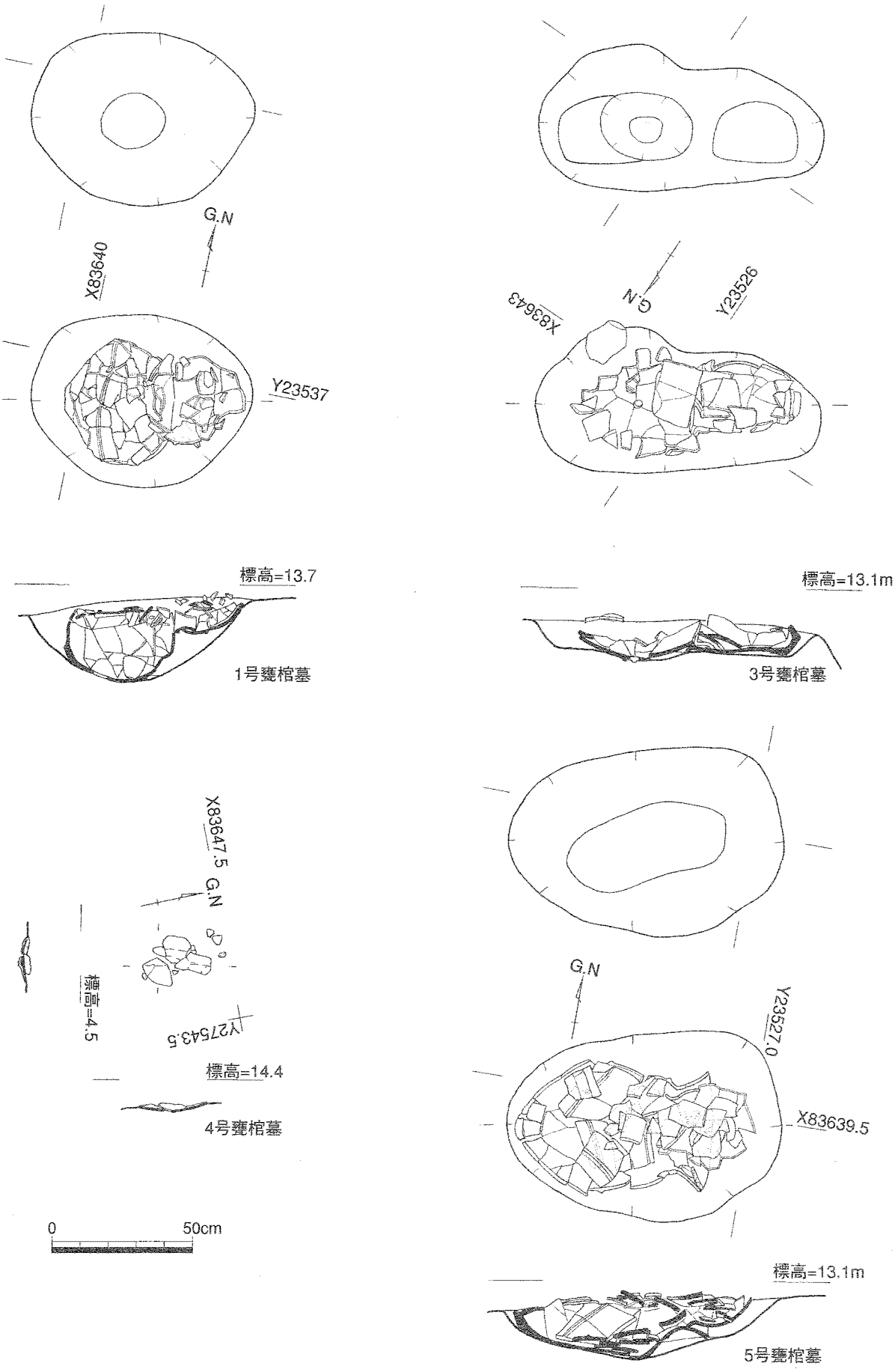


Fig. 26　原地区　甕棺墓遺構図①（1/20）

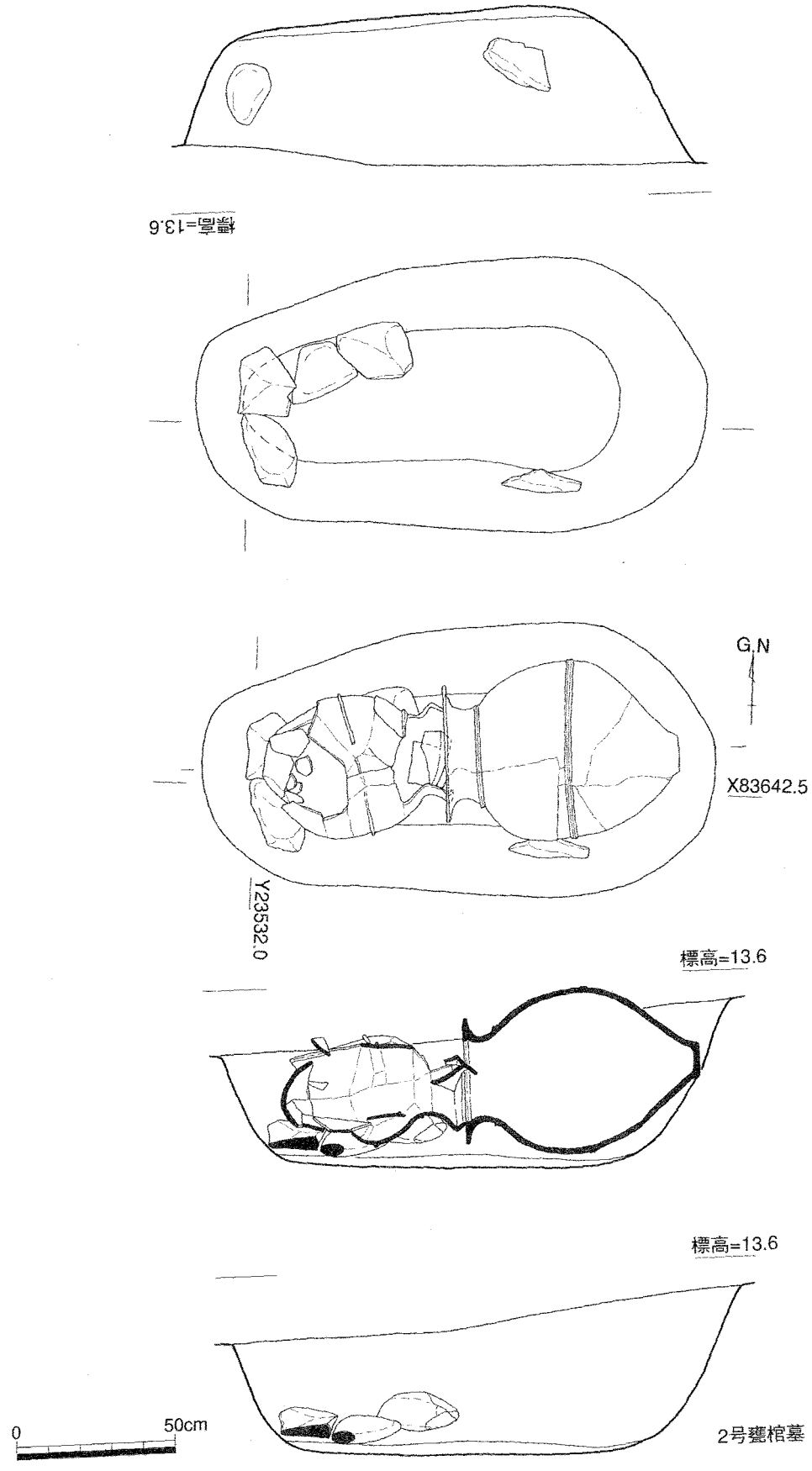


Fig. 27　原地区　甕棺墓遺構図②（1/20）

後世の杭跡による欠損が見られ，圧壊している。上甕に１つ，下甕には４つの石を入れて固定している。石材はいずれも玄武岩である。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期初頭～前葉と判断される。

３号甕棺墓（Fig.26　Pho. 5）

濠に遺構南側を切られる。主軸角度はG．N－56.5°－G．Eでほぼ北東向き，埋葬角度は18°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ100cm，幅40cmを測り，断面形は床面が平坦な「U」字状を呈する。上甕は甕，下甕は壺である。上甕，下甕とも上半分が削平により消失，圧壊している。上下甕の型式より，弥生時代後期初頭～前葉と判断される。

４号甕棺墓（Fig.26　Pho. 6）

主軸角度および埋蔵角度ともに不明。墓壙の形状や規模も不明である。検出状況から下甕の一部が残存しているものと思われる。下甕の形式から，時期は弥生時代後期初頭と判断される。

５号甕棺墓（Fig.26　Pho. 7）

主軸角度はG．N－80.5°－G．Eでほぼ東向き，埋葬角度は11°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ96cm，幅66cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕は甕，下甕は壺である。上甕，下甕ともに上半分が削平により消失，圧壊している。上下甕の型式から，時期は弥生時代後期中葉～後葉と判断される。

６号甕棺墓（Fig.28　Pho. 8）

主軸角度はG．N－62°－G．Eで概ね北東向き，埋葬角度は11.5°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ80cm，幅55cmを測り，断面形は墓壙西側の掘り込みが深い非対称の「U」字状を呈する。上甕（と推測される資料）は甕，下甕の甕である。甕の型式から，時期は弥生時代後期前葉と判断される。

７号甕棺墓（Fig.28　Pho. 9）

主軸角度はG．N－23°－G．Eで概ね北向き，埋葬角度は０°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ86cm，幅49cmを測り，断面形は下甕の掘り込みが深い非対称の「U」字状を呈する。上甕は甕，下甕は壺である。上甕は３分の２程度が，下甕は半分程度が削平により消失，圧壊している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉と判断される。

８号甕棺墓（Fig.28　Pho.10）

主軸角度はG．N－271.5°－G．Eでほぼ西向き，埋葬角度は11°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ79cm，幅60cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。甕の単棺である。削平により甕棺上面に欠損が見られ，圧壊している。瑠璃色のガラス玉１点，緑色頁岩製の管玉２点が副葬される。下甕の型式から，時期は弥生時代後期前葉と判断される。

９号甕棺墓（Fig.28　Pho.11）

主軸角度はG．N－50°－G．Eでほぼ北東向き，埋葬角度は10°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ65cm，幅46cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕，下甕とも甕である。上甕は３分の２以上が，下甕は半分程度が削平により消失，圧壊している。上下甕の型式より，時期は弥生時代中期中葉と判断される。

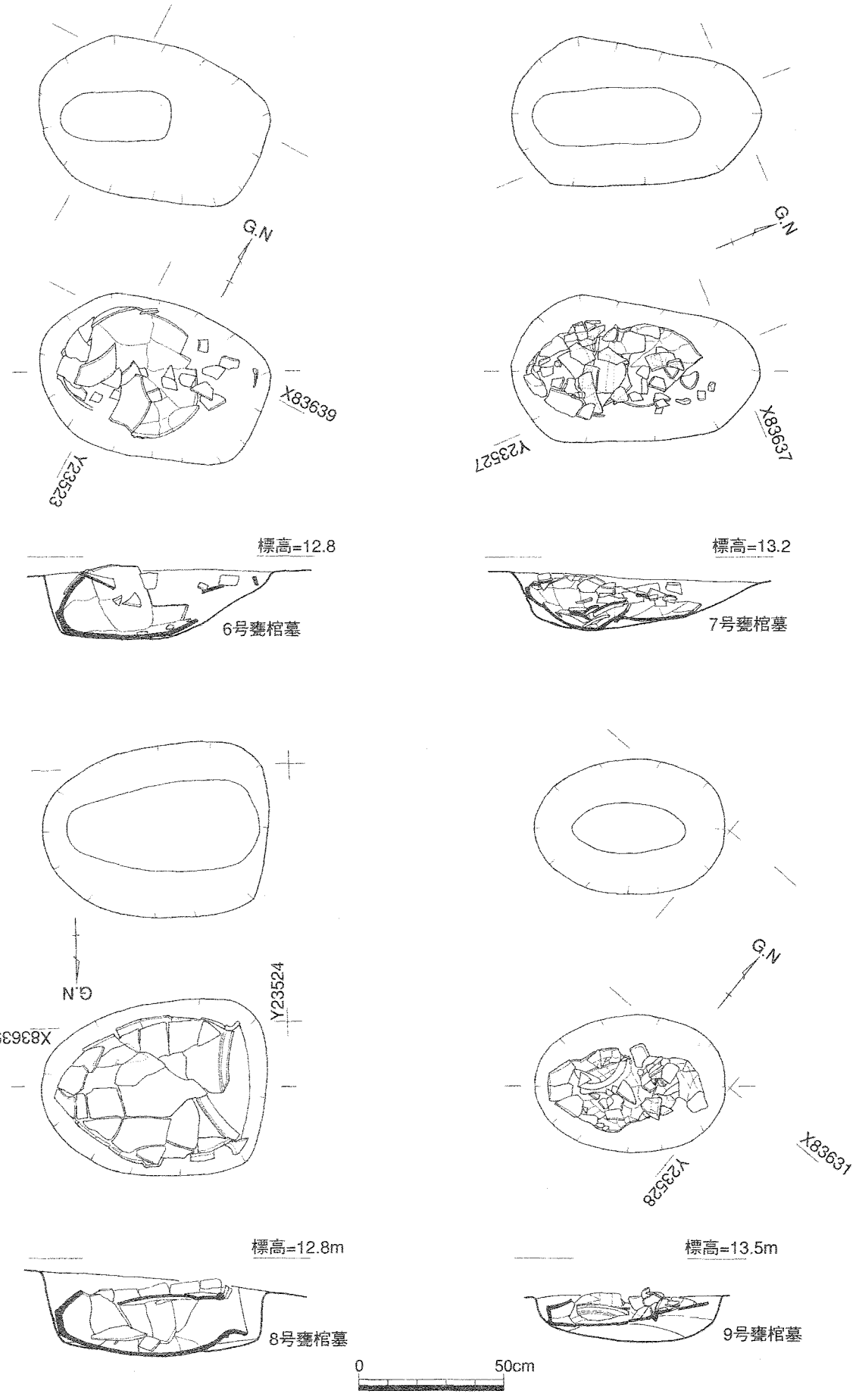


Fig. 28　原地区　甕棺墓遺構図③（1/20）

10号甕棺墓（Fig.29　Pho.12）

主軸角度G.N－113°－G.Eで概ね東向き，埋葬角度は不明である。墓壙の形状および規模は不明である。上甕および下甕とも甕である。上甕は3分の2以上が，下甕は半分以上が削平により消失しており，遺構北西側に甕棺が飛散した状況が見られる。上下甕の型式より，時期は弥生時代中期後葉と判断される。

11号甕棺墓（Fig.29　Pho.13）

主軸角度はG.N－71.5°－G.Eで概ね東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ83cm，幅50cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕，下甕ともに甕である。上甕は圧壊しているものの，ほぼ完全な状態で残存している。下甕は後世の杭跡によって消失，圧壊している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉と判断される。

12号甕棺墓（Fig.29　Pho.14）

主軸角度はG.N－47.5°－G.Eでほぼ北東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ130cm，幅65cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕は壺，下甕は壺である。上甕，下甕ともに3分の2以上が削平により消失している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉～中葉と判断される。

13号甕棺墓（Fig.29　Pho.15）

主軸角度はG.N－98°－G.Eで概ね東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ75cm，幅48cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕，下甕ともに甕である。上甕，下甕ともに圧壊しているものの欠損は少なく，ほぼ完全な状態で残存している。上下甕の型式から，時期は弥生時代後期初頭と判断される。

14号甕棺墓（Fig.30　Pho.16）

主軸角度はG.N－105°－G.Eで概ね東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ116cm，幅57cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕，下甕ともに甕である。下甕，上甕ともに圧壊している。上下甕の型式から，時期は弥生時代後期初頭～前葉と判断される。

15号甕棺墓（Fig.30　Pho.17）

主軸角度はG.N－82°－G.Eでほぼ東向き，埋葬角度は18°である。遺構の平面形は楕円形で長さ95cm，65cmを測る。下甕の堀方が深いのに対して上甕の堀方が浅いため，墓壙の断面形は底面が2段となる。上甕は鉢，下甕は壺である。上甕は半分程度，下甕は3分の1程度が削平により消失，圧壊している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期初頭～前葉と判断される。

16号甕棺墓（Fig.30　Pho.18）

主軸角度はG.N－45°－G.Eでほぼ北東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ80cm，幅46cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。下甕，上甕ともに甕である。上甕は上半分が圧壊しているが，下甕はほぼ完全な状態で残存している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉と判断される。

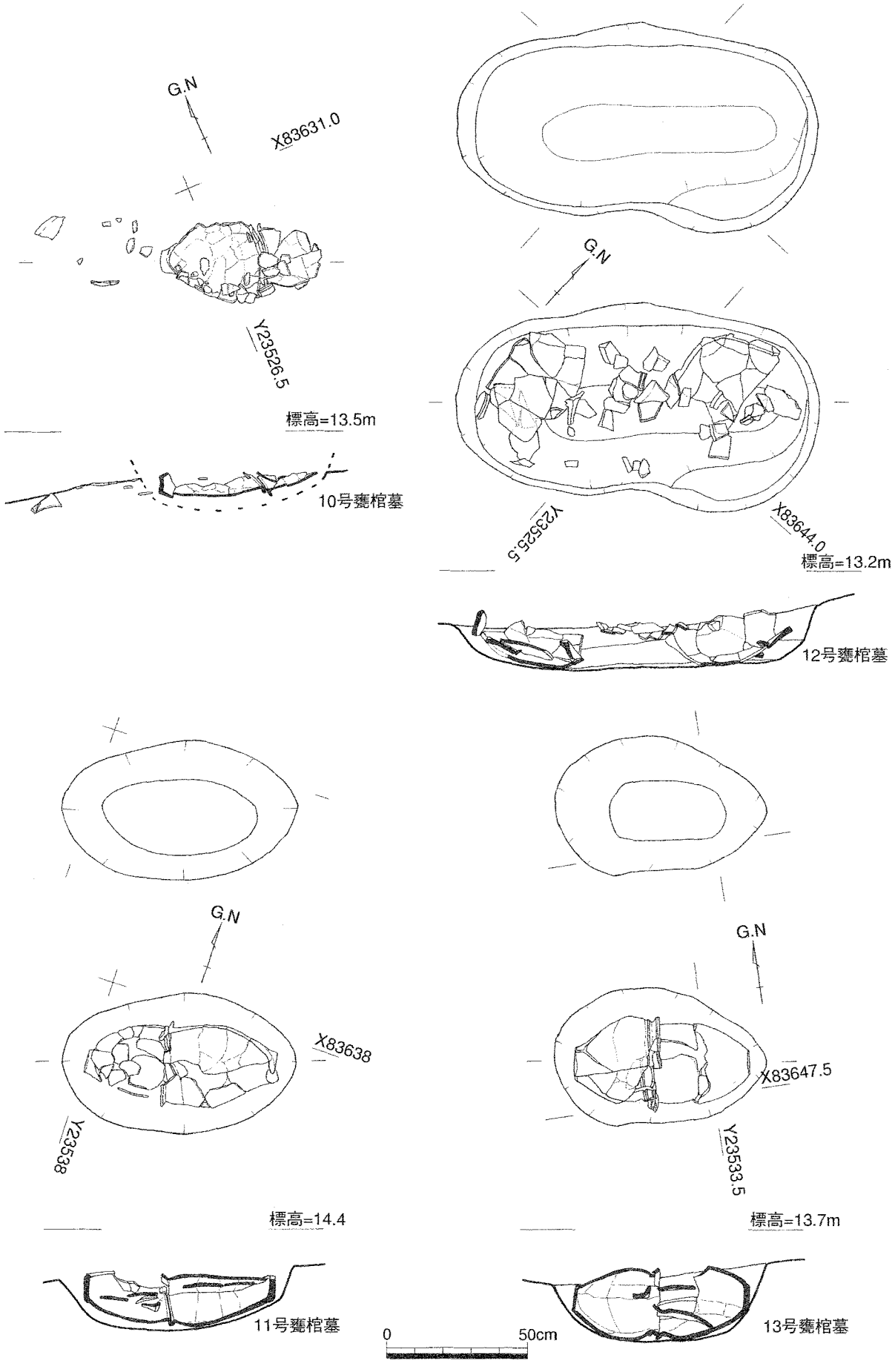


Fig. 29　原地区　甕棺墓遺構図④（1/20）

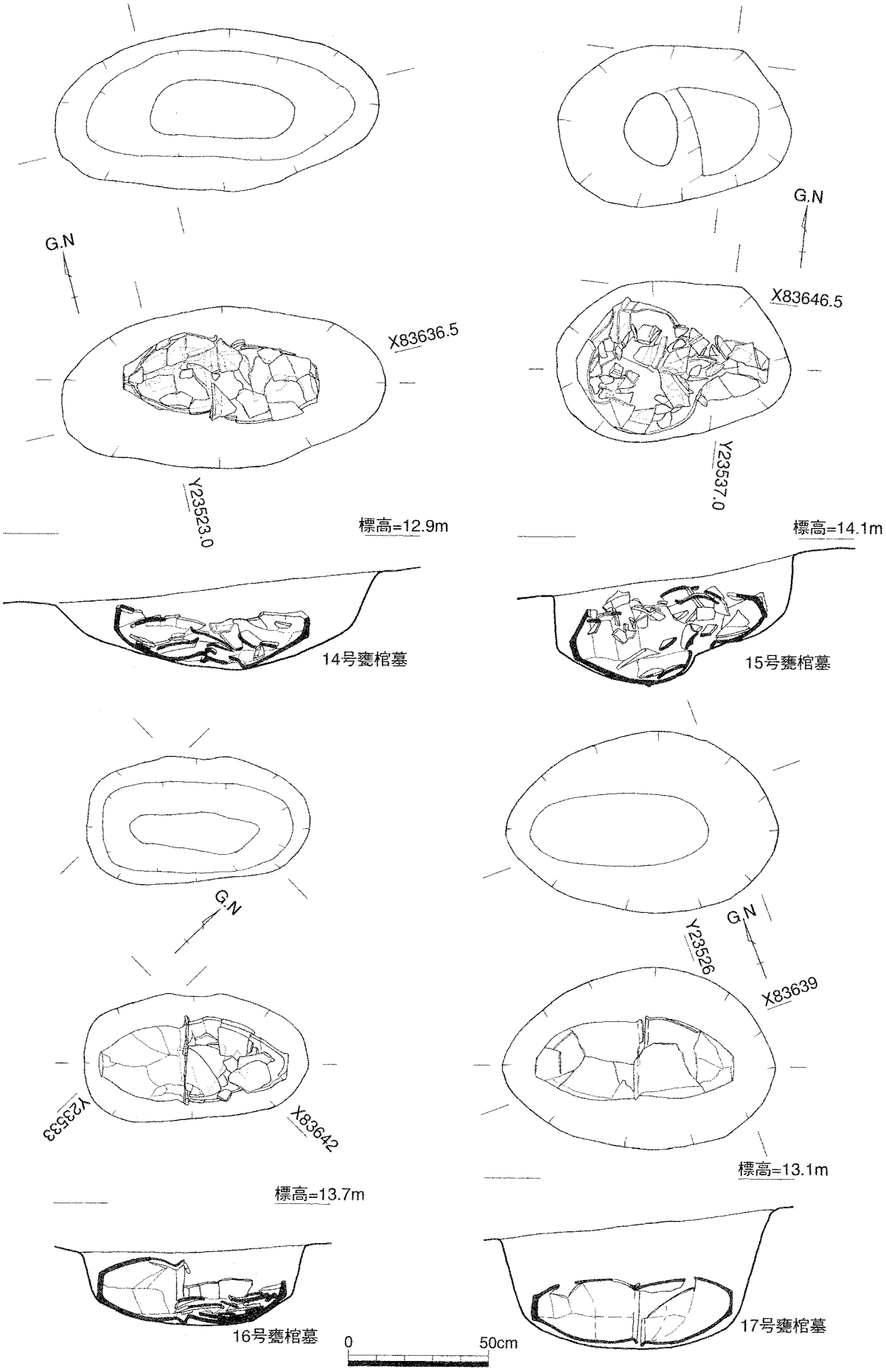


Fig. 30　原地区　甕棺墓遺構図⑤（1/20）

17号甕棺墓（Fig.30　Pho.19）

主軸角度はG.N－110.5°－G.Eで概ね南東向き，埋葬角度は0°（ほぼ水平）である。墓壙の平面形は楕円形で長さ92cm，幅65cmを測り，断面形は「U」字状を呈する。上甕，下甕ともに甕である。上甕，下甕ともに一部に欠損が見られるものの圧壊はなく，ほぼ完全な状態で残存している。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期初頭～前葉と判断される。

18号甕棺墓（Fig.31　Pho.20）

主軸角度はG.N－131.5°－G.Eでほぼ南東向き，埋葬角度は39°である。墓壙の平面形は楕円形で長さ68cm，幅39cmを測り，断面形は横穴状を呈する。遺構上面を埋納土坑3に切られる。上甕，下甕ともに甕である。上甕は圧壊しているもののほぼ完全な状態で残存しているのに対し，下甕は後世の杭跡により欠損している。下甕の底に空色のガラス玉が83点，副葬品として埋葬されている。上下甕の型式より，時期は弥生時代後期前葉～中葉と判断される。

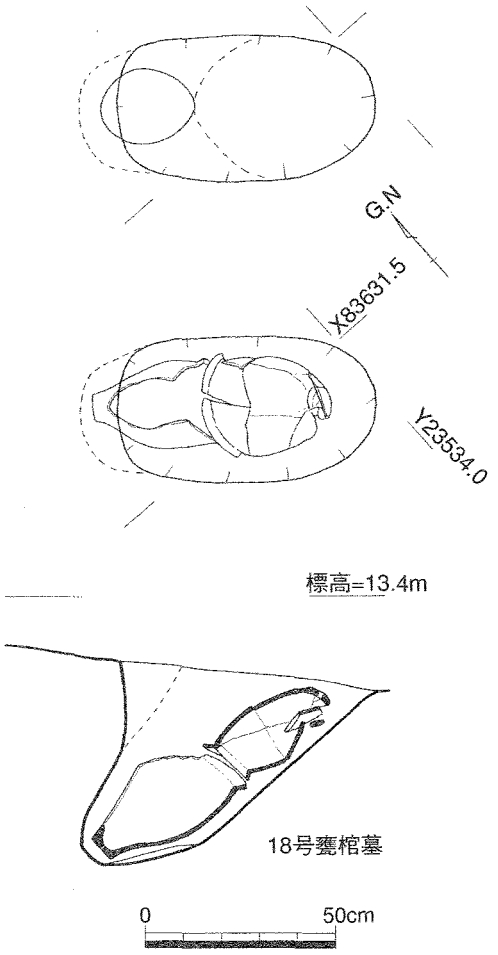


Fig.31　原地区　甕棺墓遺構図⑥（1/20）

②土壙墓

1号土壙墓（Fig.32　Pho.21）

主軸角度はG.N－42°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ120cm，幅42cm，深さ10cmを測る。断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。

2号土壙墓（Fig.32　Pho.22）

主軸角度はG.N－40.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ165cm，幅56cm，深さ35cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。

3号土壙墓（Fig.32　Pho.23）

主軸角度はG.N－91°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ160cm，幅62cm，深さ35cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。

4号土壙墓（Fig.33　Pho.24）

主軸角度はG.N－86.5°－G.Eである。墓壙の平面形は254cm，幅101cm，深さ46cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。床面は西側に緩やかに傾斜する。床面に鉄製品（鉄剣か）1点が副葬される。埋土に弥生土器片が3点含まれるが，時期の判断はできなかった。

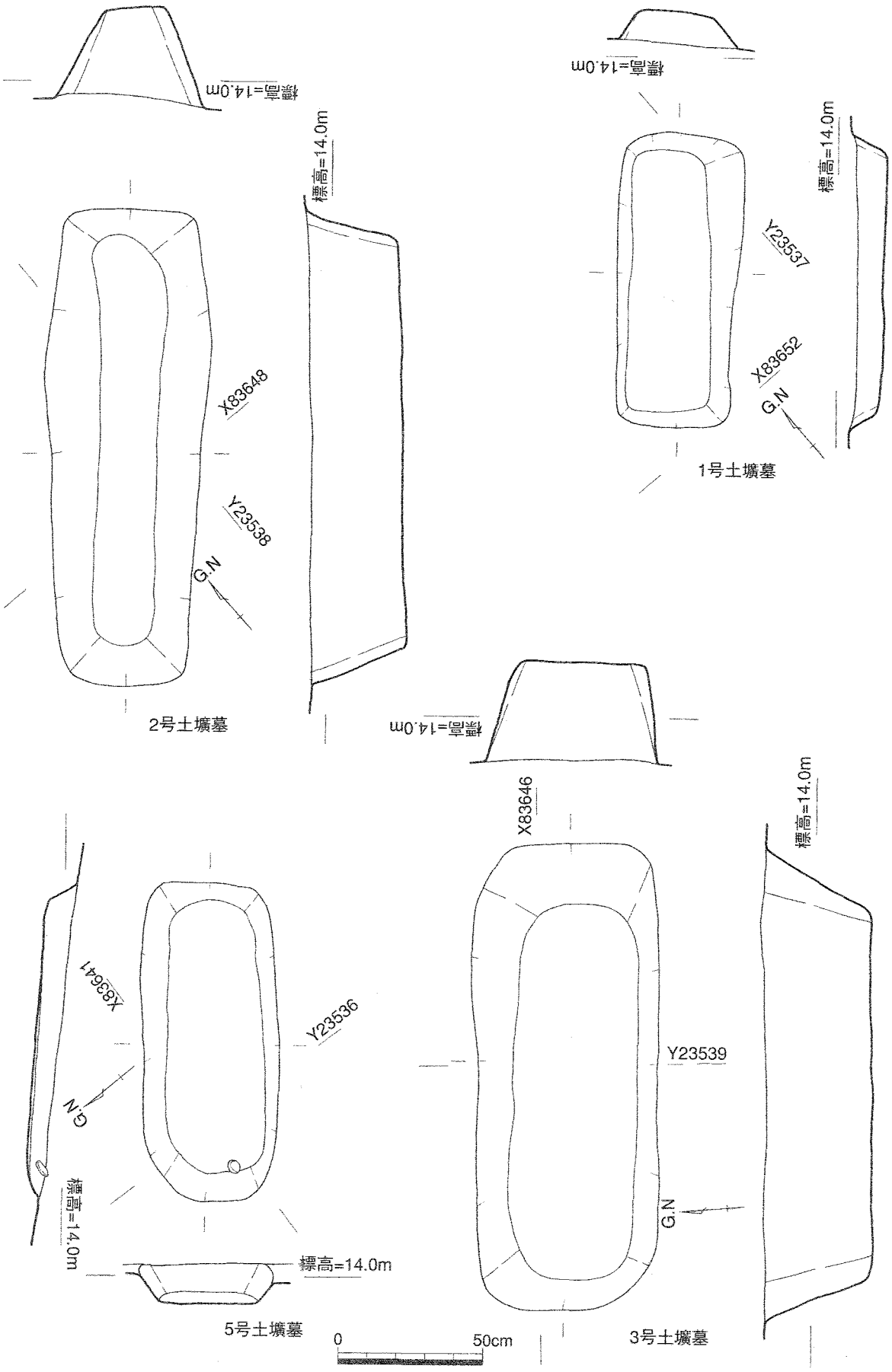


Fig. 32　原地区　土壙墓遺構図①（1/20）

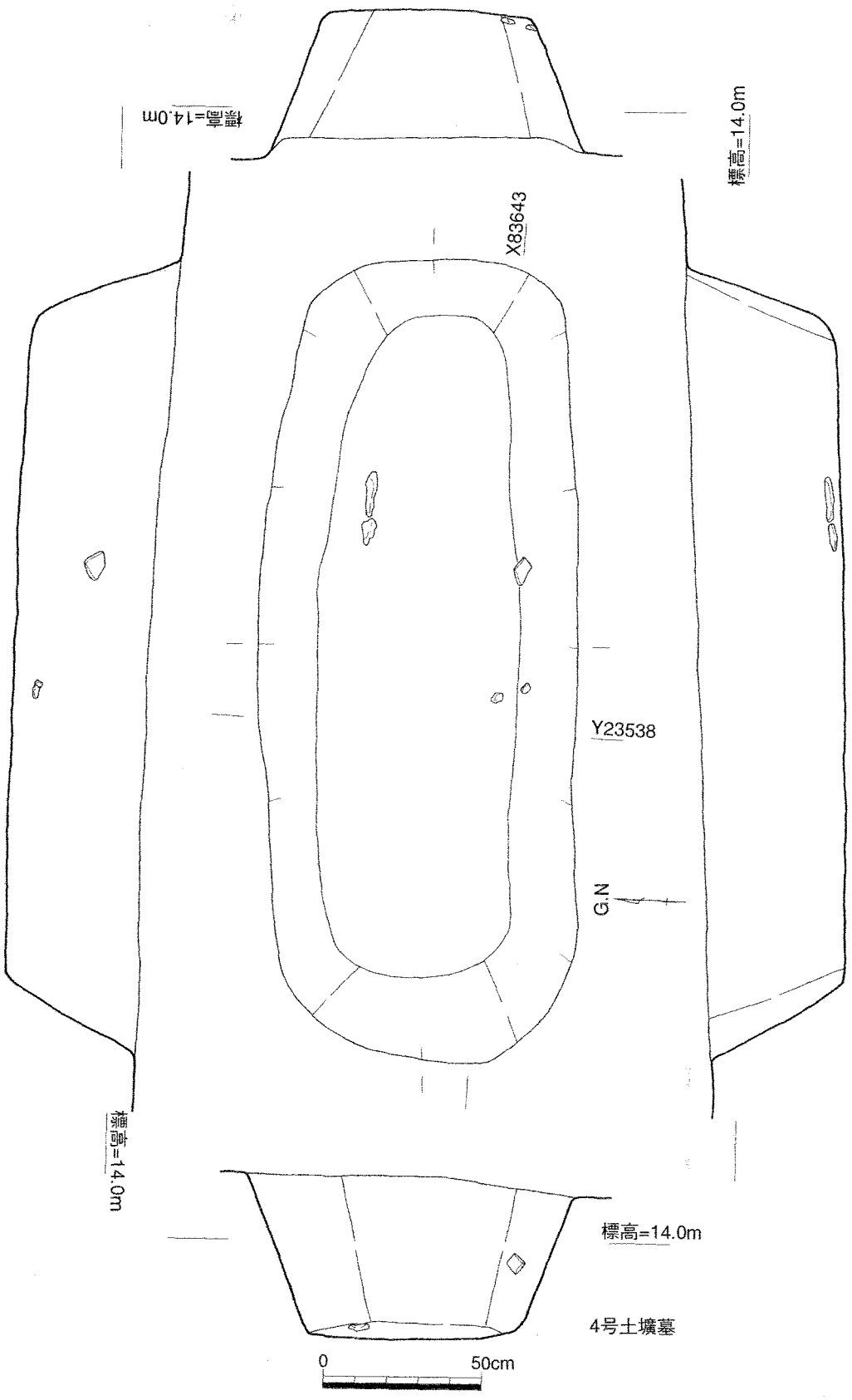


Fig. 33　原地区　土壙墓遺構図②（1/20）

5号土壙墓（Fig.32　Pho.25）

主軸角度はG.N－128°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ110cm，幅47cm，深さ8cmを測り，断面形は西側の掘り込み傾斜が東側に比べて緩やかな「U」字状を呈する。床面は西側に緩やかに傾斜する。埋土に小さな礫が含まれる。

6号土壙墓（Fig.34　Pho.26）

主軸角度はG.N－139°－G.Eである。墓壙の平面形は西側が歪な楕円形で長さ178cm，幅77cm，深さ48～30cmを測り，断面形は掘り込み傾斜が急な「U」字状を呈する。床面は東側に緩やかに傾斜する。埋土に弥生土器片が6点含まれるが，時期の判断はできなかった。

7号土壙墓（Fig.34　Pho.27）

主軸角度はG.N－88°－G.Eである。墓壙の平面形は楕円形で長さ70cm，幅40cm，深さ8～4cmを測り，断面形は西側の掘り込み傾斜が東側に比べて緩やかな「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。

8号土壙墓（Fig.34　Pho.28）

主軸角度はG.N－84.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ205cm，幅35cm，深さ26～6cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。床面は緩やかに西側に傾斜する。

9号土壙墓（Fig.35　Pho.29）

主軸角度はG.N－50°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ135cm，幅55cm，深さ11cmを測り，断面形は掘り込み傾斜が垂直に近い「U」字状を呈する。床面は西側に緩やかに傾斜する。

10号土壙墓（Fig.35　Pho.30）

主軸角度はG.N－87°－G.Eである。墓壙の平面形は楕円形で長さ90cm，幅48cm，深さ16～8cmを測り，断面形は掘り込み傾斜が垂直に近い「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。甕の口縁部が出土しており，時期は後期前葉と判断される。

11号土壙墓（Fig.35　Pho.31）

主軸角度はG.N－80.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ185cm，幅66cm，深さ31～18cmを測り，断面形は掘り込み傾斜が垂直に近い「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。埋土に弥生土器片を1点含む。床面に鉄製刀子1点と管玉15点，ガラス玉破片1点，勾玉1点が副葬される。また壺の口縁部が出土しており，時期は中期後葉と判断される。

12号土壙墓（Fig.36　Pho.32）

主軸角度はG.N－109°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ197cm，幅85cm，深さ41～28cmを測り，断面形は西側の掘り込み傾斜が東側に比べて緩やかな「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。埋土に弥生土器片が3点含まれるが，時期の判断はできなかった。

13号土壙墓（Fig.36　Pho.33）

主軸角度はG.N－144.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ185cm，幅51cm，深さ24cmを測る。断面形は東南側にテラス状の段がつく特徴がある。床面はほぼ水平である。壺の底部が

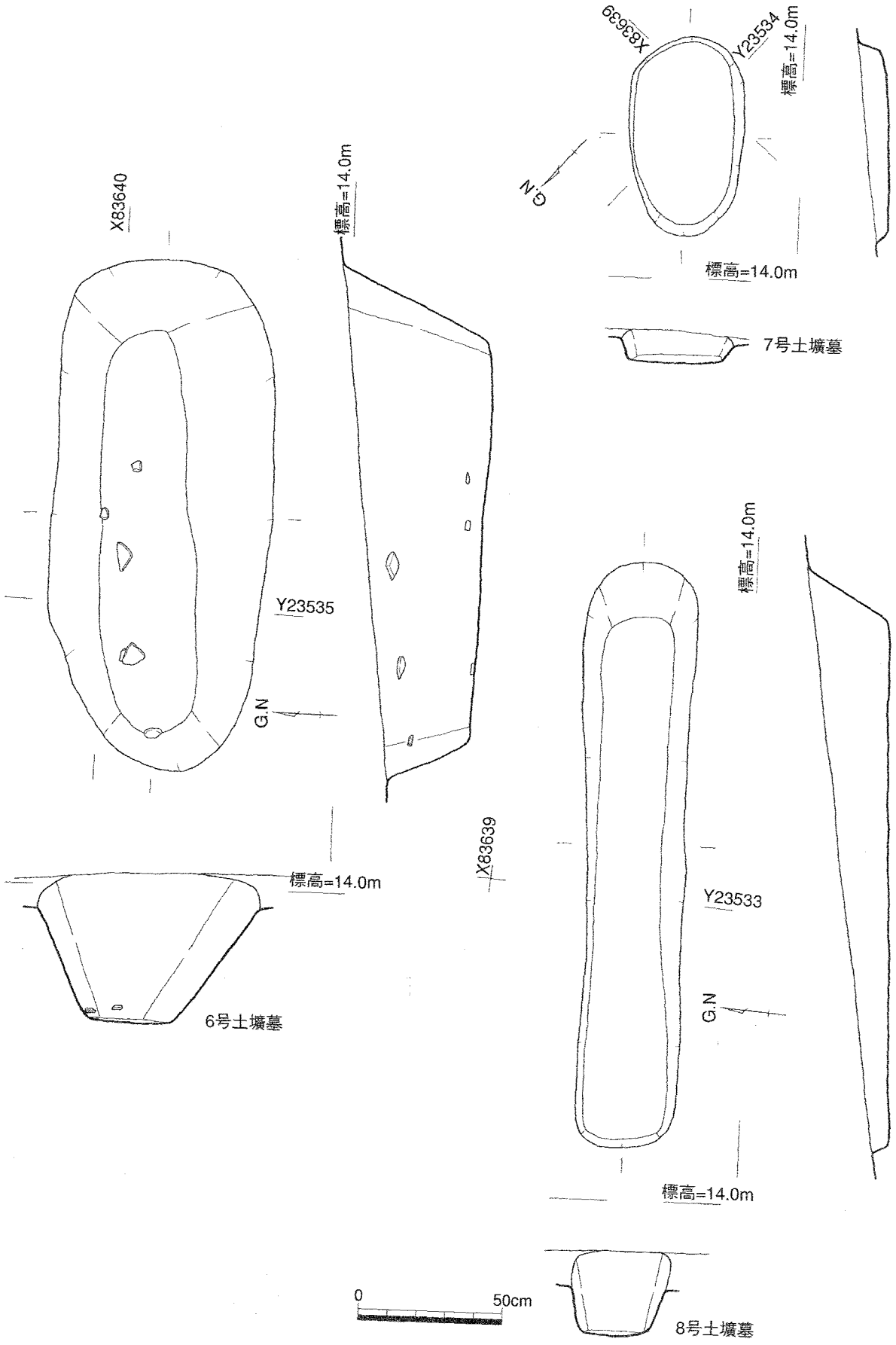


Fig. 34　原地区　土壙墓遺構図③（1/20）

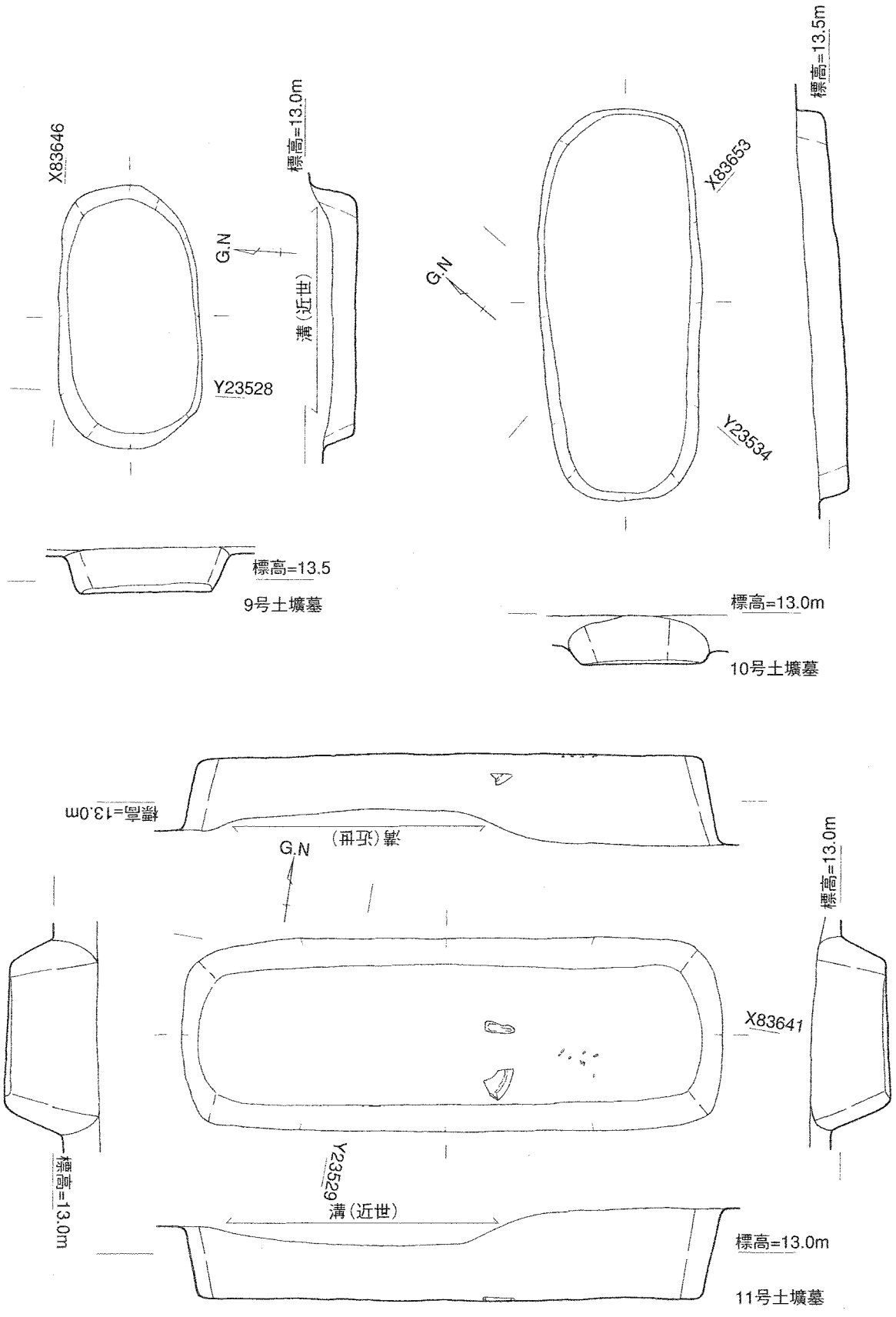


Fig. 35　原地区　土壙墓遺構図④（1/20）

出土し，時期は中期の範疇と考えられるが，朝鮮半島系無文土器（または擬無文土器）である可能性もある。

14号土壙墓（Fig.36　Pho.34）

主軸角度はG.N－75.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ126cm，幅53cm，深さ14cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。床面は西側に傾斜する。埋土に弥生土器片が2点含まれるが，時期の判断はできなかった。

15号土壙墓（Fig.37）

16号土壙墓を切る。主軸角度はG.N－86°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ122cm，幅60cm，深さ30cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状を呈する。床面は緩やかに西側に傾斜する。

16号土壙墓（Fig.37）

15号土壙墓に切られる。主軸角度はG.N－88.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ180cm，幅52cm，深さ25cmを測り，断面形は掘り込み傾斜の急な「U」字状である。床面は緩やかに西側に傾斜する。

17号土壙墓（Fig.38　Pho.35）

主軸角度はG.N－111°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ212cm，幅75cm，深さ40cmを測る。断面形は東側および北西側にテラス状の段がつく特徴があり，全体的には「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。床面に管玉6点が副葬される。

18号土壙墓（Fig.38　Pho.36）

埋納土坑3に切られる。主軸角度はG.N－110.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ136cm，幅51cm，深さ20cmを測る。断面形は南側の掘り込み傾斜が緩やかな特徴をもつ。床面は緩やかに西側に傾斜する。

19号土壙墓（Fig.38　Pho.37）

埋納土坑1に切られる。主軸角度はG.N－57.5°－G.Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で長さ140cm，幅45cm，深さ30cmを測り，断面形はの「U」字状を呈する。床面はほぼ水平である。

③箱式石棺墓（Fig.39　Pho.38～39）

主軸角度はG.N－68°－G.Eである。墓壙の平面形は長さ81m，幅51mを測り，断面形は掘り込み傾斜が急峻な「U」字状を呈する。蓋石は大小5枚からなり，側石と小口，床石ともに1枚である。蓋石はほぼ水平に置かれる。側石は南北ともに北側に傾く。小口は東西ともに上辺が内側（棺内部側）に傾く。床石はやや西側に傾斜するもののほぼ水平に置かれる。棺内は長さ50m，幅20m，深さ17cm（蓋石と床面の差）を測る。

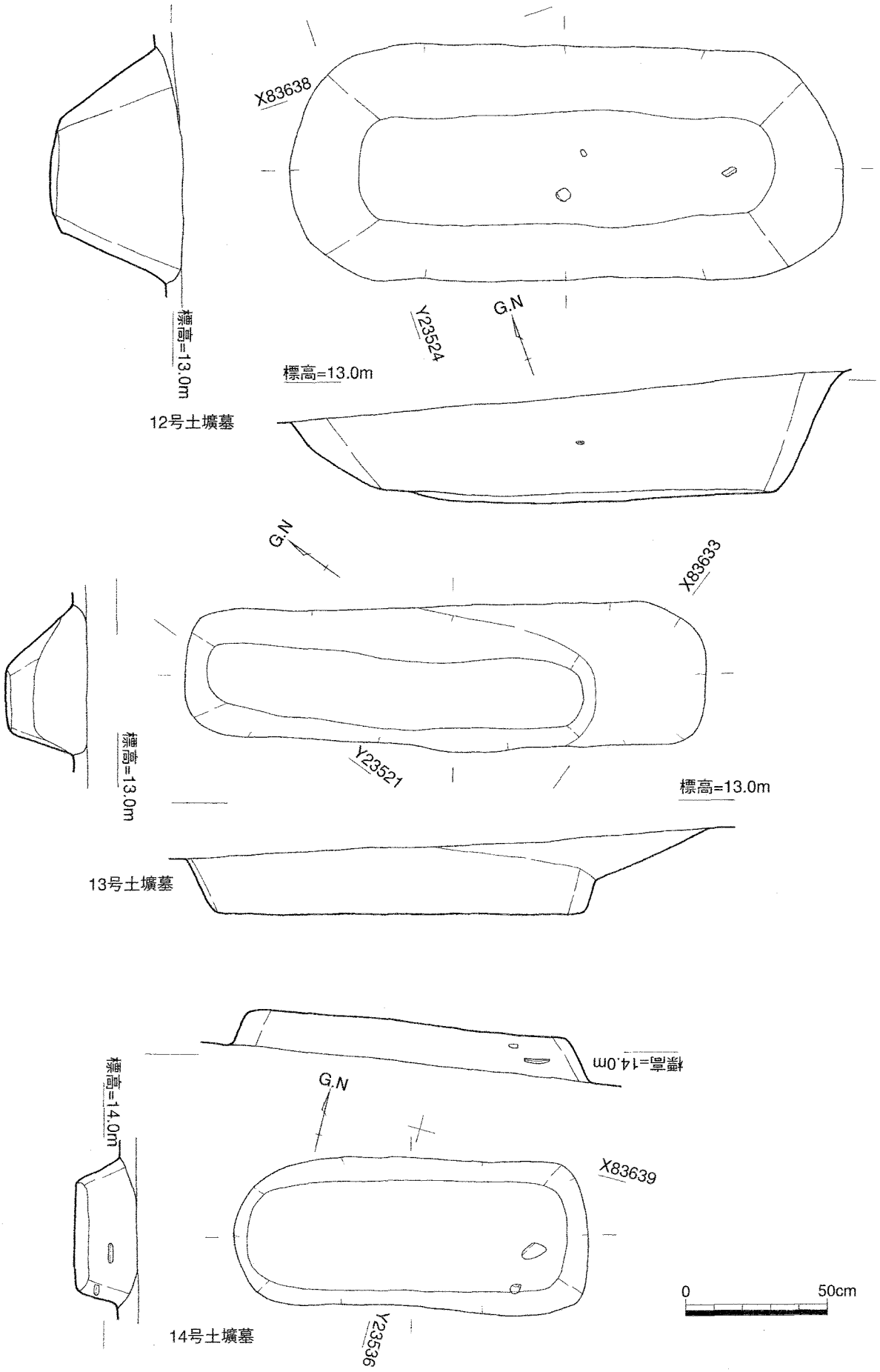


Fig. 36　原地区　土壙墓遺構図⑤（1/20）

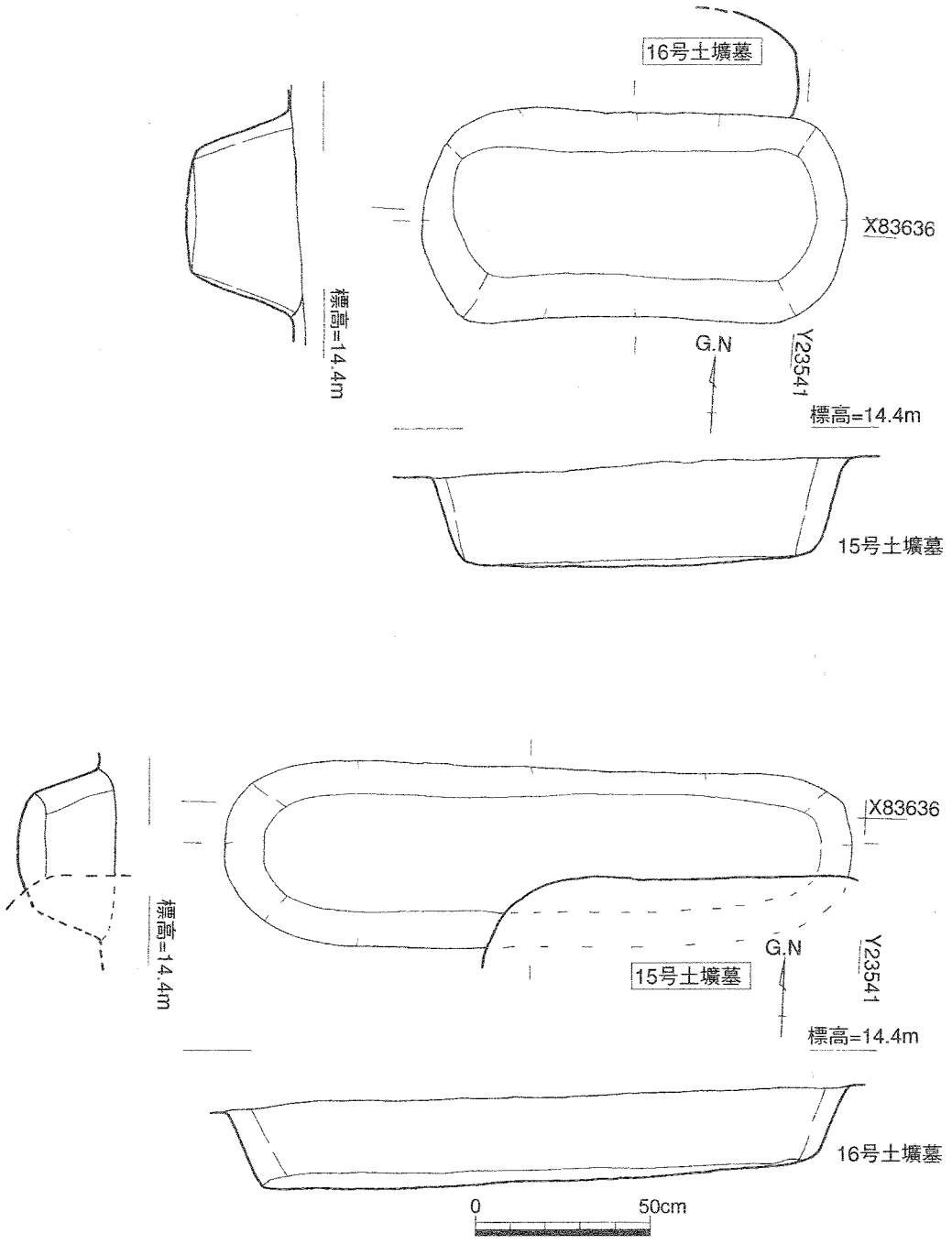


Fig. 37　原地区　土壙墓遺構図⑥（1/20）

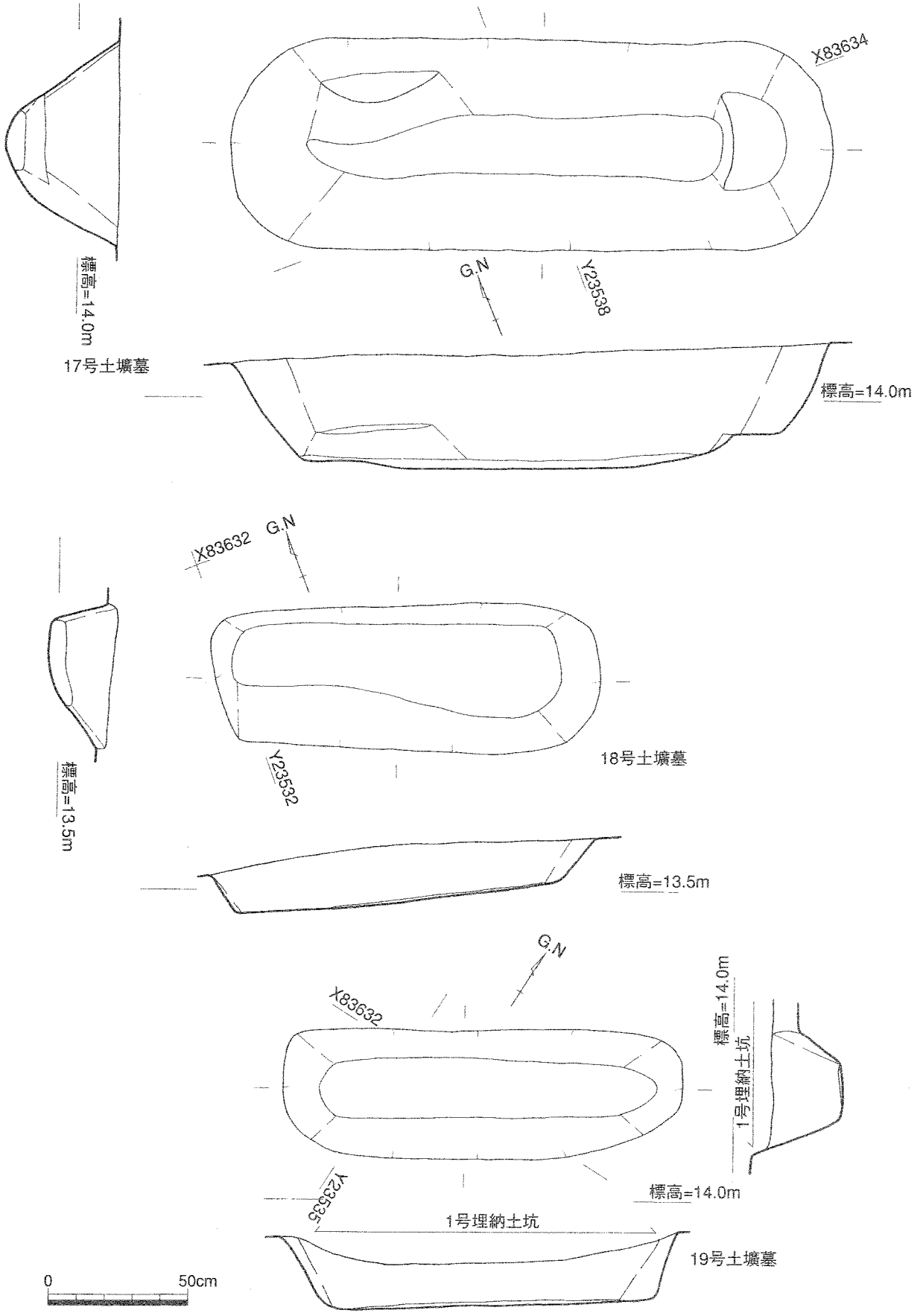


Fig. 38　原地区　土壙墓遺構図⑦（1/20）

④濠（Fig.40　Pho.40）

3号甕棺墓（弥生時代後期初頭～前葉）を切る。検出規模は長さ（東西）310cm，幅（南北）266cm，深さ185cmを測る。ほぼ東西軸をとる。東側の掘り込み面（立ち上がり）が急であることから，後世の削平等で遺構が途切れたように見えるのではなく，濠自体がここで終わるものと思われる。

堆積は8層に分かれており，色調は黒褐色と茶色が交互に堆積する様相を見せる。①層は褐色土(10YR4/4）で，粘性は少ない。②層は黒褐色土（10YR2/3）で，炭化物と小石が混入し，白色土粒（1

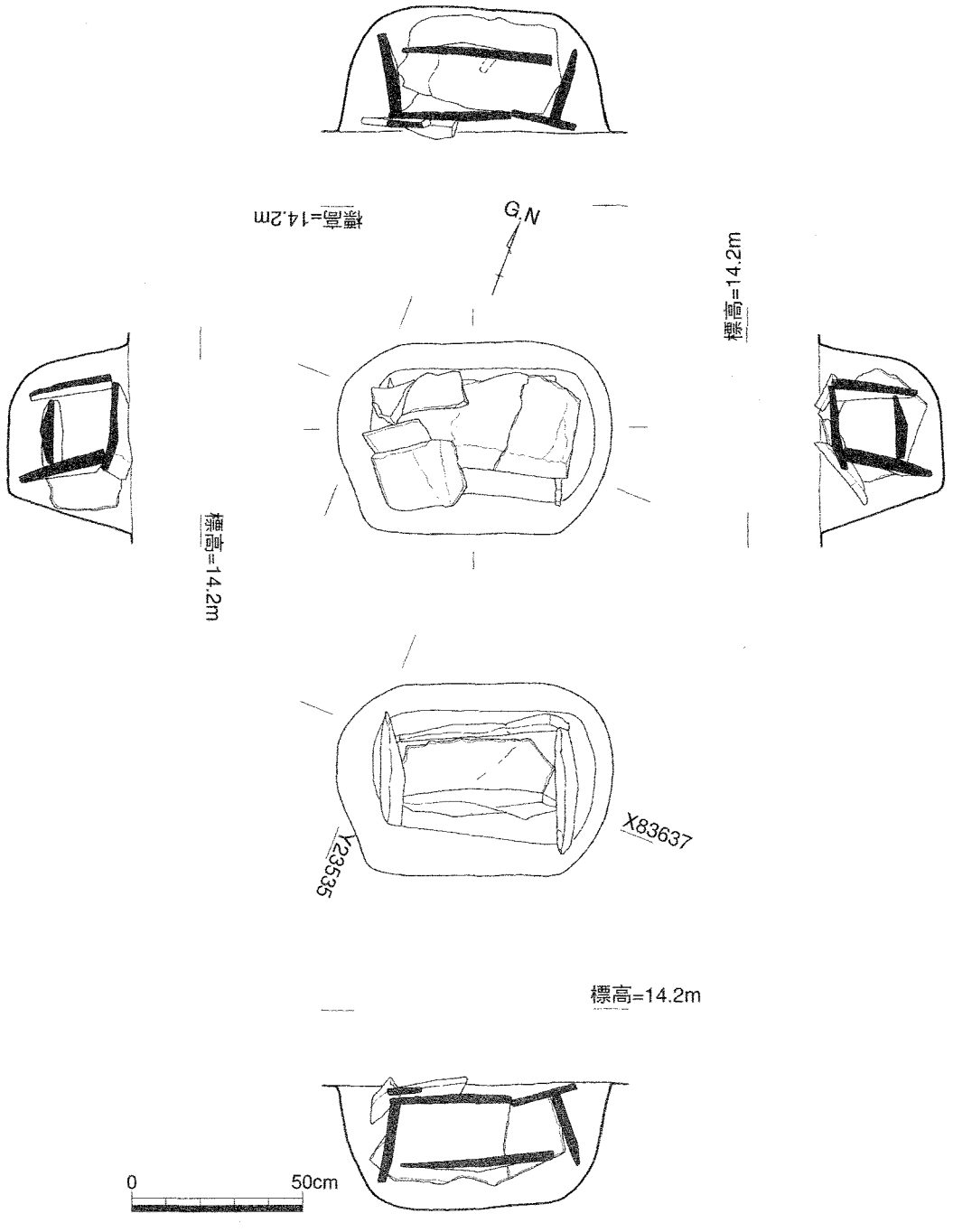


Fig.39　原地区　箱式石棺墓遺構図（1/20）

cm大）を全体に含む。③層はにぶい黄褐色土（10YR4/3）で，炭化物と小石が混入し，白色土粒（1cm大）を全体に含む。④層は黄褐色土（10YR5/6）で地山の風化土のような質感で炭化物は含まない。多少の土器片が含まれる。⑤層は黒褐色土（10YR2/2）で炭化物粒（1cm大）や小石，土器片，灰色土粒（1cm大）を全体に含む。⑥層は褐色土（10YR4/6）で炭化物粒を含む。⑦層はにぶい黄褐色土（10YR4/3）で，炭化物粒や白色土粒を含む。⑧層は最下層で，黒褐色土（10YR2/2）で炭化物粒，風化礫を含む。

明確な再掘削の痕跡は見られないが，土層断面の北側，③層と⑤層との間に段が見られ，かつ④層が地山質土壌のブロック状堆積のように判断されるため，本来はかなり急峻な「V字」に近い断面形状の濠が，後に再掘削されて断面南側で見られるように緩やかな形状の濠となった可能性もある。そうであれば3号甕棺墓を破壊したのは再掘削の時期であると推測される。

濠の堆積である①層と⑧層の土壌から得られた炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ，①層は637calAD～683calAD（95.4%：2σ歴年代範囲），⑧層は121calAD～239calAD（90.5%：2σ歴年代範囲）の年代値を得られた。また⑧層（最下層）より出土した資料は弥生時代後期前葉の資料である。遺構の切り合いや最下層出土資料の時期などの考古学的現象と年代測定からは，この濠は弥生時代後期前葉に掘削され，ほぼ同時期に埋没が始まった（あるいは埋められた）と判断されるが，やや疑問が残る。

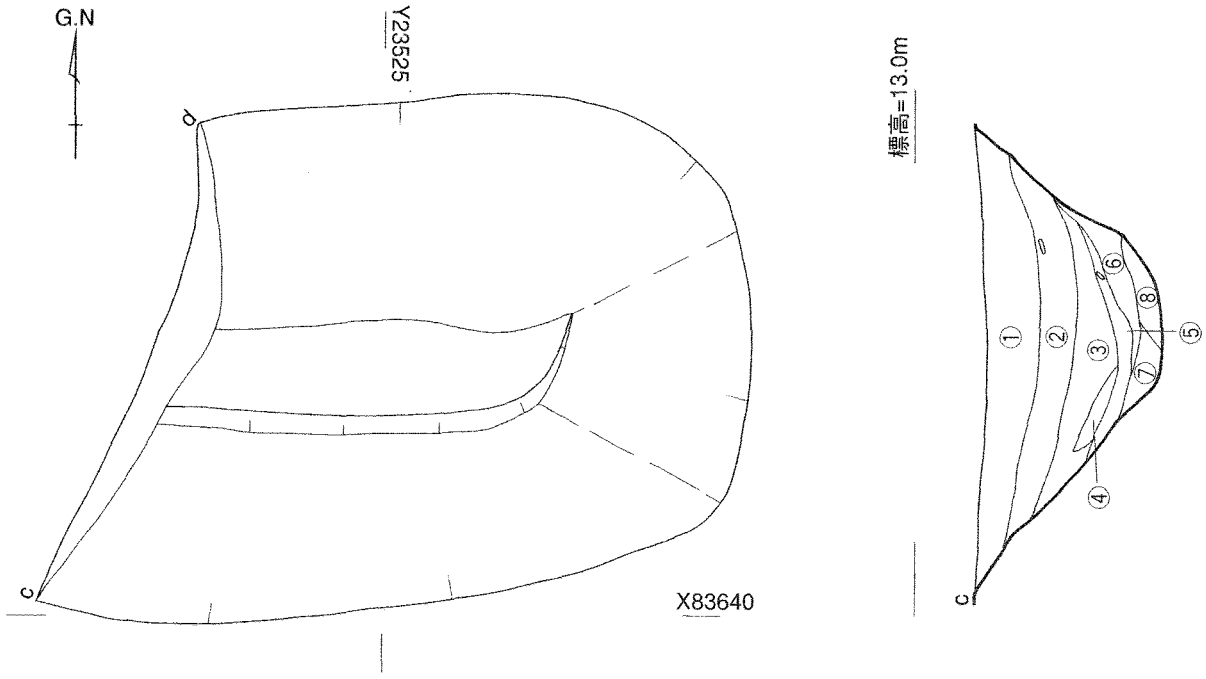


Fig. 40　原地区　濠遺構図および土層図（1/40）

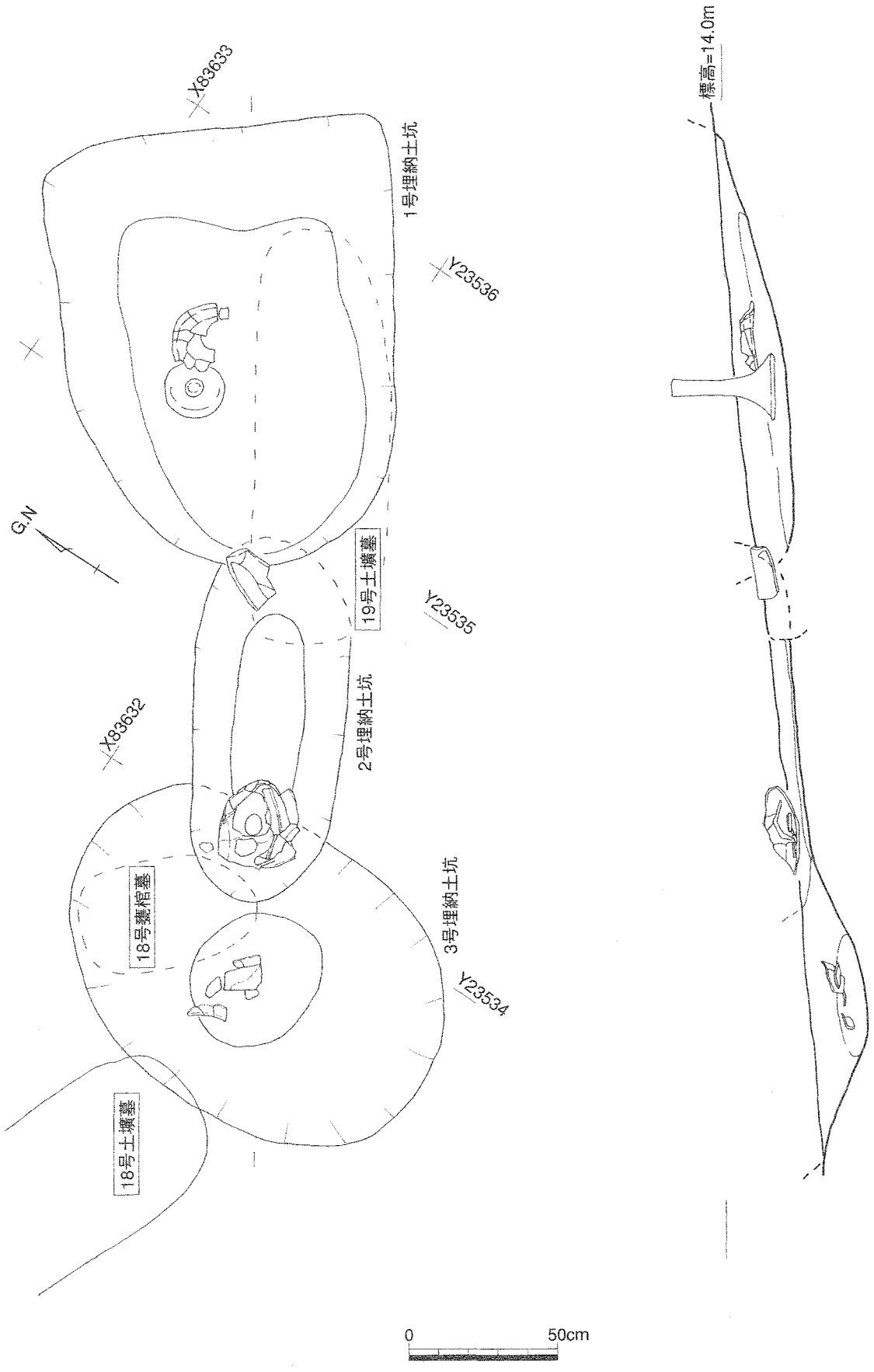


Fig. 41　原地区　土坑遺構図①（1/20）

⑤土坑

1号埋納土坑（Fig.41　Pho.41）

19号土壙墓を切る。土坑の平面形は南西側が丸くなる砲弾形で，長さ150cm，幅118cm，深さ30cmを測る。遺構中心部から高坏が出土する。後世の削平によるのか杯部が破損して落ちているが，脚部はほぼ垂直に立てられた状況で残存しており，意図的な埋納あるいは供献が想定される。19号土壙墓や2号埋納土坑とほぼ同じ長軸をとる。

2号埋納土坑（Fig.41）

19号土壙墓に切られる。土坑の平面形は細長い楕円形で，推定で長さ125cm，幅53cm，深さ7cmを測る。遺構東側からコップ形土器，また遺構西側から壺が出土する。19号土壙墓や1号埋納土坑とほぼ同じ長軸をとる。

3号埋納土坑（Fig.41）

18号甕棺墓を切る。土坑の平面形は楕円形で，長さ140cm，幅100cm，深さ10cmを測る。遺構中心から壺が出土する。

4号土坑（Fig.42　Pho.42）

土坑の平面形は歪な楕円形で，長さ132cm，幅77cm，深さ28cmを測る。遺構の底付近に土器片が多量に含まれる。祭祀土器を埋納した土坑である可能性もあるが，やや堀方が深い。

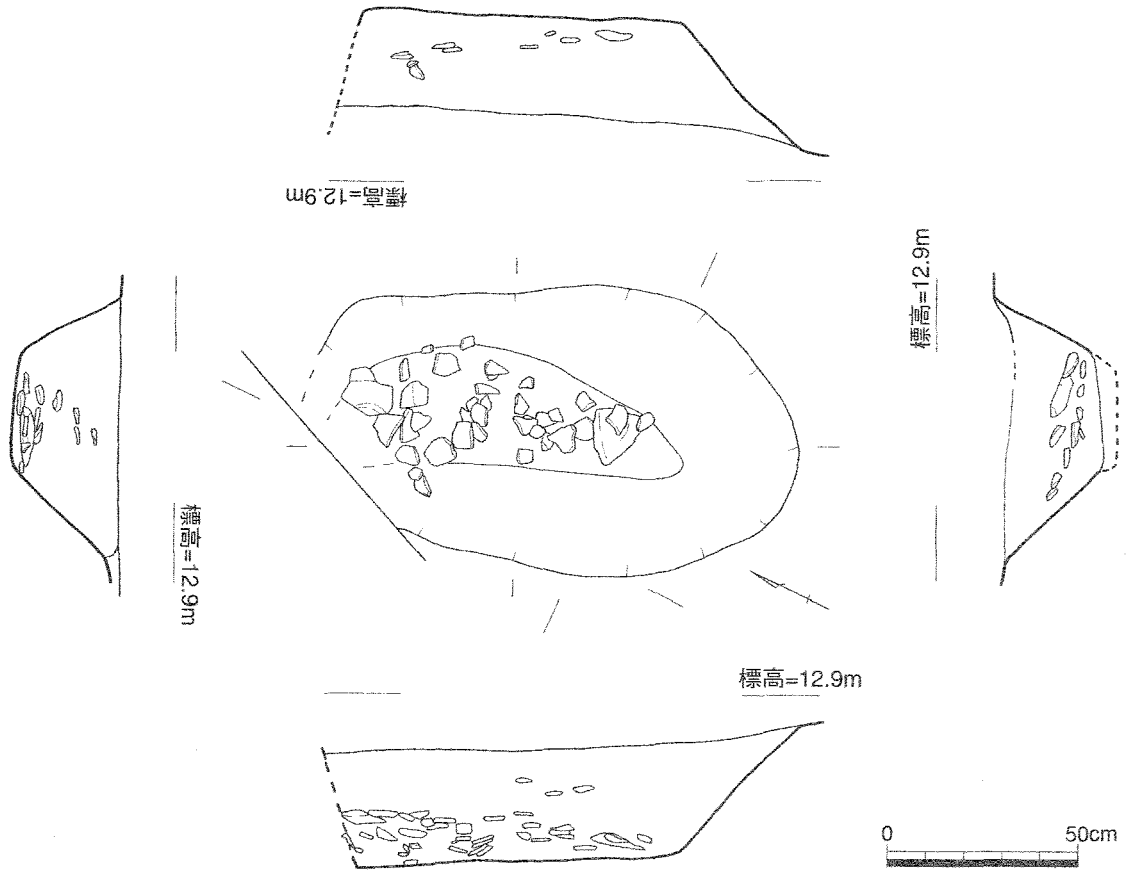


Fig.42　原地区　土坑遺構図②（1/20）

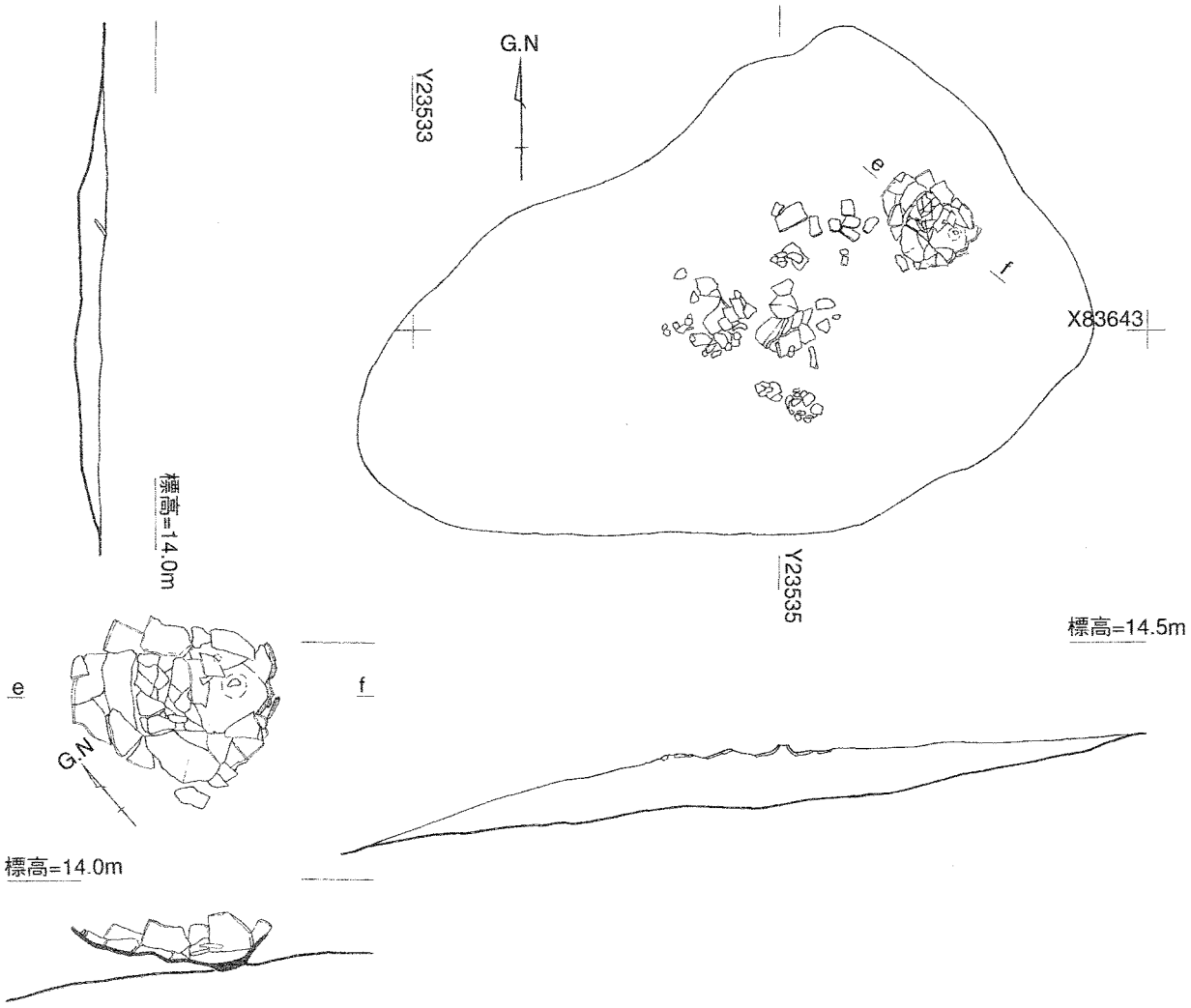


Fig. 43　原地区　1号落ち込み遺構図（1/40　遺物＝1/20）

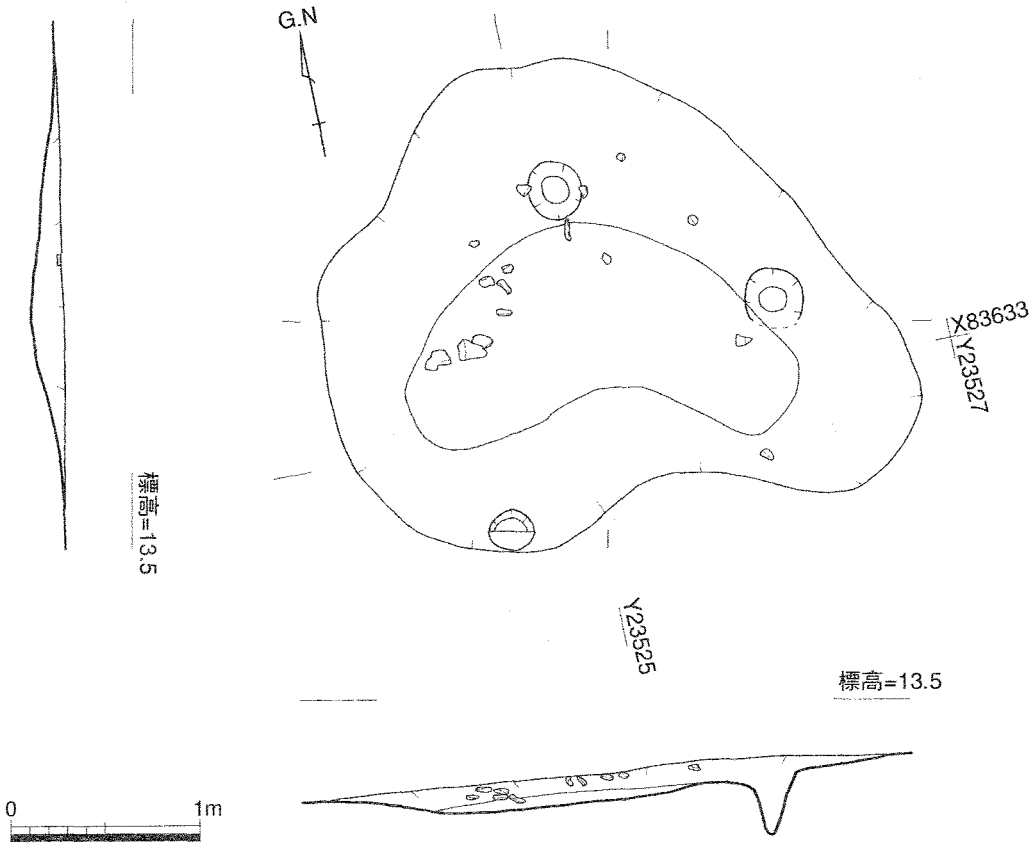


Fig. 44　原地区　2号落ち込み遺構図（1/40）

⑥落ち込み

1号落ち込み（Fig.43　Pho43）

2号甕棺墓を切る。長さ（東西）約380cm，幅（南北）約250cmを測る。底部に穿孔のある壺が傾いた状況で置かれるが，壺上部は後世の削平によってか，壊されて四散している。

2号落ち込み（Fig.44　Pho44）

長さ（東西）約380cm，幅（南北）約250cmを測る。摩滅した土器片を含む。

3号落ち込み（Fig.45　Pho45）

調査区南西部隅のため，落ち込みの範囲は不明である。出土状況が特徴的な土器が2つ出土している。1つは据え置かれたように立つ壺（以下，「立ち壺」）であるが，これには小型の壺や高坏が破損した状況で収められており，また底部付近には黒曜石製の剥片石器が入っていた。また胴部に穿孔のある小型の鉢が水平に伏せられた状況で出土している。この3号落ち込みに堆積する土壌から得られた炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ，2calBC～88calAD（87.2%：2σ歴年代範囲）の年代値を得られた。一方「立ち壺」や，これに入れられた土器の形式は弥生時代中期終末から後期後葉の資料と判断された。「立ち壺」の様相は祭祀的な行為を連想させるが，「立ち壺」内の土器型式に時間幅がありすぎる。そのため，3号落ち込みは弥生時代中期から後期にかけて堆積した土壌であるが，「立ち壺」は後世の攪乱であると判断する。

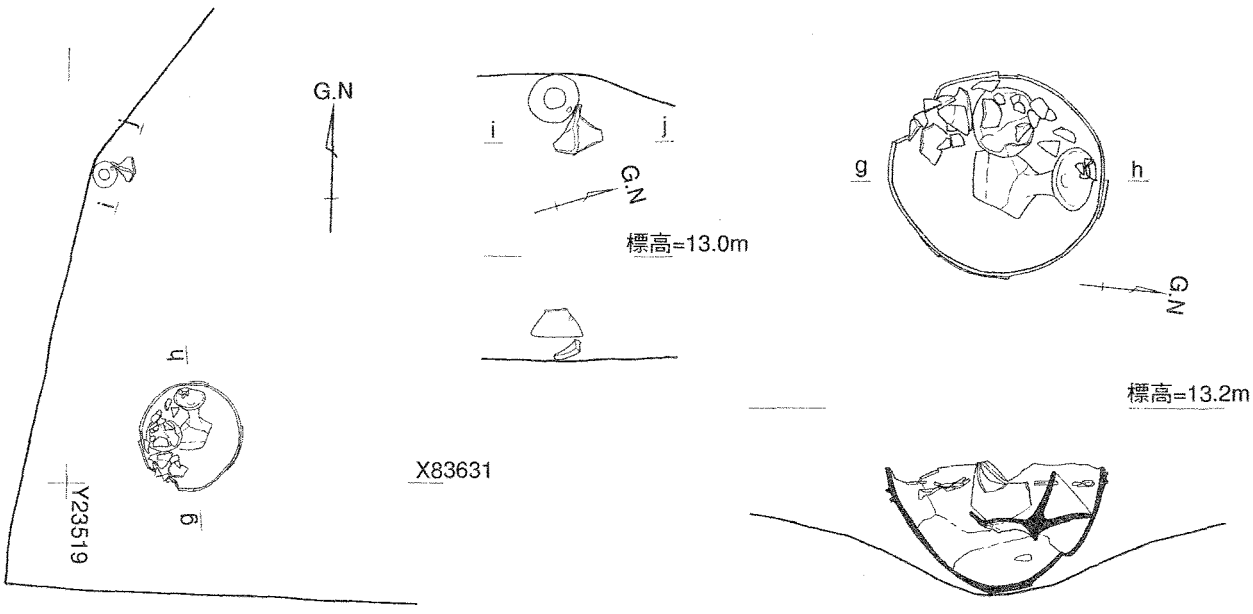


Fig.45　原地区　3号落ち込み遺構図（1/40　遺物＝1/20）

⑦ピット

調査区全体で45基を確認した。遺構覆土には大まかに分けて黒褐色系と茶色系の２種類があるが，ともに遺物の出土はほとんどない。また掘り込みも浅いが多いものが多い。平面的に見て，掘立柱建物などの遺構と判断されるピットの配置も見られなかった。このような状況から，比較的新しい時代に打ち込まれた杭などの痕跡と思われる。

(4) 遺物

①甕棺（Fig.46～51　Pho.46～79）

1～35は甕棺墓，**36**は撹乱層出土の資料である。なお，以下の説明における北部九州系弥生土器の時期判断については宮崎編年〔**宮崎2005**〕を参照した。

1は１号甕棺墓の上甕で壺である。口縁部を打ち欠いて合口甕棺としている。頸部に１条，胴部に１条の断面「コ」の字形の突帯を巡らせる。表裏面ともにナデ仕上げで平滑に仕上げ，裏面には部分的にヘラナデの痕跡が見られる。**2**は１号甕棺墓の下甕で壺，口縁部は広口である。頸部に１条，胴部に１条の断面「コ」の字形の突帯を巡らせる。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデ仕上げである。**1～2**はともに後期Ⅱ期～Ⅲ期の資料で，合口甕棺となる。**3**は１号甕棺墓下甕に埋納されていた小型の鉢である。外面の底部付近にハケ目の後にナデ，内面はナデ仕上げ，外面には丹塗りが施される。後期Ⅰ期～Ⅱ期の資料である。

4は２号甕棺の上甕で壺，口縁部は袋状となって最長径部分は稜が入る。頸部下に１条，胴部に１条の断面「三角」形の突帯を巡らすが，断面「コ」の字形となる箇所も見られるため過渡的な様相を見せる。外面はハケ目の後にナデ消して平滑に仕上げ，内面は口縁部付近には横ハケ目，頸部から胴部はナデで仕上げる。内外面の底部付近は剥離して凹凸となる。後期Ⅱ期の資料である。５は２号甕棺の下甕で壺，口縁部は鋤先形である。頸部下に１条，胴部に１条のやや崩れた断面「M」字形の突帯を巡らす。胴部突帯の下に外側からの穿孔が１つ見られる。口縁先端部分の下面には焼成前に刻み込まれた３本の線刻文様が見られ，形状は鳥の足跡状となる。内外面ともにハケ目の後にナデで平滑に仕上げる。外面の口縁部から頸部にかけて丹塗りを施す。一見，中期Ⅴ期と思われるが，突帯や底部の様相から後期Ⅰ期の資料と判断した。**4**と**5**で合口甕棺となるが，型式が異なる。

6は３号甕棺墓の上甕で甕，口縁部断面は「く」の字形である。口縁部先端はあまり上向きにならず，「く」の字形口縁では古い様相である。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで仕上げる。外面にスス痕や二次的熱変で赤色化しているところもあり，日用煮炊き具を転用したものと思われる。後期Ⅰ期の資料である。**7**は３号甕棺墓の下甕で壺，口縁部から頸部を打ち欠いて合口甕棺としている。頸部下に１条，胴部に２条の突帯を巡らすが，３条となる箇所も見られる。突帯は基本的に断面「三角」形であるが，断面「コ」の字形となる箇所も見られ，過渡的な様相を見せる。胴部突帯の上に外側からの穿孔が見られる。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで仕上げる。外面の突帯下にはタタキによる凹凸が見られる。穿孔によって剥離した突帯の接合面にもハケ目が見られるため，

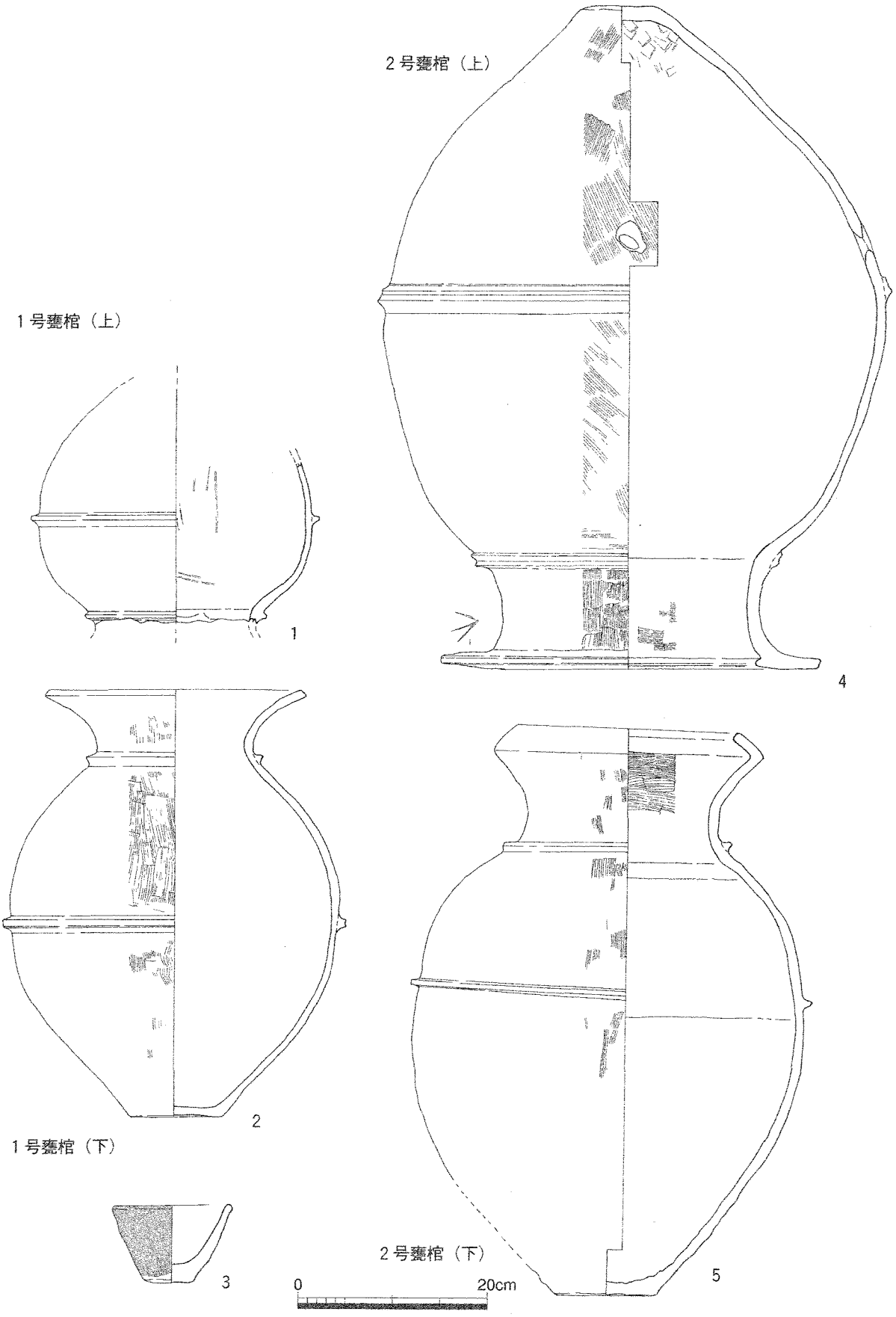


Fig. 46　原地区　甕棺墓出土土器図①（1/6）

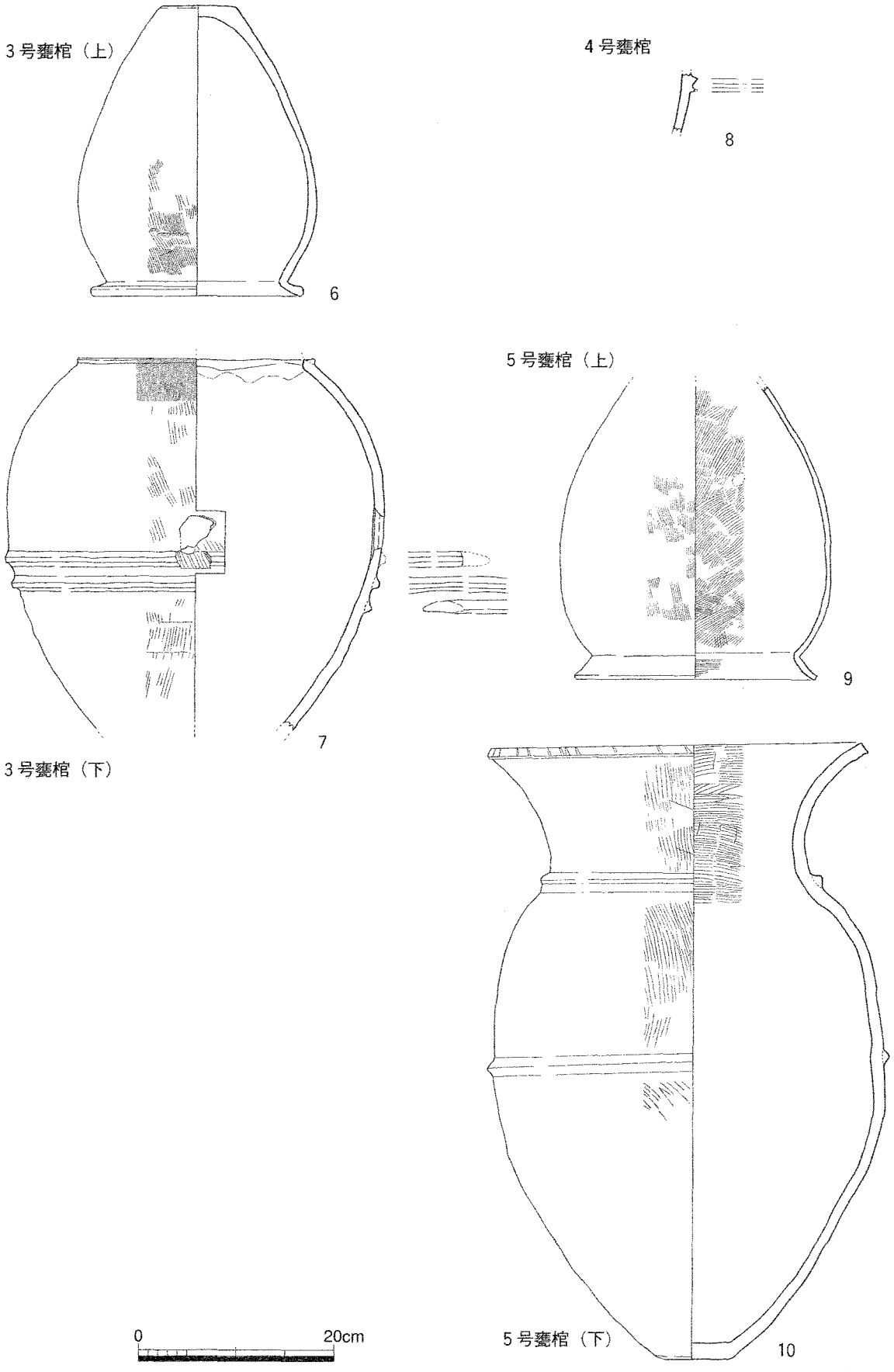


Fig. 47　原地区　甕棺墓出土土器図②（1/6）

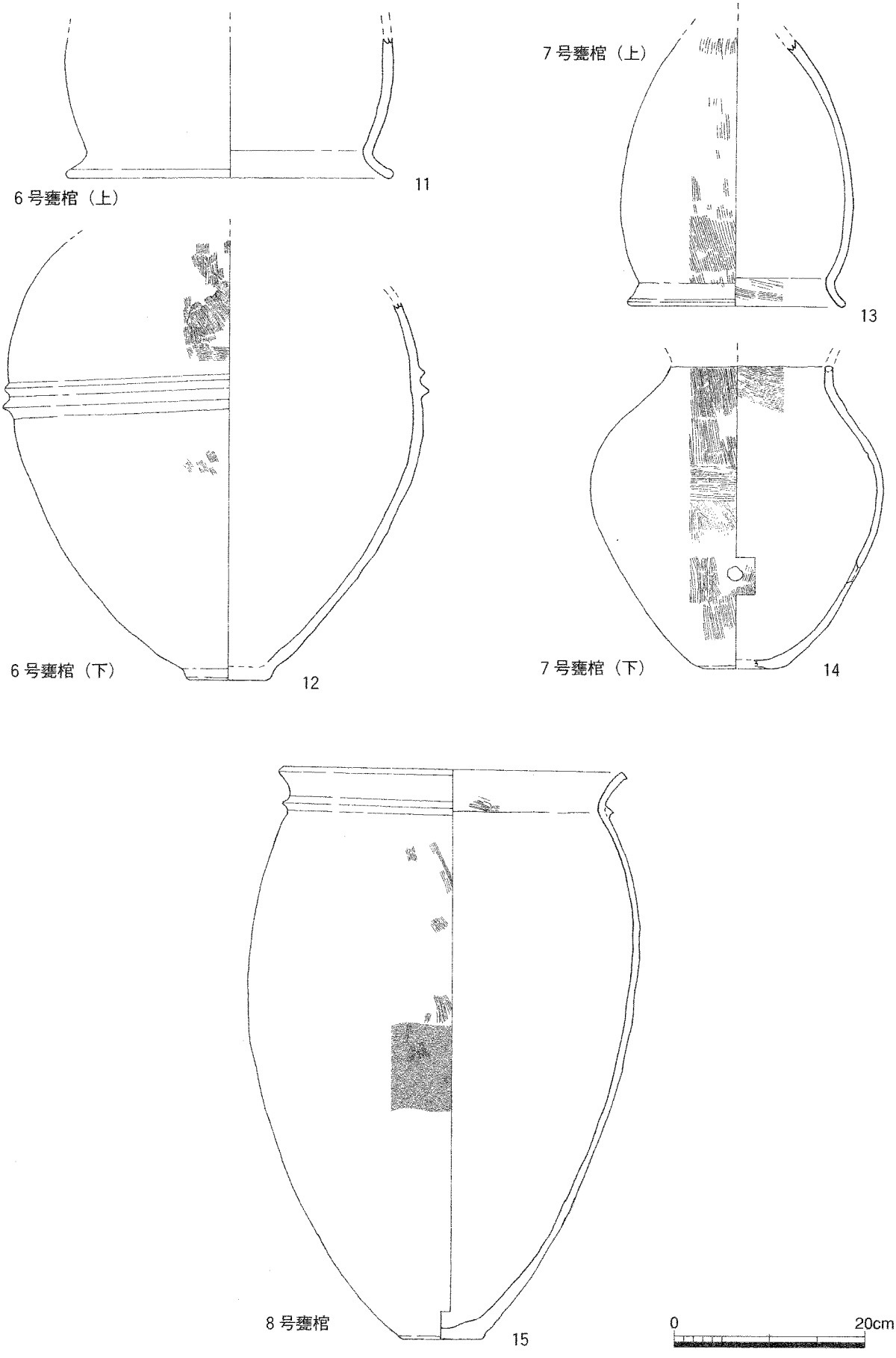


Fig. 48　原地区　甕棺墓出土土器図③（1 / 6）

突帯の貼付がハケ目調整の跡であることがわかる。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。6と7で合口甕棺となる。

8は4号甕棺墓の下甕と思われる甕で，胴部破片である。断面「M」字形の突帯が残るが，やや崩れた様相を見せる。外面は横ナデ仕上げ，内面は摩滅が著しいため不明である。突帯の様相から後期Ⅰ期の資料と判断した。

9は5号甕棺の上甕で甕，口縁部断面は「く」の字形である。外面はハケ目の後にナデ消し仕上げ，内面はハケ目仕上げで一部に指オサエ痕が見られる。外面にはスス痕が見られるため，日用煮炊き具を転用したものである。後期Ⅲ期の資料である。10は5号甕棺墓の下甕で壺，口縁部は広口形である。底部を欠く。頸部に1条，胴部に1条の断面「三角」形の突帯を巡らすが，頸部の突帯には一部，断面「コ」の字形となるところも見られる。外面は縦ハケ目，内面は横ハケ目で仕上げる。口縁部先端の平坦面に刻目が見られる。後期Ⅳ期（弥生時代後期後葉）の資料である。9と10で合口甕棺となるが，形式が異なる。

11は6号甕棺墓の上甕と思われる甕で，口縁部の断面は「く」の字形である。内外面ともナデ仕上げである。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。12は6号甕棺墓の下甕で壺である。口縁部から頸部に欠けて欠損している。胴部に2条の断面「三角」形の突帯が巡る。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデ仕上げである。口縁部が欠損しているため時期判断が難しいが，後期Ⅱ期の資料と推測される。11と12で合口甕棺となる。

13は7号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。底部を欠く。外面はハケ目，内面はナデ仕上げである。外面にスス痕や二次的熱変で赤色化しているところもあり，日用煮炊き具を転用したものと思われる。14は7号甕棺墓の下甕で壺，口縁部から頸部にかけて打ち欠いて合口甕棺としている。外面はハケ目，内面は頸部付近にハケ目，胴部から底部にかけてはナデ仕上げである。胴部下に外側からの穿孔が見られる。13と14はともに後期Ⅱ期の資料で，合口甕棺となる。

15は8号甕棺墓の単棺下甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。口縁屈曲部に断面「三角」形の突帯が巡る。外面の口縁屈曲部から胴部にかけてはハケ目の後にナデ消し，胴部から底部にかけてはナデ，内面の口縁屈曲部にハケ目，胴部から底部にかけてはナデで平滑に仕上げる。胴部外面の一部に黒塗りかと思われる痕跡が見られる。後期Ⅱ期の資料である。

16は9号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「コ」の字形である。口縁部の下に断面「三角」形の突帯を1条巡らす。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。外面の一部にスス痕が見られることから，日用煮炊き具を転用したものと思われる。17は9号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「コ」の字形である。口縁部の下に断面「三角」形の突帯が1条巡る。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。外面の一部にスス痕が見られることから，日用煮炊き具を転用したものと思われる。16と17はともに中期Ⅲ期の資料で，合口甕棺となる。

18は10号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「鋤先」形ある。底部を欠く。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで仕上げる。口縁部の先端に5カ所の刻目が刻まれる。19は10号甕棺墓の下甕で

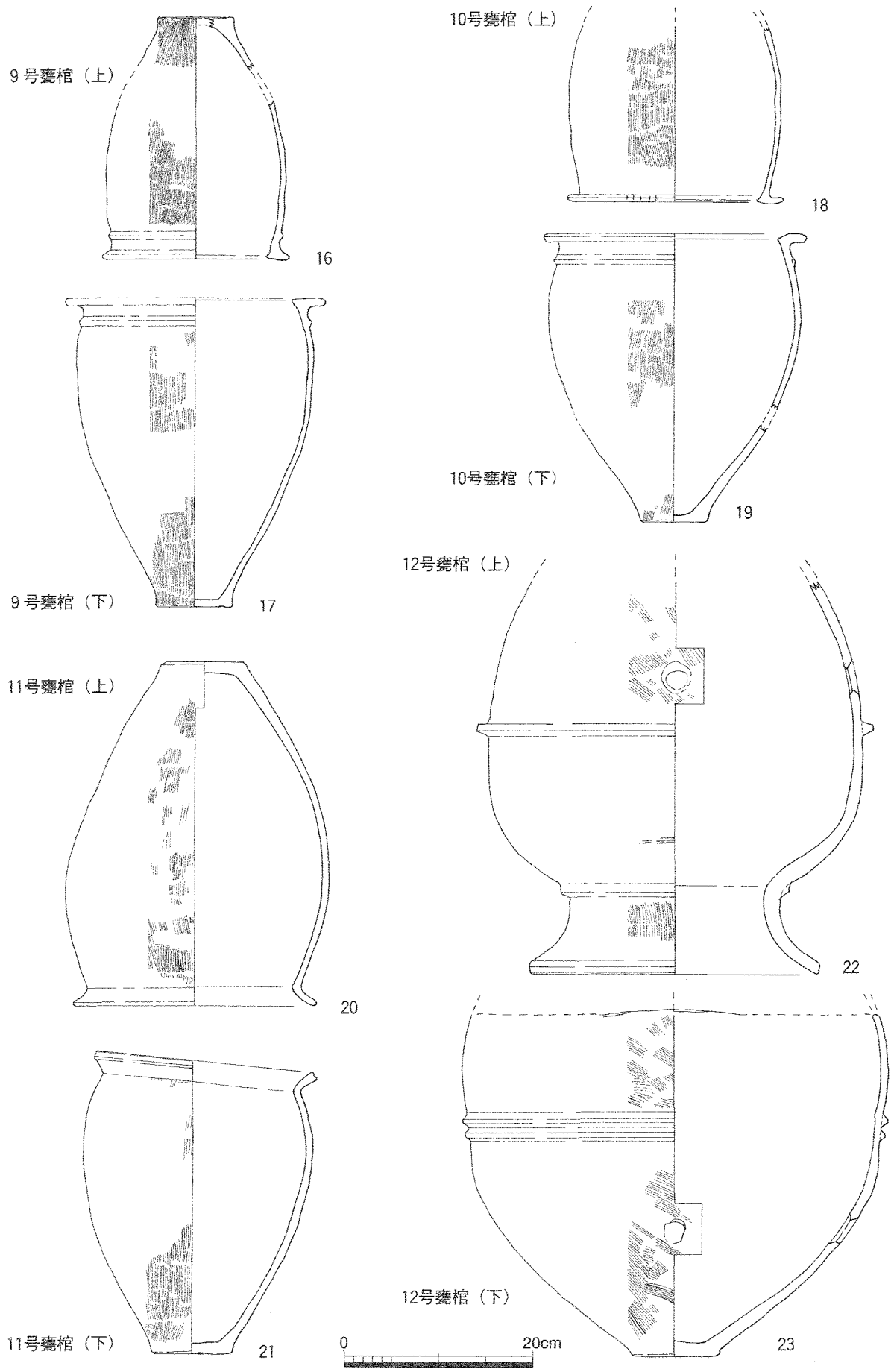


Fig. 49　原地区　甕棺墓出土土器図④（1/6）

甕，口縁部の断面は「コ」の字形である。口縁部の下に断面「三角」形の突帯を１条巡らす。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。外面の胴部から底部にかけて二次的熱変で赤色化しているところがある。18と19はともに日用煮炊き具と思われる中期Ⅳ期の資料で，合口甕棺となる。

20は11号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。21は11号甕棺墓の下甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。口縁先端部の上端を摘み上げるように成形する，いわゆる「跳ね上げ」口縁とよばれるもので，北部九州東部（豊前系）の特徴をもつ。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで仕上げる。外面の一部にスス痕が見られる。20と21はともに日用煮炊き具と思われる後期Ⅱ期の資料で，合口甕棺となる。

22は12号甕棺墓の上甕で壺，口縁部は広口である。底部を欠く。頸部の下に断面が「三角」形，胴部に断面が「コ」の字形の突帯を１条ずつ巡らす。胴部突帯の下には穿孔が見られる。外面はハケ目，またはナデ，内面はナデで仕上げる。外面の口縁部から頸部にかけて丹塗りを施す。23は12号甕棺墓の下甕で壺，胴部の上半分から打ち欠いて合口甕棺とする。胴部に２城の断面「三角」形の突帯を巡らす。突帯の下には穿孔が見られる。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで平滑に仕上げる。22は23ともに後期Ⅱ～Ⅲ期の資料で，合口甕棺となる。

24は13号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。胴部中央に穿孔が見られる。外面はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。胴部から底部にかけてスス痕が見られる。25は13号甕棺墓の下甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。口縁屈曲に断面「M」字形の突帯を１条巡らす。胴部に外側からの穿孔が見られる。外面はハケ目の後にミガキ，内面はナデで平滑に仕上げる。外面および口縁部内面に丹塗りを施す。ともに日用品の甕棺転用と思われ，口縁屈曲部や突帯に中期終末の古い様相を残すものの後期Ⅰ期の資料と判断した。24と25で合口甕棺となる。

26は14号甕棺墓の上甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形である。27は14号甕棺墓の下甕で甕，口縁部の断面は「く」の字形であるがやや屈曲部は丸みを帯びる。外面はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。外面の胴部から底部にかけてスス痕や二次的熱変で赤色化している。後期Ⅰ期の資料である。27は14号甕棺墓の下甕で，形式は甕，口縁部の断面は「く」の字形であるがやや屈曲部は丸みを帯びる。外面はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。後期Ⅱ期の資料である。26と27は合口甕棺となり，ともに胴部から底部にかけての外面にスス痕や二次的熱変を受けて赤色化したところが見られるため，日用煮炊き具の転用品と思われる。

28は15号甕棺墓の上甕で鉢，口縁部の断面は「く」の字形である。外面はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。後期Ⅱ期の資料である。29は15号甕棺墓の下甕で壺，口縁部から頸部を打ち欠いて合口甕棺としている。頸部の下に１条，胴部に１条の断面が「三角」形となる突帯を巡らす。器形がかなり歪んでいる。外面はハケ目の後にナデ消し，内面はナデで平滑に仕上げる。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料である。28と29で合口甕棺となる。

30は16号甕棺墓の上甕，31は16号甕棺墓の下甕で，ともに甕で，口縁部の断面は「く」の字形である。外面の口縁部は横ナデ，胴部はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。外面の胴部から底部にか

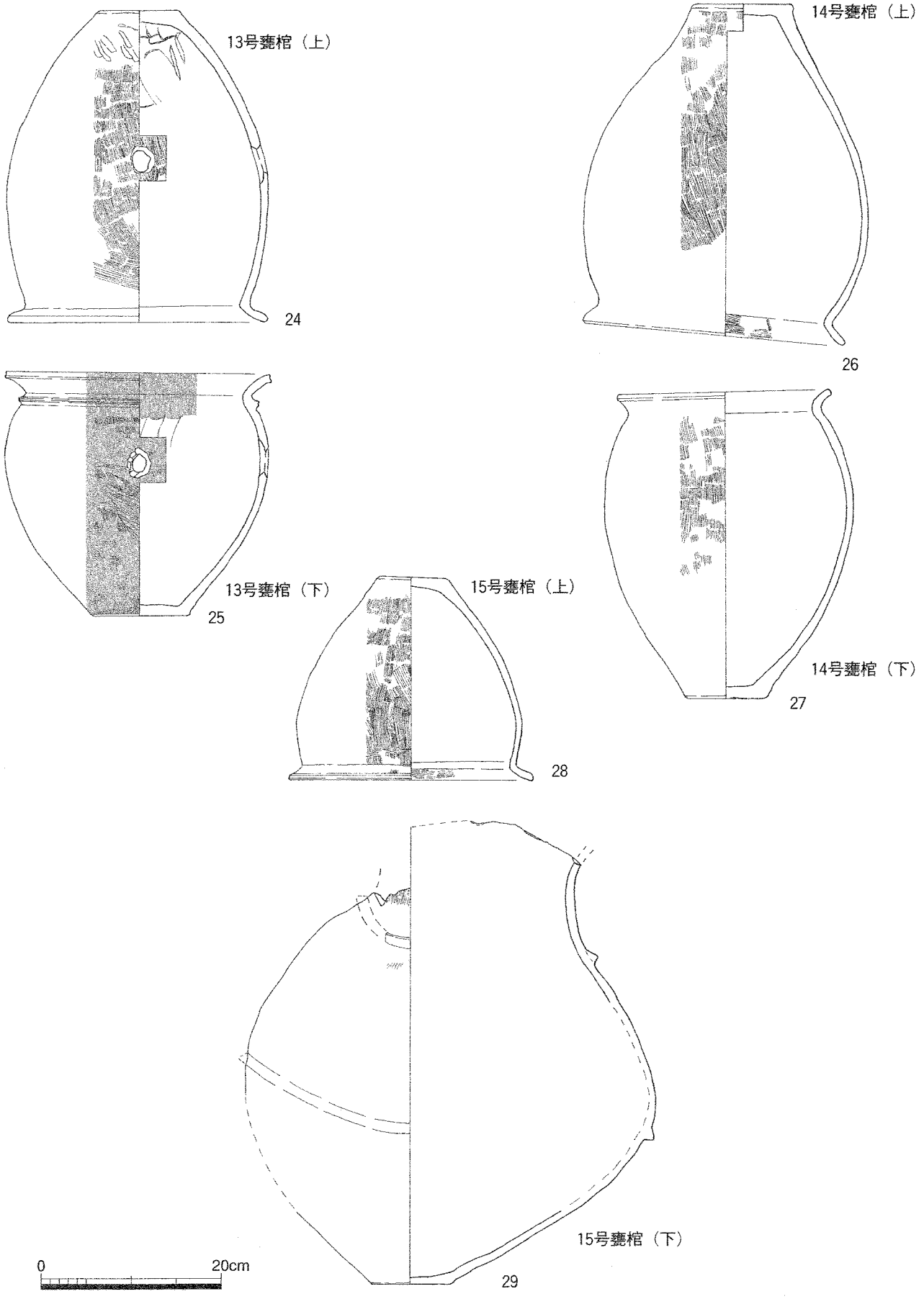


Fig. 50　原地区　甕棺墓出土土器図⑤（1 / 6）

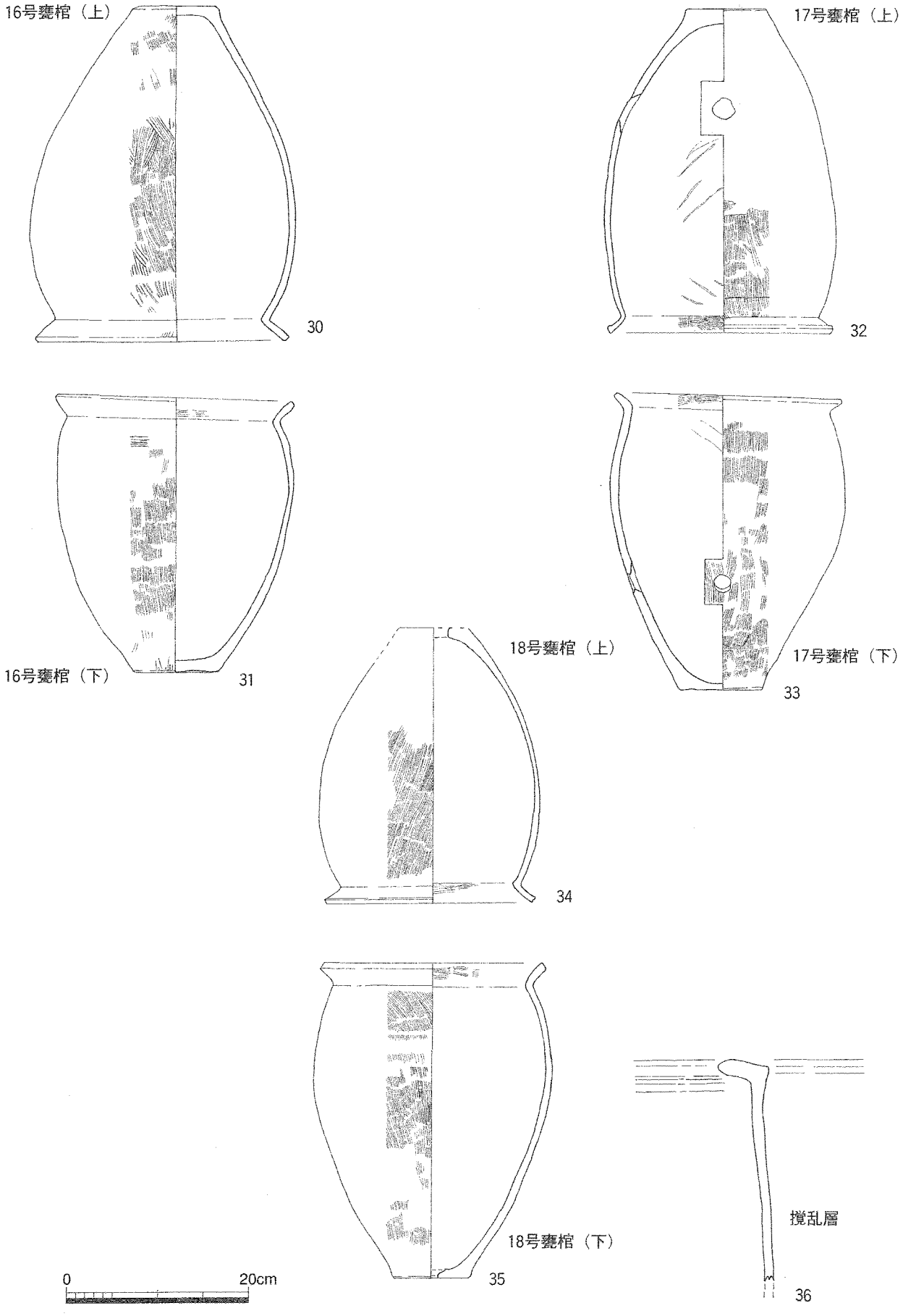


Fig. 51　原地区　甕棺墓出土土器図⑥（1/6）

けてスス痕や二次的熱変で赤色化しているため，日用煮炊き具の転用品と思われる。後期Ⅱ期の資料で，合口甕棺となる。

32は17号甕棺墓の上甕，**33**は17号甕棺墓の下甕で，ともに甕で，口縁部の断面は「く」の字形である。外面の胴部に外側からの穿孔が見られる。外面の口縁部は横ナデ，胴部はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。内面には一部にヘラの痕跡も見られる。外面の胴部から底部にかけてスス痕や二次的熱変で赤色化しているため，日用煮炊き具の転用品と思われる。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料で，合口甕棺となる。

34は18号甕棺墓の上甕，**35**は18号甕棺墓の下甕である。ともに甕で，口縁部の断面は「く」の字形である。底部に外側からの穿孔が見られる。外面の口縁部は横ナデ，胴部はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。内面の口縁部には一部にハケ目が見られる。外面の胴部から底部にかけてスス痕や二次的熱変で赤色化しているため，日用煮炊き具の転用品と思われる。後期Ⅱ～Ⅲ期の資料で，合口甕棺となる。

36は調査区北東側の撹乱層から出土した成人用甕棺材の破片で，口縁部の断面が逆「コ」の字形となる。口縁が内側に張り出すが，外側には発達しない。外面は摩滅が著しいが，ナデ仕上げか。内面はナデで平滑に仕上げる。橋口編年〔**橋口2005**〕のＫⅡｂ～ｃ式（弥生時代中期前半）に比定される資料である。

②土器

土壙墓（Fig. 52）

37は10号土壙墓から出土した甕の口縁部で，口縁部の断面は「く」の字形である。口縁先端部の平坦面は凹面状となる。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。口縁部の内面には一部にハケ目が残る。後期Ⅱ期の資料である。**38**は11号甕棺墓から出土した壺の口縁部で，口縁は広口，口縁部の断面は「鋤先」形である。内外面ともナデで仕上げる。中期Ⅳ期の資料である。**39**は13号土壙墓から出土した壺の底部で，底部は指オサエにより断がつく。外面はナデで平滑に仕上げ，内面はケズリ状の板ナデで仕上げる。中期の資料と思われるが，器形や内面調整から朝鮮半島系無文土器（または擬朝鮮半島系無文土器）である可能性も高い。

濠（Fig. 52）

40～41は濠④層から出土した甕の口縁部で，口縁部の断面は「く」の字形である。外面の口縁部は横ナデ，胴部はハケ目，内面はナデで平滑に仕上げる。口縁部の内面にはハケ目が残る。ともに後期Ⅰ期の資料である。**42**は濠⑤層から出土した壺の口縁部で，口縁は広口となる。外面はハケ目が若干残るがナデ仕上げ，内面もナデで平滑に仕上げる。内外面ともに丹塗りを施す。後期Ⅰ期の資料である。**43～44**は濠⑧層（最下層）から出土した甕の口縁部で，口縁の断面は「く」の字形である。外面はハケ目，内面はナデで仕上げる。後期Ⅰ期の資料である。

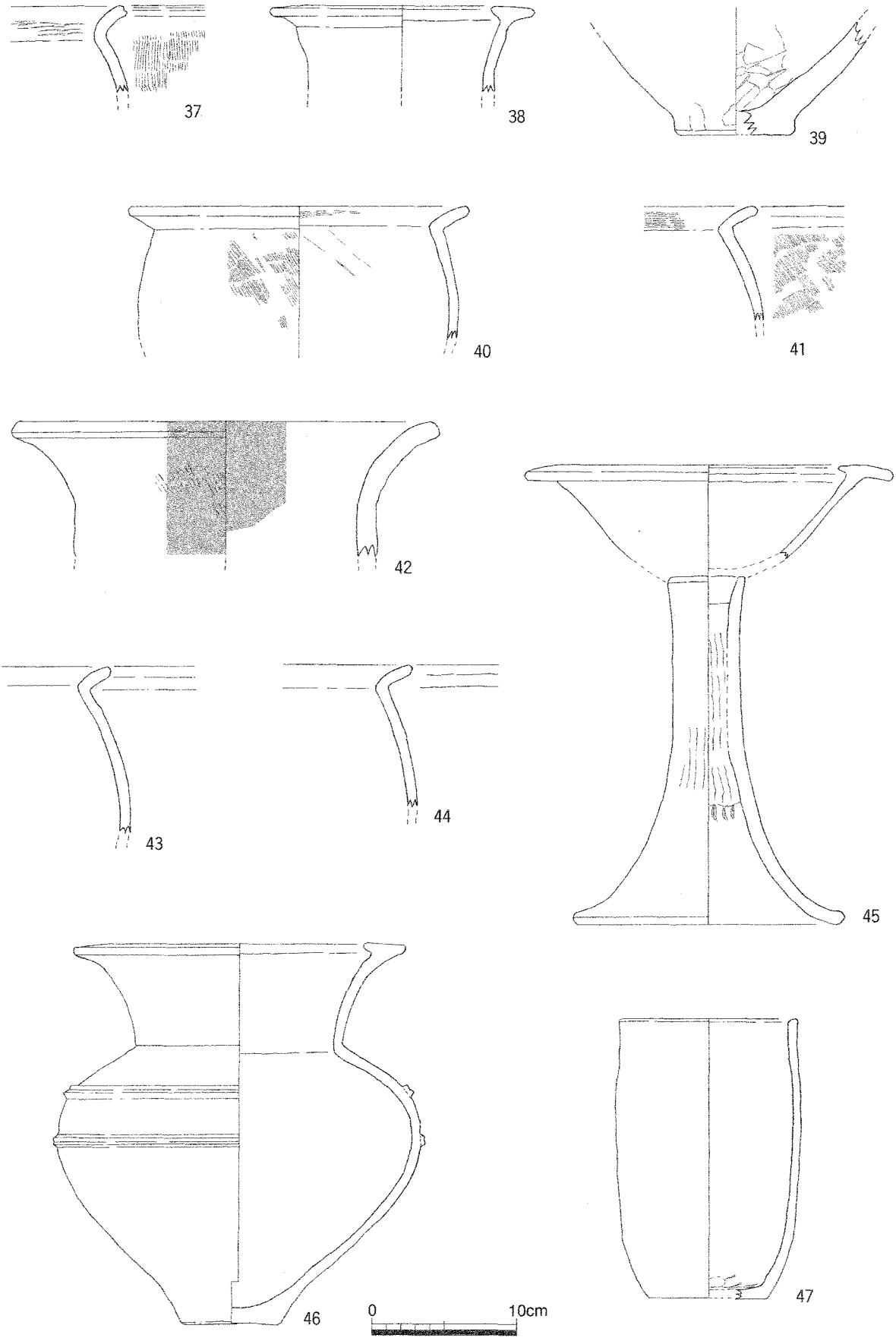


Fig. 52　原地区　土壙墓・濠・土坑出土土器図（1/4）

土坑（Fig. 52）

45は１号埋納土坑から出土した高坏で，口縁部の断面は「鋤先」形となる。摩滅が著しいが，丹塗りが施されていた可能性が高い。中期Ⅴ期の資料である。**46**は２号埋納土坑から出土した壺で，口縁は広口，口縁部の断面は「鋤先」形となる。胴部に２条の断面が「M」字形となる突帯を巡らす。内外面ともにナデで平滑に仕上げる。中期Ⅳ期の資料である。**47**は２号埋納土坑から出土した筒形の鉢で，口縁部は垂直に立ち上がる，いわゆる素口縁である。摩滅が著しいが，外面には縦ミガキの痕跡が残る。中期の範疇に入る資料である。

落ち込み（Fig. 53～54）

48～51は１号落ち込みから出土した資料である。**48**は壺で口縁は広口，口縁部の断面は「鋤先」形である。頸部の下に１条，胴部に２条の断面が「三角」形となる突帯を巡らす。底部に外側からの穿孔が見られる。外面は風化が著しいが，一部にハケ目の痕跡が残る。内面はナデで仕上げる。外面の一部には丹塗りの痕跡が残る。後期Ⅰ期の資料である。**49**は壺で口縁部は袋状となり，袋状部分の最

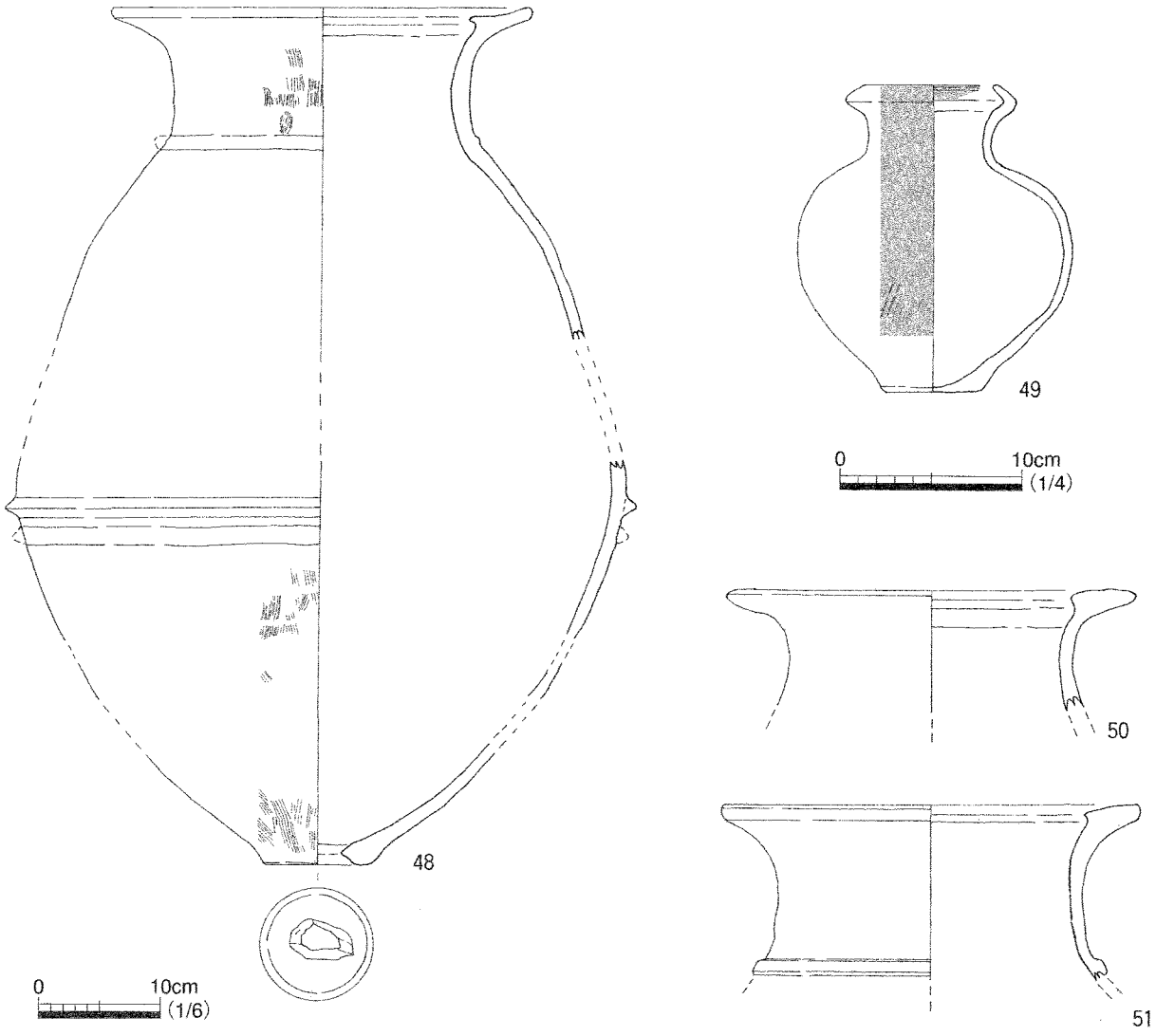


Fig. 53　原地区　１号落ち込み出土土器図（48＝１／６　49～51＝１／４）

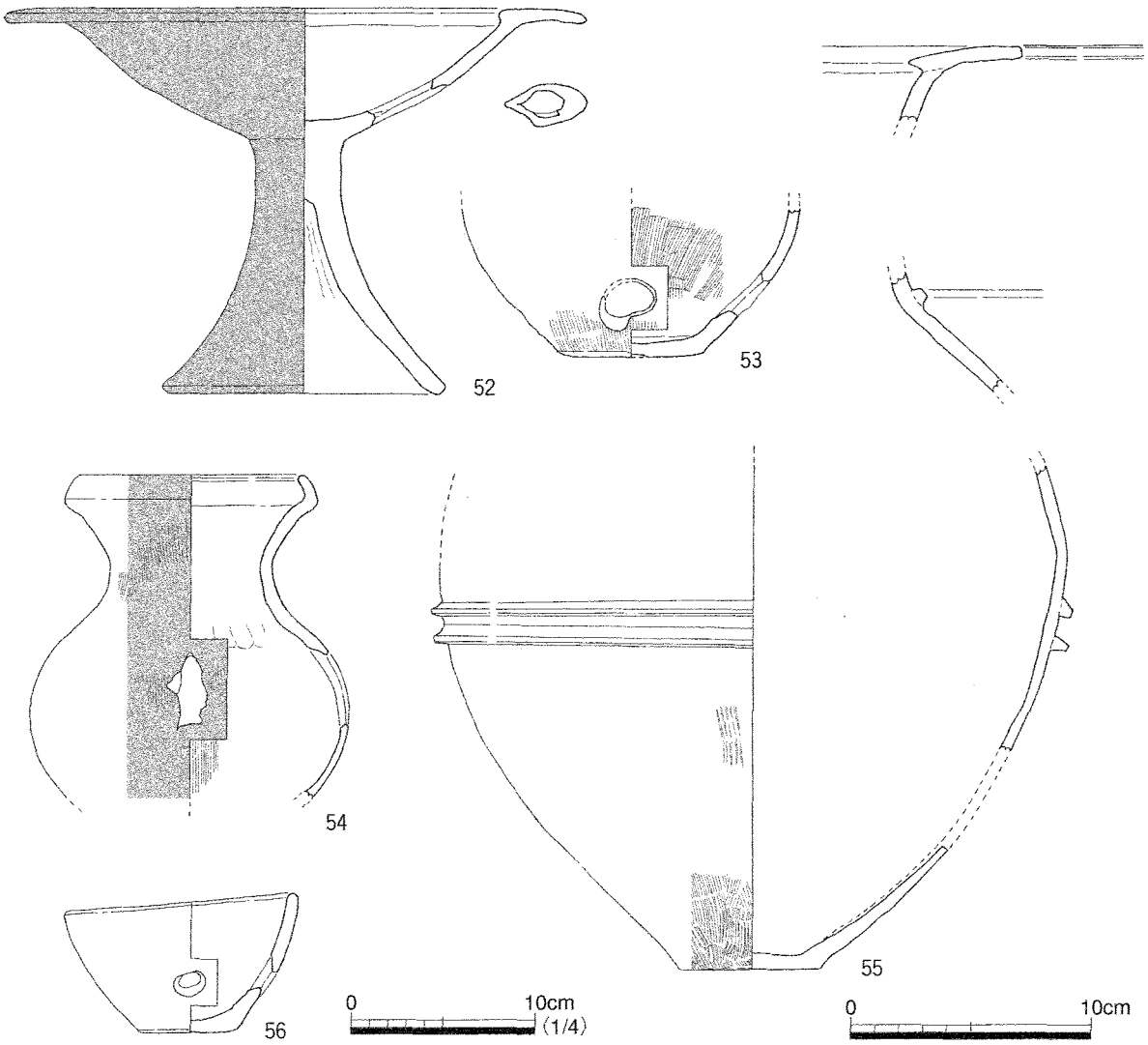


Fig. 54　原地区　3号落ち込み出土土器図（52～54，56＝1／4　55＝1／6）

大径には稜が入る。内外面ともにナデで平滑に仕上げる。外面および内面の口縁部に丹塗りを施す。後期Ⅰ期の資料である。**50～51**は壺で口縁は広口，口縁部の断面は「鋤先」形となる。内外面ともにナデで平滑に仕上げる。**51**の頸部には突帯が1条巡るが，これは断面が「M」字形だったものが風化で摩滅したものだろう。ともに中期Ⅴ期～後期Ⅰ期の資料である。

52～56は3号落ち込みから出土した資料で，このうち**52～55**は「立ち壺」およびその内部に入れられていた資料である。**52**は高坏で，口縁部の断面は「鋤先」形である。坏部に内側からの穿孔が見られる。外面の風化が著しいが，脚部に縦ミガキの痕跡が見られる。外面は丹塗りが施される。中期Ⅴ期の資料である。**53**は壺の胴部から底部にかけての破片で，胴部には外側からの穿孔が見られる。外面の胴部はハケ目ナデ消し，底部はハケ目，内面はハケ目で仕上げる。後期の資料だが，底部が凸レンズ状と判断すれば後期Ⅳ期と推測される。**54**は壺で口縁部は袋状となり，袋状部分の最大径にやや稜が入る。胴部には外側からの穿孔が見られる。外面の口縁部は横ナデ，胴部はハケ目の後にナデ仕

上げ，内面の口縁部から胴部にかけてはナデ，底部付近にはハケ目で仕上げる。外面には丹塗りを施す。後期Ⅰ期の資料である。55は壺で，「立ち壺」の本体である。全体復元ができなかったが，おそらく口縁は広口，口縁部の断面が「鋤先」形となると思われる。頸部に1条，胴部に2状の断面が「コ」の字形の突帯を巡らす。外面は風化を受けているが胴部及び底部にハケ目の痕跡が残る。内面はナデで仕上げるが風化が著しい。胴部突帯の一部に丹塗りの痕跡が残る。胴部から底部にかけての内面は特に風化が著しく，器面が剥離している。このことは「立ち壺」の状態（壺上部は欠損して飛ばされている状態）で露出されていた状態が推測される。後期Ⅱ～Ⅲ期の資料である。56は鉢で，胴部には外側からの穿孔が見られる。外面は風化，内面はナデで平滑に仕上げる。後期Ⅰ～Ⅱ期の資料と思われる。

③石器（Fig.55）

56はやや厚みの湾曲する剥片石器で，母岩側に打痕，縦方向に5回の剥離痕，一側辺に使用痕が残る。Ⅱ層からの出土である。57はナイフ形石器で，「立ち壺」から出土している。刃部背面はブランティング加工を施すが，刃部下は切断面をそのまま利用している。

④鉄器（副葬品）（Fig.55　Pho.80～82）

58は鉄剣で4号土壙墓の副葬品である。全体的に錆びて原形は不明であるが，細身の刀身であると思われる。鋒は欠損している。関は明瞭でないが，目釘があることから茎があり，柄に装着されていたことが推測される。目釘の周辺には，わずかに木質の繊維が付着しており，これが柄の痕跡である可能性が高い。59は刀子で11号土壙墓の副葬品である。鋒と基部が欠損している。60は鋳造鉄斧で濠⑦層の出土である。

⑤玉類（副葬品）（Fig.56～57）

61～63は8号甕棺墓の副葬品である。61～62は管玉で緑色頁岩製，63はガラス小玉で瑠璃色（インクブルー：酸化コバルトCoO）である。64～144は空色（スカイブルー：酸化銅Cuo）のガラス小玉18号甕棺墓の副葬である。ほぼ5㎜の同規格である。145～161は11号土壙墓の副葬品である。145は硬玉（翡翠）製の勾玉で片面から穿孔を入れる。146はガラス玉だが色は不明。風化によるものか茶色に変色している。147～161は緑色頁岩製の管玉である。162～167は緑色頁岩製の管玉で17号土壙墓の副葬品である。168はⅡ層出土の管玉で緑色の硬玉（翡翠）製である。もとはいずれかの墳墓の副葬品であったと思われ，後世の削平等で二次堆積したものと思われる。

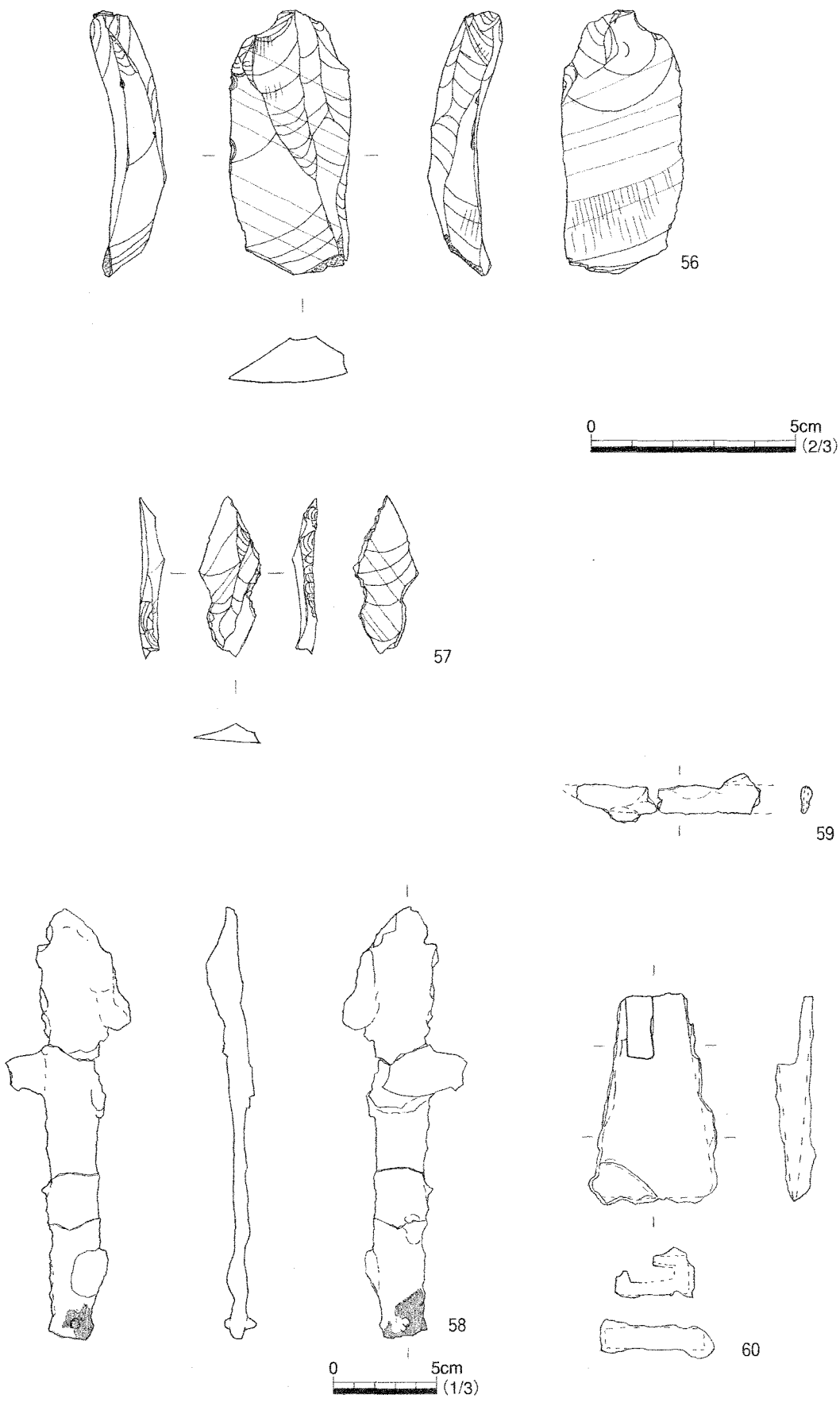


Fig. 55　原地区　石器図および鉄器図（56～57＝２／３　58～60＝１／３）

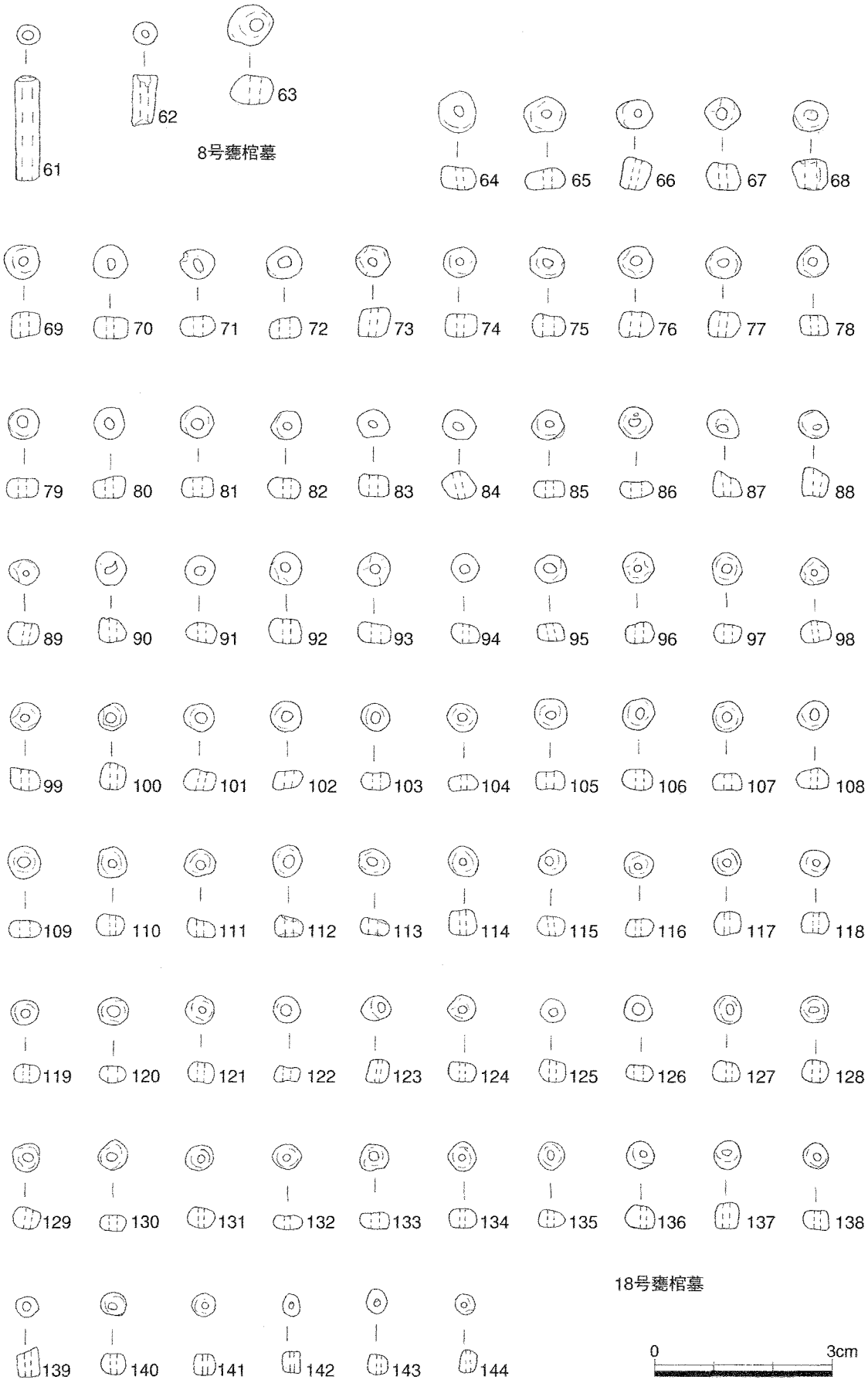


Fig. 56　原地区　甕棺墓出土玉類図（1/1）

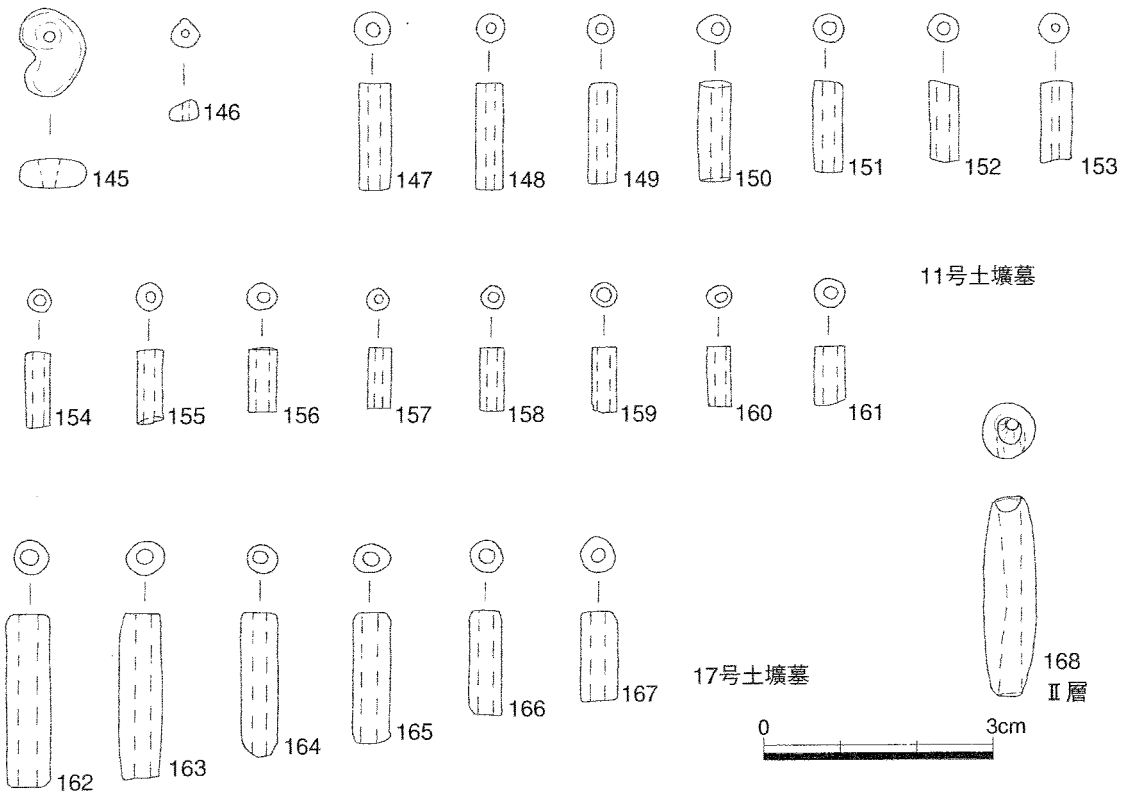


Fig. 57　原地区　土壙墓出土玉類図（1／1）

(5) 総括

①過去の調査について（Fig. 58）

今回の調査では限られた範囲から墳墓遺構が38基も確認された。このことを踏まえ，調査結果を総括するに際して，その対象範囲を広げて検討したいと思う。今回の調査地である原地区の周辺では，これまでの調査成果が多く蓄積されている。その中で墳墓遺構と濠（環濠）についてまとめてみる。

墳墓遺構

墳墓遺構を調査年度順にまとめる。平成６年度の石田町における緊急調査（以下，Ｈ６石田緊急）〔川口1995〕におけるⅢ区で石棺墓（抜き取り跡）４基が検出されている。平成８年度の範囲確認調

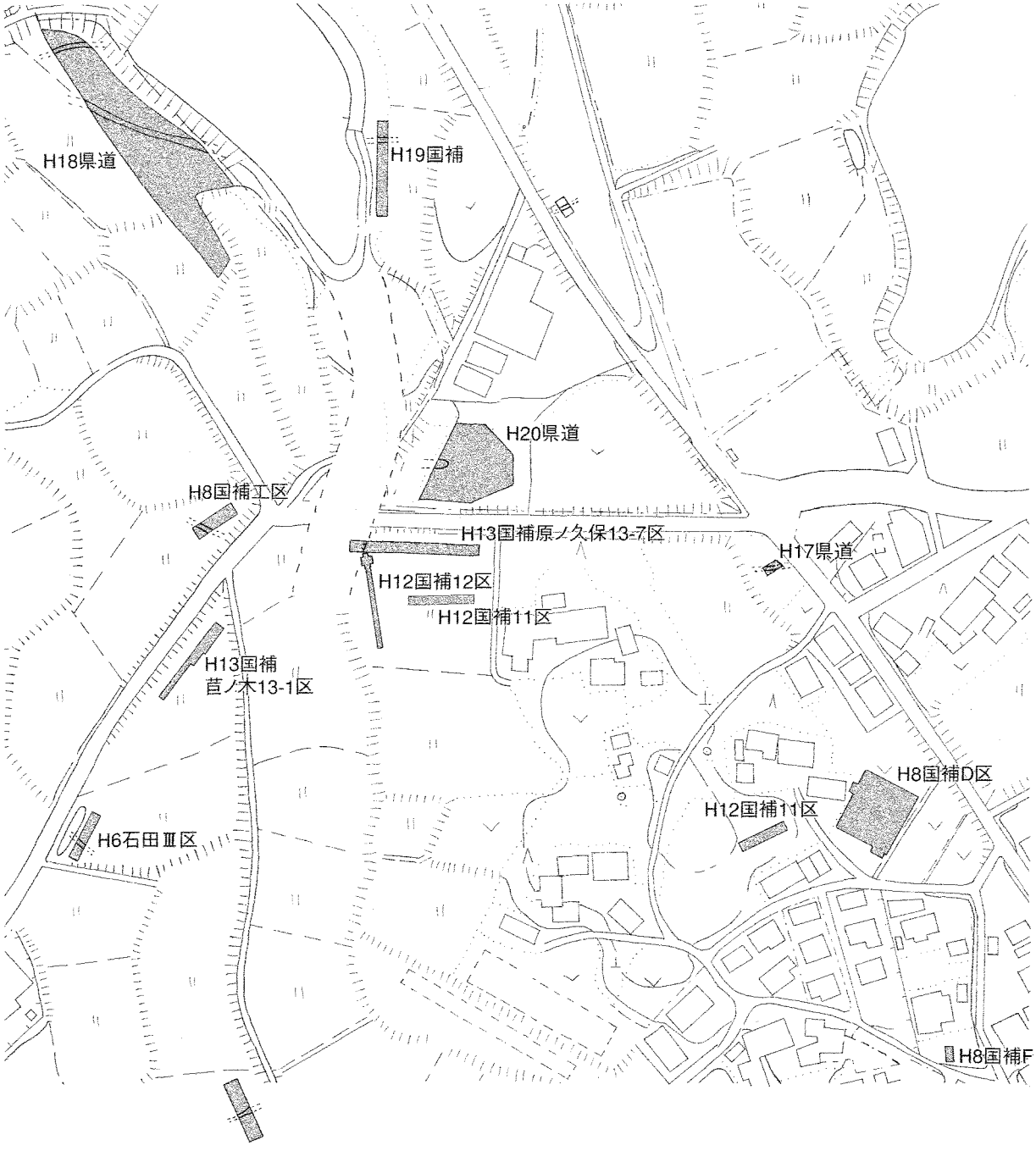
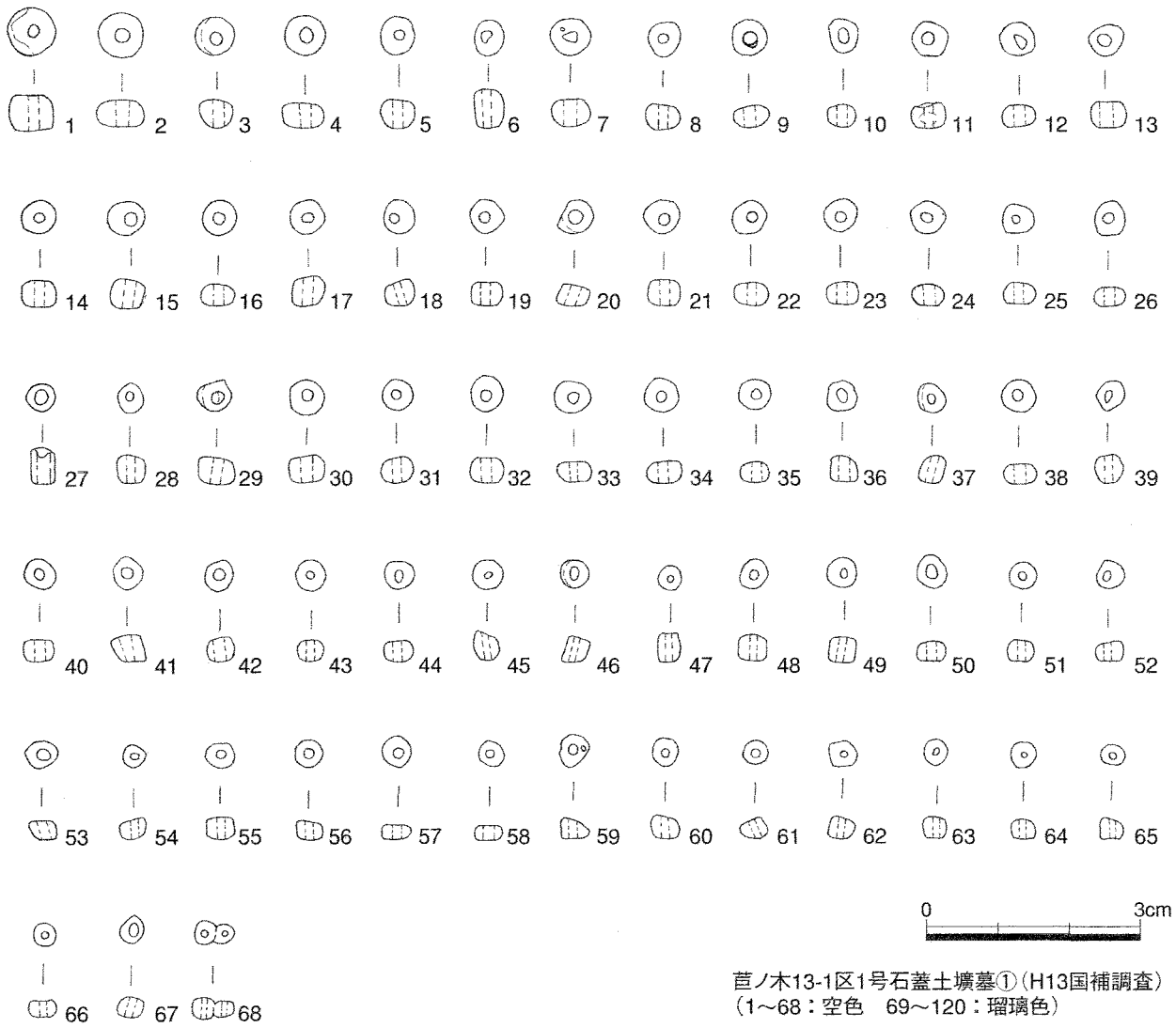


Fig. 58　原地区周辺過年度調査地位置図



苣ノ木13-1区1号石蓋土壙墓①(H13国補調査)
(1～68：空色　69～120：瑠璃色)

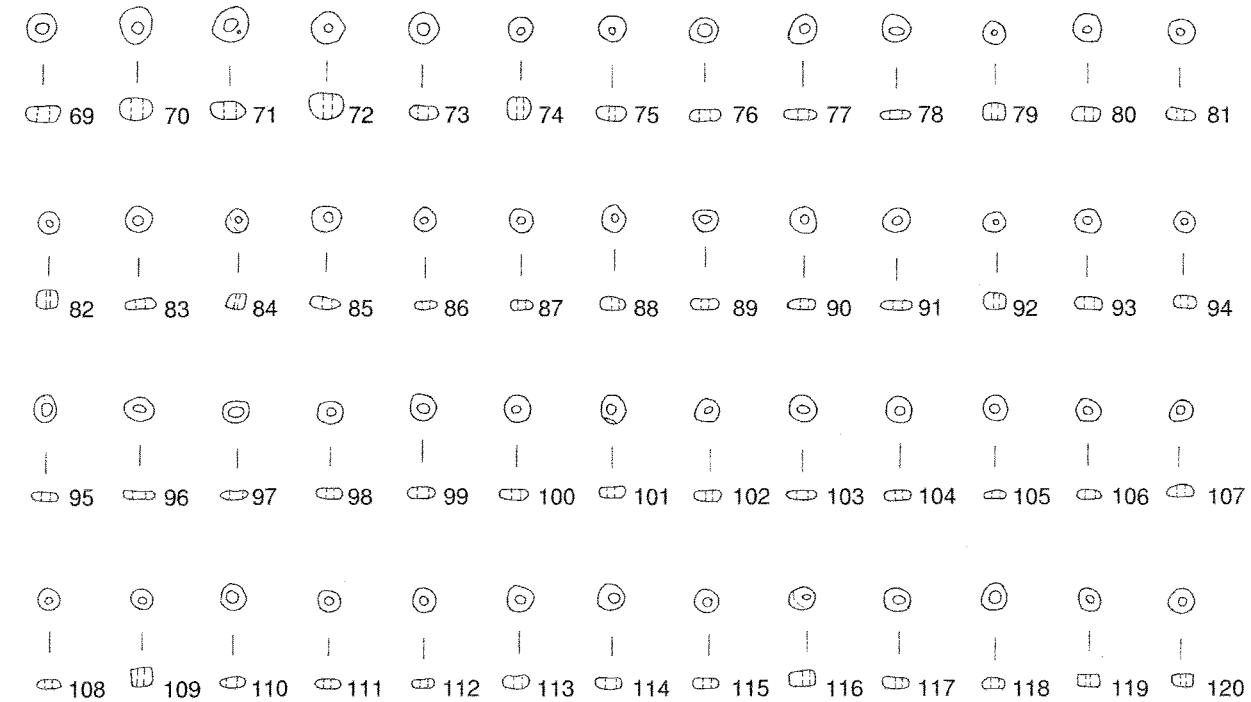


Fig. 59　平成13年度墳墓遺構出土玉類図①（1/1）

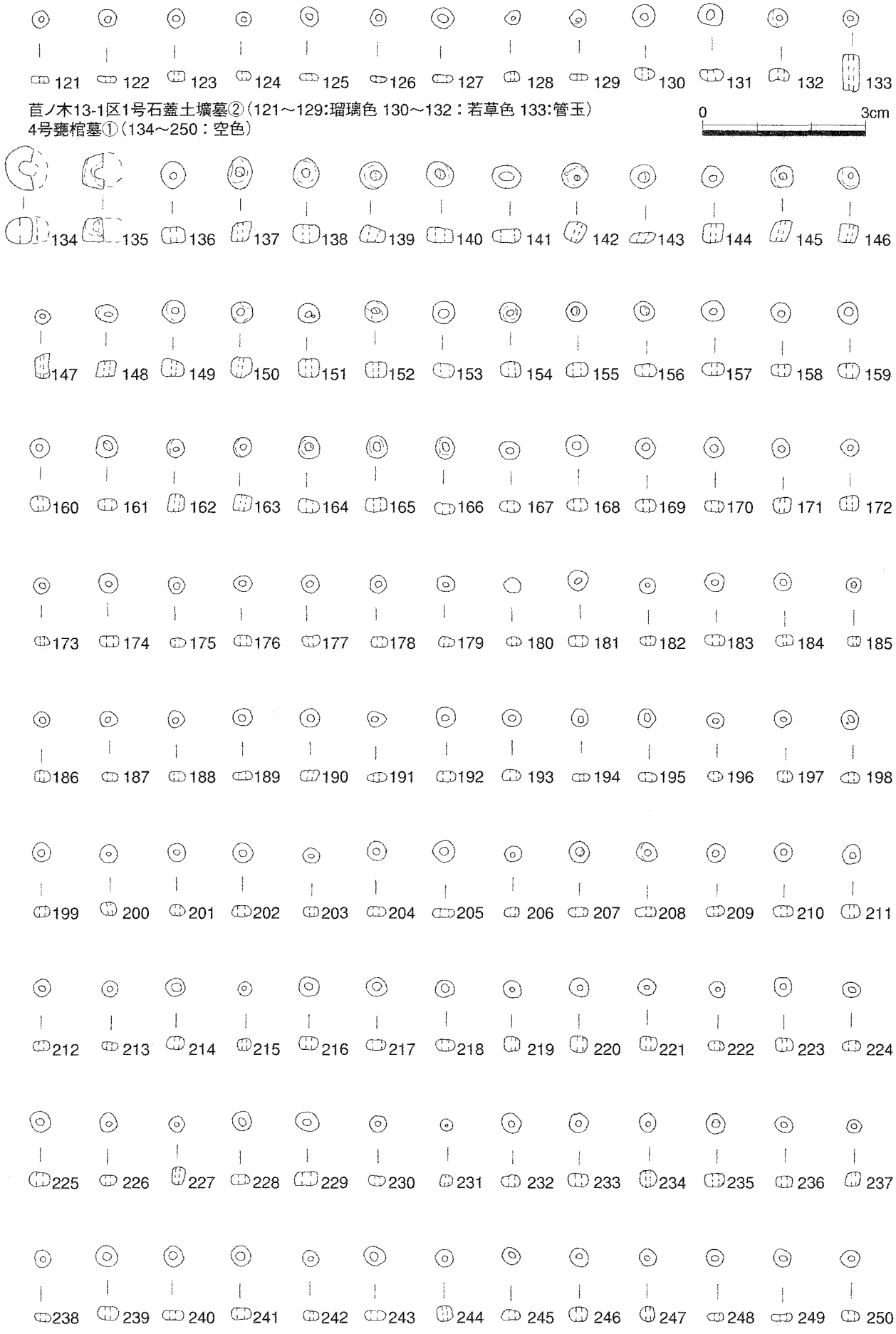


Fig. 60　平成13年度墳墓遺構出土玉類図②（1／1）

Fig. 61　平成13年度墳墓遺構出土玉類図③（1/1）

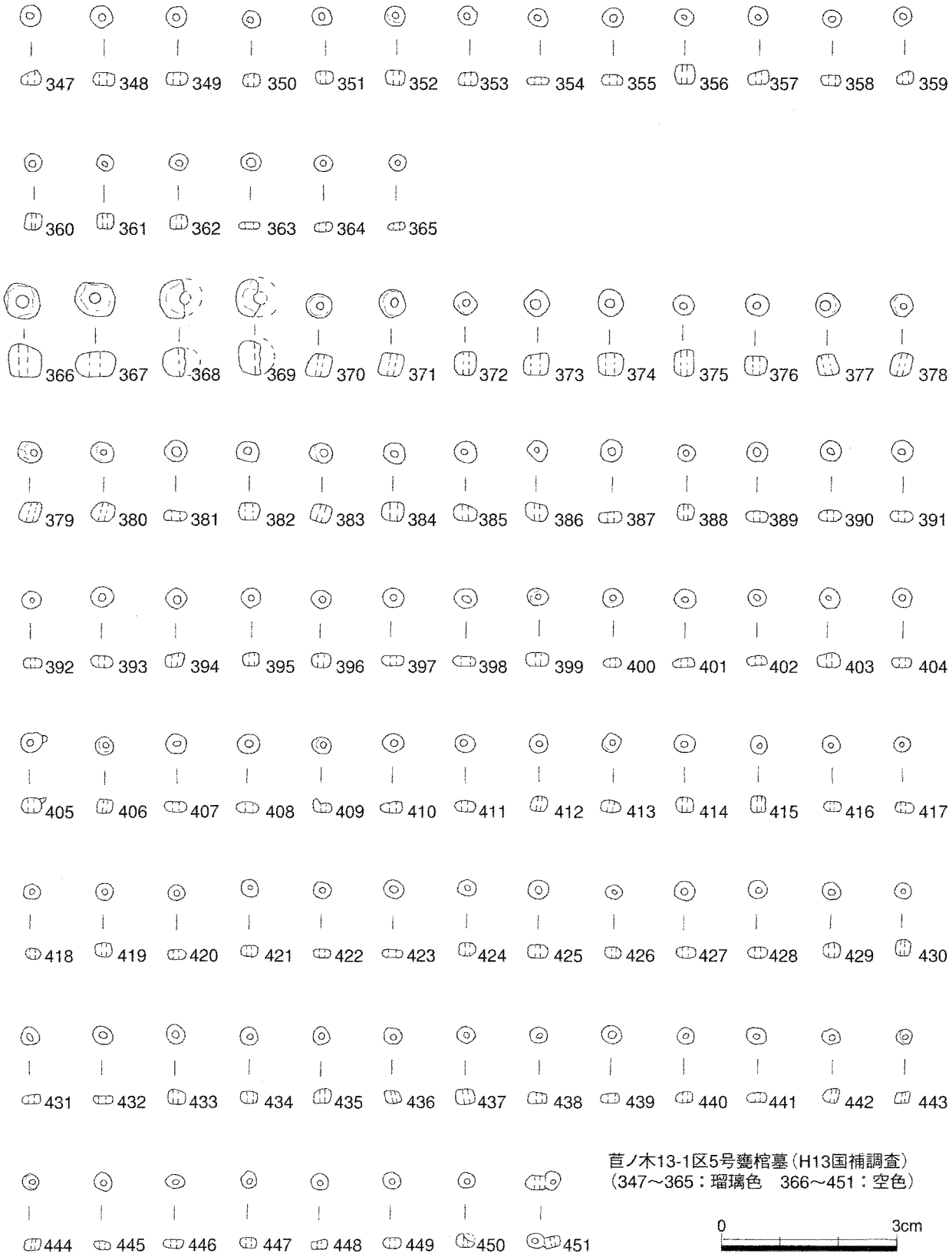


Fig. 62　平成13年度墳墓遺構出土玉類図④（1/1）

査（以下，Ｈ８範囲）〔**宮崎1999**〕における原ノ久保地区のＤ区で甕棺墓２基，土壙墓１基，石棺墓12基，石蓋土壙墓５基が，同地区のＦ区で甕棺墓１基，石棺墓１基が検出されている。平成12年度の範囲確認調査（以下，H12範囲）〔**安楽2001**〕における原ノ久保地区の11区で甕棺墓１基，同地区の10区で甕棺墓１基，同地区の12区で石棺墓１基が検出されている。平成13年度の範囲確認調査（以下，H13範囲）〔**安楽2002**〕は原ノ久保地区と苣ノ木地区の２地区で調査が行われている。そして原ノ久保13－１区で甕棺墓８基，石棺墓１基，石蓋土壙墓１基が，苣ノ木13－１区で甕棺墓５基，石棺墓１基，石蓋土壙墓１基が検出されている。

このうちＨ８範囲のＤ・Ｆ区，H12範囲の11区は「原ノ久保Ａ墓域」，H12範囲の10・12区，およびH13範囲の原ノ久保13－１区は「原ノ久保Ｃ墓域」として周知されている**註２**)。今回の調査地は，この「原ノ久保Ｃ墓域」の北に隣接する地点となる。またＨ６石田緊急のⅢ区，およびH13範囲の苣ノ木13－１区は「苣ノ木墓域」とされている。

「原ノ久保Ｃ墓域」と「苣ノ木墓域」との間には谷間があったことが，H13範囲における原ノ久保13－１区，および平成19年度の県道調査〔**本報告**〕における池田大原地区の調査で想定されている。現在は深江池となっている谷間が南へ細く狭まりながら谷間を形成するものと思われ，両「墓域」は空間的に区分けされていたと思われる。「苣ノ木墓域」の主たる構築時期は甕棺の型式より弥生時代後期前葉から後葉にかけて，「原ノ久保Ｃ墓域」は同様に弥生時代中期中葉から後期後葉にかけてと判断される。今回検出された原地区の甕棺墓は，「原ノ久保Ｃ墓域」におけるそれと構築時期と位置関係が近似している。そのため，今回調査した原地区も含めて「原ノ久保Ｃ墓域」と判断してよい。

なお，H13範囲における苣ノ木13－１区の１号石蓋土壙墓，４号甕棺墓および５号甕棺墓から出土した玉類が図面で報告されていなかったため，本報告を利用して報告することとする。

濠（環濠）遺構

濠（環濠）遺構を調査年度順にまとめる。Ｈ６石田緊急のⅢ区で「溝状遺構」として報告されている遺構１条は濠（環濠）と判断してよいと思われる。Ｈ８範囲における池田大原地区のＩ区で濠１条が確認されている。平成11年度の範囲確認調査における苣ノ木地区の３区で溝が検出され，これも濠と考える。H16県道〔**林2006**〕における原ノ久保地区Ａ調査地で「溝状遺構」と報告されている遺構１条も濠（環濠）と思われる。H18県道〔**林2007**〕における池田大原地区で濠２条が検出されている。平成19年度の国補調査（以下，H19国補）〔**川畑2008**〕における原地区で濠１条が検出されている。

このうち，濠の連続性が考えられるのはH18県道の「２号濠」と，H19国補の「濠」であるが，両遺構の間には現在「深江池」となっている谷間が存在するため，直結していたか疑問である。しかし，連続性を意識した一連の濠（環濠）であった可能性はある。また今回検出した「濠」と近いＨ８範囲１区の濠も，同様に谷間の存在で直結しないと判断される。

②平成20年度調査（本報告）原地区における墳墓遺構および濠について（Fig. 63～64　Tab. 9～10）

墳墓遺構

今回調査を行った原地区で検出された墳墓遺構について検討する。検討の際に指標としたのは遺構の構築時期と主軸である。遺構の構築時期は甕棺の型式で判断し，主軸は埋葬時に遺体の頭部が向いていたであろう方位を，方眼軸（Ｇ.Ｎ）の北から東への方位角で示した**註３**)。検討の狙いは土壙墓の構築時期を判断することである。土壙墓に含まれる資料は僅かであり，構築時期の判断は困難な状

況にある。そこで，甕棺墓における構築時期と主軸の関係性(または傾向)を援用できないかと考えた。

報告遺構名	略称	長軸(cm)	短軸(cm)	主軸角度(G.N-G.E)	時期								副葬品・備考
					中期			後期					
					中葉	後葉	終末	初頭	前葉	中葉	後葉	終末	
1号甕棺墓	K1	78	61	170 南					←→	→			
2号甕棺墓	K2	160	86	87 東					←→				
3号甕棺墓	K3	100	40	57 北東					←→				濠に切られる
4号甕棺墓	K4	不明	不明	不明 東or西				←→					
5号甕棺墓	K5	96	66	81 東						←→			
6号甕棺墓	K6	80	55	62 北東					←→				
7号甕棺墓	K7	86	49	23 北					←→				
8号甕棺墓	K8	79	60	272 西					←→				ガラス小玉1・管玉2
9号甕棺墓	K9	65	46	50 北東	←→								
10号甕棺墓	K10	不明	不明	113 東		←→							
11号甕棺墓	K11	83	50	72 東					←→				
12号甕棺墓	K12	130	65	48 北東					←→	→			
13号甕棺墓	K13	75	48	98 東				←→					
14号甕棺墓	K14	116	57	104 東					←→				
15号甕棺墓	K15	95	65	82 東					←→				
16号甕棺墓	K16	80	46	45 北東					←→				
17号甕棺墓	K17	92	65	111 東					←→				
18号甕棺墓	K18	68	39	132 南東					←→	→			ガラス小玉83

Tab. 8　甕棺墓情報一覧表

Tab. 8 の通り，甕棺墓の多くが弥生時代後期初頭から前葉に構築されていることが分かるが，構築時期の違いが主軸の傾向に反映されているとは思えない。おおよそ東向きに主軸がとられていると判断される程度で，かなりのばらつきが見られる。

次に，土壙墓の主軸について見てみる。**Tab. 9** の通り，土壙墓遺構は主軸に東向き，北東向き，南東向きの３つの傾向があることが読みとれる。

報告遺構名	略称	長軸(cm)	短軸(cm)	主軸角度(G.N-G.E)	副葬品
1号土壙墓	D1	120	42	42 北東	
2号土壙墓	D2	165	56	41 北東	
3号土壙墓	D3	160	62	91 東	
4号土壙墓	D4	254	101	87 東	鉄剣1
5号土壙墓	D5	110	47	128 南東	
6号土壙墓	D6	178	77	88 東	
7号土壙墓	D7	70	40	138 南東	
8号土壙墓	D8	205	35	85 東	
9号土壙墓	D9	135	55	49 北東	
10号土壙墓	D10	90	48	87 東	土器(後期Ⅱ期)
11号土壙墓	D11	185	66	81 東	勾玉1　管玉15　ガラス小玉1　鉄製刀子1　土器(中期Ⅳ期)
12号土壙墓	D12	197	85	109 南東	
13号土壙墓	D13	185	51	146 南東	土器(中期または無文系土器)
14号土壙墓	D14	126	53	76 東	
15号土壙墓	D15	122	60	86 東	
16号土壙墓	D16	180	52	89 東	
17号土壙墓	D17	212	75	111 南東	管玉6
18号土壙墓	D18	136	51	111 南東	
19号土壙墓	D19	140	45	58 北東	

Tab. 9　土壙墓情報一覧表

甕棺墓における構築時期と主軸の関連性（傾向）が読みとれないため，土壙墓の主軸傾向から構築時期は推測できない。また10号，11号，13号土壙墓の覆土から時期判断の可能な資料が得られたが，これから全体を検討することも難しい。例えば，10号土壙墓から出土する土器片は後期Ⅱ期，11号土壙墓から出土する土器片は中期Ⅳ期と型式的に判断されて相対的な時期差を想定できるが，主軸はともに同じく東で違いがない。

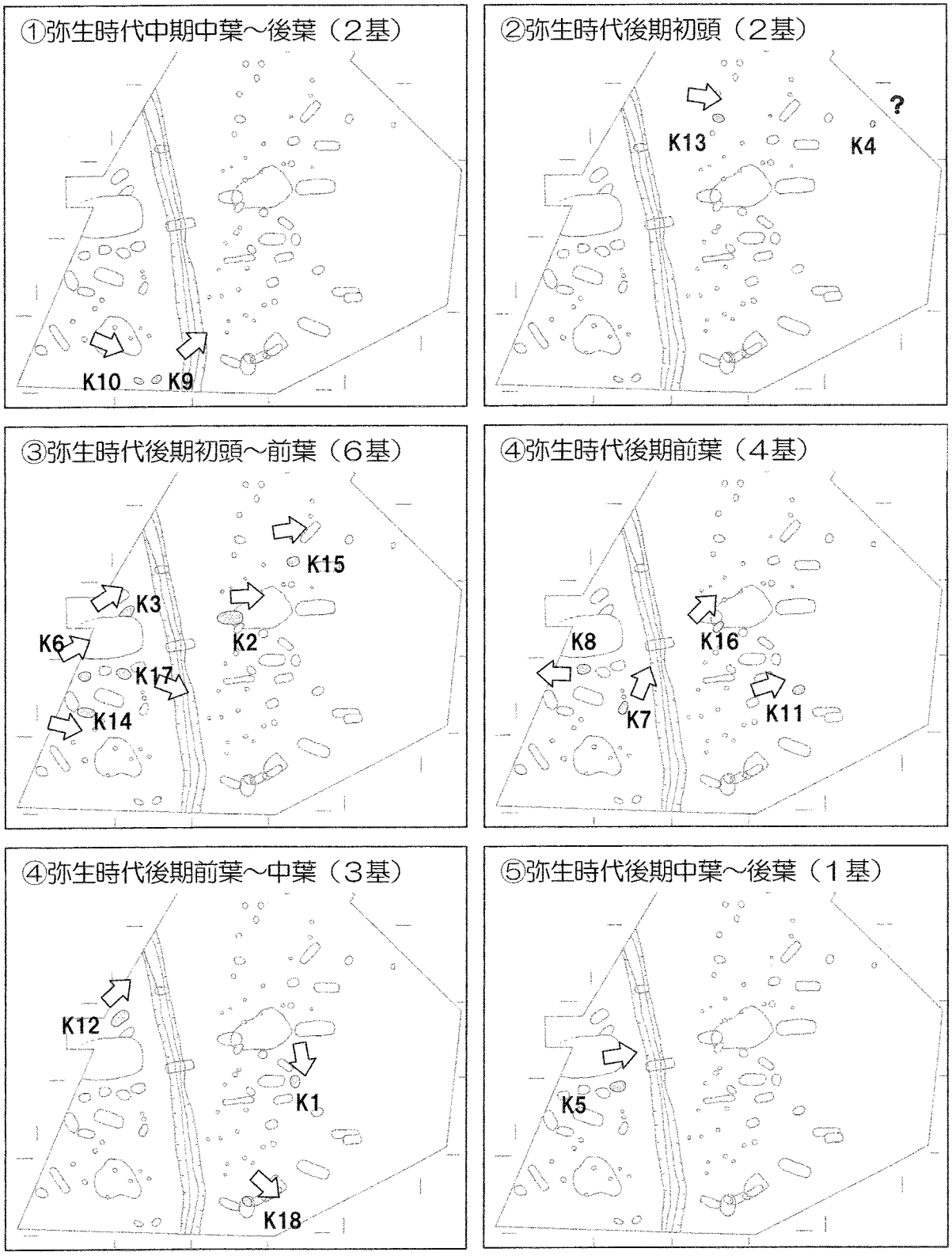


Fig. 63　甕棺墓時期別変遷図

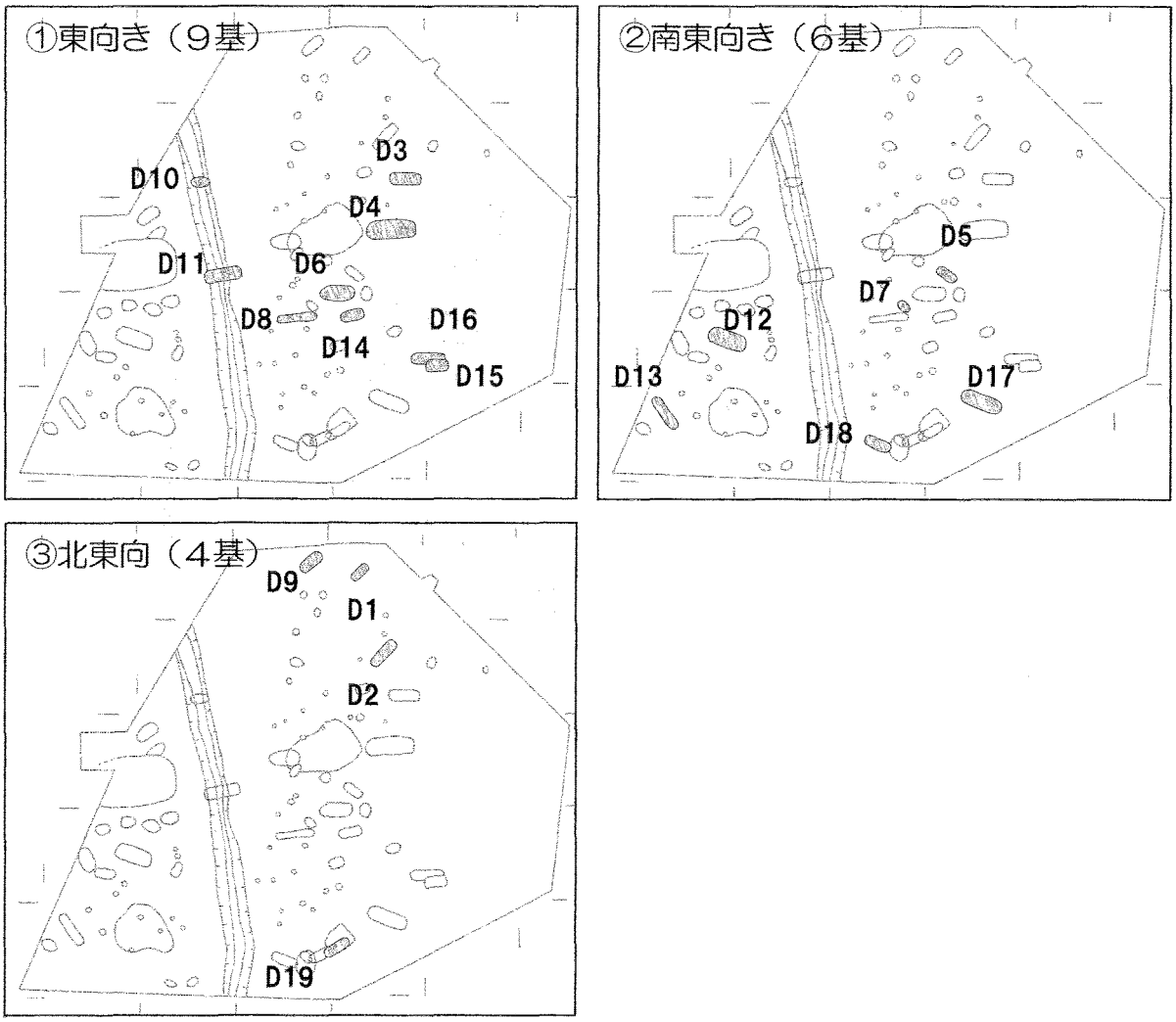


Fig. 64　土壙墓主軸別図

報告遺構名	略称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主軸角度 G.N-G.E	副葬品
1号箱式石棺墓	S1	81	51	68　北東	

Tab. 10　箱式石棺墓情報一覧表

報告番号	調査地区　遺構　層位　色調番号(外)　色調番号(内)　胎土　器種 調整手法　備考
1	原　1号甕棺墓　－　5YR6/4にぶい橙　5YR4/1褐灰　長石・石英・角閃石　壺 外面:平滑ナデ　内面:ナデ
2	原　1号甕棺墓　－　2.5YR5/6明赤褐　2.5YR6/6橙　長石・石英・角閃石　壺 外面　口縁部・突帯:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
3	原　1号甕棺墓　－　2.5YR6/6橙　2.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　鉢 外面　胴部:ナデ　底部:ハケ目　内面:ナデ　外面:丹塗
4	原　2号甕棺墓　－　5YR5/8明赤褐　5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母・角閃石　壺 口縁部下面に線刻
5	原　2号甕棺墓　－　7.5YR6/4にぶい橙　5YR5/4にぶい赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部・突帯:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面　頸部:ハケ目　胴部:ナデ
6	原　3号甕棺墓　－　2.5YR5/8明赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　肩部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ
7	原　3号甕棺墓　－　2.5YR4/8赤褐　5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　突帯:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ　突帯が一部3重となる(基本は2条)
8	原　4号甕棺墓　－　10YR6/4にぶい黄橙　10YR6/4にぶい黄橙　長石・石英　甕 外面:ナデ　内面:風化により調整不明
9	原　5号甕棺　－　2.5YR6/6橙　5YR5/4にぶい赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ハケ目
10	原　5号甕棺　－　10YR7/6明黄橙　5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部・突帯:横ナデ　頸～胴部:ハケ目→ナデ消し(一部)　内面　頸部:ハケ目　胴部:ナデ
11	原　6郷甕棺墓　－　10YR7/2灰白　10YR7/2灰白　長石・石英　甕 外面:ナデ　内面:ナデ
12	原　6郷甕棺墓　－　2.5YR4/6赤褐　10YR5/8黄褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　突帯:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ
13	原　7号甕棺墓　－　2.5YR5/8明赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面:ハケ目　内面:ナデ
14	原　7号甕棺墓　－　5YR6/8橙　10YR6/3にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 外面:ハケ目　内面:ナデ
15	原　8号甕棺墓　－　7.5YR6/6橙　10YR6/6明黄橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し・ナデ　内面:平滑ナデ
16	原　9号甕棺墓　－　2.5YR6/8橙　5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
17	原　9号甕棺墓　－　10R5/8赤　10R5/8赤　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
18	原　10号甕棺墓　－　2.5YR5/6明赤褐　5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ
19	原　10号甕棺墓　－　2.5YR4/6赤褐　5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
20	原　11号甕棺墓　－　2.5YR6/6橙　10R5/4赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
21	原　11号甕棺墓　－　10R5/4赤褐　2.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ　豊前系
22	原　12号甕棺墓　－　7.5YR6/6橙　7.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・角閃石　壺 外面　口縁部・突帯:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
23	原　12号甕棺墓　－　7.5YR7/4にぶい橙　7.5YR7/4にぶい橙　長石・石英　壺 外面　突帯:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ
24	原　13号甕棺墓　－　2.5YR6/4にぶい橙　2.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ　胴部に穿孔
25	原　13号甕棺墓　－　10R4/8赤　7.5YR7/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目→ミガキ　内面:ナデ　丹塗　胴部に穿孔
26	原　14号甕棺墓　－　5YR6/6橙　7.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
27	原　14号甕棺墓　－　2.5YR5/8明赤褐　2.5YR4/6赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
28	原　15号甕棺墓　－　5YR5/6明赤褐　5YR5/6明赤褐　長石・石英　鉢 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
29	原　15号甕棺墓　－　2.5YR5/8明赤褐　5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　突帯:横ナデ　胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ
30	原　16号甕棺墓　－　2.5YR4/8赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
31	原　16号甕棺墓　－　2.5YR5/6明赤褐　2.5YR4/6赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
32	原　17号甕棺墓　－　5YR6/4にぶい橙　5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ　胴部に穿孔
33	原　17号甕棺墓　－　10R4/8赤　10R5/8赤　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ　胴部に穿孔
34	原　18号甕棺墓　－　2.5YR5/4にぶい赤褐　2.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ　底部に穿孔
35	原　18号甕棺墓　－　10R5/6赤　5YR4/1褐灰　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ　底部に穿孔
36	原　撹乱層　－　10YR7/4にぶい黄橙　10YR7/3にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ナデ　内面:ナデ
37	原　10号土壙墓　－　2.5YR6/6橙　2.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
38	原　11号土壙墓　－　7.5YR6/6橙　7.5YR5/6橙　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸部:ナデ　内面:ナデ

Tab. 11　平成20年度調査　土器観察表①

報告番号	調査地区　遺構　層位　色調番号(外)　色調番号(内)　胎土　器種 調整手法　備考
39	原　13号土壙墓　－　2.5YR4/8赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面:平滑ナデ　内面:ケズリ状板ナデ　擬朝鮮半島系無文土器
40	原　濠　④層　5YR6/8橙　5YR7/8橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:平滑ナデ
41	原　濠　④層　5YR6/8橙　5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:ナデ
42	原　濠　⑤層　5YR7/8明赤褐　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸部:ハケ目　内面:ナデ　外面:丹塗　内面:一部に丹塗
43	原　濠　⑧層　7.5YR6/8橙　5YR6/8橙　長石・石英・金雲母　甕 外面:風化のため調整不明　内面:ナデ
44	原　濠　⑧層　5YR6/8橙　7.5YR6/8橙　長石・石英・金雲母　甕 外面　口縁部:横ナデ　胴部:ハケ目　内面:平滑ナデ
45	原　1号埋納土坑　－　7.5YR6/4にぶい橙　7.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　高坏 口縁部:横ナデ　坏内部:ナデ
46	原　2号埋納土坑　－　7.5YR6/4にぶい橙　2.5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 口縁部・突帯:横ナデ　頸～胴部:平滑ナデ　内面:ナデ
47	原　2号埋納土坑　－　2.5YR6/8橙　2.5YR5/8明赤褐　長石・石英・金雲母　鉢 外面:縦ミガキ痕　内面　口縁部:横ミガキ痕　胴部:ナデ　筒形
48	原　1号落ち込み　－　5YR6/6橙　10YR7/6明黄褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸部:ハケ目→ナデ消し　胴部:平滑ナデ　内面:ナデ　底部に穿孔
49	原　1号落ち込み　－　7.5YR6/4にぶい橙　7.5YR6/4にぶい橙　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸～胴部:平滑ナデ　内面:ナデ
50	原　1号落ち込み　－　2.5YR6/6橙　2.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸部:平滑ナデ　内面:平滑ナデ
51	原　1号落ち込み　－　5YR6/6橙　10YR6/4にぶい黄橙　長石・石英・金雲母　壺 風化のため調整不明
52	原　3号落ち込み　立ち蛸　5YR6/6橙　7.5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　高坏 外面　脚部:縦ミガキ　内面　坏部:平滑ナデ　脚部:シボリ　外面に丹塗　坏部に穿孔
53	原　3号落ち込み　立ち蛸　5YR6/6橙　5YR6/6橙　長石・石英・金雲母　壺 外面:ハケ目→ナデ消し　内面:ハケ目　胴部に穿孔
54	原　3号落ち込み　立ち蛸　5YR6/6橙　5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　壺 外面　口縁部:横ナデ　頸～胴部:ハケ目→ナデ消し　内面:ナデ　胴部に穿孔
55	原　3号落ち込み　立ち壺　10YR7/3にぶい黄橙　10YR7/3にぶい黄橙　長石・石英・角閃石　壺 外面:ハケ目(一部)　内面:風化により調整不明
56	原　3号落ち込み　－　5YR6/6橙　2.5YR5/6明赤褐　長石・石英・金雲母　鉢 外面:風化のため調整不明　内面:平滑ナデ　胴部に穿孔

Tab. 12　平成20年度調査　土器観察表②

報告番号	調査地区	遺構	層位	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	器種	石材	備考
56	原	－	Ⅱ層	61	30	13	25.8	剥片石器	黒曜石	腰岳産
57	原	立ち壺	－	41	15	5	2.3	ナイフ形石器	黒曜石	

Tab. 13　平成20年度調査　石器観察表

報告番号	調査地区	遺構	層位	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	器種	備考
58	原	4号土壙墓	－	214	45	16	105	鉄剣	目釘と木柄の痕跡
59	原	11号土壙墓	－	90	20	6	11.7	刀子	
60	原	濠	⑦層	106	63	17	190.3	鋳造鉄斧	

Tab. 14　平成20年度調査　鉄器観察表

【註】

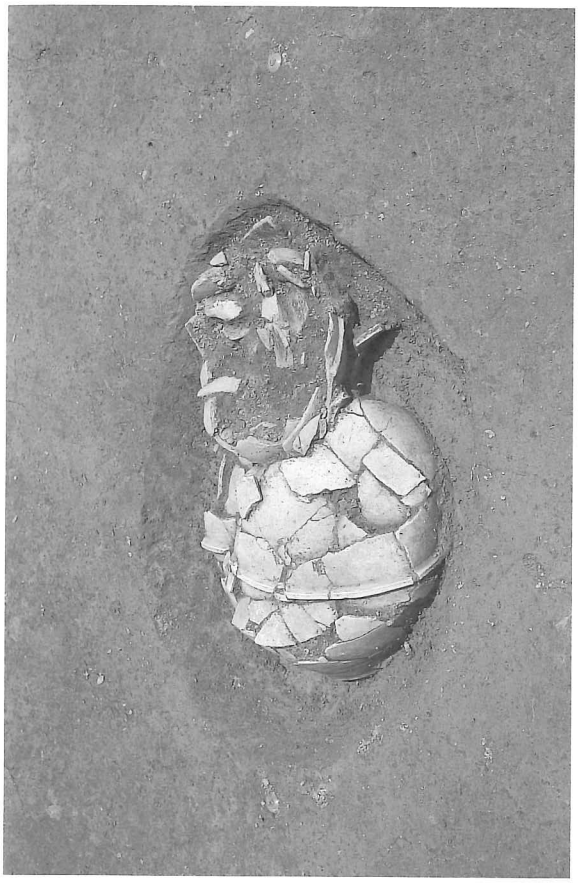
1．宮崎編年では以下のように型式分類されている（以下，弥生時代）。前期Ⅰ期（＝前期後葉：板付Ⅱｂ式古段階），前期Ⅱ期（＝前期終末：板付Ⅱｂ新段階），中期Ⅰ期（＝中期初頭：城ノ越式），中期Ⅱ期（＝中期前葉：須玖Ⅰ式古段階），中期Ⅲ期（＝中期中葉：須玖Ⅰ式新段階），中期Ⅳ期（中期後葉：須玖Ⅱ式古段階），中期Ⅴ期（中期終末：須玖Ⅱ式新段階），後期Ⅰ期（＝後期初頭：高三潴式古段階），後期Ⅱ期（＝後期前葉：高三潴式新段階），後期Ⅲ期（＝後期中葉：下大隈式古段階），後期Ⅳ期（＝後期後葉：下大隈式新段階），後期Ⅴ期（＝後期終末：西新式古段階）。

2．「原ノ久保Ｂ墓域」は，昭和52年度の長崎県教育委員会による調査で，小川川の南側丘陵上で確認された甕棺墓２基を中心に設定されている（安楽・藤田1978）。この甕棺墓は弥生時代終末期（西新式）の資料で，「原ノ久保Ａ墓域」と時期が異なる。

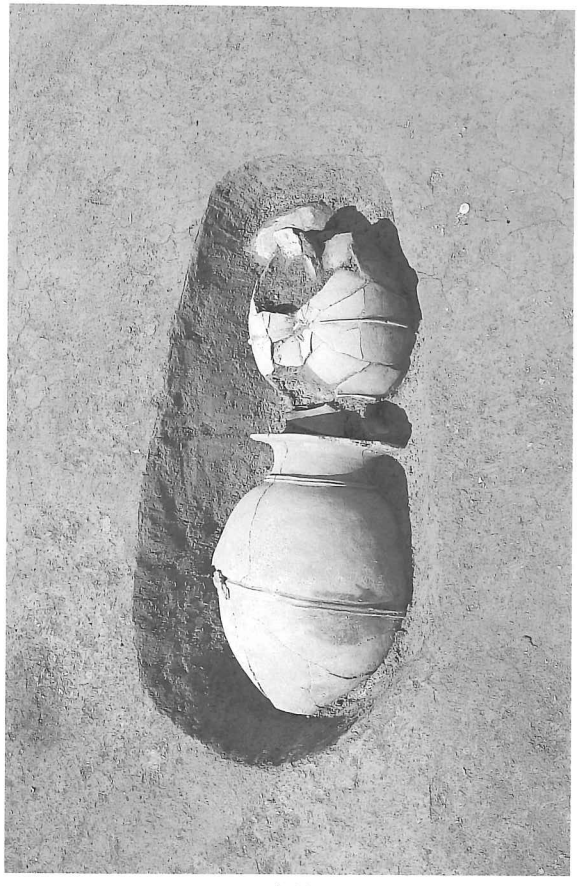
3．方眼北と真北の誤差は極僅かであるため，特に修正は必要ないと判断した。

【参考文献】

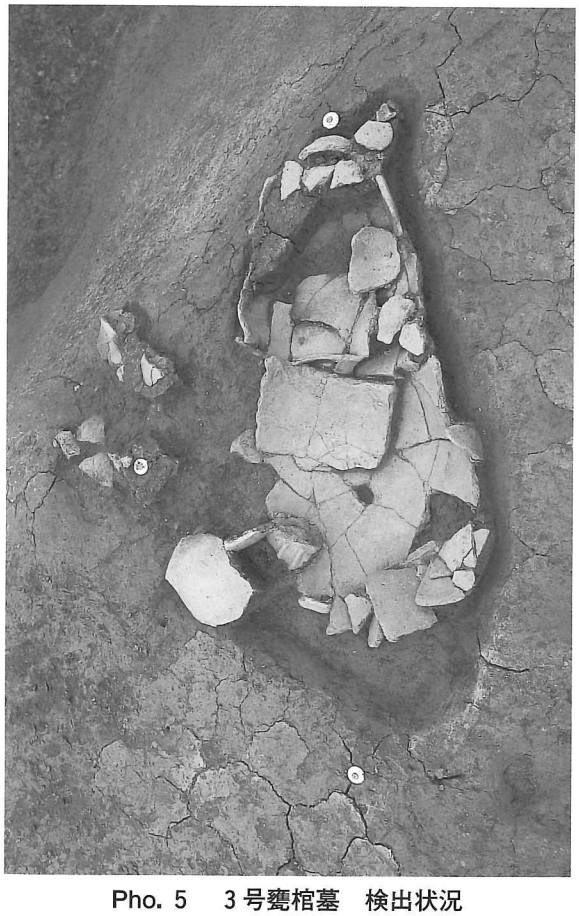
小田富士雄（1985）『九州古代文化の形成（上）弥生・古墳時代』学生社
安楽　勉・藤田和裕（1978）『原の辻遺跡』（長崎県文化財調査報告書第37集）長崎県教育委員会
森田　勉・横田賢次郎（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』
川口洋平（1995）『原の辻遺跡Ⅱ』（石田町文化財保護協会調査報告書２集）長崎県石田町文化財保護協会
山下英明・川口洋平（1997）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書１集）長崎県教育委員会
宮崎貴夫（1999）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書11集）長崎県教育委員会
安楽　勉（2001）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書22集）長崎県教育委員会
安楽　勉（2002）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書25集）長崎県教育委員会
福田一志・小玉友裕（2004）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書27集）長崎県教育委員会
橋口達也（2005）『甕棺と弥生時代年代論』（雄山閣）
林　隆広（2005）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書29集）長崎県教育委員会
宮崎貴夫（2005）「Ⅴ遺物１．土器」『原の辻遺跡総集編Ⅰ』（長崎県教育委員会）
林　隆広（2006）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書32集）長崎県教育委員会
林　隆広（2007）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書37集）長崎県教育委員会



Pho. 3　1号甕棺墓　検出状況

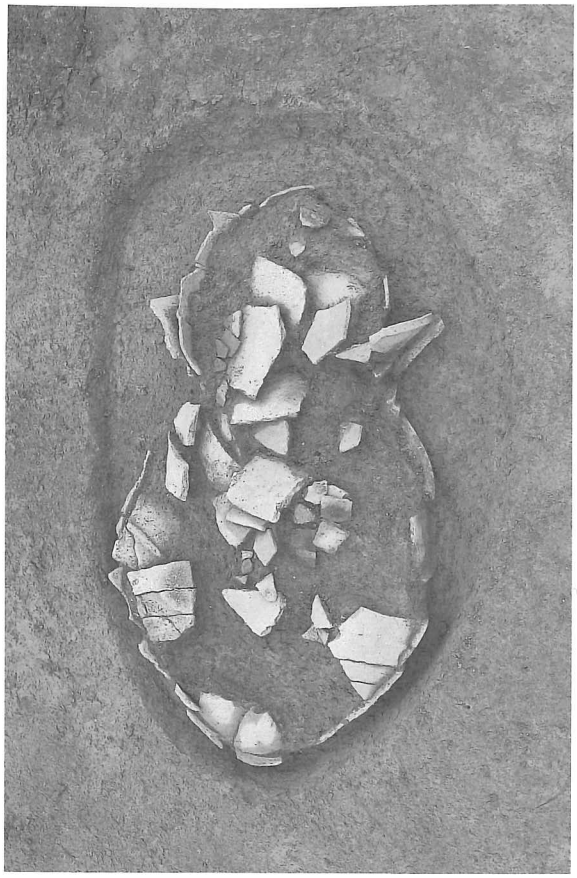


Pho. 4　2号甕棺墓　検出状況



Pho. 5　3号甕棺墓　検出状況

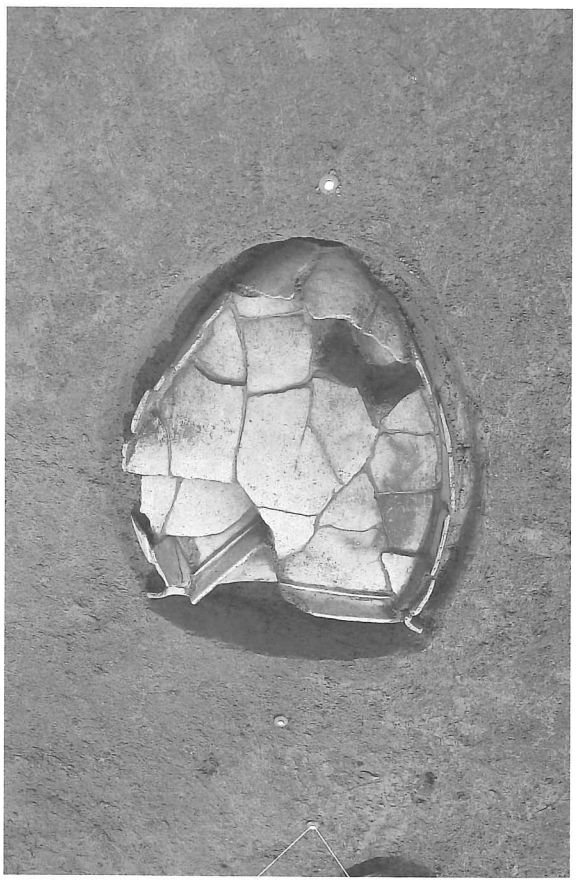
Pho. 6　4号甕棺墓　検出状況



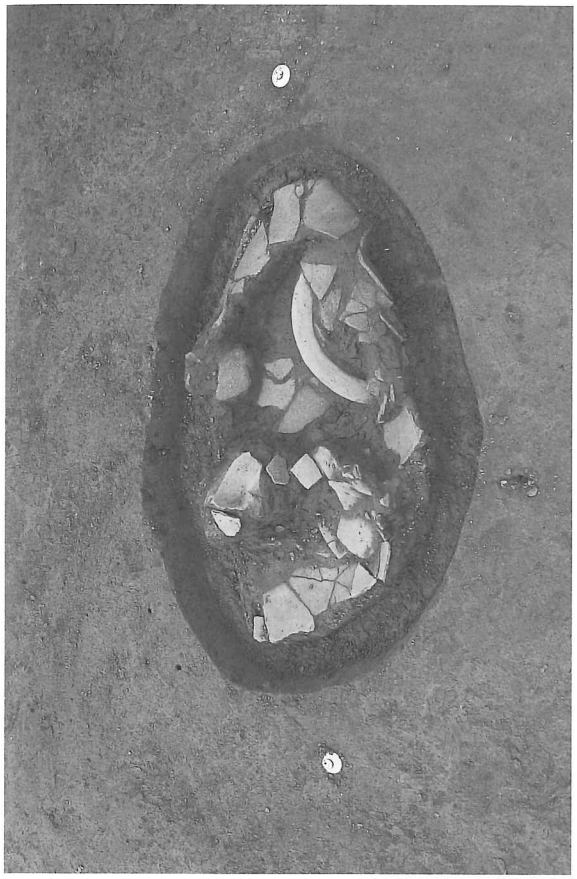
Pho. 7　5 号甕棺墓　検出状況

Pho. 8　6 号甕棺墓　検出状況

Pho. 9　7 号甕棺墓　検出状況

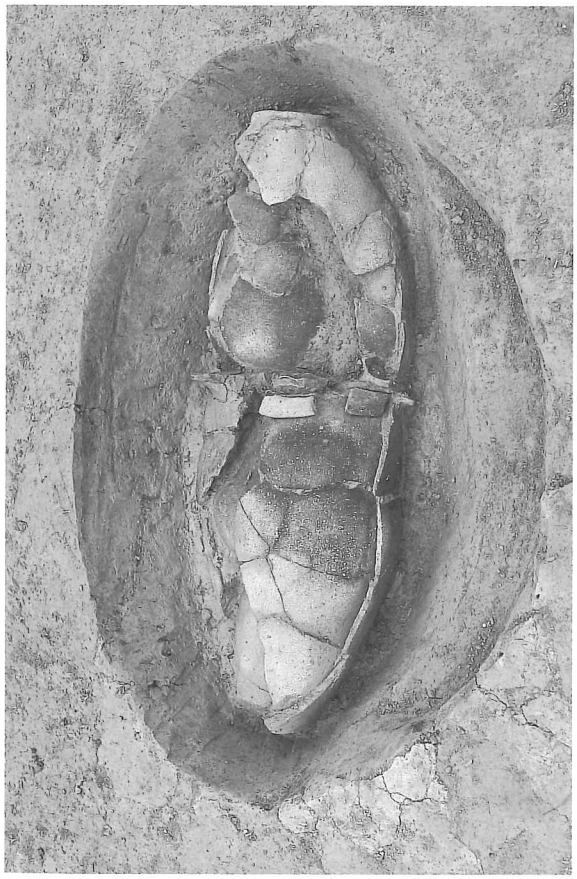


Pho. 10　8 号甕棺墓　検出状況



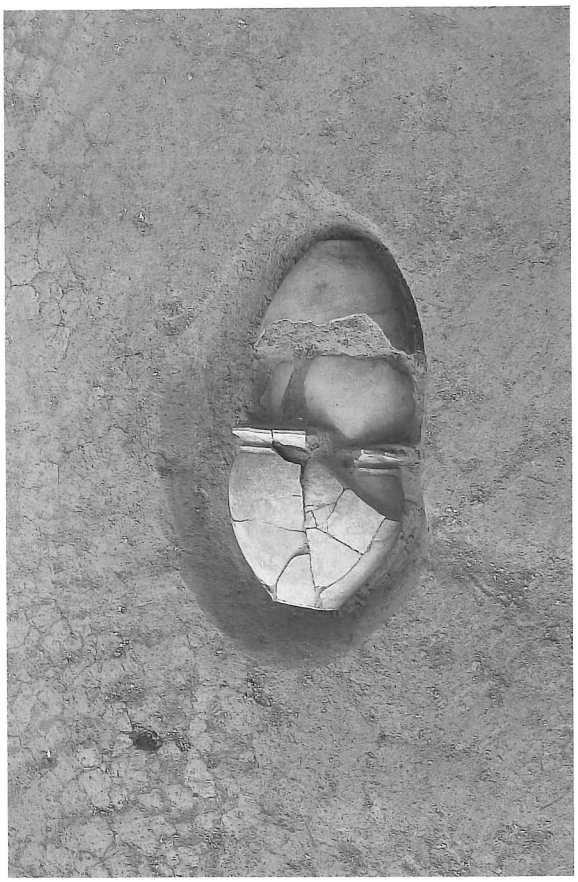
Pho. 11　9 号甕棺墓　検出状況

Pho. 12　10号甕棺墓　検出状況

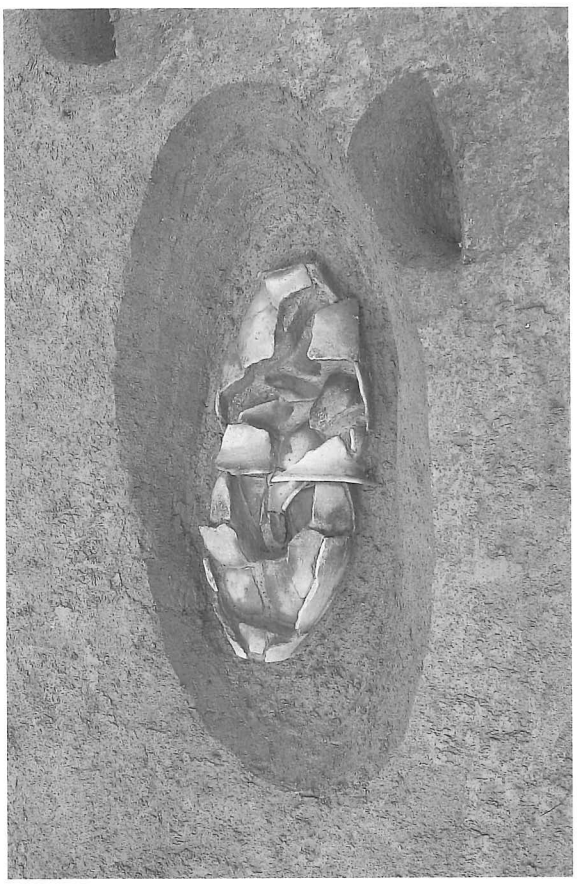


Pho. 13　11号甕棺墓　検出状況

Pho. 14　12号甕棺墓　検出状況

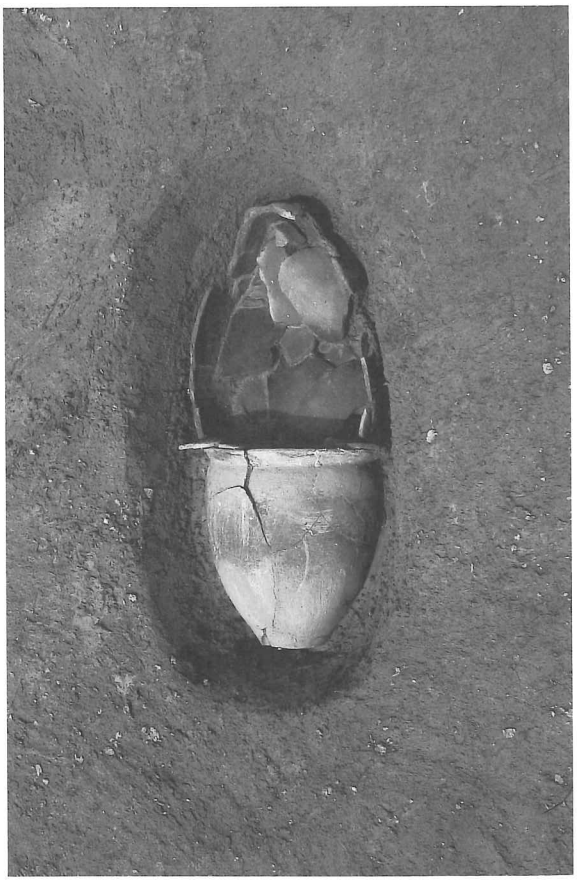


Pho. 15　13号甕棺墓　検出状況



Pho. 16　14号甕棺墓　検出状況

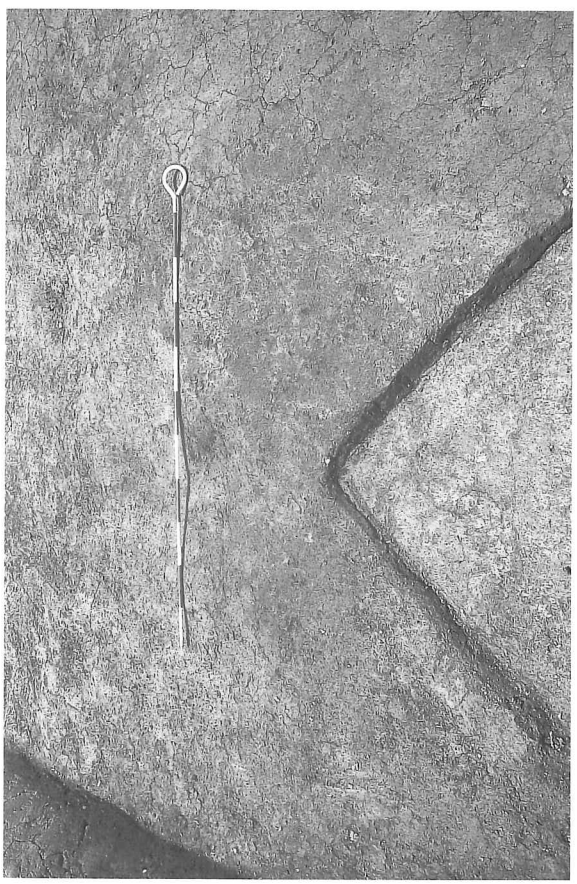
Pho. 17　15号甕棺墓　検出状況



Pho. 18　16号甕棺墓　検出状況

Pho. 19　17号甕棺墓　検出状況

Pho. 20　18号甕棺墓　検出状況



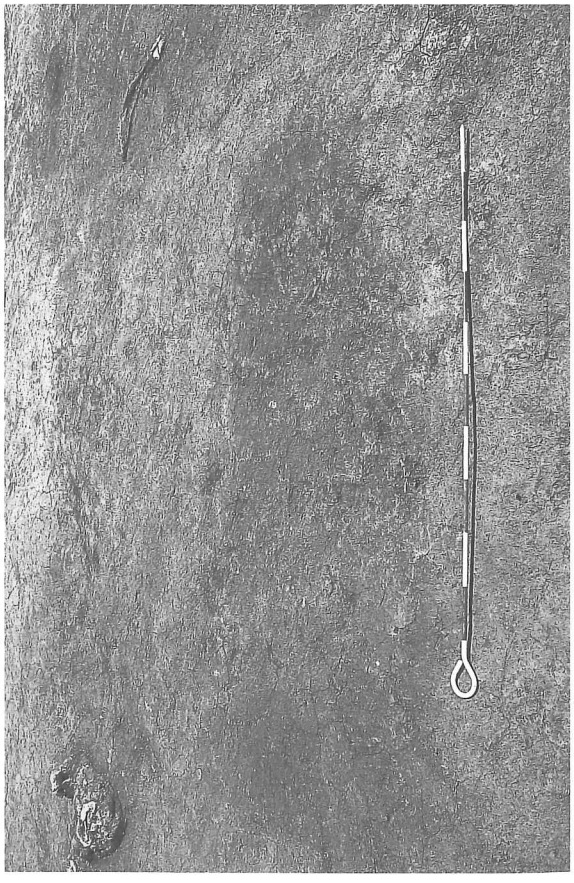
Pho. 21　1 号土壙墓　検出状況

Pho. 22　2 号土壙墓　検出状況

Pho. 23　3 号土壙墓　検出状況

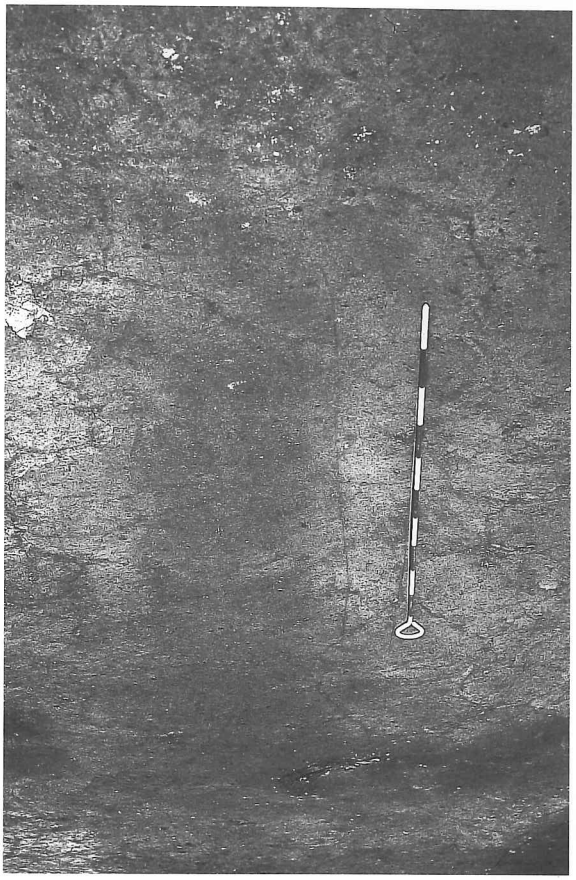
Pho. 24　4 号土壙墓　検出状況

Pho. 25　5 号土壙墓　検出状況

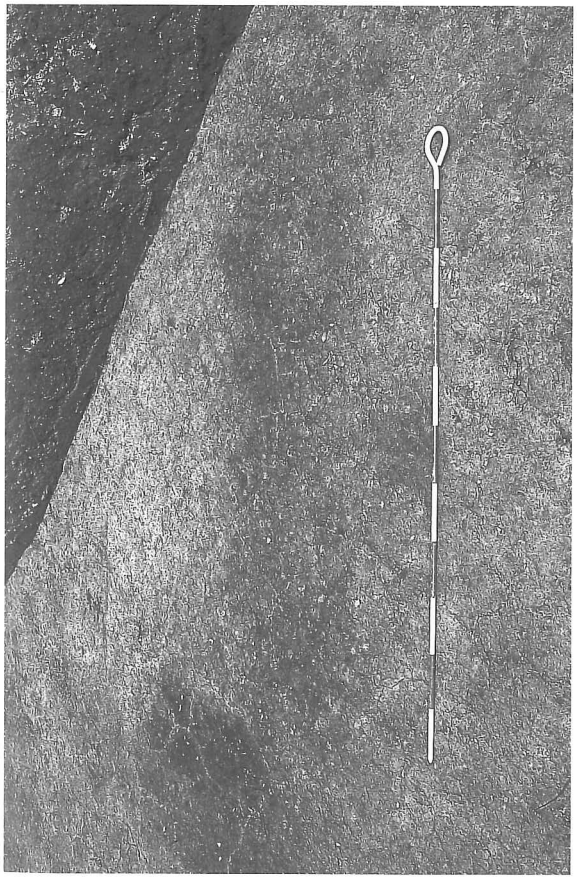


Pho. 26　6 号土壙墓　検出状況

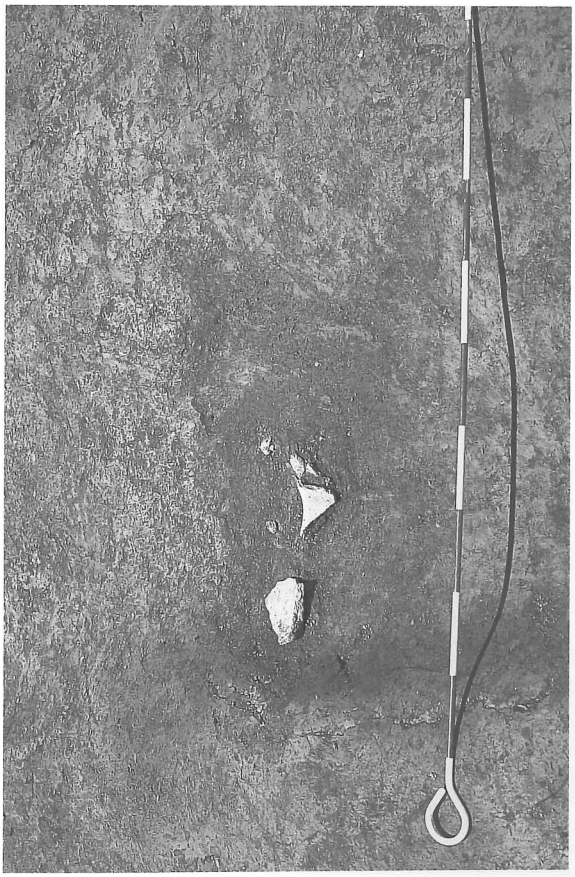
Pho. 27　7 号土壙墓　検出状況



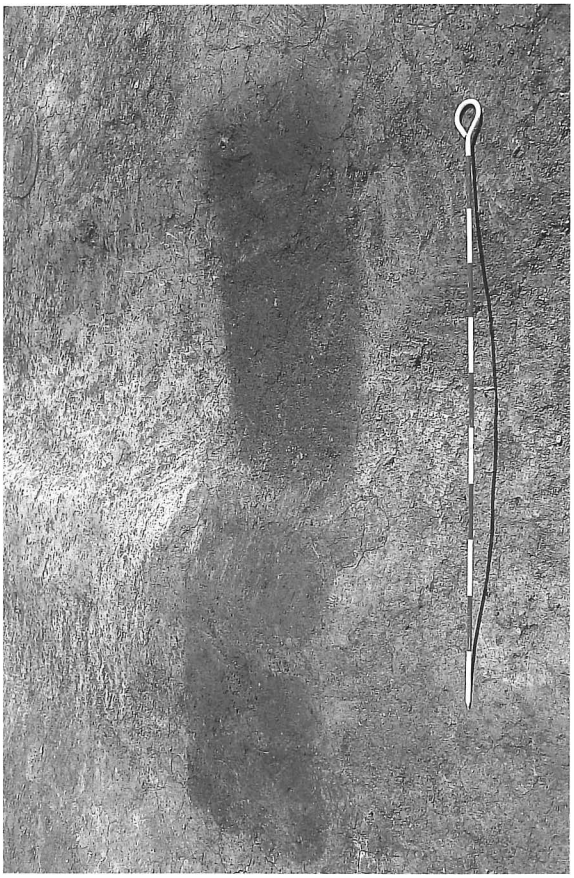
Pho. 28　8 号土壙墓　検出状況



Pho. 29　9 号土壙墓　検出状況



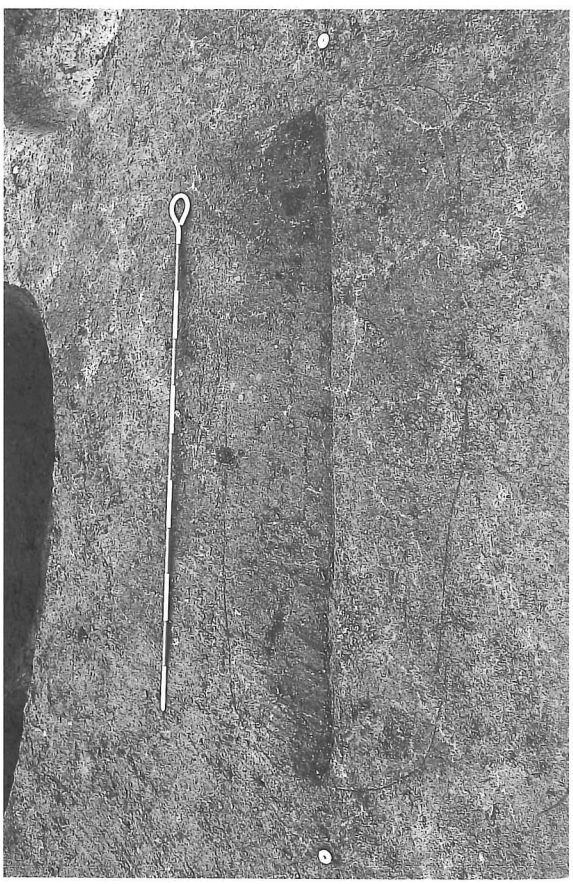
Pho. 30　10号土壙墓　検出状況



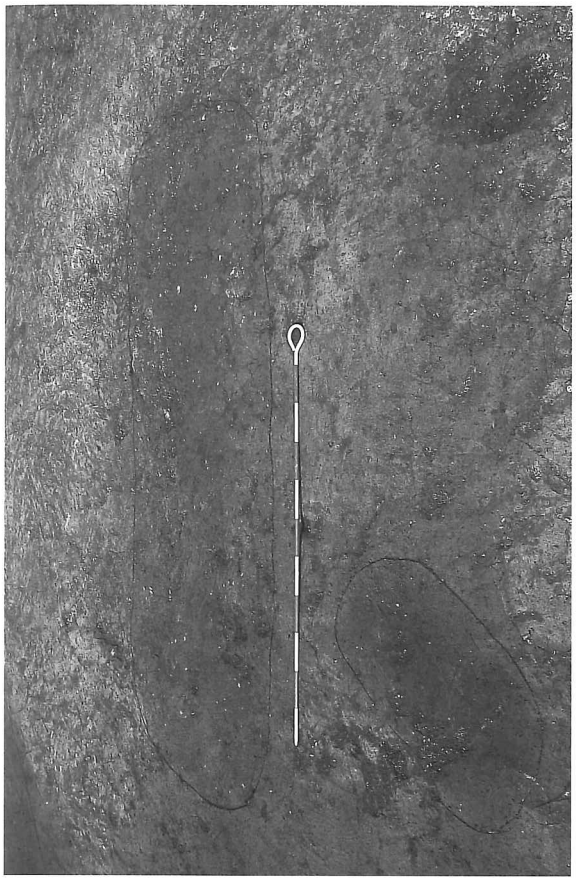
Pho. 31　11号土壙墓　検出状況

Pho. 32　12号土壙墓　検出状況

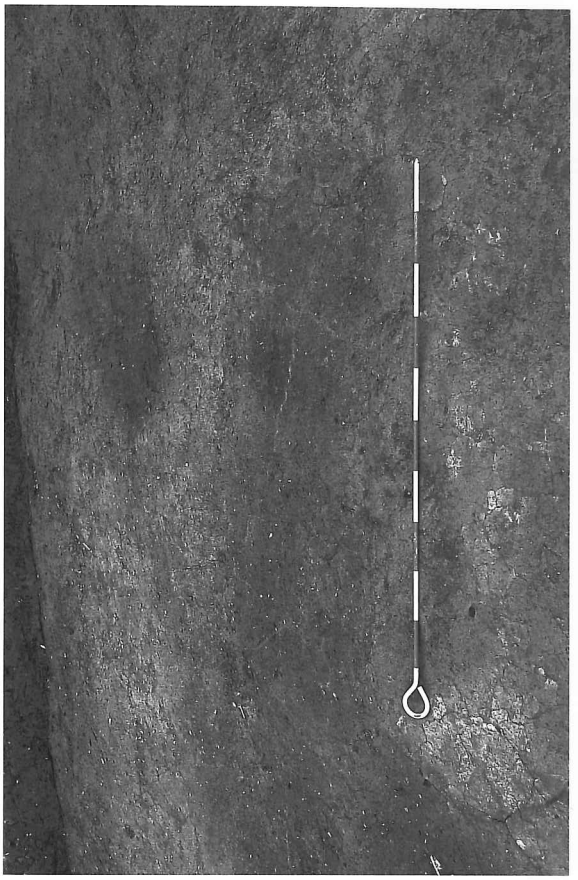
Pho. 33　13号土壙墓　検出状況



Pho. 34　14号土壙墓　検出状況

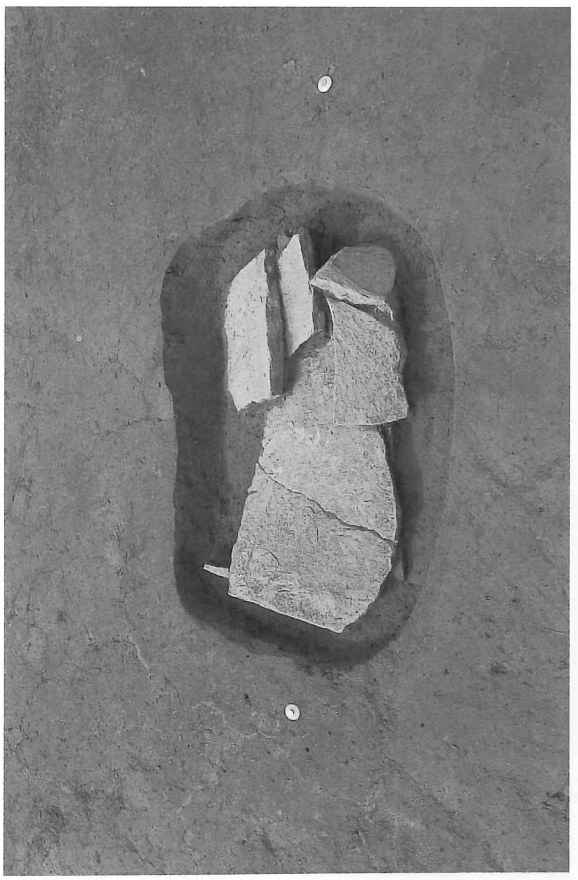


Pho. 35　17号土壙墓　検出状況



Pho. 36　18号土壙墓　検出状況

Pho. 37　19号土壙墓　検出状況

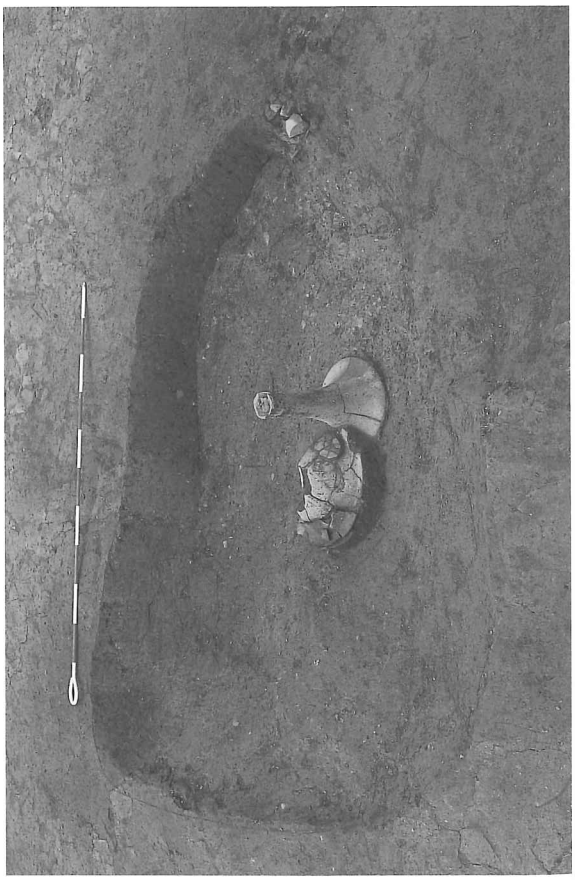


Pho. 38　箱式石棺墓　検出状況①

Pho. 39　箱式石棺墓　検出状況②

Pho. 40　1 号落ち込み　検出状況

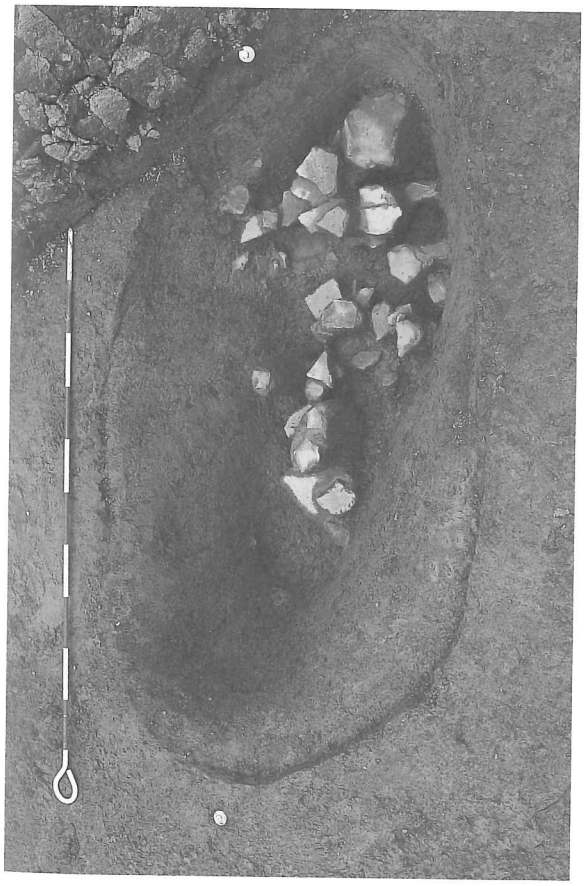
Pho. 41　2 号落ち込み　検出状況



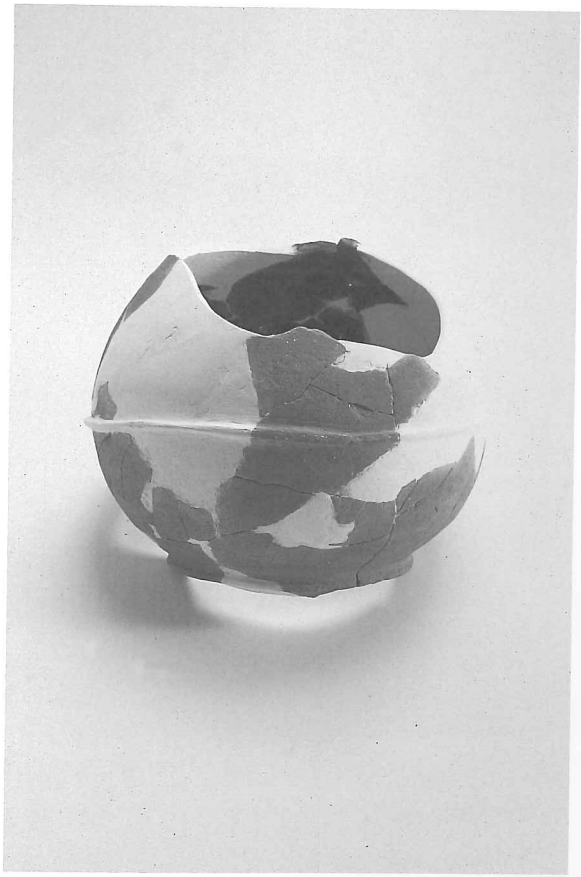
Pho. 42　1 号埋納土坑　検出状況

Pho. 43　3 号落ち込み「立ち壺」検出状況

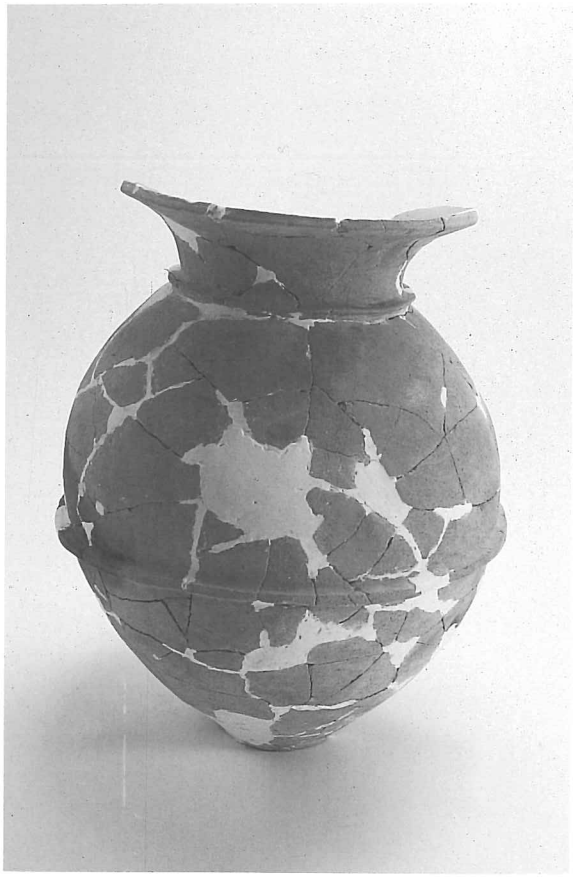
Pho. 44　濠　土層断面



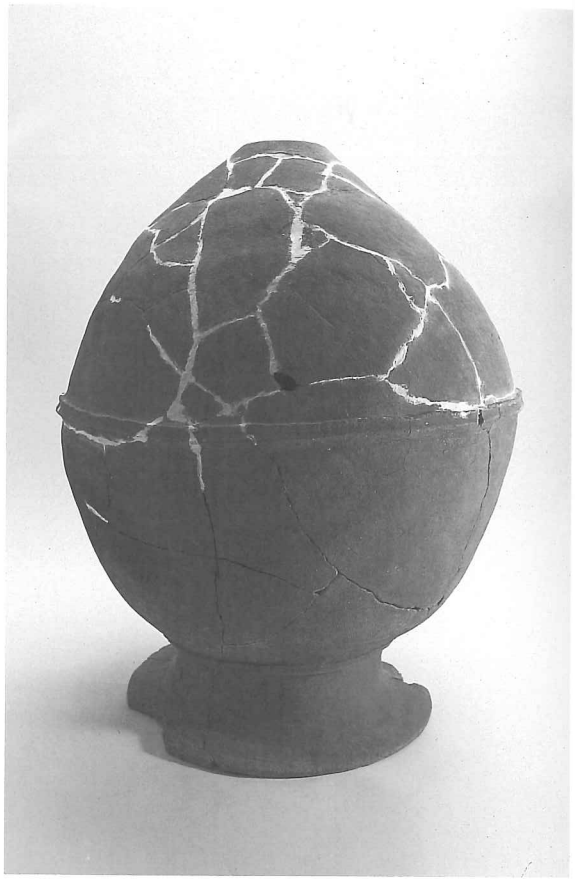
Pho. 45　4 号土坑完掘状況



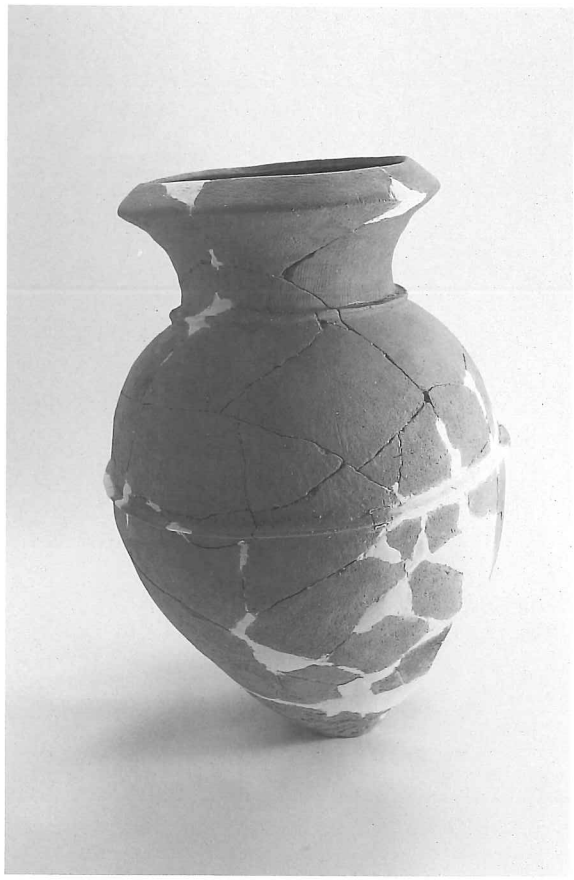
Pho. 46　1 号甕棺　上甕



Pho. 47　1 号甕棺　下甕



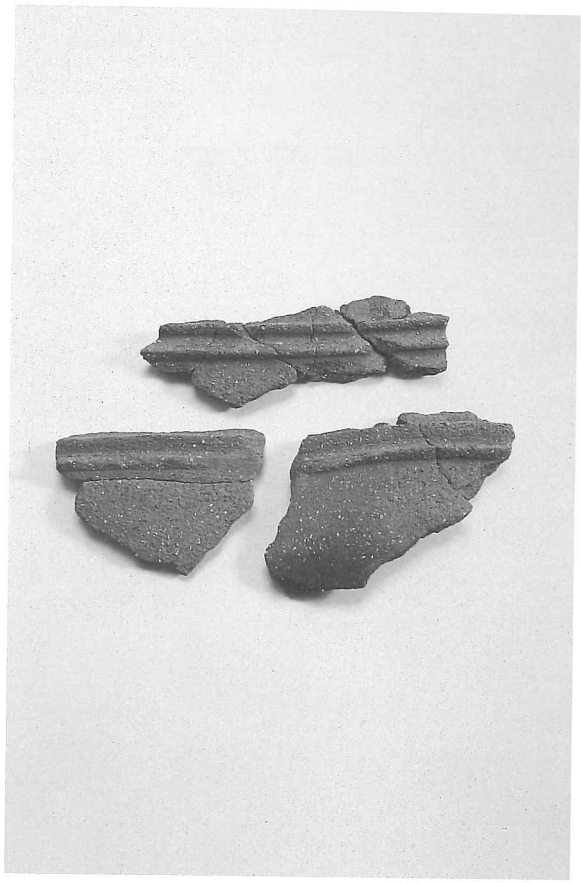
Pho. 48　2 号甕棺　上甕



Pho. 49　2 号甕棺　下甕

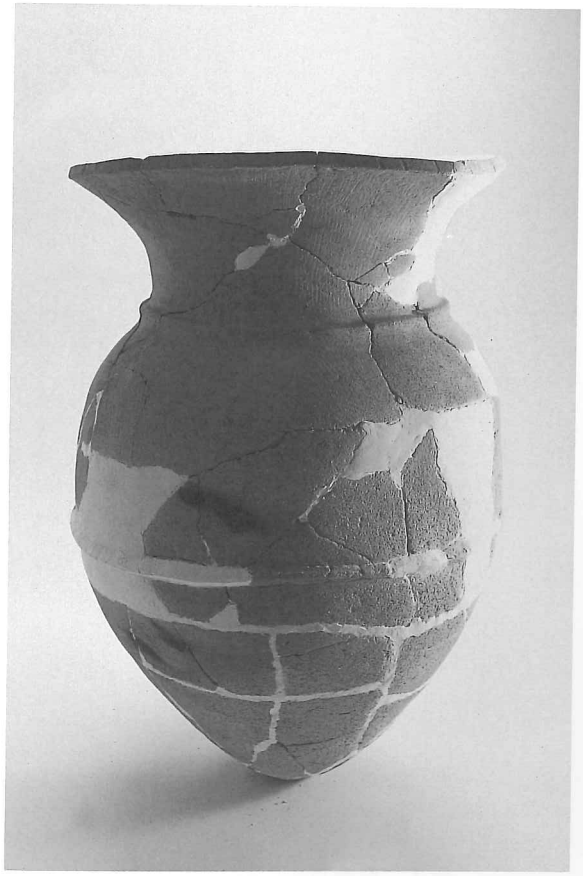
Pho. 50　3 号甕棺　上甕

Pho. 51　3 号甕棺　下甕



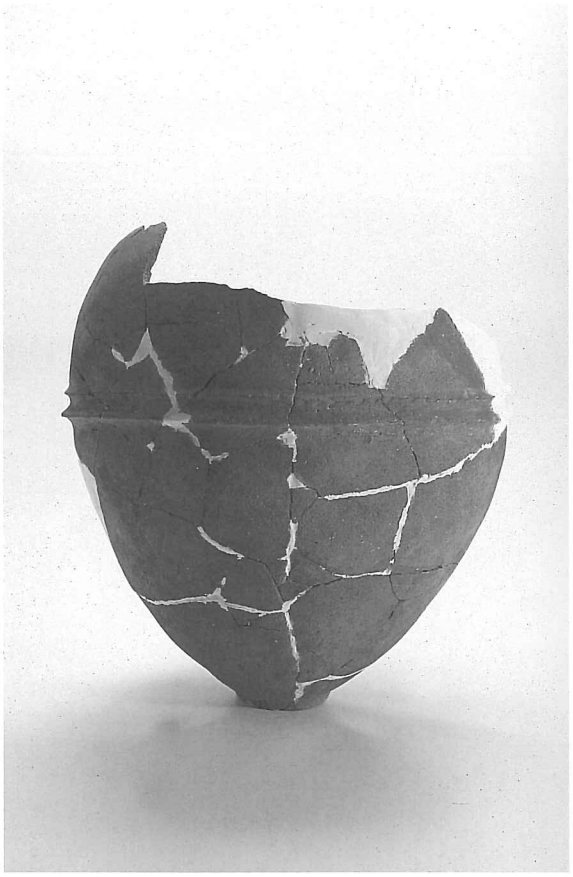
Pho. 52　4 号甕棺

Pho. 53　5 号甕棺　上甕



Pho. 54　5 号甕棺　下甕

Pho. 55　6 号甕棺　上甕

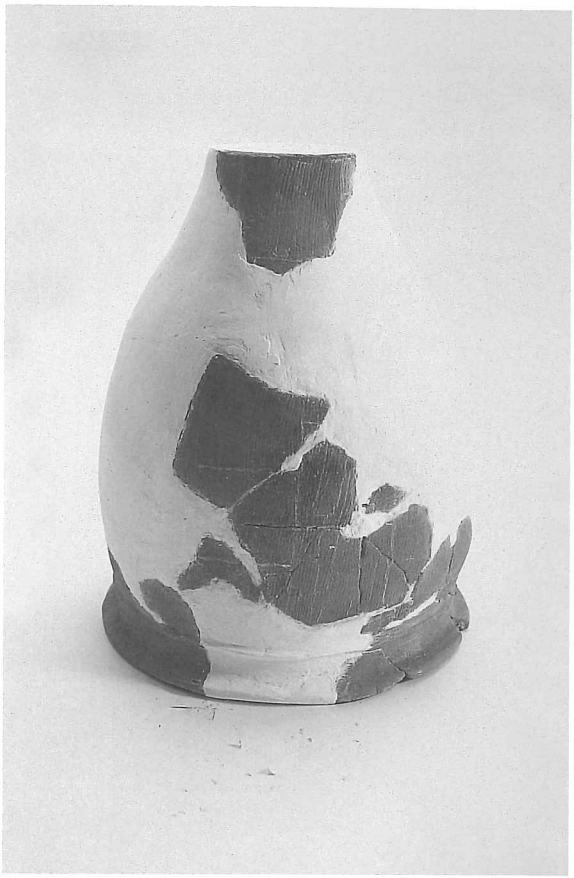


Pho. 56　6 号甕棺　下甕

Pho. 57　7 号甕棺　上甕

Pho. 58　7 号甕棺　下甕

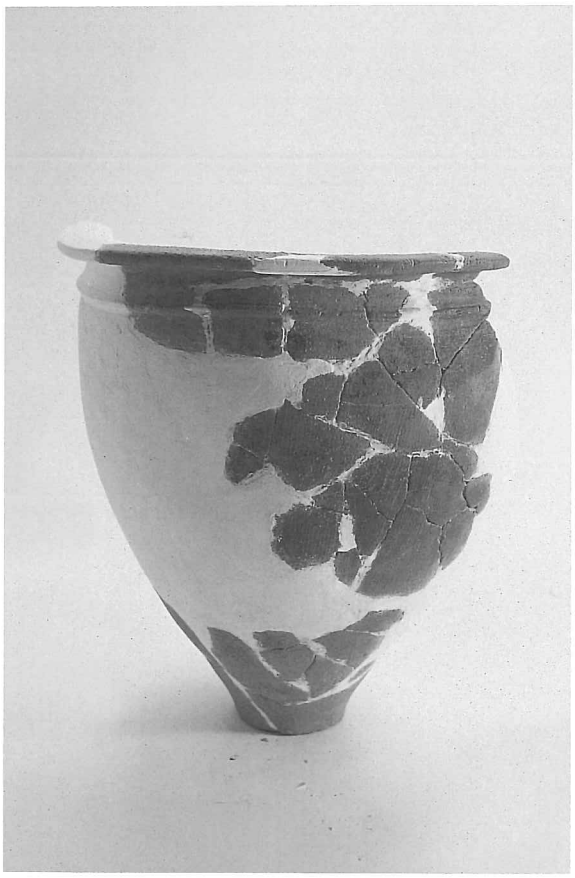
Pho. 59　8 号甕棺



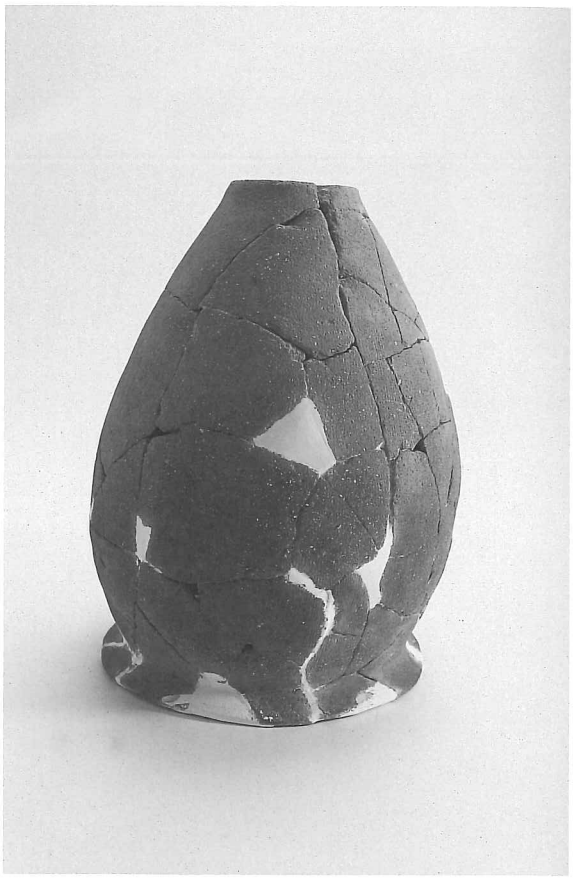
Pho. 60　9 号甕棺　上甕

Pho. 61　9 号甕棺　下甕

Pho. 62　10号甕棺　上甕

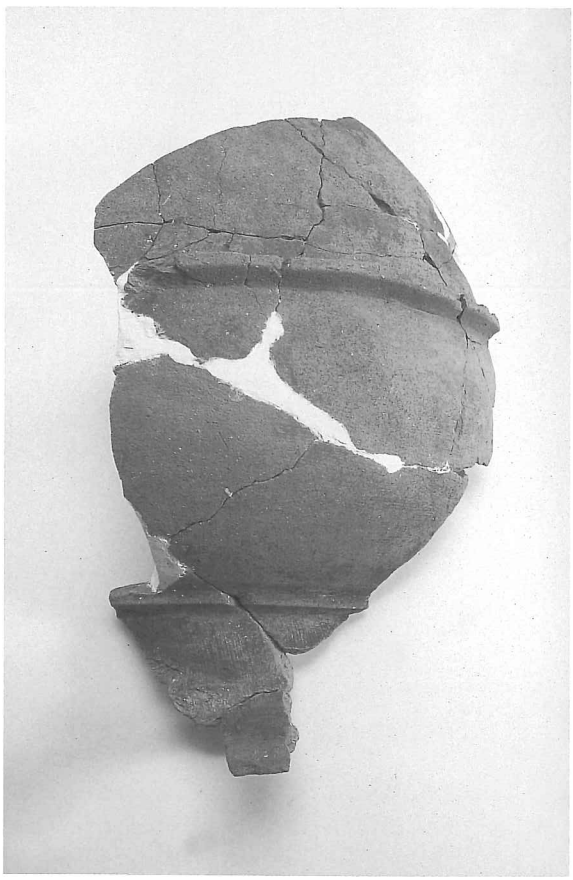


Pho. 63　10号甕棺　下甕

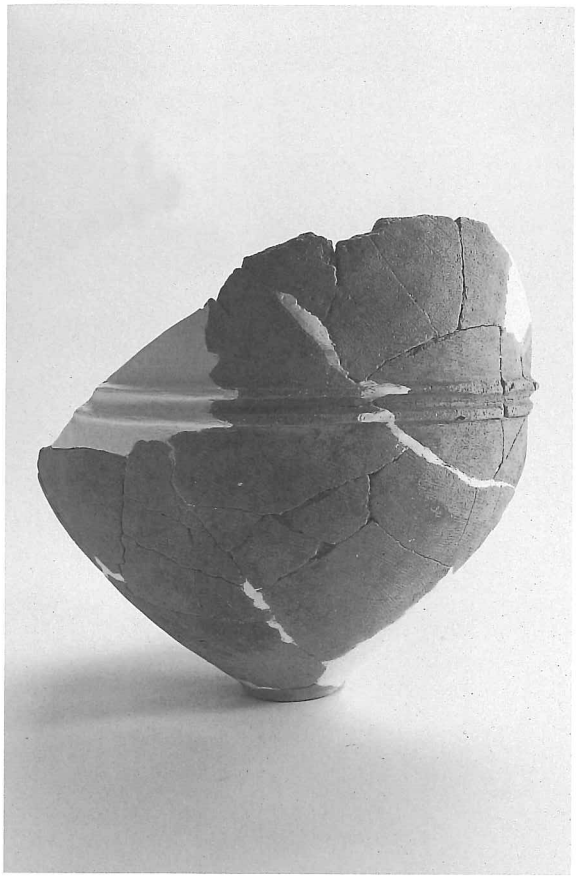


Pho. 64　11号甕棺　上甕

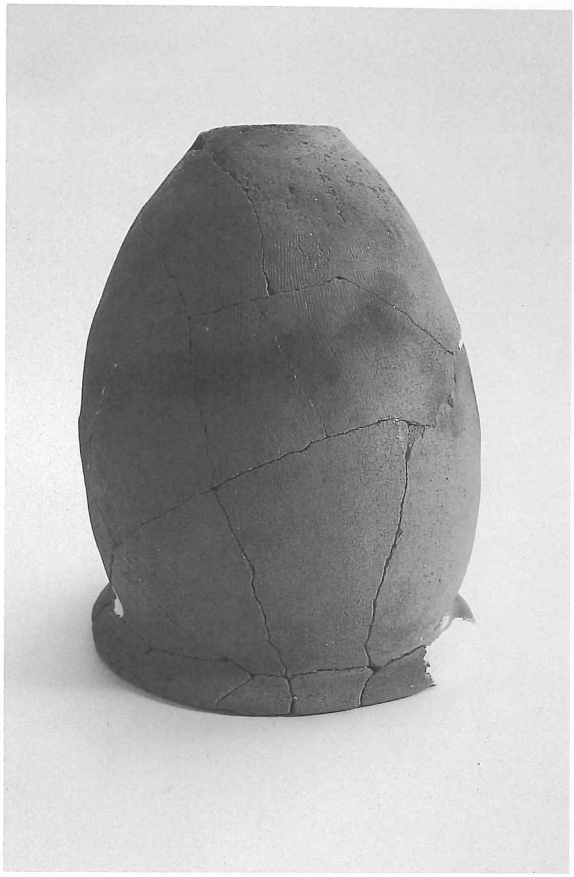
Pho. 65　11号甕棺　下甕



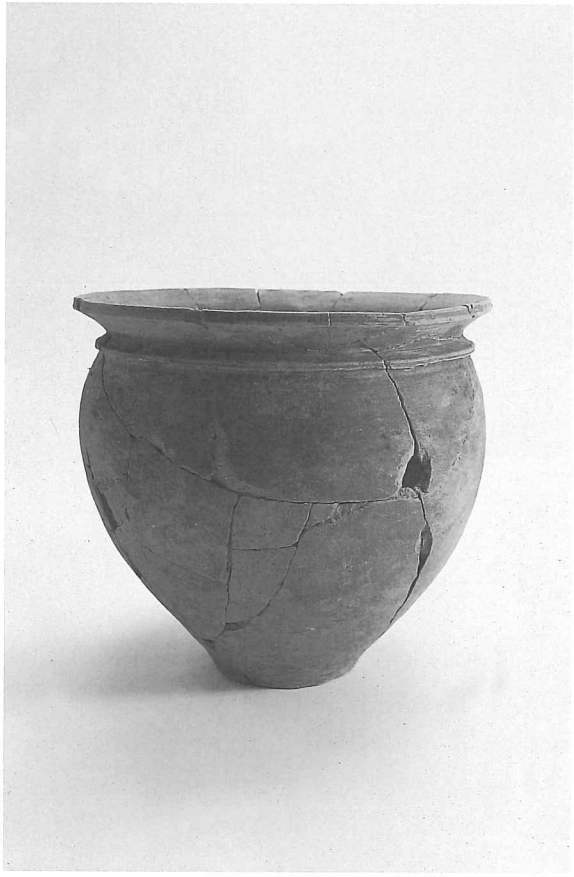
Pho. 66　12号甕棺　上甕



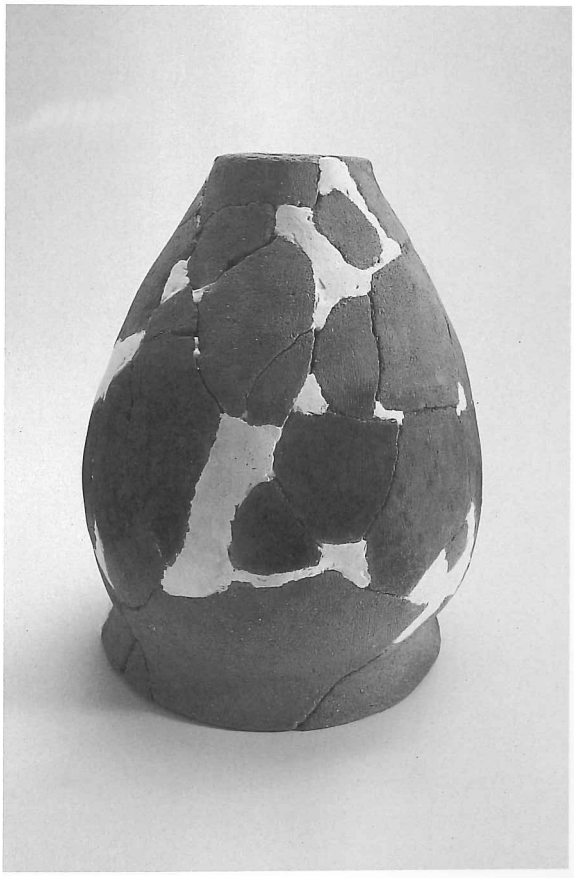
Pho. 67　12号甕棺　下甕



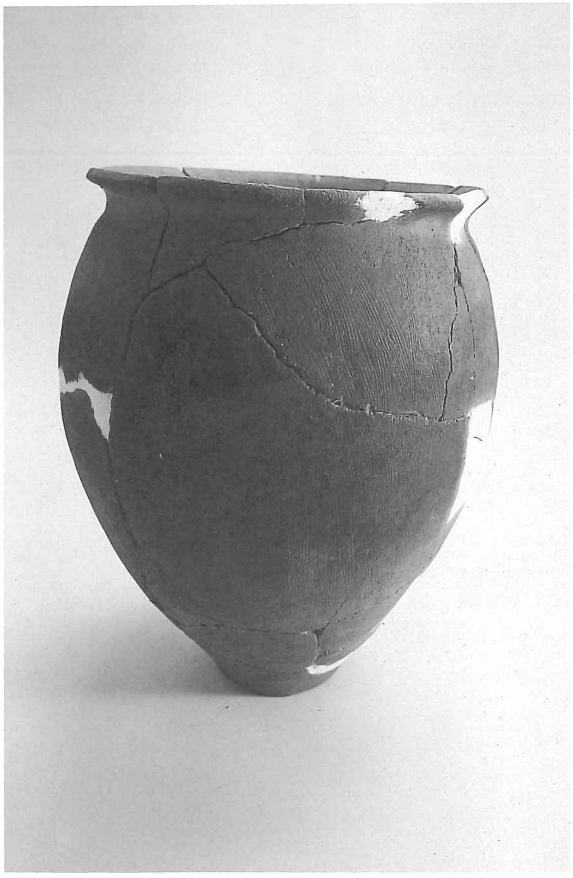
Pho. 68　13号甕棺　上甕



Pho. 69　13号甕棺　下甕

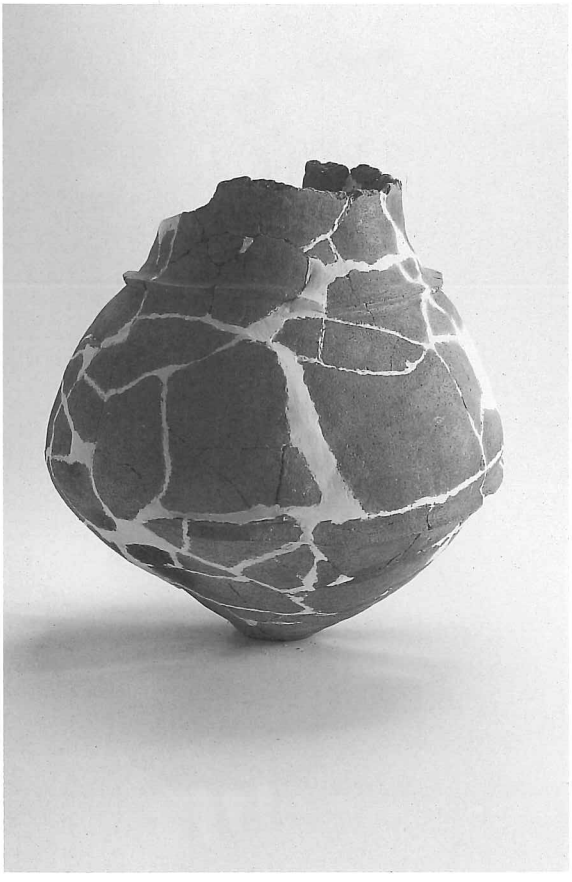


Pho. 70　14号甕棺　上甕

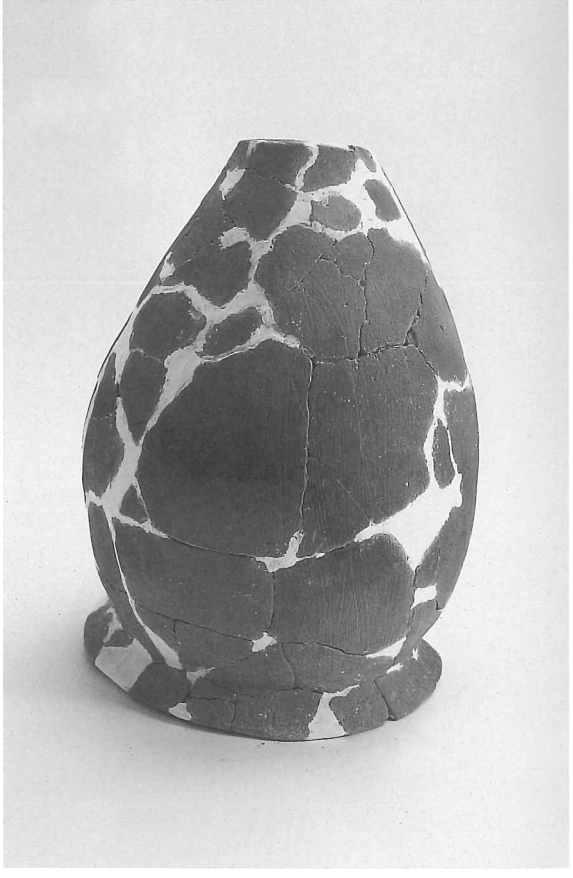


Pho. 71　14号甕棺　下甕

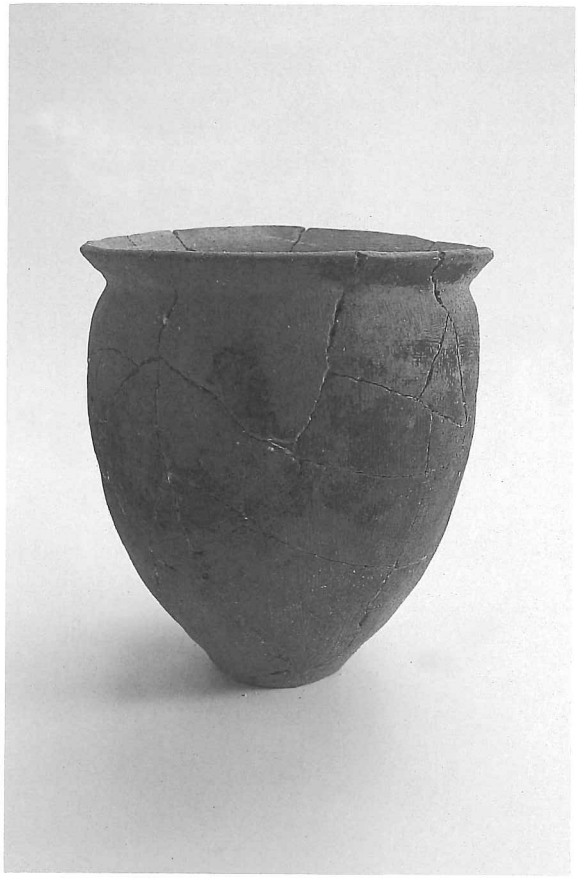
Pho. 72　15号甕棺　上甕



Pho. 73　15号甕棺　下甕



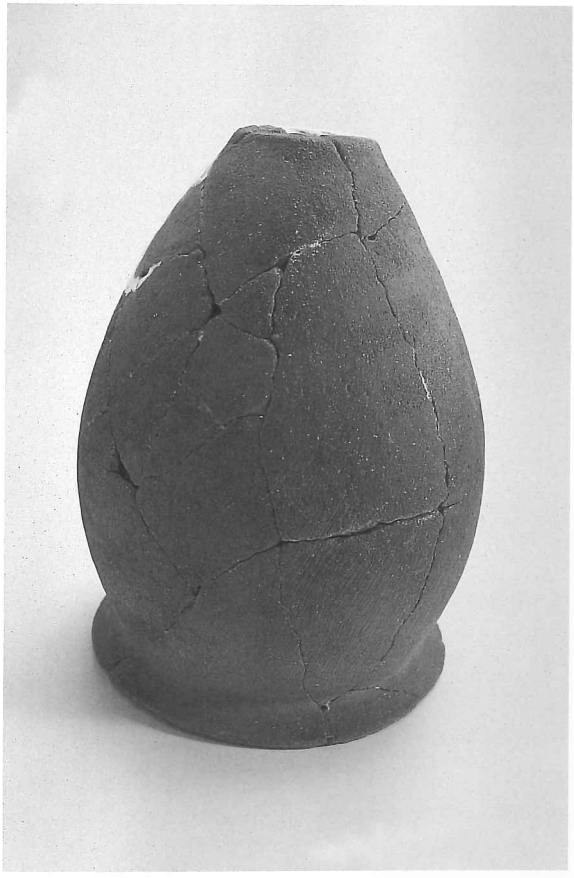
Pho. 74　16号甕棺　上甕



Pho. 75　16号甕棺　下甕

Pho. 76　17号甕棺　上甕

Pho. 77　17号甕棺　下甕

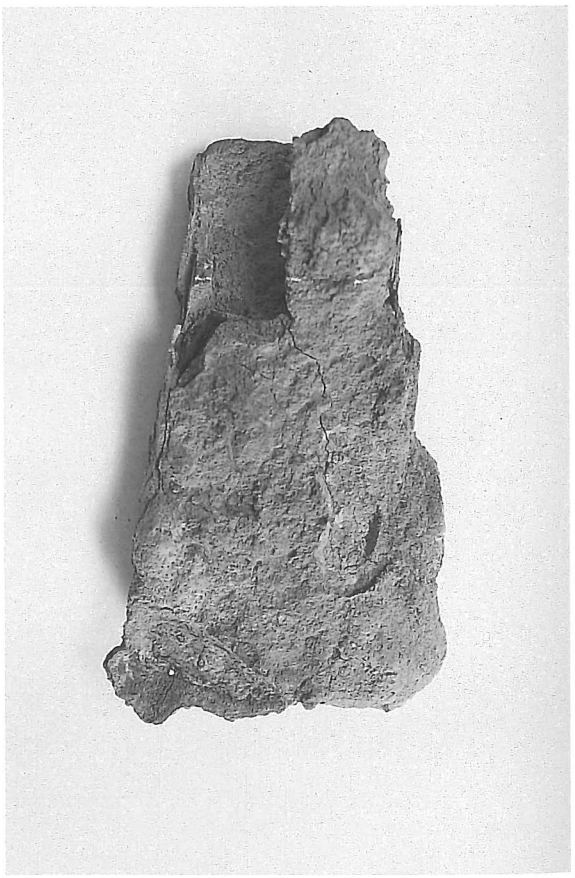


Pho. 78　18号甕棺　上甕

Pho. 79　18号甕棺　下甕

Pho. 80　鉄剣

Pho. 81　刀子



Pho. 82　鋳造鉄斧

原の辻遺跡（池田大原地区）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．花粉分析

1．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は，池田大原地区２区－11南壁の８層から11層までの層準から採取された計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

花粉の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

1）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
2）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結果

(1) 分類群

出現した分類群は，樹木花粉28，樹木花粉と草本花粉を含むもの４，草本花粉21，シダ植物胞子２形態の計55である。なお，寄生虫卵は検出されなかった。分析結果を表１に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属，モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤナギ

属，クルミ属，ハンノキ属，カバノキ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，サンショウ属，キハダ属，ウルシ属，モチノキ属，ブドウ属，ツバキ属，モクセイ科，トネリコ属，タニウツギ属，イスノキ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，バラ科，マメ科，ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，サジオモダカ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，コムギ，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，カラマツソウ属，アブラナ科，ササゲ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位の11層では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では，イネ科（イネ属型を含む）が優占し，ヨモギ属，カヤツリグサ科，ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉では，エノキ属－ムクノキ，クリ，コナラ属アカガシ亜属，シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属などが認められた。10層から9層にかけては，草本花粉のヨモギ属が増加し，イネ科（イネ属型を含む）は減少している。また，コムギ，ササゲ属，および樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科，マメ科が認められた。樹木花粉では，エノキ属－ムクノキが減少している。8層では，草本花粉のイネ科（イネ属型を含む），ガマ属－ミクリ属が増加し，樹木花粉のクリは減少している。

5．花粉分析から推定される植生と環境

下位の11層の堆積当時は，おもに水田が分布していたと考えられ，その周囲にはオモダカ属，ミズアオイ属などの水田雑草，周辺の比較的乾燥したところにはヨモギ属などの草本類が分布していたと推定される。森林植生としては，周辺地域にカシ類（コナラ属アカガシ亜属），シイ属－マテバシイ属，エノキ属－ムクノキ，クリ，ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などが分布していたと考えられる。

10層から8層にかけては，コムギ，ササゲ属，および畑作雑草や栽培植物を含むアブラナ科が認められ，ヨモギ属が増加していることから，水田とともに畑も分布していたと推定される。周辺地域の森林植生には，とくに大きな変化は認められないが，10層ではエノキ属－ムクノキが減少し，8層にかけてはクリも減少したと考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表1　原の辻遺跡池田大原地区における花粉分析結果

分類群		2区－11　南壁			
学名	和名	8層	9層	10層	11層
Arboreal pollen	樹木花粉				
Podocarpus	マキ属		1	1	
Abies	モミ属		1		2
Tsuga	ツガ属				1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1	6	3	1
Cryptomeria japonica	スギ	4	2	5	2
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	3	5	1
Salix	ヤナギ属			8	
Juglans	クルミ属				1
Alnus	ハンノキ属	2		1	1
Betula	カバノキ属		1	1	4
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	1		
Castanea crenata	クリ	2	8	20	23
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	31	19	22	19
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	6	6	20	11
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	18	26	32	21
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		1	1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	1	2	2	29
Zanthoxylum	サンショウ属		1	2	2
Phellodendron	キハダ属				1
Rhus	ウルシ属				1
Ilex	モチノキ属		1		1
Vitis	ブドウ属	3	9	1	
Camellia	ツバキ属				2
Oleaceae	モクセイ科				1
Fraxinus	トネリコ属				1
Weigela	タニウツギ属		1		
Distylium	イスノキ属		1		
Lonicera	スイカズラ属		1	5	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	9	20	2
Rosaceae	バラ科	2	3	3	
Leguminosae	マメ科	2	3	22	5
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	20	16		
Alisma	サジオモダカ属		2		
Sagittaria	オモダカ属	1		1	2
Gramineae	イネ科	126	114	88	168
Oryza type	イネ属型	19	5	6	49
Triticum aestivum	コムギ		3		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	39	22	35
Aneilema keisak	イボクサ	2	1		
Monochoria	ミズアオイ属	1	4	2	13
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1	4	2
Rumex	ギシギシ属	1	4	2	3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	1	1	1
Thalictrum	カラマツソウ属	1	16	2	4
Cruciferae	アブラナ科	3	3	8	
Vigna	ササゲ属			1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		1		1
Apioideae	セリ亜科	10	7	26	5
Lactucoideae	タンポポ亜科	7	3	6	3
Asteroideae	キク亜科	6	4	7	1
Xanthium	オナモミ属		1		
Artemisia	ヨモギ属	99	145	102	45
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	1			19
Trilate type spore	三条溝胞子	16	15	32	27
Arboreal pollen	樹木花粉	72	91	129	126
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	5	15	47	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	310	370	278	332
Total pollen	花粉総数	387	476	454	465
Pollen frequencies of 1 cm^3	試料1 cm^3中の花粉密度	7.6 $\times 10^3$	2.2 $\times 10^4$	5.2 $\times 10^4$	5.1 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	5	10	6	5
Fern spore	シダ植物胞子	17	15	32	46
Helminth eggs	寄生虫卵	(－)	(－)	(－)	(－)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)	(－)
Charcoal fragments	微細炭化物	(＋)	(＋)	(－)	(＋)

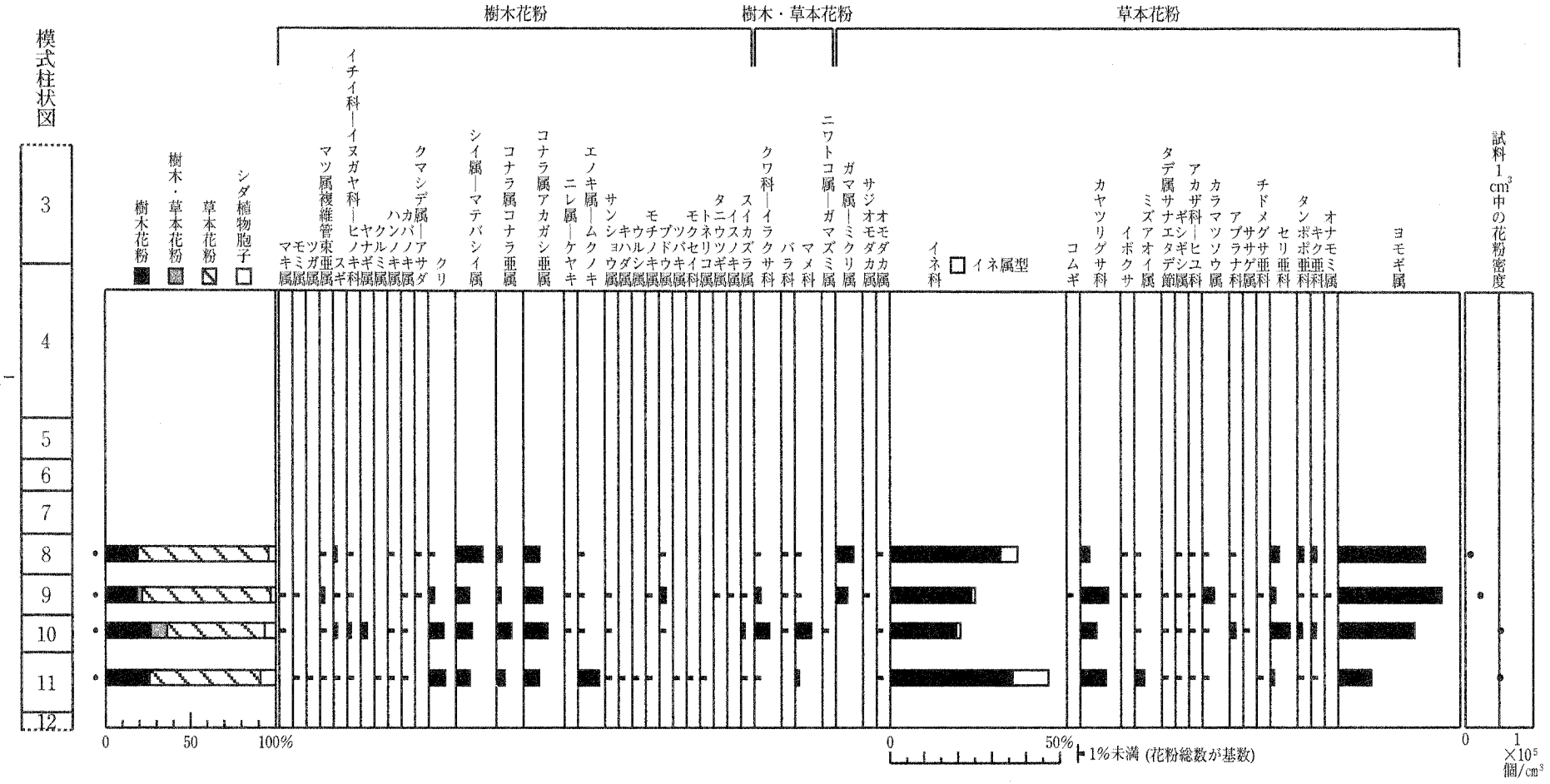
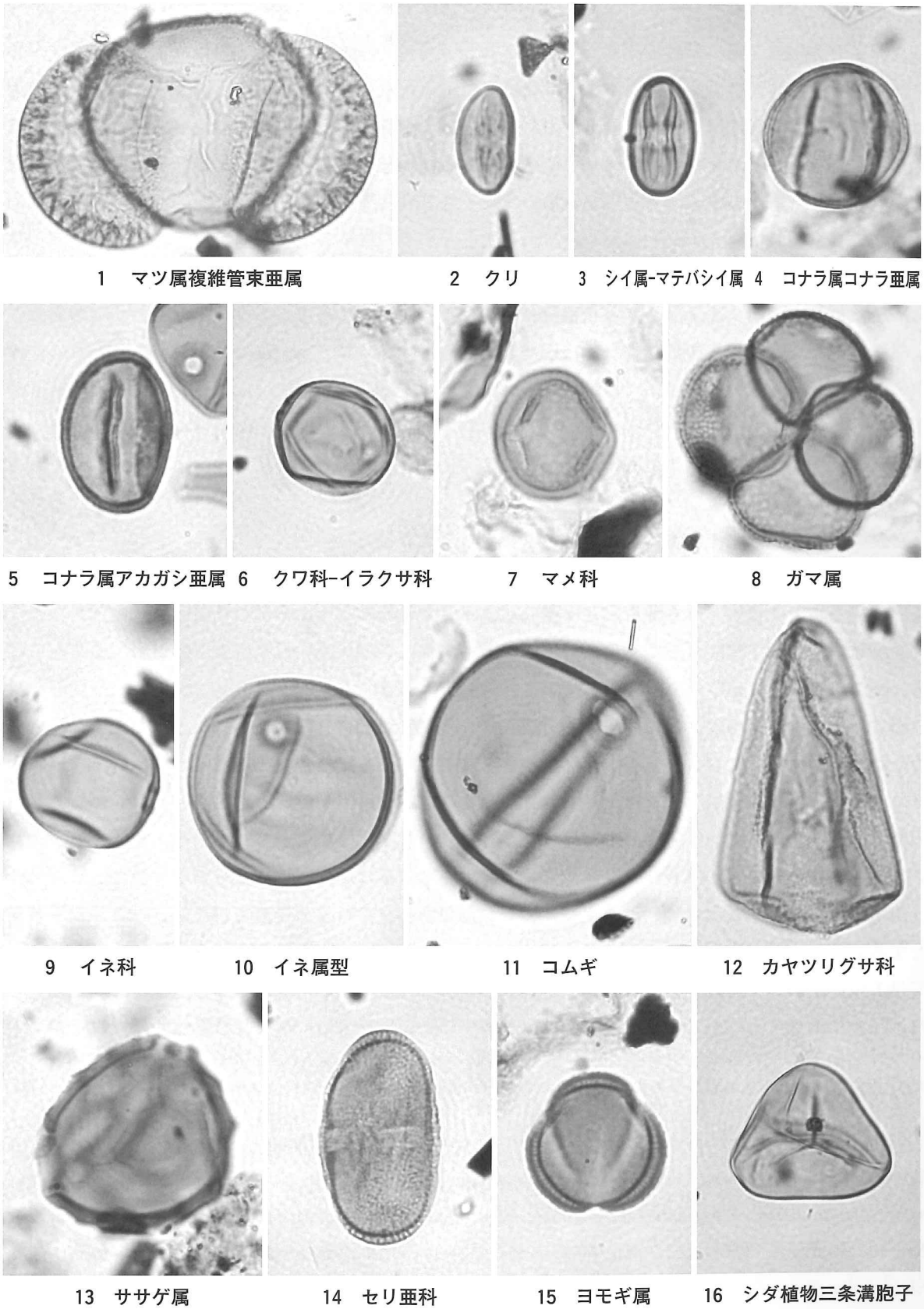


図1　原の辻遺跡，池田大原地区2区—11南壁における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡池田大原地区の花粉・胞子



1　マツ属複維管束亜属　2　クリ　3　シイ属-マテバシイ属　4　コナラ属コナラ亜属

5　コナラ属アカガシ亜属　6　クワ科-イラクサ科　7　マメ科　8　ガマ属

9　イネ科　10　イネ属型　11　コムギ　12　カヤツリグサ科

13　ササゲ属　14　セリ亜科　15　ヨモギ属　16　シダ植物三条溝胞子

10 μm

Ⅱ．珪藻分析

1．はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映しており，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2．試料

分析試料は，池田大原地区２区－11南壁の８層から11層までの層準から採取された計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

以下の手順で，珪藻の抽出と同定を行った。

1）試料から１㎤を秤量
2）10%過酸化水素水を加え，加温反応させながら１晩放置
3）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）
4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
5）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成
6）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結果

(1) 分類群

出現した珪藻は，貧塩性種（淡水生種）42分類群である。分析結果を表１に示し，珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性については Lowe（1974）や渡辺（2005），陸生珪藻については小杉（1986），環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉（1988），淡水生種については安藤（1990）の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し，主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔貧塩性種〕

Caloneis aerophila-sublinearis, Cymbella silesiaca, Cymbella tumida, Eunotia minor, Eunotia pseudoserra, Gomphonema acuminatum, Gomphonema clavatum, Gomphonema gracile, Gomphonema parvulum, Gomphonema sphaerophorum, Gomphonema truncatum, Hantzschia amphioxys, Navicula elginensis, Navicula mutica, Neidium ampliatum, Pinnularia gibba, Pinnularia microstauron, Pinnularia subcommutata, Pinnularia viridis, Rhopalodia gibberula, Tabellaria fenestrata-flocculosa

(2) 珪藻群集の特徴

下位の11層では，珪藻がほとんど検出されなかった。10層では，すべての珪藻が貧塩性種（淡水生種）であり，陸生珪藻の占める割合が高く，真・好流水性種，流水不定性種，真・好止水性種と続く。陸生珪藻では *Navicula mutica* が高率に出現し，*Hantzschia amphioxys* が伴われる。真・好流水性種では *Gomphonema parvulum*，沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis* が出現する。流水不定性種では *Pinnularia subcommutata, Caloneis aerophila-sublinearis, Eunotia pseudoserra, Gomphonema clavatum, Rhopalodia gibberula*，沼沢湿地付着生環境指標種群の *Pinnularia viridis* が低率に出現する。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor, Gomphonema gracile*，好止水性種の *Neidium ampliatum, Pinnularia microstauron* が低率に出現する。9層では，珪藻密度が低く，真・好止水性種が優占し，流水不定性種などが伴われる。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Tabellaria fenestrata-flocculosa, Gomphonema acuminatum*，好止水性種の *Gomphonema truncatum, Gomphonema sphaerophorum, Cymbella tumida* が比較的高率に出現し，沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor, Gomphonema gracile*，好止水性種の *Neidium ampliatum* が伴われる。流水不定性種では *Cymbella silesiaca*，沼沢湿地付着生環境指標種群の *Pinnularia gibba* などが出現する。8層では，珪藻が検出されなかった。

5．珪藻分析から推定される堆積環境

下位の11層では，珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったことや，水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと，土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。また，集約性の高い水田では，珪酸濃度低下のため珪藻殻が形成されなかったり，珪藻殻が溶脱して残存しないこともある。

10層の堆積当時は，流水の影響のある沼沢湿地，水草の生育する不安定な滞水域，湿潤な陸域などの多様な環境が，共存もしくは繰り返されていたと推定され，水田域もしくはその周辺の環境が反映されていると考えられる。9層では，珪藻密度が低いことから，堆積環境の詳細な推定は困難であるが，水草の生育する浅い水域が示唆される。8層では，珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

文献

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol. Suppl. 15, p.131-506.

Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333 p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer・H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae・1-4.

Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．内田老鶴圃，pp.666.
藤田剛（1984）日本化石集第27集，ATLAS OF JAPANESE FOSSILS・№27-158，南関東の第四紀化石5（沖積世の珪藻化石2）

表1　原の辻遺跡池田大原地区における珪藻分析結果

	2区－11　南壁			
分類群	8層	9層	10層	11層
貧塩性種（淡水生種）				
Amphora copulata		1		
Aulacoseira spp.			1	
Caloneis aerophila-sublinearis			14	
Caloneis hyalina			1	
Cymbella silesiaca		5		
Cymbella tumida		7		
Diploneis finnica		1		
Diploneis spp.		1		
Eunotia minor		2	36	
Eunotia pectinalis		1		
Eunotia pseudoserra			7	
Gomphonema acuminatum		22		
Gomphonema clavatum			5	
Gomphonema gracile		1	10	1
Gomphonema parvulum		2	57	
Gomphonema pseudoaugur		1		
Gomphonema sphaerophorum		8		
Gomphonema spp.			2	
Gomphonema truncatum		14		
Hantzschia amphioxys			30	
Navicula americana		1		
Navicula contenta			2	
Navicula cuspidata				1
Navicula elginensis			13	
Navicula mutica		1	115	1
Navicula placenta v. obtusa			1	
Neidium ampliatum			6	
Orthoseira roeseana			1	
Pinnularia acrosphaeria			1	
Pinnularia borealis			1	
Pinnularia gibba		8	3	
Pinnularia major			4	
Pinnularia microstauron		3	5	
Pinnularia spp.		1	3	
Pinnularia subcommutata			21	
Pinnularia viridis		2	5	
Rhopalodia gibberula			7	
Stauroneis anceps			1	
Stauroneis nobilis		3		
Stauroneis phoenicenteron		3		
Synedra ulna		4		
Tabellaria fenestrata-flocculosa		26		
合　計	0	118	352	3
未同定	0	2	13	0
破片	17	182	287	131
試料1㎤中の殻数密度	0.0	2.3×10^4	1.9×10^5	1.2×10^5
完形殻保存率(%)	－	39.7	56.0	－

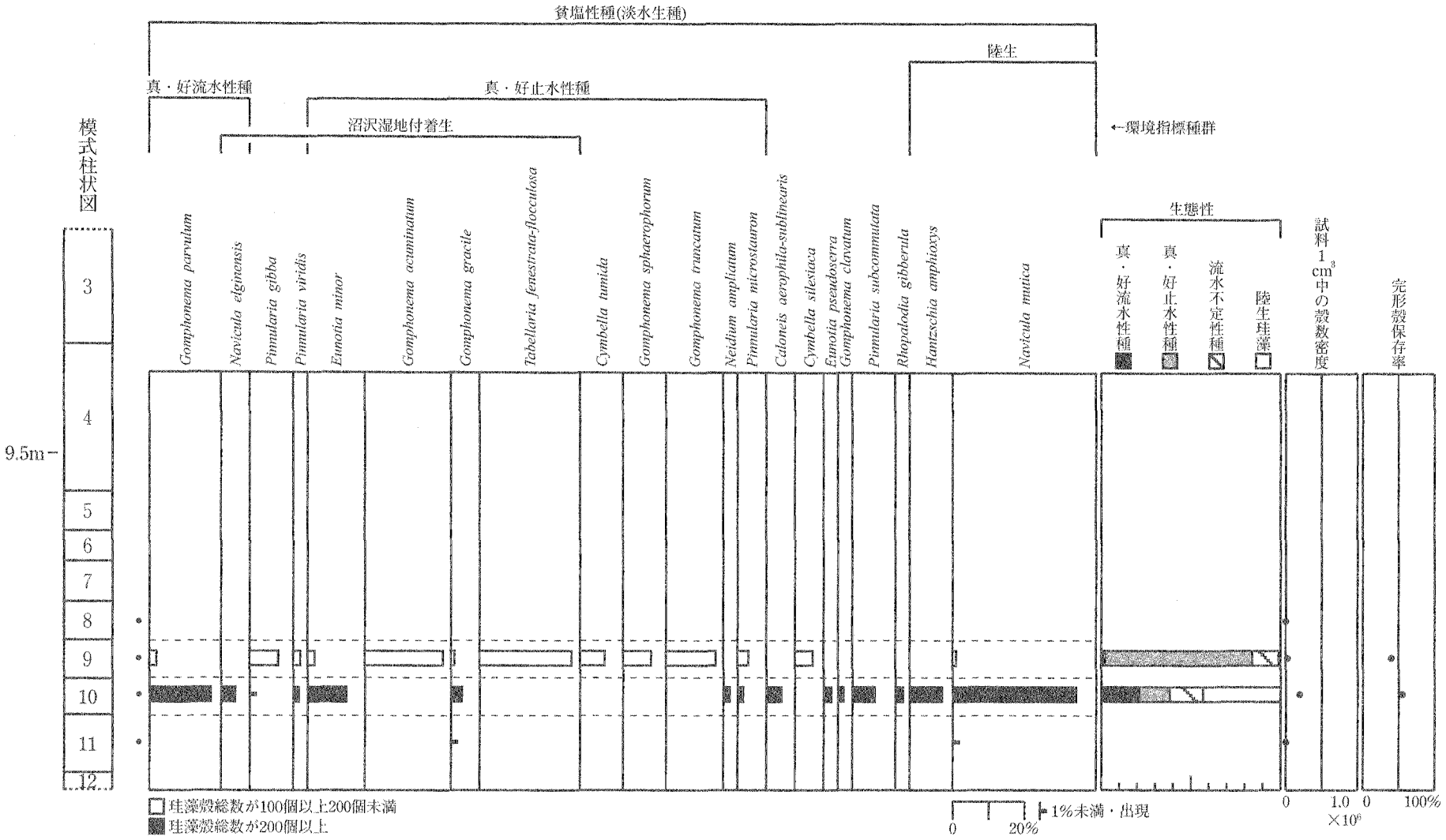
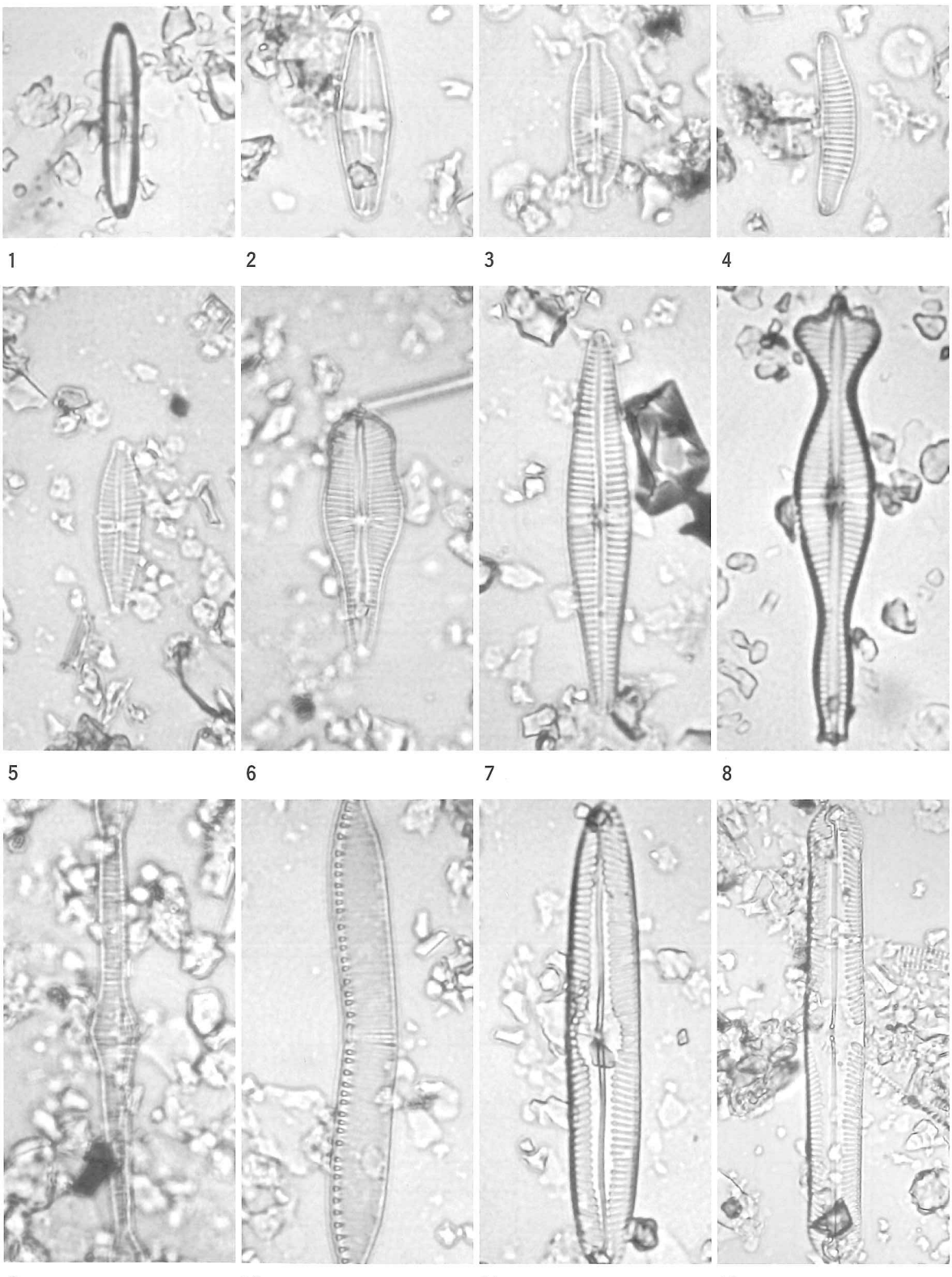


図1　原の辻遺跡，池田大原地区2区—11南壁における主要珪藻ダイアグラム

原の辻遺跡池田大原地区の珪藻



1-11 ——— 10 μm、12 ——— 10 μm

1．*Caloneis aerophila-sublinearis*　2．*Navicula mutica*　3．*Navicula elginensis*　4．*Eunotia minor*
5．*Gomphonema parvulum*　6．*Gomphonema truncatum*　7．*Gomphonema gracile*　8．*Gomphonema acuminatum*
9．*Tabellaria fenestrata-flocculosa*　10．*Hantzschia amphioxys*　11．*Pinnularia subcommutata*　12．*Pinnularia gibba*

原の辻遺跡（閨繰地区）における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は，閨繰地区トレンチ①南東壁の３層から７層までの層準から採取された計７点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

花粉の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

1）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
2）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結果

(1) 分類群

出現した分類群は，樹木花粉25，樹木花粉と草本花粉を含むもの4，草本花粉26，シダ植物胞子２形態の計57である。また，寄生虫卵４分類群が検出された。分析結果を表１に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤナギ属，ノグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，サンショウ属，ニシキギ科，ムクロジ属，ブドウ属，モクセイ科，トネリコ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，バラ科，マメ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，サジオモダカ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，アヤメ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，キン

ボウゲ属，カラマツソウ属，アブラナ科，アカバナ科，ヒシ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，オオバコ属，ゴキヅル，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵，鞭虫卵，カピラリア，不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

下位の７層では，花粉がほとんど検出されなかった。６層から５層にかけては，草本花粉の占める割合が高く，ヨモギ属，イネ科（イネ属型を含む）が優占し，アブラナ科，セリ亜科，および樹木・草本花粉を含むクワ科－イラクサ科などが伴われる。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属，クリ，スギ，マツ属複維管束亜属などが低率に出現する。４ｂ層では，イネ科（イネ属型を含む）が増加し，ヨモギ属は減少している。また，寄生虫卵のカピラリアがわずかに検出された。４ａ層では，樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が増加し，イネ科（イネ属型を含む）はやや減少している。３層では，イネ科（イネ属型を含む），アブラナ科，および樹木・草本花粉を含むクワ科－イラクサ科が増加し，樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属は減少している。また，回虫卵，鞭虫卵がわずかに検出された。

５．花粉分析から推定される植生と環境

下位の７層では，花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと，土層の堆積速度が速かったこと，および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定される。

６層から５層にかけては，ヨモギ属やイネ科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられる。イネ科にはイネ属型が伴われ，水田雑草のオモダカ属，ミズアオイ属，および畑作雑草や栽培植物を含むアブラナ科も認められることから，周囲には水田や畑が分布していたと推定される。

森林植生としては，周辺地域にカシ類（コナラ属アカガシ亜属），シイ属－マテバシイ属，クリ，スギなどが分布していたと考えられる。

４ｂ層から３層にかけては，水田や畑が拡大したと考えられ，周囲の比較的乾燥したところにはヨモギ属，イネ科，クワ科－イラクサ科（カナムグラ，カラムシ）などの草本類が分布していたと推定される。周辺地域の森林植生には，とくに大きな変化は認められないが，４ａ層では一時的にカシ類が増加した可能性が考えられる。

３層では，寄生虫卵の回虫卵，鞭虫卵が検出された。いずれも低密度であることから，人糞施肥に由来するものではなく，集落周辺における通常の生活汚染程度と考えられる。回虫と鞭虫は，いずれも中間宿主を必要とせず，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は，腹痛を主とする消化器病症がおこり，多数寄生の場合は症状が重い。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学．考古学と自然科学，２，同成社，p.151-158.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表1　原の辻遺跡闇繰地区における花粉分析結果

分類群		トレンチ①南　東壁						
学名	和名	3層	4a層	4b層	5層	6層(砂)	6層	7層
Arboreal pollen	樹木花粉							
Abies	モミ属			1	1	1		
Tsuga	ツガ属		2					
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	10	6	1	2	1	1	
Cryptomeria japonica	スギ	2	3	3	2	4	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1		1				
Salix	ヤナギ属						1	
Platycarya strobilacea	ノグルミ		1					
Alnus	ハンノキ属		2	1	1	2		
Betula	カバノキ属	2	1	1	1			
Corylus	ハシバミ属		2					
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	2	3			1		
Castanea crenata	クリ	2	5	1	3	4		
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	10	14	20	8	10	1	
Fagus	ブナ属	2						
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		5	7	1			
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	11	47	12	11	9	1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		10	2				
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ		6					
Zanthoxylum	サンショウ属		1					
Celastraceae	ニシキギ科	2	2					
Sapindus	ムクロジ属		3					
Vitis	ブドウ属	1	4	2	2	1		
Oleaceae	モクセイ科	1						
Fraxinus	トネリコ属	1						
Lonicera	スイカズラ属	1				1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	65	19	12	10	8		
Rosaceae	バラ科	2	9	2		1	2	
Leguminosae	マメ科	1	2	4	2			
Araliaceae	ウコギ科	1						
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	5						
Alisma	サジオモダカ属		4					
Sagittaria	オモダカ属	3	3	2		3		
Gramineae	イネ科	120	88	156	49	68	31	
Oryza type	イネ属型	30	6	13	4	4		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	17	21	15	3	4		
Aneilema keisak	イボクサ	4	3					
Monochoria	ミズアオイ属	6		4	2	1		
Iris	アヤメ属					1		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	5	3	3	1			
Rumex	ギシギシ属	3	4	4		1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	9	5	2	4	5	4	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	1	3		1		
Ranunculus	キンポウゲ属	4	2	1				
Thalictrum	カラマツソウ属					2		
Cruciferae	アブラナ科	49	19	24	9	31	10	
Onagraceae	アカバナ科			1		1		
Trapa	ヒシ属		2					
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	3	3	5	2			
Apioideae	セリ亜科	6	9	11	17	23	5	3
Plantago	オオバコ属		1	2				
Actinostemma lobatum	ゴキヅル	2						
Lactucoideae	タンポポ亜科		3	1	5	4	2	
Asteroideae	キク亜科	1	1	5	3	5	4	
Xanthium	オナモミ属			1	1	2		
Artemisia	ヨモギ属	42	64	79	123	205	98	2
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	2	1	1	3		2	
Trilate type spore	三条溝胞子	1	10	10	10	28	20	
Arboreal pollen	樹木花粉	48	117	52	32	34	5	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	69	30	18	12	9	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	314	242	332	223	361	154	5
Total pollen	花粉総数	431	389	402	267	404	161	5
Pollen frequencies of 1 cm³	試料1cm³中の花粉密度	2.6 ×10⁴	1.4 ×10⁴	1.2 ×10⁴	1.9 ×10³	8.1 ×10³	1.2 ×10³	4.2 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	8	11	5	3	8	5	1
Fern spore	シダ植物胞子	3	11	11	13	28	22	0
Helminth eggs	寄生虫卵							
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵	1						
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵	1						
Capillaria sp.	カピラリア			1				
Unknown eggs	不明虫卵		2					
Total	計	2	2	1	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1 cm³	試料1cm³中の寄生虫卵密度	1.4 ×10	1.2 ×10	0.7 ×10	0.0	0.0	0.0	0.0
Digestion rimains	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(−)	(−)	(+)	(−)	(+)	(+)	(+)

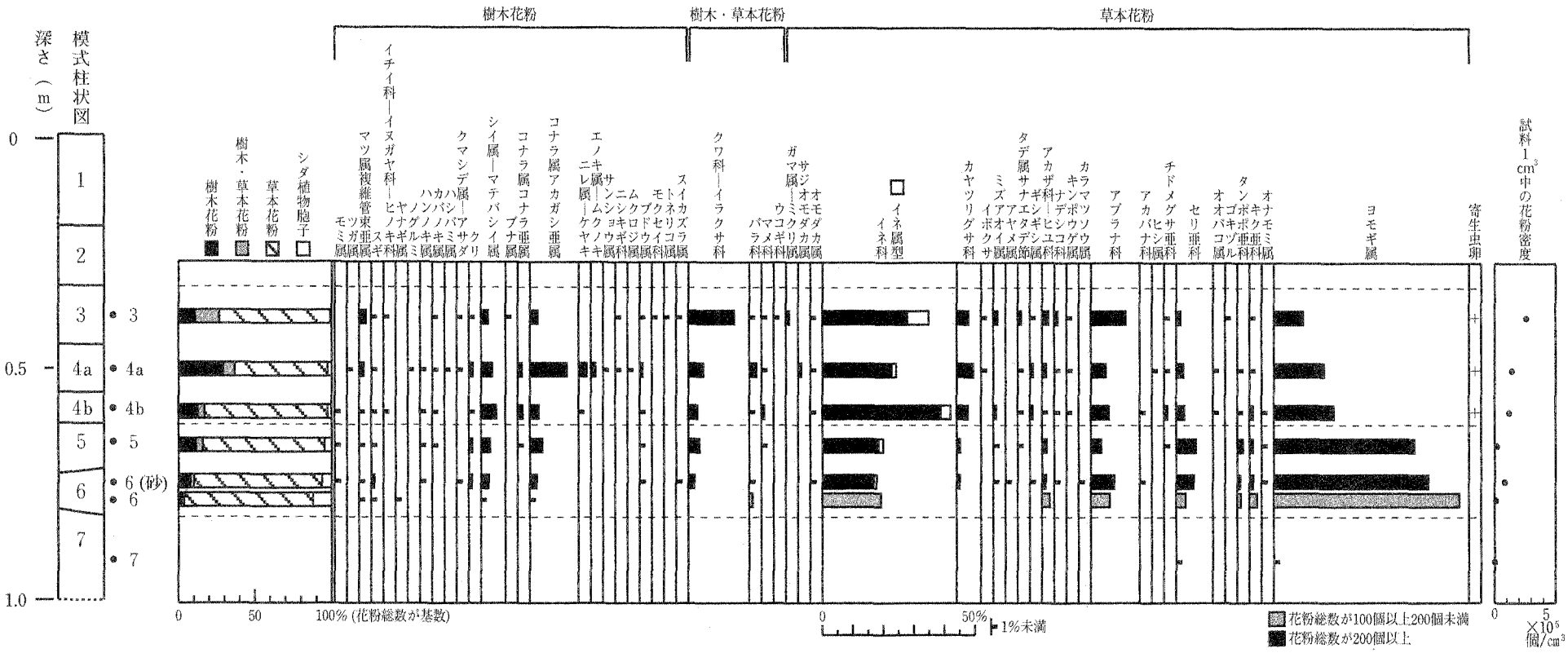
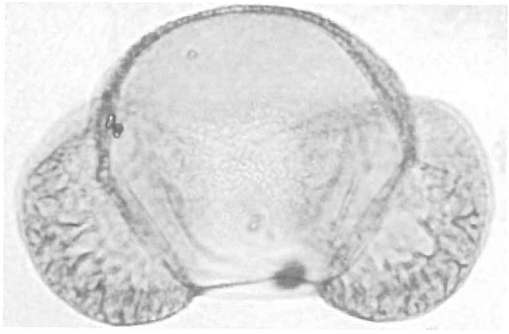
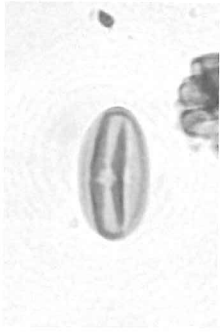


図1　原の辻遺跡，閨繰地区トレンチ①南東壁における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡闇繰地区の花粉・寄生虫卵

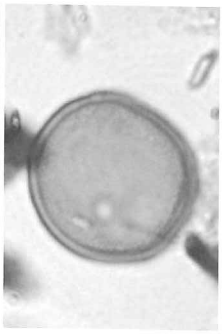


1　マツ属複維管束亜属



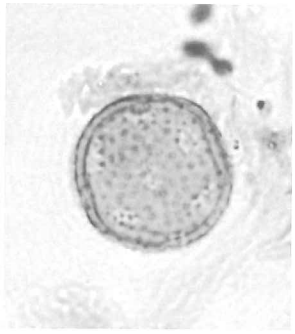
2　シイ属
-マテバシイ属

3　コナラ属
アカガシ亜属

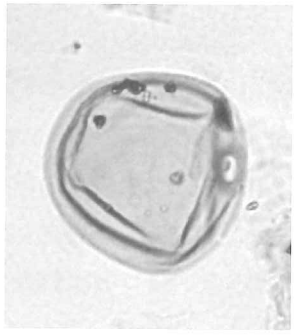


4　エノキ属
-ムクノキ

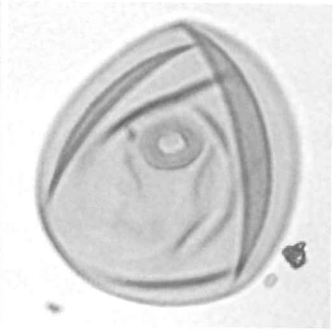
5　クワ科-イラクサ科



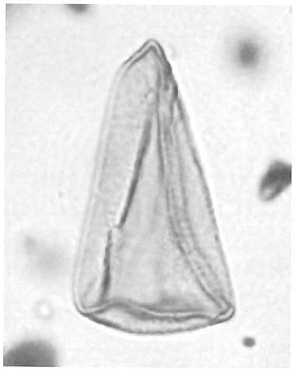
6　オモダカ属



7　イネ科

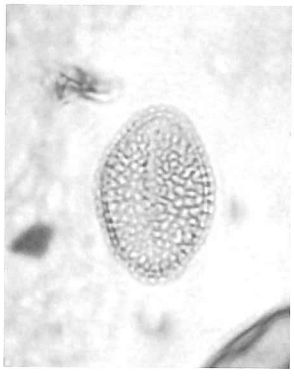


8　イネ属型



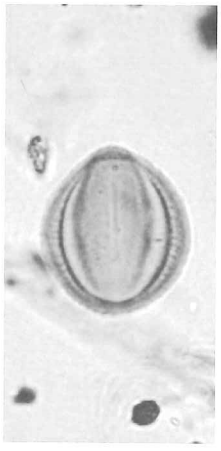
9　カヤツリグサ科

10　ギシギシ属

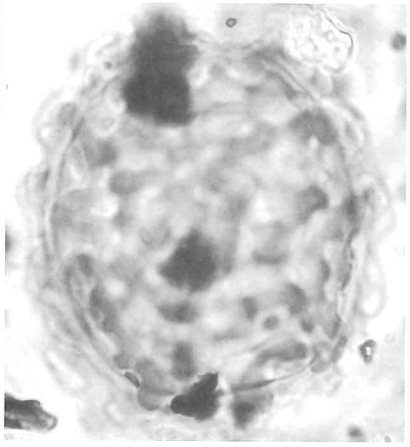


11　アブラナ科

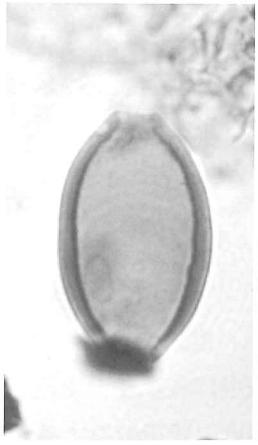
12　セリ亜科



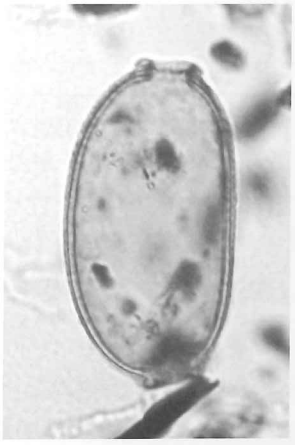
13　ヨモギ属



14　回虫卵



15　鞭虫卵



16　カピラリア

10 μm

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1．はじめに

長崎県壱岐島に位置する芦辺町原調査区より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田，瀬谷，Lomtatidze, Jorjoliani，測定は伊藤，丹生，小林が行い，報告文は伊藤，中村が作成した。

2．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料採取位置は，調査区のⅣ層，濠埋土下部の⑧層，濠埋土上部の①層である。各層から採取された土壌を洗浄し，炭化材を抽出した。炭化材は微小であったため，複数の小片をあわせて測定に供した。また，炭化材はいずれも部位不明である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11219	調査区：原地区 層位：Ⅳ層	試料の種類：炭化材(小片複数) 試料の性状：部位不明 状態：wet その他：土壌より抽出	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-11220	遺構：濠 層位：⑧層 その他：埋土下部	試料の種類：炭化材(小片複数) 試料の性状：部位不明 状態：wet その他：土壌より抽出	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-11221	遺構：濠 層位：①層 その他：埋土上部	試料の種類：炭化材(小片複数) 試料の性状：部位不明 状態：wet その他：土壌より抽出	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N） サルフィックス

3．結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値，誤差を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うため

に記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-11219	−27.68±0.15	1955±26	1955±25	20AD(68.2%)75AD	36BC(1.2%)30BC 22BC(2.6%)11BC 2BC(87.2%)88AD 104AD(4.4%)121AD
PLD-11220	−28.53±0.19	1844±24	1845±25	131AD(68.2%)214AD	86AD(4.9%)106AD 121AD(90.5%)239AD
PLD-11221	−27.63±0.18	1366±22	1365±20	650AD(68.2%)666AD	637AD(95.4%)683AD

4．考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2σ暦年代範囲に着目して結果を整理する。暦年較正の結果と弥生時代の考古学編年との対応関係については，春成・今村編（2004），西本編（2006，2007）を参照した。

Ⅳ層採取試料（PLD-11219）の2σ暦年代範囲は，36−30calBC（1.2%），22-11calBC（2.6%），2calBC-88calAD（87.2%），104-121calAD（4.4%）で，弥生時代中期から後期に相当する。

濠の埋土採取試料のうち，下部（⑧層）試料（PLD-11220）は，121-239calAD（90.5%）および86

-106calAD（4.9%）で，弥生時代後期に相当する。上部（①層）試料（PLD-11221）は，637-683calAD（95.4%）で，古墳時代終末期に相当する。

なお，木材の年輪は内側であれば，枯死・伐採年よりも古い時期に形成されており，古い年代を示す。これは古木効果と呼ばれる。今回はいずれも部位不明の小片の炭化材を測定したため，古木効果を考慮する必要がある。

文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

春成秀爾・今村峯雄編（2004）弥生時代の実年代．学生社，p.253.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代．3-20.

西本豊弘編（2006）新弥生時代のはじまり第1巻　弥生時代の新年代．雄山閣，p.143.

西本豊弘編（2007）新弥生時代のはじまり第2巻　縄文時代から弥生時代へ．雄山閣，p.185.

Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Bertrand, C. J. H., Blackwell, P. G., Buck, C. E., Burr, G. S., Cutler, K. B., Damon, P. E., Edwards, R. L., Fairbanks, R. G., Friedrich, M., Guilderson, T. P., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R. W., Remmele, S., Southon, J. R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F. W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C. E. (2004) IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

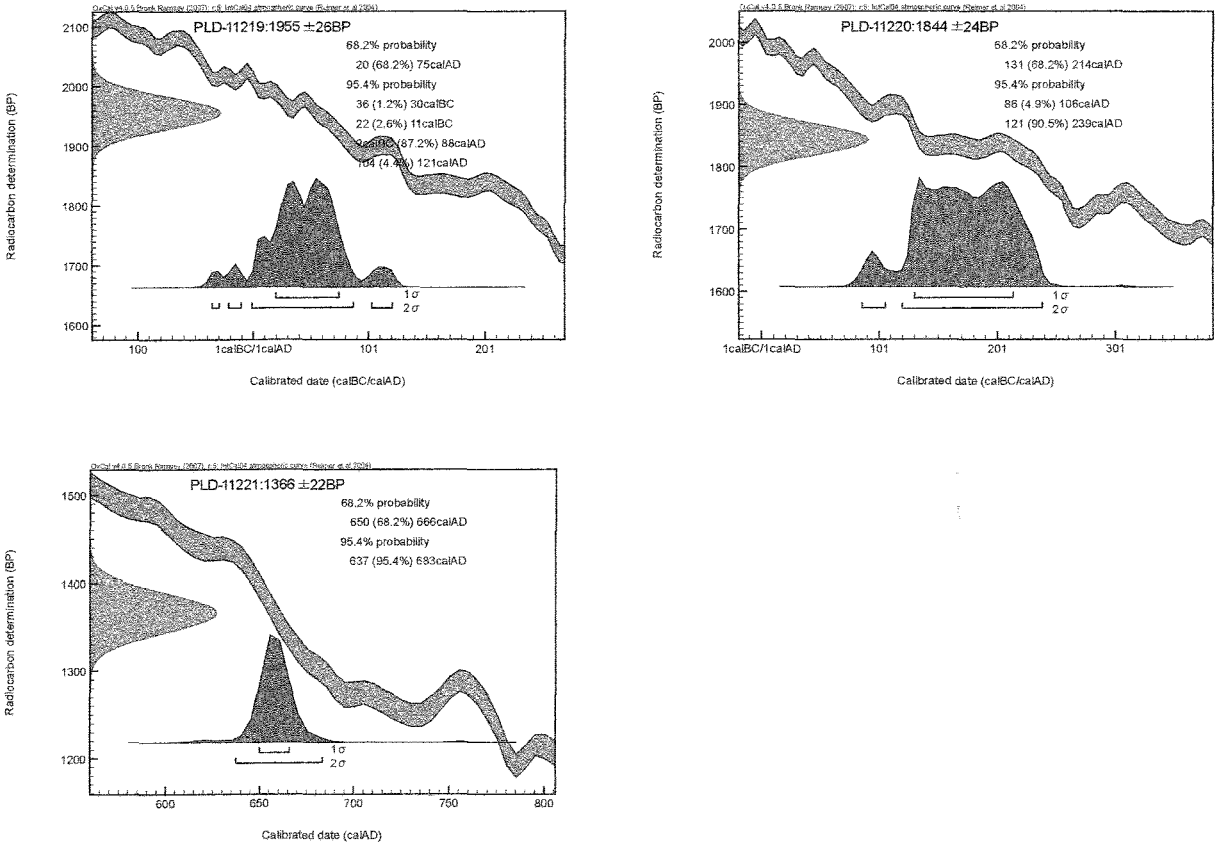


図1　暦年較正結果

花粉分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

1．はじめに

原の辻遺跡原地区において行われた発掘調査で濠が検出され，その埋積土壌が採取された。以下にはこの土壌試料を用いて行った花粉分析結果について示し，濠周辺の古植生について検討した。

2．試料と分析方法

試料は，濠の下部⑧層（試料８）と上部の②層（試料２）の２試料である。これら２試料はいずれも黒褐色の粘性の高い土壌で，小さな空隙が散在しているのが観察される。また濠の埋積土壌を用いて年代測定が行われており，２σ暦年代範囲で高い確率の年代を示すと，⑧層（PLD-11220）で121-239calAD（90.5%）が，また①層（PLD-11221）で637-683calAD（95.4%）が得られている（年代測定の節参照）。これら２試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約５ｇ)を遠沈管にとり，10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後,0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き，傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後，比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い，浮遊物を回収し，水洗する。水洗後，酢酸処理を行い，続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後，残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い，その際サフラニンにて染色を施した。

3．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は，樹木花粉５，草本花粉８，形態分類を含むシダ植物胞子３の総計16である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に，それらの分布を図１に示した。なお分布図は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また，表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検境の結果，保存状態はかなり悪く，得られた花粉化石数，分類群数共に少ない結果となった。特に樹木花粉は少なく，多い方の試料２でやっと10個体を越えた程度である。個々にみると，試料２ではイネ科が最も多く，次いでタンポポ亜科，ヨモギ属が多く得られている。またソバ属も３個体得られているが，観察された化石はすべて破片であり，それらをまとめて３個体分としたものである。樹木花粉ではシイノキ属－マテバシイ属近似種（以後シイ類近似種と略す）が最も多く得られているが，保存状態が悪く，シイ類と確定できなかったことから近似種を付したものである。その他，コナラ属のコナラ亜属，アカガシ亜属とジンチョウゲ科がわずかに観察されている。

試料８では樹木花粉の検出数，分類群数がさらに少なくなっており，シイ類近似種とコナラ亜属がわずかに得られたのみであった。草本花粉のタンポポ亜科が非常に多く，出現率は80%を越えており，花粉塊も認められた。その他ではイネ科が約６%の出現率を示している。

4．濠周辺の古植生

上記したように花粉化石の保存状態はかなり悪く，得られた花粉化石数，分類群数共に少ない結果であった。このことは多くの花粉が地表に落下後，紫外線や土壌バクテリアなどによって分解消失していることを示していると考えられる。こうしたことから図１に示した花粉分布図については参考程度にみて頂きたい。そのなか，試料８においてタンポポ亜科が非常に多く検出されており，花粉塊も観察されていることから，年代測定結果より弥生時代の後期から終末期頃の濠近辺にはタンポポ亜科

が多く生育していたと推測される。

その後の②層堆積期（①層の年代より古墳時代？）の濠周辺ではイネ科，カラマツソウ属，アブラナ科，ヨモギ属，ヨモギ属を除く他のキク亜科，タンポポ亜科，シダ植物などの雑草類が生育していたとみられる。また破片ではあるがソバ属が検出されており，この時期ソバの栽培が行われていた可能性が推察される。一方，周辺丘陵部にはアカガシ亜属やシイ類の照葉樹や落葉広葉樹のコナラ亜属，低木のジンチョウゲ科が生育していたと推測される。

表1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	2	8
樹木			
コナラ属コナラ亜属	*Quercus subgen. Lepidobalanus*	3	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	1	—
シイノキ属-マテバシイ属近似種	cf. *Castanopsis-Pasania*	6	4
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	2	—
草本			
イネ科	Gramineae	27	15
ソバ属	*Fagopyrum*	3	—
カラマツソウ属	*Thalictrum*	5	2
アブラナ科	Cruciferae	7	2
セリ科	Umbelliferae	1	1
ヨモギ属	*Artemisia*	17	—
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	19	217
シダ植物			
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	1
単条型胞子	Monolete spore	5	12
三条型胞子	Trilete spore	3	3
樹木花粉	Arboreal pollen	12	5
草本花粉	Nonarboreal pollen	82	238
シダ植物胞子	Spores	9	16
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	103	259
不明花粉	Unknown pollen	20	5

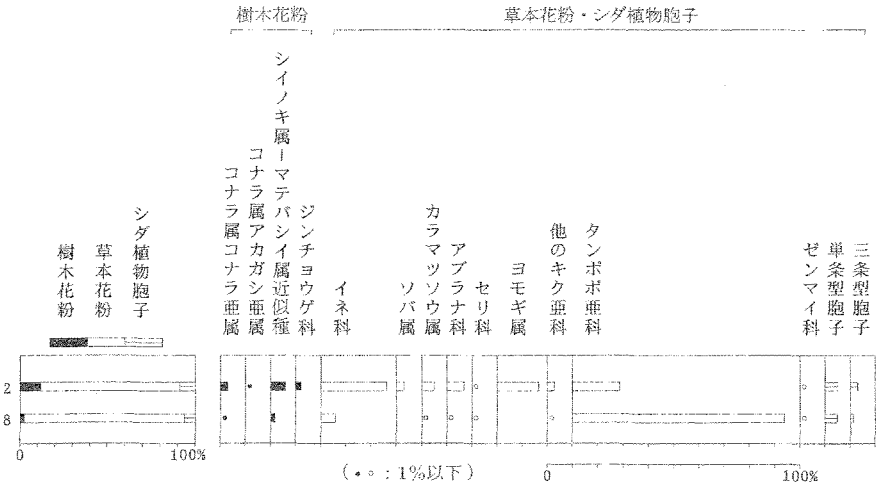
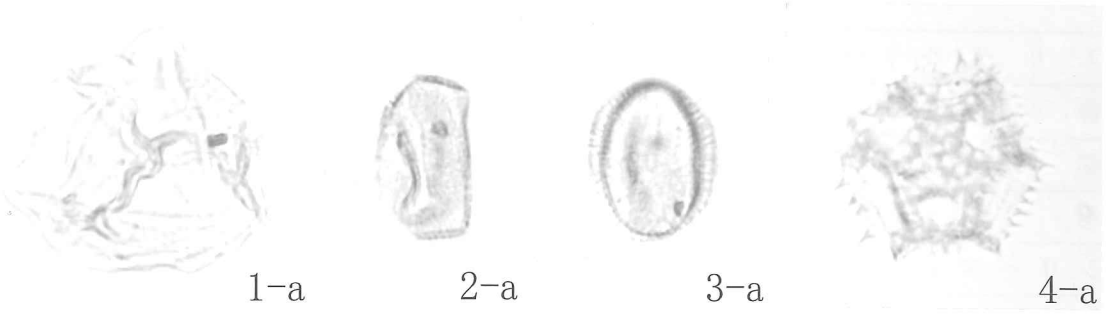
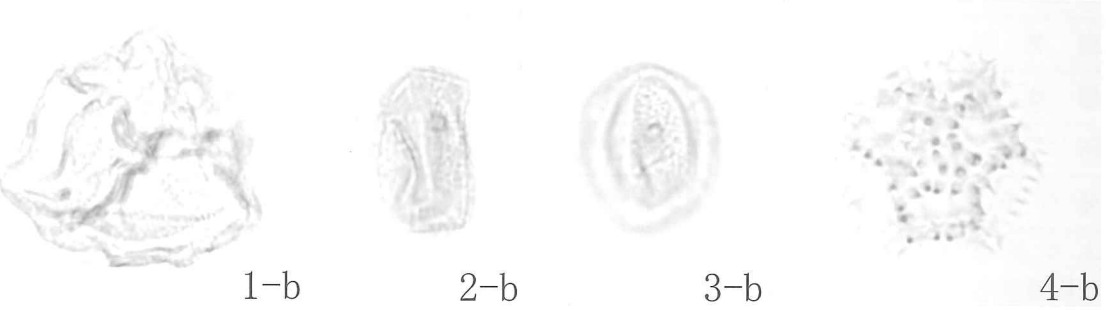
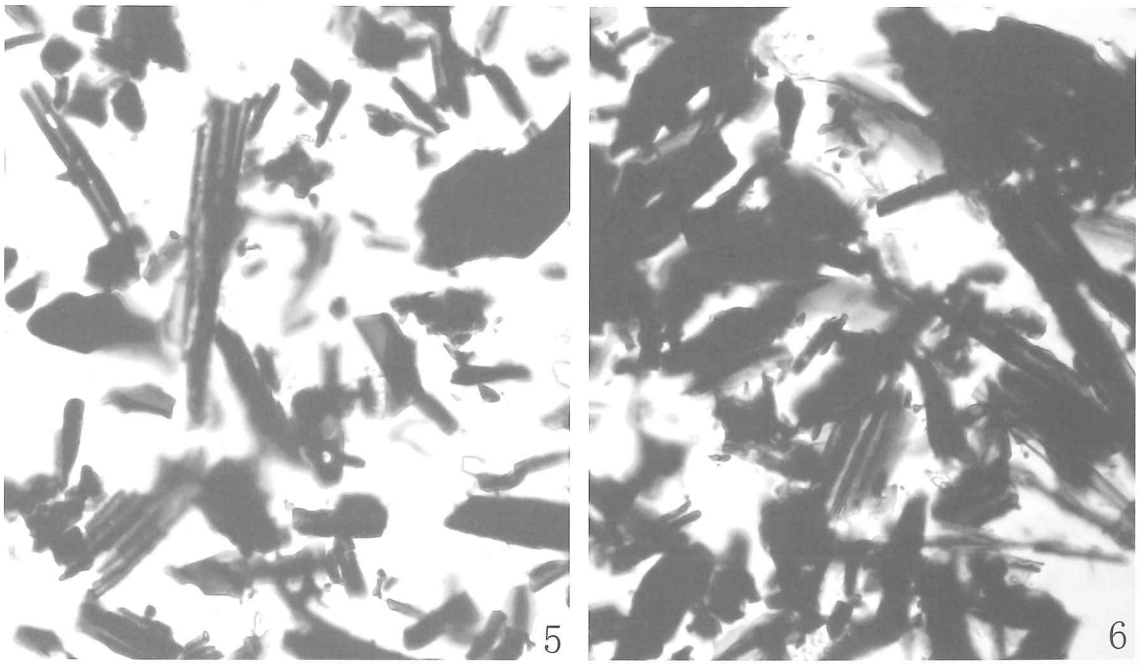


図1　原地区濠堆積物の花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

図1　原地区濠堆積物の花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）







1～4：　　5，6：

図版　原地区濠堆積物の花粉化石（scale bar：0.02㎜）

1：イネ科　PLC. SS4419　No.2
2：アブラナ科　PLC. SS4421　No.2
3：ヨモギ属　PLC. SS4423　No.2
4：タンポポ亜科　PLC. SS4422　No.8
5：プレパラートの状況　No.2
6：プレパラートの状況　No.8

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	⑥
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	宮崎貴夫・林　隆広
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡 (はるのつじ)	長崎県壱岐市 (ながさきけんいきし) 芦辺町・石田町 (あしべちょう　いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	2008.4.16 ～ 2009.1.31 2009.4.14 ～ 2009.7.9	〔池田大原〕 1,904m² 〔八反〕 75m² 〔闇繰〕 211m² 〔原〕 1,200m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	〔八反〕 溝状遺構 〔闇繰〕 河川跡 〔原〕 甕棺墓 土壙墓 箱式石棺墓 濠 土坑 落ち込み	弥生式土器 土師器 陶磁器 石器 貨泉	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集

原の辻遺跡

2009．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂